

《世界》を書く技術と思想

山本武信



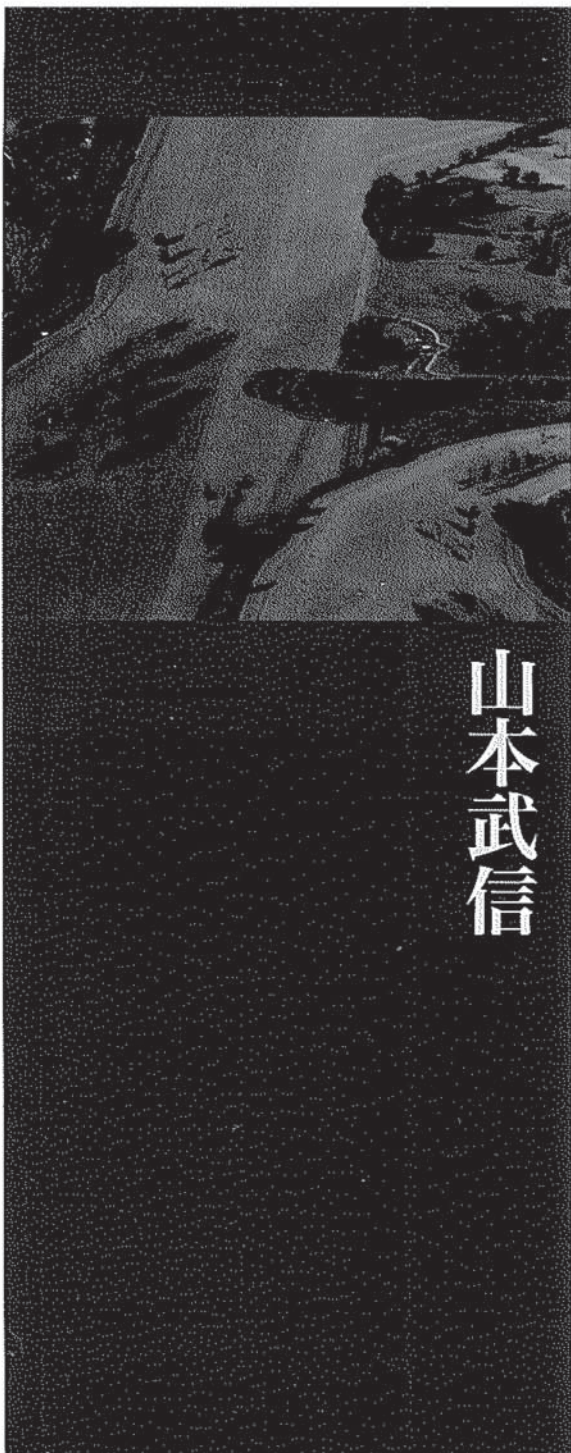
潮風書房

21世紀のメディア表現

# 《世界》を書く 技術と思想

ミネルヴァ書房

山本武信





21世紀のメディア表現

# 世界を書く 技術と思想

山本武信

ミネルヴァ書房







## はじめに

「今から五〇〇年ほど前の世界では、人生のすべての出来事が現代よりもはるかに鋭い輪郭を持っていた。悲しみと喜び、不幸と幸福の隔たりが現代のわれわれよりもずっと大きかったに違いない」

と、オランダの歴史家ホイジンガは一九一九年に著した『中世の秋』に記している。二一世紀の現代はホイジンガの時代よりも、さらに人生や世界の輪郭があいまいになっている。それだけ向き合う世界が大きくなり、真実が見えにくくなっている。

現代世界の真実とは何か。

地球社会は二〇世紀末の一〇年間に大転換した。IT革命とグローバル化の荒波が押し寄せ、あらゆる領域で融合が進んだ。二〇世紀の常識は通用しなくなり、聖域という聖域が崩れ去った。この磁場からインターネットや携帯電話といった新しいメディアが台頭し、新聞、テレビ、ラジオなどの旧メディアを揺るがしている。

こうして生まれたのが、グローバルコミュニケーション社会である。

個人が発した情報がリアルタイムで世界を駆けめぐる。パーソナルメディアが時間と空間の壁を超え

てマスメディア化し、政治、経済、文化に広範な影響を与える。工業社会に代わり、情報ネットワークを動脈とするメディア時代が幕を開けたのである。

近代社会が追求してきた「表現の自由」は、現代メディア社会において全面開花した。表現の宇宙は無限に広がり、言語コミュニケーションの機会はどんどん増えている。だからと言って、必ずしも真実の追求や解明が深まっているわけではない。

無数の地球市民が思い思いに自己表現するグローバルコミュニケーション社会は、響き合う世界である。知は知と共鳴し、愚は愚と共鳴する。厄介なことに、愚ほど感染しやすい。例えば、2ちゃんねるのような悪意の連鎖、コンピューターウィルスの世界的な感染、日韓や日中間で頻繁に起きているハッカー戦争……。人間はゴシップの流布や足の引っ張り合いに快感を覚えるようにできているらしい。

二〇〇四年六月、長崎県佐世保市の小学校で六年生の女子児童が同級生をカッターナイフで殺害するという痛ましい事件があった。被害者の父親の御手洗恭二・毎日新聞佐世保支局長は、私が共同通信長崎支局時代に一緒に仕事をした記者仲間であり、大学の後輩でもある。暗然として言うべき言葉がない。

事件はインターネットのホームページに悪口を書かれたことが引き金になったという。その背景には、グローバル競争が激化する中で勝ち組と負け組の構図が鮮明になり、人間の尊厳に対する意識が低下している現実がある。大人社会のいびつなエゴイズムが、子どもたちの世界にも暗い影を落としているのである。御手洗支局長は二〇〇四年二月二七日付朝刊に発表した手記で「大人として子どもたちに思



いをきちんと送り届けることができたか、今も悩み続けている」と痛恨の思いをつづった。

便利なデジタル社会の中で、「人間」が崩れ始めている。そう思わざるを得ないような出来事があまりに多すぎる。「人間」が構築した文明そのものも、大規模なテロや戦争で傷つき病んでいる。

文化の摩擦とは表現の摩擦であり、文明の衝突とはコミュニケーションの衝突にほかならない。暴力やテロリズムは表現の最も粗野な形態だ。情報が洪水のようにあふれる中でコミュニケーション不全症候群が蔓延しているのは、文明のパラドックスと言うしかない。

表現のあり方は、世界のゆくえを左右する。時代や世界と向き合い、自分を高め、他者とのコミュニケーションを深めるために、言語による表現力を磨かなくてはならない。それは奔放な「自由」に対する「責任」の問題である。人類の共存、文明の共生は「責任」に対する自覚なくしてあり得ない。『星の王子さま』で知られるフランスの作家アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリは『人間の土地』の中で、次のように言っている。

「人間であるということは、とりもなおさず責任を持つことだ。人間であるということは、自分には関係がないと思われるような不幸な出来事に対して忸怩たることだ。……人間であるということは、自分の石をそこに据えながら、世界の建設に加担していると感じとることだ」

表現するというのは、自分の内なる世界を外へ押し出すことである。善・悪・美・醜、文章には書く人の全人格が映し出される。文章を見ると、その人のいろいろなことが見えてくる。書くことは自己表

現の最高形態であり、人間形成の確かな指標である。どんな分野であれ一流と言われる人たちは、例外なく文章表現に秀でている。

一流とは心の形であり、精神の力である。それが文章の内容にも形式にも表れる。逆もまた真なりで、書く力は自分の可能性を開く鍵になる。書くことによって自己の内なる力が湧き出し、世界への理解が深まる。

世界や自己、あるいは世界と自己の関係について、自分が考えていることを正確に伝え、相手になるほどと納得させること。これを達意という。新聞、テレビ、雑誌、出版、広告などのメディアプロフェッショナルに限らず、自己確立の一環として、簡潔かつ平明な達意の文章を書く能力を高めることが急務である。

グローバル時代の難しさは何と言っても、その複雑さにある。全体状況が複雑になればなるほど、個の存在は不透明になる。世界や人生の輪郭があいまいになっている、と言うゆえんである。複雑さを解きほぐし、輪郭を鮮明にするのが世界認識に基づく表現力である。

グローバル社会の深層をどう認識し、伝達するのか。

地球上で起きている出来事をどう取材し、どう書くのか。

メディア時代の表現者はどのような世界観に立つべきなのか。

本書は二三年間の国際ジャーナリスト経験を基に、地球社会の深層に迫りながら実践的な文章技法を



探るとともに、メディア表現者がよって立つべき座標軸を提示する。ルポやエッセーから記事、論文、書評、本の書き方までさまざまな文章の構造を解析する中から、地球時代に対応した新しい表現思想の地平が浮かび上がってくれば、幸いである。

山本 武信





〈世界〉を書く技術と思想——21世紀のメディア表現 目次

はじめに

第1章 非日常体験から生まれる表現力…………… I

1 希望への架け橋…………… 2

2 極限状況での体験と思索…………… 7

3 書くことの意味…………… 13

4 死生観から見た表現の大切さ…………… 17

5 過ぎ去る時間を書き留める…………… 22

6 後世への贈り物…………… 27

7 生きるとは世界と交わること…………… 29

第2章 書くことは生きること…………… 37

1 コピー能力から創造力へ…………… 38

2 読むことと書くこと…………… 40

- 3 活字に生命力を吹き込む……46
- 4 内なるものに形を与える……51
- 5 内と外のコミュニケーション……53
- 6 文章修業の秘訣——名文に学ぶ……56
- 7 文才と努力……60

### 第3章 世界の实像に迫る文章技法

63

- 1 エッセー——体験と感性が勝負……64
- 2 人類の星の時間……68
- 3 実像と虚像のギャップを埋める……73
- 4 字数と時間の制約が生む奇跡……76
- 5 人生の持ち時間と生かし方……80
- 6 文章は書き出しで決まる……84
- 7 紀行文——世界へのまなざし……86



## 第4章 時代に斬り込む視点と論理

- 8 地球という書物を読む取材の旅……94
- 9 ルポ——生きざまへの共感……98
- 10 一〇〇の材料を一〇に絞る……110
- 11 評伝——人間像を浮き彫りにする……111
- 12 寝かして練り直す……117

- 1 事実の積み上げ——感性から論理へ……124
- 2 新聞記事——逆三角形の構成……125
- 3 解説記事——現象の背後に潜むもの……129
- 4 インタビュー記事——核心に迫る……132
- 5 論説——時代精神を読み取る……135
- 6 論文のかなめ……139
- 7 書評——エッセンスを引き出す……144
- 8 誤報とスクープ……148

|   |                 |     |
|---|-----------------|-----|
| 9 | 権力とジャーナリズムの危機…… | 154 |
|---|-----------------|-----|

|     |                     |     |
|-----|---------------------|-----|
| 第5章 | 生きる力と言葉のダイナミズム…………… | 161 |
|-----|---------------------|-----|

|   |                 |     |
|---|-----------------|-----|
| 1 | 『星の王子さま』と言葉の力…… | 162 |
| 2 | 生命のリズムと思想のリズム…… | 168 |
| 3 | 理想を持ち続けることの意味…… | 170 |

|     |                        |     |
|-----|------------------------|-----|
| 第6章 | 本を書くということ——情熱のかたち…………… | 175 |
|-----|------------------------|-----|

|   |                 |     |
|---|-----------------|-----|
| 1 | メッセージを伝える……     | 176 |
| 2 | 有限性と永遠性というテーマ…… | 180 |
| 3 | 根源的な問いと主題の提示……  | 184 |
| 4 | 体験とモチーフ……       | 188 |
| 5 | 沈黙の深さと死生観……     | 191 |
| 6 | 創作の原動力……        | 196 |

|    |                 |     |
|----|-----------------|-----|
| 7  | 意外性の発掘……        | 199 |
| 8  | 構想と持続力……        | 202 |
| 9  | 本を書くための必要条件……   | 211 |
| 10 | 内容が形式を創り出す……    | 214 |
| 11 | モチベーションとパッション…… | 216 |
| 12 | 抽象から具象へ……       | 219 |
| 13 | 本の構成方法……        | 221 |

## 第7章 表現する世界——メディア危機に抗して………225

|   |                 |     |
|---|-----------------|-----|
| 1 | 『悪魔の詩』と言論抑圧……   | 226 |
| 2 | グーテンベルク革命の衝撃……  | 227 |
| 3 | 近代初頭のビル・ゲイツ……   | 231 |
| 4 | グーテンベルク世界の没落……  | 234 |
| 5 | テーマが先か、ニーズが先か…… | 238 |
| 6 | 出版ジャーナリズムの気概……  | 241 |

|   |              |     |
|---|--------------|-----|
| 7 | 失われざるものの秘密…… | 243 |
| 8 | 非日常的な異空間……   | 246 |

## 第8章 地球のゆくえ・人間のゆくえ……………251

|   |                  |     |
|---|------------------|-----|
| 1 | ビル・ゲイツとゴルバチョフ……  | 252 |
| 2 | 言語の誕生と表現の自由……    | 254 |
| 3 | 天空とのコミュニケーション……  | 258 |
| 4 | 希望のメッセージ……       | 264 |
| 5 | ダ・ヴィンチの知の宇宙……    | 268 |
| 6 | 時代認識に立った表現の力……   | 275 |
| 7 | シンブル化と緩やかさの創造力…… | 279 |

|        |     |
|--------|-----|
| 参考文献一覧 | 285 |
|--------|-----|

|      |     |
|------|-----|
| あとがき | 291 |
|------|-----|





## 第1章

# 非日常体験から生まれる表現力

ロシアの文豪ドストエフスキーは政治犯として捕らえられ、銃殺刑寸前に特赦を受けた後、痛切にこう告白している。「一個の人間としてその神経組織に生涯の傷を負わなかった人間はいないだろう」

ドストエフスキーの大作は生涯の傷をばねにして生まれた。ドストエフスキーに限らず、優れた文学やルポルタージュの多くが絶望的な極限状況との格闘から生まれた事実は、書くということの本質がどこにあるかを示している。わが身をずたずたに切り刻み、後悔し、その傷を必死に克服しようとするからこそ、人間は人間なのである。文学に限らず、文章というものはそういう精神的な自己格闘によって深みを増す。

フランスの偉大なヒューマニスト作家であるロマン・ロランは、第一次世界大戦が勃発するまでの一〇年を孤独と苦悩の中で過ごした。この時期、『ジャン・クリストフ』を書くことが唯一の楽しみだった。『ジャン・クリストフ』全一〇巻の序にこう記している。

「クリストフは、わたしにとっては、外部の目からは見えない第二の生であって、ここでわたしは、自分のもっとも深い自我と接触を取り戻していたのである。……わたしが自分の中に宿していた『ジャン・クリストフ』は、わたしにとっては難攻不落のわたしの《城砦》であり、敵意ある大洋のただ中

でわたしだけが近寄りうるわたしの《静寂の島》であった。わたしは未来のたたかいのために、黙々としてそこにわたしの力を集中した<sup>(1)</sup>」

自ら造形した作中人物の成長とともに、内面の危機を克服していった過程がうかがえる。『ジャン・クリストフ』へ直接つながる評伝『ベートーヴェンの生涯』の結びに、ロランは、

苦悩を突き抜けて歓喜に到れ！ Durch Leiden Freude!

という言葉を書いている。ロランはこの言葉の由来について、こう説明している。

「不幸な貧しい病身な孤独な一人の人間、まるで悩みそのもののような人間、世の中から歓喜を拒まれたその人間がみずから歓喜を造り出す——それを世界に贈りものとするために。彼は自分の不幸を用いて歓喜を鍛え出す。そのことをこの誇らしい言葉によって表現したが、この言葉の中には彼の生涯が煮詰められており、またこれは、雄々しい彼の魂全体にとっての金言だった<sup>(2)</sup>」

希望は無邪気な楽天性ではない。精神の深みから生まれる。絶望を通っていない希望を信じることはできない。絶望の底から蘇生した希望だけが本当の癒しになる。世界についてであれ、人間についてであれ、そういう希望をどこかに宿した文章こそが書くに値する。逆に言うと、体験の深みを言葉であぶり出すことによって、人は苦しみや悲しみを乗り越え、希望の高みに達することができる。



危機的状況の中で、人に伝えずにはおれないものがある。抑えようとしてなおあふれてくるものがある。あふれてくるものを的確な言葉で包み、揺るぎない文章にすることができたとき、そこに救いが生まれる。表現することの効用である。

世の中で体験を積み重ねるほど、人はものごとを一面からではなく、多角的に見るようになる。多角的にというのは、対象の本質により深く迫るという意味である。ジャーナリストが現場を踏むことを重んじるのも、生きた体験と死んだ知識との間には埋めがたい溝があるからである。百聞は一見に如かずである。ジャーナリストにとっての現場とは、予断と偏見を打ち砕き、自分を陶冶する試金石である。

体験の深みが文章の深みになる。

体験の砥石が文章の切れを研ぎ澄ます。

人生の負の体験が最も生きてくるのが物書きの世界である。下り坂を転げ落ちる経験が、物書きの世界では上り坂になる。あらゆる体験が文章に生きてくる。書くことによってマイナスがプラスとなり、絶望が希望ともなる。失敗の人生というものは存在しないと得心がいったとき、精神的に強くなり、書く力も増す。

書き手だけでなく、読む方も、同じ表現空間から絶望を疑似体験し、希望を取り戻す。『ジャン・クリストフ』は学生時代の私にとっても、「難攻不落の城砦」にして「静寂の島」だった。ジャン・クリストフの世界に浸り、そこから希望と勇気を汲み取っていた。希望の再生と共有。それが文章コミュニ

ケーションにおける共感であり、共鳴である。

書くことが自分の生を生きることだとすれば、読むことは他人の生を生きることである。記事にしろ、論文にしろ、エッセーにしろ、ものを書いて世に問うというのは、心や魂が響き合う表現空間を創造しようとする試みにほかならない。

表現空間には情報を伝え合うというだけでなく、人の心を癒すカタルシス効果がある。その意味において、メッセージは互いの心をほぐすマッサージである。<sup>(3)</sup> 俗っぽく言えば、「書いてすっきりした」「読んですっきりした」というあの感覚である。

表現 (Express) は言葉と一緒に、内面に蓄積したフラストレーションを吐き出すことである。だから、心の浄化作用が働く。風邪を引いたり、病を患ったりした後、他の悪い部分が一緒に消えて、生命力が高まるのと同じメカニズムだろう。

飢えた人々や貧しい人々にとって、文学は何の役に立つのか、という命題がある。確かに言葉はおなかの足しにはならない。しかし、心の飢えには十分こたえることができる。例えば、次の文章はどうだろうか。新聞配達をしていた中学時代に出会った人道主義作家・武者小路実篤の『人生をどう生きるか』の一節である。

自分はある日銀座を歩いていたら、某所で夜店を出して燃料を売っている一人の少年を見たら燃料



が三つ四つ心細く燃えている。少年は何か効能を述べている。誰も店の前に立っているものはない。6  
それで気のりせずに一人ごとのように、それも無理に調子をつけて、自分の気を引き立てながらや  
っている。雨が少し降り出してきた。誰も買いそうにない。自分はそれを見たら、その少年の幸福  
を祈りたくなった。帰りにまたその店の前を通ったら、一人の男がそれを買っていた。自分はそ  
男に感謝したくなった。その時、自分は愛は死に勝つものだということをおぼろげながら感じた。  
人間にもし愛するという本能が与えられなかったら、我らは死ぬために一寸の闇を生きるのにすぎ  
ない憐れな生きものである。

学生時代、この一文を復唱するたびに、何か生きる勇氣のようなものを得たことを覚えている。今も、  
新聞少年時代と二重写しになったこの文章を思い出すと、ハングリー精神がむくむくつとよみがえって、  
前向きに生きる勇氣が湧いてくる。勇氣とは、どんなことがあっても、前へ進み続ける力である。挫折  
しても、その中から意味を見つけ、希望を持ち続ける力である。それは不屈の理想があるからこそ可能  
になる。

モノや情報の豊かさが心の豊かさに取って代わったところに、現代の貧しさがある。その貧しさがネ  
ット世界で見られるような言葉の汚れ、表現の貧しさに表れている。言葉がやせ細ると、心までが貧弱  
になる。飽食窮民<sup>(4)</sup>——。心の豊かさとしての表現力の再生が急務になっている。

他者や社会が共鳴し、希望を持てるような心のメッセージを一つ、この世に残すことができれば、それだけでも、生きた甲斐はあると言えるのではないだろうか。そういうものとして執筆に取り組む姿勢が、今のネット時代にはとりわけ大切である。

このように世界を書くことは自分を書くことであり、自分を書くことは世界を書くことである。世界を読んだり、書いたりする営みにおいては、自分という人間のありようが決定的な意味を持つ。書くことの深さはつまるところ、世界内における体験の深さである。体験は思想である。したがって、書く技術とは書く思想にほかならない。体験と思想を伴わない文章技法は、人間にたとえれば、血と肉のない骸骨がこうのようなものである。体験と思索が文章の真髄をなす。豊かな体験に基づく想像力がクリエイティブな表現力を高める。

## 2

### 極限状況での体験と思索

現代世界の危機とは何か。政治、経済、軍事問題が大きいことは言うまでもないが、それと同じくらいに深刻なのはコミュニケーションの危機、言語表現の危機である。それは人間そのものの危機と言える。危機克服と自己再生に向けて、表現やコミュニケーションのあり方を真剣に考える必要がある。

国内外で多くの事件や事故が発生した二〇〇四年。その暮れの朝日新聞「天声人語」に、こんな一節



があつた。

神戸の連続児童殺傷事件の加害男性が本退院するのを前に、被害者の一人山下彩花さんの母京子さんが手記を公表した。「どんなに過酷な人生でも、人間を放棄しないしてほしい……生きて絶望的な場所から蘇生してほしい……けつして彼の罪を許したわけではありません……それでも、彼の『悪』に怯えるよりも、わずかでも残る『善』を信じたいと思うのです」

加害男性は、仮退院後、父親につぶやいた。「なぜ、あんなことをしてしまったんやろ」。「お父さん、幸せやと思うたことあるか?」。「お前が生まれた時や」<sup>(5)</sup>

被害者の母親の言葉も、加害者の父親の言葉も、哀切で痛ましい。「絶望」と「幸せ」の間にある現実が重くのしかかる。それでも、人は救いようのない現実から、微かな希望を読み取ろうとする。そこに、人間の業に対する希望の力学がある。だれの人生にも、生きているより死んだ方がましだ、と思う瞬間が何度かあるに違いない。どん底の絶望とどう関わるかによって、その後の生き方は決まる。人生の原点が常に死であることを思えば、少々の挫折など何でもない。

テレビも、パソコンも、携帯電話もない。あるのは海と空と森。文明から隔絶した孤島に流されたとき、人は何を糧に生きていくのか。トム・ハンクス主演の映画『キャスト・アウェイ』はロビンソン・

クルーソーの現代版である。ハンクス演じる宅配便のシステムエンジニア、チャック・ノールランドは飛行機事故で遠い無人島へ流され、途方に暮れる。泣いてもわめいても、だれも助けてくれない。チャックはもともと鬱病<sup>うつ</sup>だった。今はそんなことは言っておられない。生き延びるために、水と食糧とねぐらを確保することが先決だった。悪戦苦闘しながら、最低限の生活スタイルができあがる。火をおこすことも覚えた。

生きるための手段を得た後に待ち受けていたのは、孤独との闘いである。

スピードと効率が優先する文明社会の中では、生き残るために時間を消費し続けていた。今は持て余すほどの時間と闘っている。自分の時間ができると、裸の自分と向き合わざるを得ない。裸の自分とは、他人にも文明の利器にも依存しない、独立した自己である。宇宙のただ中にひとり屹立<sup>きつりつ</sup>する一個の生命である。身も心も真っ裸の極限状況に置かれて、チャックは文明社会の中で大切だと思っていたものが幻影にすぎず、本当に大切なものは自分の中にあるという真実に気づく。孤島での孤独な生活は自己発見の旅だった。

すべてを失い、ゼロから生活を立て直す作業は、自分自身を再構築する営みだった。チャックは四年後、島を脱出し、生まれ変わって文明社会へ復帰する。そして、孤島での四年間こそは人生最高の出来事だったと悟る。これは一種の転身物語である。自分の意志ではなかったが、失業したり転職したりするときの心理状況と似ている面がある。日常がひっくり返って、非日常的世界が出現する。孤島へ流



されるのは、職業だけでなく、人生そのものがそっくり有から無へ流されることである。

トム・ハンクスは自分の役にリァリティーを持たせるために、撮影開始から一年余りで二〇キロも減量するほどの取り組みようだった。数々の賞に輝いたこの映画は二〇〇〇年のクリスマスシーズンに全米で公開され、わずか四日間で五〇億円余りを稼ぎ出した。着膨れし、厚化粧した現代文明への警鐘として、カネとモノの追求に明け暮れるアメリカンドリームの人々の共感と呼んだ。

ダニエル・デフォアの『ロビンソン・クルーソー』は、アレクサンダー・セルカークという靴屋の息子がチリ海岸沖の無人島で四年間暮らした事実を基にした創作である。クルーソーの方は船が難破し、孤島で二八年間過ごす。当初、この物語はクルーソー本人の自叙伝として出版された。出版直後から大反響を呼び、海賊版まで登場するほどだった。日本でも江戸後期にオランダ語から翻訳、紹介されている。

こうした孤島生活の物語が人気を集めるのは、自分が生きている現実の豊かさを確認するとともに、いざというときに自分は生き延びることができるだろうかという潜在的な不安感からだろう。どんなに文明が進化しても、絶対に安全ということはない。むしろ、非常こそ、この世の常なる姿である。いつ何が起きてもおかしくない。当たり前と思っていた日常を瞬時に失う危険は、どこにでも転がっている。

戦争の犠牲になってフィリピンのジャングルで三〇年間過ごした小野田寛郎さんや、グアム島で二八年間暮らした横井庄一さんのような極端な例を持ち出さなくても、一九九五年の阪神・淡路大震災、二

〇〇四年秋の新潟中越地震、二〇〇四年末のスマトラ島沖地震、二〇〇五年八月の米ハリケーン被害のような例もある。大地震が発生すると、一度に何万、何十万という人が生活基盤を奪われる。二〇〇一年九月一日の米中枢同時テロ事件は、文明の足場がいかにもろいかを如実に示した。大リストラ時代のホームレスも、一種の文明からの遭難者である。

フランスの作家アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリは飛行中にアフリカの砂漠に不時着し、生死の境をさまよう。その極限体験が『人間の土地』や『星の王子さま』などの名作を生む原動力になった。サン＝テグジュペリの『砂漠』も、クルーソーやチャックの『孤島』も、人間が生まれ、文明が発生した始原のシンボルである。荒涼たる風景こそが人間存在の原点であり、文明の原風景であることを示している。

人間は本来、無である。文明は本来、無一物である。本来無であるものが有を創造し、モノの豊かさの迷宮で迷子になっている。『砂漠』や『孤島』は物質文明へのアンチテーゼである。『星の王子さま』は、二本の線で描いた砂漠の上に星が一つ出ている絵で終わっている。

これがぼくにとっては、この世で一ばん美しくって、一ばんかなしい景色です。<sup>(6)</sup>

すべてが始まり、すべてが終わるシンプルな景色。それが人間存在の最も根源的なありようである。



文明からの遭難物語はこのことに気づかせてくれる。ロビンソン・クルーソーとは、日常性に埋没する文明人への警鐘にはかならない。だからこそ、時代と国境を超えて読み継がれ、手を替え品を替えて新たな物語が生まれる。

極論すれば、人生には日常と非日常の二つしかない。その両極の中で揺れ動く人生の諸相を独自の立場から描くことが本質的な意味において、本や文章を書くということである。だれの人生も一冊の書物である。非日常性の体験の度合いに応じてドラマになる。非日常的な体験者は本を書ける人である。小野田さんも横井さんも、体験談を本にした。阪神・淡路大震災からも米中枢同時テロ事件からも、数々の体験本が生まれた。

生きる価値があることは記録する価値がある。非日常性の体験は、それを記録して残そうという情熱を生む。ほかの人が経験したことがない非日常体験を通して、日常性を照射する。ここにものを書く原点がある。

人生にはどんなことも起きる。自分があつと言うような体験は、他人もあつと驚く。裏を返せば、他人をあつと驚かせるには、自分自身があつと驚く体験をしていなければならない。自分の体験が読み手の心に共鳴する。それが先に述べた読書における共感である。

このように、あつと言う体験を共有し、伝承するのが本、新聞、雑誌などの活字メディアである。新聞が日々の非日常的な現象としてのニュースを伝えるのに対し、本は非日常性を深く掘り下げて本質ま

でたどり着くところに意義がある。

クルーソーのように孤島に流されたとき、家族や友人のために何を書き残すだろうか。そういう自問から浮かんだものが、各人が書くべき作品のテーマになる。同じように、二一世紀の国際ジャーナリストは地球市民のために何を伝えるべきかを考え、行動する。

### 3

#### 書くことの意味

非日常的体験は日常の虚飾をはぎ取る。例えば、こう自問すると分かりやすいかもしれない。文明が崩壊したとき、生きていくうえで最小限必要なものとは何だろうか。<sup>(?)</sup>

ロビンソン・クルーソーの孤島生活を考えれば分かるように、IT産業や仮想世界がなくても、人間は生きていける。自動車やテレビがなくても、人間は生きている。金融市場がなくても、人間は生きていける。だが、食べ物がないと、人間は生きていけない。生きていくうえでまず必要なのは食糧だ。生の営みの土台は採集、狩猟、農業という食の確保である。

食の安定性という点で、農業がとりわけ重要な意味を持つ。文明の興りが農耕と深く結びついているのはこのためである。それを支えているのは、地水火風という自然である。食の確保から経済や貿易が派生し、工業からさらにサービス産業やIT産業へと発展する。クルーソーの孤島生活は文明の生成・



発展過程を思い起こさせる。

人間の生存にとって一体、何がどこまで必要なのだろうか。

米国の優れた思想家ヘンリー・D・ソローは一八四五年、ウォルデン湖畔で自給自足の生活を始めた。当時、米国は転換期にあった。繊維工場ができ、鉄道が西部を走り、何百万人という移住者がより良い生活を求めて苦闘した。人々は古いキリスト教の代わりに「進歩」と「限りない未来へのオプティミズム」を信仰した。ありとあらゆるものが変化し、どんなことでも実現可能のように見えた。

そういう前進の時代に、ソローは文明の進歩や量産システムの普及に背を向けた。本質的なものとだけ向き合うために、教師をやめ、都会を離れ、森で質素な生活を送った。動物と親しみ、魚を捕り、工作道具を自分で作った。湖水のように透明な生活だった。

その生活記録を『森の生活』に書き残している。

皮相な文明のまっただなかにあっても、原始的な辺境生活を送ってみると、最低限の生活必需品とはなんであり、それを手に入れるにはどうしたらよいかがわかる。これはなかなか有益である。

……時代の進歩も、人間生活の根本法則にはほとんど影響を与えていないことがわかるだろう。ちょうど現代人の骨格がおそらく祖先の骨格と区別できないように。<sup>(8)</sup>



こう述べた後、ソローは「贅沢品とか生活の慰みと呼ばれるものの多くは不要なばかりか、かえって人類の向上を妨げている<sup>(9)</sup>」と断じている。古今東西の賢者は貧しい人々以上に、質素で貧しい生活を送ってきた。モノがいくらあっても、心は満足しない。心が満ちていたら、モノは少なくてすむ。心が満ちているというのは、精神的な充足感のことである。その一つの答えが本である。

一頁一頁、一冊一冊と、書物を読んでいく喜びは何ものにも替えがたいものです。書物とともにありますれば、長い冬の夜もまことに楽しく、手足も心地よく暖まるような気がします。それに貴重な古文書をひもといたりすれば、この世がそのまま極楽と化します<sup>(10)</sup>。

(ゲーテ『ファウスト』)

ロビンソン・クルーソーのように孤島に流され、一冊だけ持つて行くとしたら、あなたは何を選びますか。よくこんなアンケートがあつて、識者らがいろいろな心の書を挙げています。この問いは、心の孤独と向き合うとき、本が最も良き伴侶になってくれるという共通認識が前提になっている。今の私なら、きつとソローの『森の生活』やサン・テグジュペリの『人間の土地』を挙げるだろう。両書とも、良く生きるということの意味を、自らの体験の深みから最も純粋な形で表現しているからである。何度読んでも飽きない。時をおいて読み返すたびに新しい発見があり、生きるヒントが見つかる。

人生体験を通して練られた言葉が、生きる力を鼓舞してくれる。

平穩無事のときはいい。だが、人生というのは炎のときもあれば、灰のときもある。灰のときに役立つのが座右の書である。じっくり温めてきた本の思想や言葉が「灰」を「炎」に導いてくれる。「絶望」から「希望」を引き出してくれる。

本は心の糧である。生涯に何度も読み返せるような本に出会えた人は幸福である。そういう座右の書を何冊も持っている人はさらに幸福である。だとすれば、そういう本を後世に残せた人は至福と言うべきだろう。

この美しい地球で生きた確かなあかしを一つの文章あるいは一冊の本に書きとどめ、後世の人々に読み継がれる。一個の小さな人生が歴史を超え、海を越え、多くの人々に役立つ。限りある生が心を込めた文章によって永遠性を獲得したと言っている。

人間は「個」としては非連続だが、「種」としては連続である。文章は「個」としての有限性を「種」としての無限性につなぐ営みである。本や文章を書く最大の意義はここにある。ロビンソン・クルーソーのように孤島に流されて読みたい本というのは、実は自分が一番書きたい本でもある。孤島の孤独の中で本当に書き残したいものこそ、書くに値する文章である。極限の中からこそ、傑作は生まれる。

日常と非日常が切り結ぶ表現空間にこそ、作家やジャーナリストらメディア表現者の立脚点はある。



## 4

### 死生観から見た表現の大切さ

長い生も、死ぬときは、あつけない。

あと一日しか生きられないとしたら、あなたは何をしますか。

いくら好きだからと言って、最後のゴルフやパチンコを思う存分、楽しもうという人はまずいない。

どんなに有能な企業戦士だからと言って、会社へ行き、積み残しの仕事を片づける人はいないだろう。

高級レストランで豪華な料理に舌鼓したつづみを打ったり、有り金をはたいてブランド品を買いあさったりする人もいないだろう。パソコンを開き、インターネットやコンピューターゲームに興じる人もいないだろう。

そんなことは、死んでしまえば、どうでもいいことである。

人は日ごろ、本当はどうでもいいことに多くの時間を割いている。普段はそれがどうでもいいことなのだというのに気づかない。ロビンソン・クルーソーのように日常の軌道から振り落とされ、自分の命がどうのこうのという非常事態になったとき、初めてそのことに気づく。

私たちの生活は二つの次元からなっている。一つは深みのないありふれた日常生活、もう一つはより高次の精神生活である。現象と本質、物と心の違いと言ってもいい。普段は前者のレベルで生きていて、



何かがきっかけになって後者の世界に入る。例えば、死という現実直面するときにそうである。はつとして、物のにぎやかさから、心の深さに意識が向かう。

あと一日しか生きられないという極限状況から浮かび上がるのは、生きていくうえで何を大切に思っているかという自分の偽らざる姿だ。人は口ではいつ死んでもいいと言いながら、本心では長生きしたいと思っている。苦しみや悲しみがどんなに多くても、死なないのは、やはり生きていることには何かしらいふことがあるからだろう。

だれでも豊かに年を重ねながら、年相応の知恵や落ち着きを身につけたいと思っている。しかし、そんな思いとは無関係に、いつ最後の日がやってきてもおかしくないのが人生だ。生の本質は無常である。非常こそが人生の常である。

夏のバカンスへ向かうドライブ中に事故に遭うこともあり得る。働き盛りに心筋梗塞で命を失うこともあり得る。二〇〇一年の米中枢同時テロのような不幸な事件に遭遇して、非業の死を遂げることだってあり得る。海外への栄転が決まり、赴任する直前に不治の病であることが判明して、赴任を断念したという身近な例もある。

そういう人たちはみんな、もっとやりたいことがあったはずである。もう一度生きることができたら、もっとゆつたりと過ごそう。もう一度生きることができたら、もっと創造的な事業にチャレンジしよう。もう一度生きることができるなら……。何か重要な、本質的なことに出会ったとき、人生は別

の次元へ押し上げられる。感覚が鋭くなり、色が鮮やかになり、音が快くなり、命が強烈に燃え上がる。白黒テレビがカラーテレビになるように、人生の色合いががらりと変わる。

ローマにサンタ・マリア・デッラ・コンツォーネという教会がある。俗に骸骨寺と言う。室内には、四〇〇〇体の骸骨がびっしり敷き詰められている。初めて訪れる人たちは異様な光景に度肝を抜かれる。その一角にこんなプレートがかかっている。「昔は私たちもあなたたちのようでした。いずれ、あなたたちも私たちのようになるのです」。死者が生者に最も鮮烈なメッセージを送っている。

人生最後の一日について思いをめぐらせるのは、死ぬことへの不安や憧憬からではない。あと一日しか生きられないとしたらと自問すること、生きる意味がくつきり浮かび上がるのである。生きるとは何なのか。息をするとは何なのか。自分自身を感じるとは何なのか。美しい景色を眺めたり、バラの香りを嗅いだりすることには、どんな意味があるのか。出会いとは何だろう。自分の人生を通じて子どもたちに何を伝えようとしているのか。この世にどんな足跡を残そうとしているのか。人生の最後の日をリアルに思い浮かべると、漫然とうわつらで生きている今の自分の姿が浮き彫りになる。

もっと濃密な時間を過ごし、瞬間瞬間を味わい尽くし、毎日を新鮮に生きようという思いを新たにする。一瞬一瞬を懸命に生き、自分が今ここに存在するということに意識を集中するようになる。あと一日しか生きられないということを具体的に想像することによって、生の深みに気づき、自分がよって立つべき生の本源に触れる。要するに、それまでの生活をすべて洗い直すきっかけになるのである。



人間関係もそうだ。今日が最後の日だとしたら、真っ先にだれと会うだろうか。最後の一日をだれと過ごすだろうか。このように考えることによつて、どの人との関係が利害を超えたものであり、どの人との関係が表面的なものだったかが明白になる。死という意識の濾過紙<sup>ろかし</sup>が偽りのものをふるい落とし、本物だけを残す。大切な人たちは自分にとつて何だったのか。その人たちが自分の中に残したものは何だったのか。自分は何を聞き、何を学んだのか。心の琴線に触れたものは何だったのか。

内なる目で愛すべき人たちとの出会いを思い浮かべると、大切なものの本当の意味が見えてくる。そして、思う。友情や愛情は死によつて壊れない。それは死を超え、永遠なるものへつながっている。死との遭遇において、死よりも強い友情の秘密、死によつて断ち切られない愛情の秘密が立ち現れる。

フランスの思想家シモーヌ・ヴェイユはこんな言葉を残している。「与えるというものではないが、人には是非渡しておかねばならぬ大切な預かりものが自分のうちにある」。発明家トーマス・エジソンは「人間が臨終に際して、子孫に熱狂的精神を伝えることができれば、無限の価値ある財産を残したことになる」と記している。

一九世紀の英国の天文学者ハーシェルは友人に「わが愛する友よ、われわれが死ぬときは、われわれが生まれたときよりも世の中を少しなりとも良くして逝<sup>(1)</sup>こうではないか」と言つたそうである。ハーセルはそれまで知られなかった天体の全体像を描き出し、世の中の進歩に貢献した。

永遠の別れに際して、大切な人たちに自分の全人生をもつて伝えたいこと、与えたいものとは一体、



何なのか。それは結局、自分が全人生をかけて追い求めてきたものにほかならない。自分の全人生をもつて表現したいものについて考えるとき、一切の不純物をそぎ落とした純粋な言葉が浮かんでくる。その言葉が結局、自分が歩んだ人生なのである。

あと一日しか生きられないとしたら、という問いに立つとき、人はこの世でまだ積み残していることについて考える。人生においてまだはつきりしないものは何か。これから追求すべきものは何か。このように考えたときに「書きたい」と心から思ったことが、真の文であり、真の本である。

生の向こう側から、こちら側の生を見つめ直すとき、書いておかなければならないことが見えてくる。ホイジンガの『中世の秋<sup>(12)</sup>』の言葉を借りれば、「人生のあらゆる出来事が鋭い輪郭を持ち、悲しみと喜びの隔たりがはつきりする」のである。

どの分野であれ、表現者に求められるのは、机上の想像力やアイデアよりも先に、生と死に対する透徹した視点である。死生観の深さが文章に深みを与える。ソローは『森の生活』でこう言っている。

たいていの書物では、一人称の私は省略される。私に固執するところが、本書とほかの書物とのおもなちがいである。話しているのはいつでも一人称の自分だということを、われわれはとく忘れがちである。……私としてはあらゆる作家が、他人の生活について聞いたことばかりでなく、いつかは自分自身の生活について、単純率直に語ってほしいものだと思っている。ちょうど遠い国が

ら肉親にあてて手紙を書き送るように<sup>(13)</sup>。

書くことは一個の人間の全人格的な営みであり、それが同時代の人々、そして未来の人々へ伝わっていく。そこに時間的・空間的なコミュニケーションが成り立つ。

## 5

### 過ぎ去る時間を書き留める

精神的に深く生きるとは何か。豊かな人生とは何か。

都会の雑踏の中で、人はふと立ち止まって考えるときがある。何もないのに、希望に胸が高鳴っていた時代があった。朝、目が覚めると、それだけでわくわくしていた時代があった。今はどうだろう。なぜ、こんなにあくせくするのだろう。何かに駆り立てられるように、走り続けようとする。立ち止まれば、負けてしまう。一体、何に？ 他人に、社会に、時代に。

ああ、おまへはなにをして来たのだと……

吹き来る風が私に云ふ<sup>(14)</sup>

(中原中也「帰郷」)

人間というのは、忘れていることがいろいろあるらしい。はるかな心の原風景を思い浮かべるとき、胸にあふれてくるものがある。中国の魯迅に『故郷』という珠玉の短編がある。実体験に基づく創作である。

没落地主の家に生まれた主人公の魯迅は四〇歳近くになって、二〇年ぶりに帰郷する。旧家を売却するためである。昔親しかった人々と再会する。だが、埋められない心の隔たりに歳月を感じる。ああ、これが二〇年来、片時も忘れることのなかった故郷だろうか。古い家も、故郷の山も遠くなり、自分だけが取り残されたように気がめいる。

でも、自分の幼い甥と親しかった人たちの子どもとは、今でも心が通い合う。せめて彼らだけは自分と違って、互いに隔絶することのないようにと願いながら、魯迅は思う。

「希望という考えがうかんだので、私はどきつとした。希望とは、もともとあるものとも言えぬし、ないものとも言えない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ<sup>(15)</sup>」

思えば、生そのものが希望のように、あるような、ないような不確かなものだ。自分の足で何十年と踏みしめることによって、ようやく道らしきものができる。太い道もあれば、細い道もある。まっすぐな道もあれば、曲がりくねった道もある。それは後から振り返ったときに初めて見えてくる生の軌跡である。



東山魁夷画伯に「道」という名画がある。緑の牧場を一本の道がすーっと伸びている。それだけである。それ以外に何も描かれていない。「まっすぐな道でさみしい」という漂泊の禅僧、山頭火の句を思わせる風景である。

来た道なのか、これから行く道なのか。どちらとも取れるところにこの絵の深さがある。はるかな道のりを越えて「ここまでたどり着いた」という感慨を持つ人もいれば、これから進む未来にそこはかない希望や不安を抱く人もいるだろう。

長野市の善光寺近くに信濃美術館東山魁夷館がある。何年か前、一つのまとまった仕事を終え、初めてたずねた。長野駅から善光寺への一本道を上りながら、「道」を思い描いた。実物を前にして、人生とは一本の道であるとの感を深くした。この絵は見る人の心を映す。

画伯は制作当時の心境をこう記している。「夏の朝早い空気の中に、静かに息づくような画面にしたいと思った。この作品の象徴する世界は私にとって遍歴の果てでもあり、また、新しく始まる道でもある。それは絶望と希望を織りまぜてはるかに続く一本の道であった<sup>(16)</sup>」。そして「歳月の推移、境遇の変化、心の遍歴——人はみな旅人である。この一筋の寂しい道こそ、私の心の道である。描くことは、祈ることであるとは、終始一貫して私の信条である」と締めくくっている。

生きるとは、数限りない明日という日を問い返し、夢を追い続ける旅である。旅とは、日常の軌道から外れ、非日常的な未知の世界を体験することである。可愛い子には旅をさせよ。人は本当の自分にな

るために一度、住み慣れた故郷を捨てなければならない。故郷を離れ、山河を越え、異郷で未知の自分とめぐり会う。

古い自分を捨て、新しい自分を発見する。魯迅も東山も、みな故郷を捨てて自己形成の旅に出た。旅にありながら、彼らの心はいつも故郷にあった。船乗りは港を出たときから故郷を目指すという。古い自分と新しい自分、故郷と旅先、その距離が道程である。旅は視野を広げ、精神を深めてくれる。グローバル時代に必要なのは、広い視野と深い精神である。それが文章に生きてくる。

ゲーテ<sup>ひつせい</sup>畢生の大作『ファウスト』。疾風のように時代を駆け抜けた主人公ファウストは、ヨーロッパ中を旅して人間と文明のあるべき姿を考え抜いたゲーテの胸の内を代弁する。

己は自分の心で、全人類に課せられたものを

じっくり味わってみたい。

自分の精神で、最高最深のものをつかんでみたい。

人類の幸福と苦悩とを己の胸で受けとめてみたい。

そして己の心を人類の心にまで拡大し、

最後には人類同様、己も滅んで行こうと思うのだ。<sup>(17)</sup>



宇宙の中心に屹立するような、一個の人間の気迫を感じさせる告白である。自分の可能性を最大限に生かす。生きること自体が文字通りのライフワークである。各人が自分で踏みしめ、創っていくオンラインワンロード。世界でたった一つしかない自分の道——。この事実を自覚することが自分を生かすための出発点になる。

生きることは一步一步、死に近づくことである。生きつつ、死んでいるのが生の実相だ。時間という観点からすると、生きることとは、持ち時間を消費することにはかならない。人間の持ち時間は無限から無限へ流れる時間の太い川にのみ込まれ、過去になる。過去とは死んだ時間の集積である。過ぎ去ったものは再び帰らない。過ぎ去った時間は幻のようなものである。

ルネサンスという激動の時代を生き抜いた巨人レオナルド・ダ・ヴィンチは「歲月よりも速いものはない。おお時間よ、すべてのものを食い尽くす嫉妬深い老人よ。お前はすべてを破壊し、すべてを死に至らしめる」<sup>(18)</sup>（『手記』）と言っている。

過ぎ来し方を振り返るとき、長いようであつたという思いがよぎる。そういう過ぎ去る時間、過ぎ去る生を、確かな形として残すことが書き留めるという営みである。生命活動のあかしが言葉の作品に結晶する。逆に言うと、全人格を投じた文章には、その人の生と魂が宿る。ジャーナリストの仕事も、消えゆく日々の出来事を歴史に書き留めることである。書いておかないと埋もれてしまう事実を記録することである。



このような観点から、ものを書くという営みを見据えると、たるんでいた背筋がピンと伸び、筆先に力がこもってくる。

## 6

### 後世への贈り物

地球という星は驚異に満ちている。最大の驚異は何と言っても、人類という高度の知性を備えた生物が熱帯から極寒の地まで、惑星全体を占有していることだろう。文明史とは、霊長類ヒト科に属するヒトが異常に繁殖した歴史だった。その数、実に六三億。人類は今、地球の外へ出て太陽系の惑星にまで進出しようとしている。

しかし、宇宙的な時間から見れば、人類の生存は顕微鏡でのぞくような極小の一点にすぎない。個人の一生はさらに短い。時の流れは無常である。だからこそ、この限られた時間の中で何かを経験できるというのは幸運と言うべきだろう。生まれなかったら、何も経験できないのだから。喜びであれ、悲しみであれ、この地球上で生きている手ごたえを感じることができるのは、素晴らしいことである。

経験できるのは生きている間だけである。そう考えると、この世に生きたあかしとなることをやってみようという気持ちになる。死のベールを通した緊張感が生きる意味を浮き彫りにする。

無常の克服。そこにこそ、人生の輝く究極のシーンがある。

内村鑑三は『後世への最大遺物』で、こんな趣旨のことを言っている。われわれが五〇年の生命を託したこの美しい地球、この美しい国、われわれを育ててくれた山や河に対し、何も残さずに死んでしまいたくない。何かこの世に生きたあかしとなるものを残して去りたい。それは一体、何だろうか。お金か、事業か、思想か。これらも用い方によつては大変有益である。けれども、最大の贈り物ではない。残すべきあかしは何よりも、自分自身の勇ましい高尚なる生涯である……<sup>(19)</sup>

勇ましいというのは、苦難を乗り越える勇氣という意味である。苦悩を突き抜けて歓喜にいたる。危機を克服して自己を再生する。そこに危機と再生の場としての表現空間がある。

柔道、剣道、書道というふうには、伝統的な武芸には「道」がある。文章表現にも、文章道と言ふべきものがある。道はどこまでも続いている。終わりが無い。終わりのない困難な道を究めようとするところに、人間の本源的力量が表れる。

文章は自分の成長とともに深まる。

文章を書くことは人生の諸相に関わるものであり、人間のさまざまな力を引き出す。内容と形式の両面において、自分の偽らざる歩みが文章に刻まれる。それがこの世に生きたあかしになる。生きたあかしを残しながら、自分を高めていく。そういうものとして文章力を磨き、表現力を培っていかなければならない。



## 7

### 生きるとは世界と交わること

グローバル化が進み、世界が「一つの地球」へ向かう中、異質なもの同士が出会う機会はぐんと増えた。

未知の世界との遭遇ほど、心躍るものはない。人が旅にあこがれるのは、めくるめくような驚きを体験したいからである。驚きは、生きていることの素晴らしさを実感させる。

命というのはそれ自体、天からの贈り物である。生きる価値はつまるところ、至福の時間をどれだけ持ったかにかかっている。そういう時間を文章に書き留めることによって、有限なる生は不滅の価値を獲得する。善・悪・美・醜、さまざまな相が織りなす人間社会——。だれでも自由に情報を発信できるインターネットの世界をのぞくと分かるように、悪意、嫉妬、虚言が充満している。だからこそ、善意に出会うと、人のありがたさが身にしみる。悪より善を選び、醜より美を求めるのが人間の気高さである。その意味で、この世は真実を探求する巡礼の旅と言えるかもしれない。

国際ジャーナリストとして二三年、世界各地を旅した。地球上のさまざまな職業の人と出会い、刺激を受けた。日々刺激に満ち、単調さの苦痛を感じない仕事に打ち込めるのは幸せなことである。特派員や国際ジャーナリストという仕事は最も面白い職業の一つである。自らの足跡を振り返るとき、胸底に



響く言葉がある。スペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットの、

生きるとは世界と交わること、世界に立ち向かうこと、世界の中で働き、世界に携わることである。<sup>(20)</sup>

（『大衆の反逆』）

という名言である。オルテガは「人間にとって、『生きる』とは単に『存在する』ことではなく、『よく存在する』ことを意味する<sup>(21)</sup>」とも言っている。これはフランスの哲学者ジャン・ジャック・ルソーの「わたしたちは、いわば、二回この世に生まれる。一回目は存在するために、二回目は生きるために<sup>(22)</sup>」（『エミール』）という言葉と重なる。

「よく存在する」「よく生きる」というのは、自分および他者に対して責任を持つことである。人間は地球上で唯一、責任を持つ自覚的な生き物である。自分とは直接関係のないような世界の悲惨な出来事に心を痛め、自分の仕事を通じて世界の建設に寄与するところに、地球社会の一員としての共感と責任がある。

責任とは他者に対して、社会に対して、地球に対して、未来に対して人間の意志を示すことである。この世は生きるに値するという炎のメッセージを同時代の人々へ、そして次世代へ伝えることである。このメッセージの伝達こそが最も高次の表現活動にほかならない。

そういうふうに関わりながら、真実の自己を確立する。真実の自己というのは「汝のそうであるべきもの」(ペーラーヴェン)になるということである。それは外の世界との精神的な自己格闘を通じて実現する。外の世界と内の世界との火花の散るような遭遇、そして交流。世界を旅するとは、自分自身を旅することにはかならない。

地球社会を旅し、自己を高めるうえで大切なのは、「表現する」という営みである。写真家は写真によつて、画家は絵によつて、作家やジャーナリストは文章によつて、自己の体験的世界を表現する。中でも、人間形成や思想構築に不可欠なのが言語表現である。世界や自己を文章で的確に表現しながら、内面を深めていく。文章を書くことは内面の海に思考のロープを下ろし、精神の海底をラディカルに探查することである。そこから世界や自己の実像を再構築する。この作業は自己確立に不可欠である。

文は人なりという。書くことによつて思想が深まり、精神が強まり、人間性が高まる。良く書くとは、良く生きることである。書くという苦しくて楽しい営みの中に、深く生きるための契機が潜んでいる。その意味で、各個人の生きざまを抜きにした一般の命題はあり得ない。文章や言語はどこまでも自己の問題である。内なる世界の表現は、自己認識への通路である。表現することによつて自覚が深まり、自覚が深まることによつて表現の幅が増す。

五〇の峠に立ち、上ってきた坂道を振り返ると、気づくことがある。ひとときわ明るく輝いている箇所がいくつもある。目を凝らし、記憶をたどると、いずれも文章にした箇所である。著書、論文、記事、



エッセーと形式はさまざまだが、文章に残したところは印象が濃い。その時代を、自分は確かに生きたという達成感や自足感が湧き上がってくる。それだけ対象と深く交流したということである。

世界的な出来事であれ、個人的な出来事であれ、それを文章として表現したかどうかで印象の深さ、記憶の鮮やかさは異なる。記憶とは単に頭の中の静止した記録ではない。身心のトータルな体験としての生きた記憶である。そこでは「出来事の輪郭」<sup>(23)</sup>（ホイジンガ）がくつきりしている。

もっと大きく言えば、各人の体験的世界は、文章として表現することによって永遠の生命を獲得する。自分が紡ぎ出した言葉や文章はずっと残る。それは取りも直さず、自分の精神活動や生命活動がそこに永遠に刻まれるということにほかならない。

つまり、それがこの世に生きたあかしということである。生きる価値があることは、記録する価値がある。グローバル時代に入り、世界を旅したり書いたりする機会は急速に増えた。異質なものととの出会いは人間の幅を広げてくれる。

文明の衝突を避け、文明の共生を促すためにも、地球を表現するための思想と技術が今ほど必要な時代はない。グローバルコミュニケーション時代における文章表現の大きな意義は、地球の本質を浮き彫りにし、相互認識を深めるところにある。

「コミュニケーション (communication)」とは、「共通するもの (common)」を共有して「共同体 (community)」を形成する営みである。したがって、ポジティブなコミュニケーションが豊かな共同体



の前提になる。前向きな言葉や美しい言葉が健全な人間関係をはぐくむ。逆に、汚い言葉や誹謗中傷が飛び交うネット世界がどういう方向へ向かっているかは、容易に想像がつく。ネット世界の一部はすでに愚者の楽園と化している。

インターネットをはじめとする新メディアの猛攻で、ジャーナリズムも機能不全に陥っている。現代のジャーナリズムに欠けているのは、危機意識と自己認識である。「情報はカネなり」とばかりに、情報の量に走って質を見失ってしまった。それではもはやジャーナリストではなく、情報ブローカーにすぎない。

勝つか負けるかの市場主義の中で、ジャーナリズムは理想を失った。記者一人一人が表現者としての高い自覚を取り戻さない限り、ジャーナリズムが滅びる日はそう遠くないだろう。ジャーナリストの使命について考えるとき、思い浮かべる言葉がある。冷戦下の東ドイツ時代、ドイツ北端のバルト海から自由な西側世界へ脱出しようとした何千という東ドイツ市民の運命を克明に取材し、『バルト海から自由を目指して——悲劇の脱出史』<sup>(24)</sup>という正・続二巻の本にまとめたボード・ミュラー氏の言葉である。

私たちは先の見えない暗闇の中で書き始めた。どこへ行き着くのか、見当さえつかなかった。ただ、「明日はない、今日しかない」という切迫した思いを抱いて、必死に取材し、書けるだけのものを書き尽くそうと思った。大きな壁を前にすると、情熱を燃やすことができた。情熱を持ち続けるこ

とが私たちの唯一の使命だった。書かずにはいられない宿命的なテーマに挑み、そして果たそうとした。書くことは自分自身を含む同時代人の過去を現在に再現し、未来へ語り継ぐことである。苦しくて充実した日々だった。

ミユラー氏はホーネッカー政権への露骨な反権力姿勢ゆえに、家族とともに国外追放になった反骨のジャーナリストである。「命懸けで西側への脱出を図り、バルト海で命尽きた人々の悲劇を歴史に埋もれさせるわけにはいかない」と、ベルリンの壁崩壊後、クリステイーネ夫人と一緒に精力的に取材し、悲劇の全体像を明らかにした。

私がミユラー夫妻の自宅を訪ね、話を聞いたのは、ボン特派員時代の一九九二年六月だった。『バルト海から自由を目指して』は冷戦終結という時代の怒濤どとうの中で、執念が生んだ本である。「私たちの作品は私たちが懸命に生きた時代の墓碑銘です。友人の死は、私たちの何かが死んだことと同じです。その友人たちの人生を文章として復活させることは、私たち自身の中の何かを復活させることだったんです」

注

(1) ロマン・ロラン『ジャン・クリストフ(二)』新潮文庫、新庄嘉章訳、一九六九年、八頁



- (2) ロマン・ロラン『ベートーヴェンの生涯』岩波文庫、片山敏彦訳、一九六五年、六八頁
- (3) MacLuhan, Marshall. Fiore, Quentin. *The Medium is the Massage*, Gingko Pr Inc., 2001
- (4) 斎藤茂男『飽食窮民——〈ルポルタージュ〉日本の幸福』共同通信社、一九九一年
- (5) 『天声人語』『朝日新聞』二〇〇四年二月二〇日付
- (6) アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ『星の王子さま』岩波書店、内藤濯訳、一九五三年、一五五頁
- (7) 山本武信『星の王子さまからの警鐘』共同通信社、二〇〇〇年、二七四―二七五頁
- (8) ヘンリー・D・ソロー『森の生活(上)』岩波文庫、飯田実訳、一九九五年、二五頁
- (9) 前同、二九頁
- (10) ヨハン・W・フォン・ゲーテ『ファウスト第一部』新潮文庫、高橋義孝訳、一九六七年、七三―七四頁
- (11) 内村鑑三『後世への最大遺物・デンマルク国の話』岩波文庫、一九四六年、一八頁
- (12) ヨハン・ホイジンガ『中世の秋』角川書店、兼岩正夫・里見元一郎訳、一九八四年
- (13) ヘンリー・D・ソロー『森の生活(上)』前同、一〇頁
- (14) 中原中也『中原中也詩集』角川文庫、一九六八年、二九頁
- (15) 魯迅『阿Q正伝・狂人日記』岩波文庫、竹内好訳、一九九五年、九九頁
- (16) 東山魁夷『自然の中の喜び』講談社、一九九五年、四〇頁
- (17) ヨハン・W・フォン・ゲーテ『ファウスト第一部』前同、一一頁
- (18) レオナルド・ダ・ヴィンチ『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記(上)』岩波文庫、杉浦明平訳、一九五四年、七七頁
- (19) 内村鑑三『後世への最大遺物・デンマルク国の話』前同、五三―五四頁
- (20) Ortega y Gasset, Jose. *Revolt of the Masses*, Blackstone Audiobooks, 1997: pp. 35-39
- (21) *ibid*: p. 77



- (22) ジャン・ジャック・ルソー『エミール(中)』岩波文庫、今野一雄訳、一九九四年、五頁
- (23) ヨハン・ホイジンガ『中世の秋』前同
- (24) Müller, Bodo. *Über die Ostsee in die Freiheit*, Delius Klasing, 1992

## 第2章 書くことは生きること

人間は、あらかじめプログラム化された本能が地球上で最も少ない動物である。スペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットが言っているように、人間は他の生き物と違って、方向性を持たずにこの世に放り出される。

他の生き物、例えば、鳥や魚は群れを離れ、親から教えられなくても、本能によって鳥や魚のように行動する。人間はそうはいかない。家庭や学校で長い間教育を受けることによって初めて人間らしい人間になる。実際にあつたように、オオカミやゴリラに育てられたら、当然言葉は使えず、オオカミやゴリラのように振る舞う。それが方向性を持たない人間の宿命である。

その分、人間は学習能力が優れている。学習能力が高いということは、環境の変化に適應する能力が高く、新しいものを創造する自由を持っているということである。つまり、最も多くの可能性を秘めているのが人間という生き物なのだ。

適應能力があるから、次々に新たな可能性を見つけて実現しようとする。心地よい可能性を発見すると、追い求めずにおれない。昨日までの自分の枠を超えて、明日の自分に挑戦しようとする。本能から自由であるがゆえに、目標を描く。目標を持ち、夢を見るのは人間の特権である。目標に向かって努力



するうちに、さまざまな困難に直面し、さまざまな経験を積んで人間的に成長していく。

その意味で、この世は自己完成を目指す巡礼である。世界と交わり、世界に立ち向かう巡礼の旅において大切なことは、自分の五感をフルに使って世界を見たり、感じたり、考えたりすることである。世界との内的なコミュニケーションを通して、人は自分というものを知る。世界と自己を媒介するもの、それが言葉である。

「見る」「聞く」「読む」という情報をインプットする作業は、「書く」というアウトプットの段階にいたって完了する。書くことにより、世界や自分に対する認識が深まる。こうして知性が磨かれ、進む方向が見えてくる。あらかじめ本能を書き込まれた他の生き物に対し、人間は自分の方向性を自分自身で書くのである。書くとはこのように、自分自身を生きることであり、自分の中に埋もれている知性、感性、経験、アイデア、イメージーションを文章として引き出すことである。そこに自分を高めるきっかけがある。

方向性を持たずにこの世に放り出された人間は、教育と学習によって社会で生きるためのルールを身につける。後天的な学習によって知性が磨かれ、人格が形成される。子どもから大人になる過程で重要なのは広義の記憶力である。高校受験や大学受験で問われるのも、基本的に記憶力である。コピー能力と言ってもいい。

コピー能力は人間が人間になるための不可欠の要素だが、人間の真価はそこからさらに進んだ創造力

にある。「(テレビを)見る」「(ラジオを)聞く」「(本を)読む」「(文章を)書く」で言えば、「書く」ことが最も創造的である。それだけ難しい。

コピーからクリエイトへ。インプットからアウトプットへ。表現するという営みは、方向性を持たずに生まれた人間が学習によって持ち得る最大の特権である。後天的に獲得したこの力によって、人類は壮大な文明を築くことができたのである。文明とは、人類の表現力が高度に結晶した姿かたちにはほかない。

書くところに、内なる世界の姿と力が正直に表れる。それが文章である。書くことを放棄すれば、人間は本来の力を失うことになる。そう言っても過言ではない。

## 2

### 読むことと書くこと

優れた人は深い思想を持っている。思想が深い人は表現力に優れている。

日ごろ積極的に発言し、はた目には立派な人と映っていた人の文章が意外と稚拙で、がっかりすることがある。反対に、物静かで目立たない人が書いた文章の素晴らしさに接して、にわかには畏敬の念を抱いたりすることもある。文章を見ると、人となりがよく分かる。文章には、他の基準では計れない要素が凝縮している。そういうふうによく語ってくれるのが文章である。



文章とはつまるところ、「内容」と「形式」である。内容とはメッセージであり、形式とは文体である。内容は形式を満たす実質である。例えば、情報、知識、思想といったものである。文章を書くためにはまず、言うべきこと、言うに値することを持たなければならぬ。伝えるべき内容がなければ、書く営みは成り立たない。

社員のいない会社と同様、メッセージのない文章は意味がない。

文体は、内容に沿って選び取る形式である。<sup>(1)</sup>身体の特徴や気分、季節などに合わせて選ぶファッションのようなものである。形式は内容を生まないが、内容は自ずと形式を生む。料理で言えば、料理法を知っていても食材がなければ、料理はできない。食材さえあれば、料理らしいものはできる。その意味で、初めに内容ありきと言える。

もちろん、いったん文体が確立すると、文体の方が内容を選択するという面も出てくる。コックが料理法に依じて食材を選ぶのと似ている。一流の人は一流の素材、一流の題材を選ぶものだ。ここに言う一流とは高価とか豪華という意味ではない。質の問題である。

言うべきことを持つために、書くことは読むことから始まる。語彙を増やし、知識を吸収し、世界観を深めるためには、読書や情報収集が不可欠である。創造力を発揮する前にコピー能力を高める必要がある。中でも良書は精神を鍛え、人格を磨く貴重な糧となる。人は本とともに成長する。

実際に、本を読むことは人間形成にどんな効果があるのだろうか。次の一文はドイツの代表的メルヘ



ン『グリム童話』をテーマにした新聞用ルポである。フランクフルトで暮らすドイツ人一家を素材に、良書を読み聞かせるという営みが人間形成や家族関係に与える影響をレポートしたものである。

実例1 「六〇億人の地球家族——メルヘン」<sup>(2)</sup>

ある夏の午後。ドイツ南部の「黒い森」に迷い込んだ坊やがいました。大人でも三カ月は出てこれないといわれる深い森です。坊やはフランクフルトから家族とキャンプに来て遊んでいるうちに、はぐれてしまったのです。

辺りが暗くなってきました。坊やは不安になって大声で呼びました。「パパー、ママー」。返事はありません。疲れて木の根っこに腰かけました。うとうとしながら、グリム童話の「森の中の三人の小人」を思い浮かべていると、小人が話しかけてきました。「坊や、一緒に遊ばないか」。坊やはいつしか眠ってしまいました。目が覚めると、懐中電灯を手にしたお父さんとお母さんが立っていました。「レオン、大丈夫かい」「うん平気、怖くなんかなかったよ。小人のおじさんがね……」

▽安眠効果

ことし五歳のレオン・クライナーの楽しみは三歳の時から毎晩、就寝前に聞いているグリム童話。「ぼくが選んだ物語を。パパやママがぼくと弟のヤンに読んでくれるの。どの物語も大好きだよ。今夜は『オオカミと七匹の子やぎ』。何度聞いても楽しいよ」

朗読が始まると真剣なまなざしになり、うなずいたり、時折「危ない」と叫んだりする。メルヘンの世界に溶け込み、主人公になり切っているようだ。読み終わるまでにはいつも寝息を立てている。

「童話を読んで聞かせることには安眠効果をはじめ多くの効用があるのです」と母親のバルバラさんは言う。レオンは利発で記憶力が良い。受け答えもしつかりしている。「子どもたちはメルヘンを通じて思考力や表現力を高め、善悪を知り、自立心を身につけていきます。色彩豊かな挿絵は想像力を養うのに役立ちます。説教調の聖書には望めないことです」

『星の王子さま』で知られるフランスの作家アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリも乳母にグリム童話を読んでもらった一人。文学的才能はそこから芽吹いたといわれる。

グリム童話には残酷な場面も多い。「日本では『本当は恐ろしい』と銘打った本が話題になりました」と水田を向けると、バルバラさんは少し考えてから「私も最初、そういう場面は飛ばしたり、言い換えたりしていました。でも、夫のイエンスは構わずに読む。レオンも変だと気づき、原文通りに言うので、今はそうしています」。建築家のイエンスさんが代弁した。「殺人や暴力などおそろしい場面は、生きていくうえで必ずぶつかる障害を暗示しています。悪者たちが殺されるのは正義が勝ち、悪は懲らしめられるというモラル形成に不可欠な要素なのです」

主人公は危機的状況に直面し、最後に脱出する。子どもはそこから障害を乗り越える勇気を学ぶ。「健全な世界にはないものがメルヘンの影の部分から得られます。悪や抑圧との葛藤の果てに生まれる希望と自己信頼がハッピーエンドで終わる童話の良さなんです」。イエンスさん夫婦がレオンたちにグリム童話を読み続けるのも、こうした信念からだ。

やりとりを聞いていたレオンは、げんそうに「何が怖いのか？ ぼくは悪者を退治して王さまになった仕立屋さんみたいに強くなりたい」。仕立屋というのはグリム童話の「勇ましいちびの仕立屋さん」。レオンは半年ほど前、蓄膿症を患って入院した。初めは手術を嫌がっていたが、この物語に勇気づけられ「仕立屋さんできたんだから、ぼくにもできる」と言って手術室に向かったそうだ。

「子どもたちに生きる希望と勇気を渡していくのが親の務め。グリム童話は親から子へ、子からまたその子



へと引き継いでいく心の贈り物です」とイエンスさん。「親と子が童話という共通の窓から同じ目線で世界を見つめる。親の方も童心に返り、生きる活力を得る。ここに家族の絆が深まっていく土台があります」  
▽心のふるさと

聖書が禁じられていた社会主義政権下の東ドイツでも、グリム童話だけは熱心に読み継がれた。童話の世界に東西の壁はなく、情操教育の伝統は冷戦時代も息づいていた。冷戦が終わると、グローバル競争が激化した。人間関係がいびつになり、家庭や共同体の崩壊が叫ばれるようになった。子どもたちはコンピューターゲームやインターネットに熱中し、家族や友だちと肌で触れ合う機会が減った。その結果、暴力、犯罪、うつ病、自殺が急増、「子どもの危機」が深刻になっている。

そんな世相に心を痛め、グリム童話のルネサンス運動を始めたのがクライナー家と親交のあるザビーネ・ラニウスさんだ。二年前にフランクフルトで「グリム童話語り部会」を旗揚げし、約一〇〇人のボランティアと各地の家庭、病院、学校などで朗読会を催している。

「競争、競争で社会全体の神経がピリピリしています。心のふるさととしての童話を語り継いで子どもたちの成長を支援し、家族や地域のきずなを再生したいと願っています」

グリム童話との対話がきっかけで自閉症的傾向から立ち直った子、学校でのいじめにくじけなかった子……。「うちでもぜひ」という依頼が相次ぐようになり、語り部の数も増えてきた。

レオンは最近、幼稚園から帰ると、グリム童話の主人公たちの絵をかくのに夢中。幼稚園の独演会に向け、自分でアレンジした物語を作っているのだ。「先生や友だちにグリム童話のお話をしあえば、面白いつてほめられたの」

レオンにはひそかな夢がある。「ぼくね、大人になったら、ザビーネさんのような語り部になって、日本や中国やアメリカなど世界中を旅行したいんだ」。両親に見守られ、澄んだ目がほほえんだ。

（フランクフルト共同＝山本武信）



童話を読むことにはたくさんの利点がある。メルヘンの主人公がたどる道筋は人間の発達過程を示している。それは一人一人の人間の歩みであるとともに、人類全体の歩みである。一個の人間の発達史は人類の発達史の縮図である。その縮図を、メルヘンの主人公は濃密に、暗示的に演じる。

メルヘンでは人間の根本的な諸問題が扱われている。メルヘンはIT革命のような現代の生活については何も語らないが、人々がさまざまな状況に適合できるシナリオや正しい解決法を提示する。

要するに、人々はメルヘンを通して生きる知恵を学ぶのである。メルヘンは、現実と空想を包み込んだ世界を自由に飛び回るための翼を与える。メルヘンに限ったことではない。読書は自分を読み、世界を読むことである。文学や哲学書をはじめ良書を読むことにより、人は生き方の幅を広げ、考え方を深めることができる。

読むという営みを通じて、自分の内側に何かが加わり、自分が変わる。幼いころから本を読んで聞かせると、言葉の使い方や文章のリズムも心身に刻まれるという。読書家には、一朝一夕には身につかない知性の輝きがある。読書家は良い書き手になる可能性が高い。

このように、読むことは書く内容を満たし、書く形式を創り出すためのベースになる。したがって、世界を書く技術とは世界を読む技術にはかならない。

現実には、良書に親しむ習慣がないため、きちんとした日本語が書けない若者が多い。

第二次世界大戦前後まで、本は庶民には高価なもので、手に入れるのが難しかった。それが今、年間六万点の新刊を数え、だれでも簡単に入手できる。わざわざ買わなくても、近くの図書館で借りることもできる。こんなに本があふれているのに、本を読まない若者が増えている。

学生たちに聞くと、「あまり読んでいません」「漫画も本に入りますか」という答えが返ってくる。ゲームやインターネットや携帯電話などの新メディアに夢中になって、硬派の活字メディアは遠のいてしまった。出版文化の地崩れが心配されるような状況にあるのは否定できない。

語彙の数が増えるほど、知覚できる対象の数が増える。知能もより高度に働くようになる。語彙が増えると、言葉の微妙な働きや感情の複雑な動きも分かってくる。個々人の知性の発達過程は人類が言葉を発明し、ホモサピエンスとして進化してきた過程と重なる。

豊かな思想の持ち主は、言葉や表現が豊かである。活字を読むというのは、知能と表現力を高める言語体験である。「本を持っているかどうかは教養の有無を示す表面的なものであるが、見分けやすい<sup>(3)</sup>しるしでもある」というカール・ヒルティの言葉は、今も妥当性を失っていない。



世界の趨勢は活字メディアから、映像メディアや音声メディアによって情報を得る文化に移っている。テレビは新聞や書物と違い、視聴者に対して読書力、集中力、思考力といったものを要求しない。同じニュースを見るにしても、テレビの方がずっと楽である。その分、視聴者は受動的になりやすい。それでいてインパクトは強い。映像のイメージ喚起力は大きい。良くも悪くも、テレビは時代精神を創り出すうえで大きな役割を果たしている。

テレビの台頭により、新聞、雑誌などの活字メディアの影響力は相対的に弱まった。テレビ番組を見ると、その国がどういう国であるかがよく分かる。テレビ文化はその国の文化の縮図である。低俗な番組があふれているところは、社会や文化も低俗になる。

ドイツ人は一九七〇年代まで「テレビは創造力やイマジネーションを損ない、精神的に良くない」と言っており見なかった。テレビが影響力を増す中、先進国ではテレビは絶対に見ないという市民もいる。ドイツのテレビ拒否派は二%、フランスもほぼ同数。五〇人に一人という割合である。<sup>(4)</sup>

ヒマラヤのブータンはほんの少し前までテレビのない最後の国の一つだった。この辺境の小国の国王は、何百年と培われてきた文化が西側のテレビ文化によって侵害されるのではないかと心配した。今では孤立政策を放棄し、ビデオショップやビデオレコーダーも普及している。

テレビがもたらす負の効果は、インターネットや携帯電話が主役のネット時代を迎えて一段と強まっている。



ゲームや携帯電話がもたらす悪影響はテレビ以上である。脳神経科学が専門の森昭雄・日本大学教授の『ゲーム脳の恐怖』<sup>(5)</sup>（NHK出版）によると、ゲームに熱中しすぎると、脳波が低下し、アルツハイマー症と同じような症状を呈するという。この「ゲーム脳」説に対しては各方面から異議が唱えられているが、ゲームのしすぎが脳に悪い影響を与えるであろうことは、脳の専門家でなくとも容易に想像がつく。携帯電話の使いすぎも、ゲーム脳と同じような症状をもたらすという。

ホモサピエンスは言語によって知性や感性を磨き、文明を高度に発達させてきた生き物である。きちんとした言語体験が欠如すると、知能や文化の発達に支障が生じる。そういう時代背景の中で、日本語が揺れている。

だからと言って、「活字離れ」という表現は必ずしも実態を正確に伝えていない。

デジタルネット時代を迎え、だれでもパソコンや携帯電話を使って自由に情報を流すことができる。時間と空間の壁を超え、自由に自分の思いを文章にして流すことができる。デジタル世代はむしろ活字に慣れ親しんでいる。

中高年以上の世代にとって、自分が書いた文章が活字になる機会はまれだった。活字へのあこがれがあった。手書きの文字の癖や乱れをぬぐい去った美しい活字は神々しい。活字は真理そのもののようだった。自分が書いたものが活字になると、それこそ踊り出さんばかりにうれしかった。グーテンベルクの活版印刷以来、そういう活字信仰の時代が長く続いた。グーテンベルクの晩年に生まれたレオナル

ド・ダ・ヴィンチも、膨大な草稿が活字本になることを願いながら、夢はついになわなかった。

このアナログ時代の活字信仰を切り崩したのがデジタル時代のワープロであり、パソコンであり、インターネットである。デジタル文化の幕開けとともに、活字は手書き文字以上に身近なものとなった。今の若いデジタル世代は活字に特別な感情を抱いていない。活字離れどころか、むしろ活字世界にどっぷりつかっている。

活字は一般的になったため、かつての神々しさは消え、無機質になった。問題は、この無機質な活字が織り成す文章の中身である。「オナ中」「プチプラ」「パケ死」「プリン」「ボーパ」「オペッタ」「キノヌ」「ネカマ」……。若者の間で飛び交っているメールには、暗号としか言いようのないものも多い。自分たちだけの世界で通用する言葉で意志を伝え合えば、十分ということなのだろう。大人とは違う独自の用語を編み出すことで、自分たちの個性をアピールしようという意図もある。

若者の間でしか通じない用語があってもいい。ただし、許されるのはプライベートな場面だけ。一般社会では通用しない。一般社会で通用しないというのは、良識ある社会人としては認められないということである。

文章を読むと、その人の知性、知恵、想像力、思考力、心のありようといったものが見えてくる。知能を鍛え、知性を磨くような本を読まないと、中身の濃い文章は書けない。本を読むというのは簡単そうに見えて、実は難しい。何が難しいかというと、良い本ほど、読み手の能力に応じて立ち現れるとい



うことである。言い換えると、人は自分の能力の範囲でしか本を評価できない。本当は素晴らしい良書なのに、自分の力が及ばないために、「つまらない」と安易に断じるケースも多い。本に限ったことではない。世の中とは総じてそういうものである。

読む能力と書く能力は相関関係にある。栄養のある食べ物が立派な身体をつくるように、良い文章をたくさん読むことが良い文章を書く土台になる。先人の知恵を積極的に吸収しながら、独自の言葉で自分の世界を外の世界へ表現していく。逆に書く能力が高まれば、他者の文章への意識が研ぎ澄まされ、読む能力も向上する。

このように「読む」「書く」という営みを通じて、心や知恵を伝達し合うのが文章コミュニケーションである。活字が当たり前になったデジタル社会では、活字を生かす能力、つまり文章を書く能力がますます重要になる。無機質な活字にどんな生命力を吹き込むか。活字が生きるかどうかは、書き手の姿勢にかかっている。

文章を書く能力を高めなければ、どんな分野へ進んでも、苦勞するし、社会的な成功も望めない。政治、経済、ビジネスから文化、教育、科学、芸術、宗教まで一流と言われる人たちは言語表現に長<sup>た</sup>けている。

言語表現は人間形成と密接な関係にある。思考、感性、人格、性格。自己の内なる姿が言語表現を通して表れる。文章の中に人間性が映し出される。入学試験や入社試験など各種試験で作文や論文を書か



せるのは、人となりを判断しやすいからである。

情報を自由に発信できるネット社会では、そこに参加する人たちの偽らざる姿と心のありようが露呈する。例えば、他人を和ませるような文には、書き手の穏やかな心が映っている。匿名性を隠れ蓑にして他人を誹謗中傷する人や汚い言葉を使う人は、自らの心の貧しさをさらけ出している。ネットは、社会や文化の裸の姿を映し出す鏡である。

## 4

### 内なるものに形を与える

表現するとは何か。文章を書くとは何か。定義はいろいろ可能だが、次のように言うことができる。

- ① 自分の中に漠然と存在しながら外へ出ようとしているものに明確な形を与えること
- ② 抑えようとしてもなお内側からあふれ出ようとするものを的確な姿で引き出すこと

人の心は際限もなく深い。自分でも意識しないようなことがたくさん詰まっている。心を樽にたとえると、人間はだれでも生きていくうちに、さまざまな情報、知識、観念を樽の中に蓄えていく。生まれたときには空っぽだった樽は成長とともに水かさを増し、次第に水があふれ出してくる。あふれ出よう

とするものは、吐き出す必要がある。吐き出すことにより、樽は軽くなり、安定する。

人間の心や精神も同じである。貯めるばかりでは、フラストレーションを起こす。フラストレーションを解消するには、蓄積した後に適時、放出しなくてはならない。このように内からあふれようとするものを外へ出すことが「表現する (Express)」ということである。英語の Express は内面に存在するものを外へ (ex) 押し出す (press) ことを意味する。内から外へ。表現とは内面から外面への顕在化にほかならない。ドイツ哲学で言う「外在化 (Äußerung)」である。

したがって、内なるものを外へ押し出すことには、精神的なカタルシス効果もある。例えば、悲しいことや苦しいことを文章に吐き出すと、すっきりする経験はだれにもある。書くことによって生きる力が高まる、という一例である。

次に重要なのは、表現するということは他者に何かが伝わるという点である。自己の内側から表面に押し出されたものは、直接・間接に外部の人間に触れる。それは事実に関する客観的な情報だったり、送り手の意志や心だったりする。文章を書くというのは、自分の中にあるものを言葉として表に出し、相手に伝えるということである。そこにコミュニケーションが成り立つ。コミュニケーションの相手は特定の一人であることもあれば、不特定の多数ということもある。

書くことは他者や社会に何らかの影響を与える。文章表現は自分個人の問題にとどまらず、社会的に大きな意味を持つ。自分の中から何かを引き出し、言葉で表現する際は他者や社会への影響を考えなく



てはならない。そこにテクニクを超えた表現の難しさがある。

## 5

### 内と外のコミュニケーション

人間は個人的存在であるとともに、社会的存在である。

自分自身と向き合う個人的存在が座標軸の縦軸だとすれば、他者と向き合う社会的存在は横軸である。それは四〇億年ほど続いている生命進化の「時間的な縦軸」と、地球生態系の「空間的な横軸」に対応する。縦の生命意識と横の社会意識、その交差するところに個人は位置する。<sup>(6)</sup>

内なる心の世界と外の世界を媒介するのが言葉である。個人日記やメモのように純粹にプライベートな文章はともかくとして、他人が読むことを前提とする文章は出発点から社会関係を含んでいる。社会関係とは、人と人をつなぐ絆という意味である。文章は人と人の絆として、人間関係に作用する。このため、外部とのコミュニケーションの前にじっくり自分の内面とコミュニケートしなければならない。

自分自身との内的コミュニケーションの深さが他者との外的コミュニケーションの質を規定する。外的コミュニケーションを円滑に行うためには、内的なコミュニケーションを十分に練っておく必要がある。内と外が調和して有意義なコミュニケーションは成り立つ。

日本国際理解教育学会副会長の多田孝志・目白大学教授は「『共感し、響き合うことば』をもつこと



は、生きる希望をもつことにつながります。逆に、自分を語る『ことば』をもたず、あるいは聴いてくれる相手がいないことは、苛立ちと淋しさをもたらし、生きる希望を失わせるにちがいありません<sup>(7)</sup>と述べている。「共感し、響き合うことば」というのは現代社会のあるべき方向を示す良い言葉である。言語や思考は純粹になればなるほど、孤独になるのではなく、むしろ共感的なものになっていく。

実存が響き合うという意味で、人間は「響存」<sup>(8)</sup>である。

脳と脳がつながるネット社会は感染しやすい。リアルタイムのネット網は過敏である。知は知と、愚は愚と共鳴する。愚ほど感染力が強いのは、インターネット世界をのぞくと一目瞭然である。美しい言葉は心の透明度を高める。汚い言葉は心を汚す。この理屈がのみ込めれば、心ある文を書かなくてはならない理由が分かる<sup>(9)</sup>。

情報メディア社会では情報さえ伝わればいい、と安易に考える風潮が根強い。だが、同じ情報でも、書き方によっては相手を励ますこともあれば、傷つけることもある。社会的な意味において情報が生きるか死ぬかは、伝えようとする側の心のありようにかかっている。

何を書くかという問いは、なぜ書くかという問いである。思った通りに書けばいい、と勧めている素朴な文章論もある。思ったままをさらさら書けるのは、文章の達人だろう。普通はそうはいかない。思った通りに書けという勧めは、自分勝手に書けばいいという誤解を生む恐れがある。

樽の水がいっぱいになったから外へぶちまけるというのでは、フラストレーションの解消にはなっ

も、心と心をつなぐコミュニケーションにはならない。粗野な感情を粗野なまま吐き出してはならない。粗野な感情が粗野な言葉に乗って伝わると、思わぬ波紋を生む。特に神経過敏なネット社会ではそうだ。自由なインターネット世界では、相手の心を読み取ったり、配慮したりする想像力に欠ける人が多い。発信者の「匿名性」が表現の暴走を許す隠れ蓑になっている。

自分が思っていることを十分に吟味し、書くに値するかどうかを見極め、適切な言葉を選ばなければならぬ。文章を書くうえで大切なのは、読み手を気遣う思慮深さである。精神の海にロープを下ろし、心のありようを精査する。鬱蒼とした言葉の森から、人の心に心地よく届く最適な言葉を見つける。丹念に選んだ言葉の積み重ねから生まれた文章こそが、豊かな言語コミュニケーションを可能にする。

言葉は生き物である。文脈に応じて静止したり、躍動したりする。同じ言葉がコミュニケーションの文脈によって相手を鼓舞したりもすれば、傷つけたりもする。それが言葉を発するということである。外へ向かって発した言葉は自分のもとへフィードバックする。

心の絆を強めるためには、他者のことを念頭に置いて表現を考え抜かなければならない。心ある文章は多元文化時代の共生観を高める触媒となる。偽・悪・醜を抑制し、真・善・美を目指す。文章を書くことは、自らの生き方を問うことである。文章を端正に整えることは自らの心を端正に整えることである。

表現を整えることによって思考を整え、心を整える。



文章を書く能力を高めることは、自己形成と社会関係の向上に役立つ。

表現するとは、心が響き合うことである。ここに、文章を書くことの実践的および形而上学的な意義がある。コミュニケーションの本当の意義は単なる情報の伝達ではなく、心そのものを伝え合うところにある。相手のことを思いやる。文章を書く際は、だれに向かって書いているのかを絶えず念頭に置かなければならない。地球ネット時代のコミュニケーションが健全になるかどうかは、表現に対する地球市民一人一人の意識の高さにかかっている。

では、文章表現力の基礎はどのように身につけるのか。この点について、私自身の体験を基に触れておきたい。

## 6

### 文章修業の秘訣——名文に学ぶ

建築家が石を一個ずつ積み重ねていくように、一つの語を他の語に結びつけて書く作業が文章である。一気に達成する方法は存在しない。文章は持続である。

学問に王道なしという。文章修業にも近道はない。よほどの天才を除いて、速成の道はないと言い切れる。文章が一字一字の積み重ねであるように、文章修業も日々の努力の積み重ねである。できるだけ良い文章をたくさん読みながら、書いて書いて書き続けるしかない。書かずにうまくなる方法はない。



車の運転や各種スポーツと同様、実地の修練を積むことが大切だ。たくさん書くことによって、文章勘のようなものが身につく。継続は力なりで、文章勘ができると思うことが楽になり、面白くなる。

私自身の文章修業は大学時代に始まった。多くの本を読みあさるうちに、自分もいつか本を書きたいという欲求に目覚めた。どこの大学の哲学教授の本だっただろうか。「研究や思索は書くという営為において完結する。本や論文を書かないと思想は深まらない」という趣旨の一文に目がとまった。それがかっかけになって、大学一年のときから哲学論文の執筆に打ち込んだ。単行本を出版する日が来るのを夢見ていた。面白くて仕方がなかった。生まれて初めて経験する創作の喜びだった。

卒業するまでに、四〇〇字詰め原稿用紙で最大六五〇枚の『実存理性としての個別的推論式世界』から、六〇枚程度の『「個」の探求』や『自由論の覚え書き』まで一五本に上った。今もわが家の書庫に眠っている。将来、活字原稿として生きてくるとは思っていないが、修業時代の遺産として捨てがたいのである。二〇〇〇枚を超えるこの論文集を見るたびに、初心に戻る。

本を書こうというエネルギーの源流は、この大学時代の論文修業にさかのぼる。私の著作と思想の原点がそこにある。あの時代があったから今の自分がある、とつくづく思う。二〇〇〇枚以上の原稿は活字として日の目を見なかったが、将来への布石になった。

大学卒業後、縁あって共同通信社の記者になった。ジャーナリストになった以上、ジャーナリストイックな文章が書けないとやっていけない。新米記者は日々の仕事を通じて取材方法とともに、新聞記事

のスタイルを学ぶ。基本的な記事スタイルを覚えてから、本当の文章修業が始まる。

マスコミの世界では、大学時代の論文修業がかえって記事を書くうえで妨げになった。文章のスタイルが哲学とジャーナリズムとでは、まったく言っていないほど違う。一方は思想の論理的構築、他方は事実の客観的記録。溝は大きかった。もう一度、ゼロから出発しなければならなかった。

こうして私が採った方法は、お手本に学ぶことだった。優れたジャーナリストや作家が書いた名著を丁寧に読み、気に入った箇所をコピーしたり書き出したりして名文集を作った。四年間で大判ノート一〇冊以上になった。

中でも、暗誦するほど読み込んだのが深代淳郎氏の『天声人語 正・続』（朝日新聞社）や森本哲郎氏の『文明の旅』（新潮選書）である。深代氏の『天声人語』にいたっては、七〇〇編余りのコラムのうち特に感銘を受けた二〇〇編ほどを暗記した。どれも流麗でリズムがあり、内容が濃かった。

森本氏の『文明の旅』は少なくとも四回通読した。『文明の旅』は題名通り、各国を旅して思索をめぐらせた文明論である。該博な知識に裏打ちされて、スケールが大きい。私は何か文章を書くたびに参考にした。今思うと、最大の収穫は文章のリズムが身についたことかもしれない。将来やりたい仕事について聞かれると、私は決まって「森本哲郎氏のような仕事がしたい」と答えるようになった。

優れた文章に習うというのは、書き手の生き方に触発されるという面も大きい。文章や言葉は時間と空間の制約を超え、読み手と書き手とのコミュニケーション回路を開く。この回路を活用し、書き手の



知恵を吸収しようとするポジティブな姿勢があれば、読み手は多くのものを得ることができる。

眼高手低という言葉がある。人が書いたものはとやかく批判するくせに、自ら書くとなるとまったく力がない。もちろん、批判的に読むということも大切だが、まず虚心坦懐に著者の声に耳を傾ける必要がある。自分より優れた人に学ぶという姿勢が大切である。

学ぶという言葉は、真似るから来ている。真似るというのは、何か悪いことのように思われている。そうではない。いいところを謙虚に学ぼうとする姿勢なくして、成長できない。文章を学ぶというのは、自分がいいと思う文章を真似るところから始まる。良い文章を模倣することは、独創性を獲得する過程において通過しなければならぬ基本である。真似ることによって、文章力は確実に向上する。それを自分が書く文章に応用し、訓練を積むうちに自分のスタイルができあがってくる。型から入って型を出す。

真似て創造の力を得る。

私は良質な文章に学びつつ、四〇〇字詰め原稿用紙で五、七枚程度の文章を一日も欠かさず書き続けた。原稿用紙スタイルのノートがあつて、一冊六〇枚か七〇枚だった。それが五、六年続いた。二〇〇冊を超えた。仕事の新聞記事とは別に、四〇〇字で一万枚以上の文章を書いた計算になる。そのころになると、書くことが面白くなり、本を書くという夢を実現しようという気になった。



## 7

### 文才と努力

芸術家やスポーツ選手と同じように、天性の文章家がいる。文豪はたぐいまれな表現力を持って生まれた人である。例えば、

- ①余分な言葉は省く
- ②平明・簡潔な文章を心がける
- ③一つのセンテンスは短くする
- ④起承転結のメリハリをつける
- ⑤文中の用語や文体を統一する
- ⑥難しい言葉より易しい言葉を使う
- ⑦漢字と平仮名をバランスよく使う
- ⑧抽象的な話には具体的な話を織り込む
- ⑨色、音、香りなどを入れ、臨場感を高める
- ⑩「また」「そして」「しかし」などの接続詞はできるだけ使わない

というような文章作法は努力して習得できる。

しかし文章のリズム、語彙の豊富さ、イマジネーションの広がりなど、ある一線を超えると、いくら努力しても到達できない地点というものがある。それは天才にのみ許されるものだろう。

それでも、努力によって文章は確実にうまくなる。書けば書くほど、向上する。ただし、意識して書く必要がある。やみくもに書けばいいというものではない。文章がうまい人に読んでもらい、直してもらうと効果的である。マスコミの編集現場では毎日、その作業をやっている。文章力が伸びない方がおかしい。だから、新聞記者は平均以上のレベルの文章を書くことができる。平均以上というのは、世間並み以上という意味である。

プロでも油断すると、失敗する。書き続けないと、すぐに錆びつくのが文章である。現場の記者をやるめ、管理職のデスクや部長になると、筆が重くなってくる。運動能力と同様、文章能力も書き続けなければ衰える。書くことをやめると、発想力や思考力も鈍ってくる。書くことによって、思考が深まり、アイデアが生まれる。書きながら、自分と世界を見つめる。

書くことは頭と心を鍛える最高の手段である。文章を練ることは最高の頭の体操であり、内面における最高の自己格闘である。文章は一回ごとに完結しても、文章力は完成しない。喜劇王チャールズ・チャプリンは新聞記者に「あなたが出演した映画で最高傑作は？」と聞かれ、「次の作品です」と答えたという。過去の栄光に甘んじず、未来に向かって挑戦していく意気込みを示したものである。

サン＝テグジュペリの「歩みだけが重要である。歩みは持続するが、目的地は持続しないからである」<sup>(10)</sup>という言葉は、文章修業にも当てはまる。文章修業に終わりはない。生きている限り続く。書くことによって精神的に成長する。書くことは深く生きることである。

# 注

- (1) 尾川正二『文章の書き方』講談社新書、一九七七年、八九―一一八頁
- (2) 山本武信「共同通信社・全国加盟紙配信記事」二〇〇〇年四月
- (3) カール・ヒルティ『幸福論』白水社、斎藤栄治訳、一九七九年
- (4) Dohmen, Florian. *Medien & Macht*, VSA-Verlag, 1998: pp. 15-17
- (5) 森昭雄『ゲーム脳の恐怖』NHK出版、二〇〇二年
- (6) 尾川正二『原稿の書き方』講談社新書、一九七六年、三―四頁
- (7) 多田孝志『地球時代の言語表現』東洋館出版社、二〇〇三年、一九八頁
- (8) 鈴木亨『響存的世界』合同出版、一九六七年
- (9) 山本武信『IT革命とメディア』共同通信社、二〇〇一年、一四一―一四三頁
- (10) アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ『城砦』みすず書房、山崎庸一郎訳、一九八五年、二三八―二



## 第3章

### 世界の实像に迫る文章技法

作文は文字通り、文章を作ること、伝えたい内容を言葉にして表現することである。

したがって、あらゆる文章が作文ということになる。おおざっぱに言えば、作文は自由な「エッセー」と、論理的な「論文」に分かれる。もともと、エッセーと論文の境界は必ずしも明確ではない。論文のようなエッセーもあれば、エッセーのような論文もある。一応定義すれば、エッセーが「テーマの本質を感性的に浮き彫りにする自由な文章」であるのに対し、論文は「テーマについて論理的に論じ、主張の正当性を証明する文章」である。感性と論理、体験と論証、イメージーションと思考、アピールと説得力の違いと言っているかもしれない。

哲学的に言うと、エッセーと論文の違いは、パトス（情熱）とロゴス（論理）の比重の違いに相当する。論文の方が高尚で、エッセーは低俗ということは決してない。低俗な論文もあれば、高尚なエッセーもある。格調の高さは中身次第である。例えば、フランスの哲学者モンテーニュの『エッセー』、ルソーの『エミール』、パスカルの『パンセ』のようなエッセー風の哲学書もある。エッセーが論文以上に優れた論文となり得る好例である。

切り口、構成、語彙といった点で、作文・エッセーの方が論文より自由度が高い。自由度が高い分、

面白いが、難しくもある。どこからどう書いてもいいというのは、どこから入ってどう書けばいいのか分からないということになりかねない。何でもできる無制限な自由は、何もできない不自由に転じる。最も自由という意味で、文章はエッセーに始まってエッセーに終わる。エッセーがうまく書けるようになる、どんな文章スタイルにも対応できるようになる。材料さえ集まっていれば、一般的にエッセーより論文の方が書きやすい。

論文のかなめはテーマを論理的な筋道に従って論じ、読み手を論理的に説得するところにある。極論すれば、論文は読み手が納得すればいい。テーマを論証するための論理の構築が勝負だ。文章のうまい・へたは二の次である。

エッセーは内容や展開の面白さがものを言う。うまい・へたの差が出る。同じテーマについて多くの人に書いてもらうと分かるように、論文の方は展開の仕方に大きな隔たりはない。エッセーは人生経験に応じて千差万別である。振幅が大きい。そこがエッセーの醍醐味でもある。

エッセーに限らないが、文章の質は「体験の意外さ」と「ものの見方のユニークさ」で決まる。面白い体験をたくさんしている人はたくさん武器を持っている。体験がすべてと言ってもいいほど、エッセーの勝負は体験にかかっている。表現が内なる経験の表出であるとすれば、当然の理である。世界中を旅している人が面白い本や文章を書いているのは当然だ。旅は意外な発見をもたらす。マルコ・ポーロの『東方見聞録』などが良い例である。



博覧強記にして軽妙洒脱<sup>しゃだつ</sup>な文章で知られる高知大学名誉教授の澤村榮一さんは、次のように書いてい

る。「私の人生の原動力は知的好奇心と遊びの精神である。知的好奇心と言えば、カッコいいが、要するに何でも見てやろうという弥次馬根性。専門に徹するのも一つの生き方であるが、弥次馬根性に導かれて放浪するのが私の生き方である。……私は人生の幕引きの日まで、越境を続けるだろうと思う」  
〔ケルトふたたび<sup>(1)</sup>〕

その関心は専門分野の英語学を超えて、説文解字の世界から陰陽道や道教にまで及ぶ。二〇〇四年七月に高知新聞に長期連載され、好評を博して同年末に単行本になった『英語と日本語のはざま<sup>(2)</sup>』でも、澤村さんの知的好奇心と弥次馬根性はいかなく発揮されていた。

『空想には翼を、文章には写実を』というのが小生の理想とするところです。表現は多岐であつても、文章の根底には写実性がないと読む者の共感は得られません。文章の細部に写実の網を張ること<sup>(3)</sup>とは、推理作家・松本清張の言葉である。

エッセーなどの作文は小説以上に、写実がものを言う。しかし事実の単なる写実では、平凡になる。大事なのはリアリティーの意外性であり、リアルな意外性である。意外性とは非日常性と言ってもいい。非凡な目が日常の中から意外性を読み取る。文章の命は何と言っても、この非日常的な体験にある。書き手の非日常的な体験を読んで、読み手自身も非日常的な刺激を味わう。だれもが知っていることを知っている通りに書いても、だれも面白がらない。他人に向けて書く文章は面白いが、有益かのどちら

かの要素を含んでいなければ意味がない。読み手を楽しませること、面白がらせること、驚かせること、それが重要になる。

その意味でエッセーには、実体験に基づくエンターテインメント的な要素が欠かせない。読み手をうならせる、あるいは、あつと言わせるエピソードの有無が決め手となる。こう言った方がいいかもしれない。人にぜひ聞かせたいエピソードがあるから、文章をしたためたくなる、と。それが先に言った「自分の内側からあふれ出てくるもの」である。

あふれ出てくるものが書く情熱を生み、文章の勢いとなる。

ただ、鬼面人をおどかすようなものは禁物である。白昼にけばけばしい厚化粧の女性に出くわしたような奇抜さは、逆効果となる。筆を抑制する必要がある。抑えたところから自ずとにじみ出てくる驚きや感動が読み手の共感を誘う。読み手が感情移入しやすいように工夫しなければならぬ。喜びも、悲しみも、抑え気味に書いた方がいい。文章を書くとは、情熱のほとばしりを抑え、整えることにほかならない。

何かを体験するというのは自分の思想、自分の言葉に体温を獲得することである。その体温が素直に読み手に伝わる。それが良い文章である。気取った文章は敬遠される。良い文章はうまいという嫌みを感ぜさせない。技巧を凝らすという意識的な段階を経て、思ったままに素直に書けるという高次の段階へ行くと、文章から一種の臭みが抜ける。



読ませる文章、という言い方がある。時間がたつのも忘れてぐんぐん引き込まれる。そういう読みごたえのある文章のことである。どんな文章も読んでもらわなければ、意味がない。読んでもらうというところに、自分を成長させるきっかけがある。

相手を楽しませるには、いろいろな工夫が必要になる。そのためには自分を無にしなければならない。一方的な自己主張だけでは、だれもついてこない。自分を空しくして、相手と一体化する。それがコミユニケーションの秘訣である。メッセージはマッサージであると言うゆえンである。

## 2

### 人類の星の時間

歴史には、忘れがたい決定的な瞬間がある。例えば、コロンブスがアメリカ大陸に到着したとき。例えば、ライト兄弟が人類最初の動力飛行に成功したとき。例えば、冷戦が終結したとき。世界史の中でも、ひととき大きく輝く運命の転換点である。その渦中にいるときは、何か大変なことが起きていると実感しながら、本当の大きさは見えてこない。後から振り返ったとき、初めてその偉大さに気づく。そういう濃密な瞬間である。

自然界には「前進運動」と呼ばれる複雑な現象がある。簡単に言えば、動物なり昆虫なり、ある生き物が一つのことをすると、予期しないもっと重要な何かが起きるということである。一種の連鎖現象で



ある。人間社会も同じ。ある出来事が起きると、さまざまな波紋を描いて、予想もしない方向へ展開する。夜空を彩る大輪の打ち上げ花火のように、決定的瞬間がスパークし、歴史のドラマが繰り広げられる。

オーストリアの作家シュテファン・ツヴァイクはこれを「人類の星の時間」と呼び、こう言っている。「無数の世界史の時間が平凡に流れ去るからこそ、いつか、本当に歴史的な『人類の星の時間』とも言うべきひとときが訪れる。芸術の中の一つの天才精神が生まれると、それは幾多の時代を超えて生き続ける。世界史にもそのような時間が現れると、その時間がその後の数十年、数百年を決定づける」<sup>(4)</sup>

一九八九年十一月九日のベルリンの壁崩壊は、そういう歴史的瞬間だった。次の文章は、ベルリンの壁崩壊に伴って、私が共同通信の特派員としてドイツのボンに赴任したとき、最初に全国の加盟紙へ配信したエッセーである。

実例？「チンチャンチョン」<sup>(5)</sup>

「お父さん、チンチャンチョンってなに」とドイツ人小学校に通い始めた息子と娘が口をそろえて聞く。「クルスの子が僕らのこと、そう呼ぶんだよ」  
チンチャンチョン？ ドイツ語にそんな単語はない。三味線の「チントンシャン」でもあるまい。ドイツ人

助手にたずねたら「日本や中国の人たちを指す俗語です。まあ、外国人といった意味合いでしょう」と歯切れが悪い。調べてみると、思った通り、中国語の発音に由来するアジア人に対する蔑視用語だった。

そのとき、怒りよりも、諦めにも似た複雑な感情が込み上げてきたのはわれわれ日本人が引きずる中国や朝鮮半島に対する歴史的な後ろめたさのためだろう。日本にも欧米人を卑しむ毛唐という古い言葉がある。他人のことは言えない。ただ、日本とドイツが違うのは、日本人の意識の根底には欧米信仰とも呼ぶべき劣等感があるのに対し、ドイツ人は劣等感とは無縁のたくましい優越意識を持っていることだ。

それは例えば、われわれ日本人記者には「ノーコメント」と歯牙にもかけない大蔵次官が欧米の記者には笑みを浮かべながら答える、といった場面でも感じる。これが世界の冠たるドイツか、と。

ドイツ国営放送局の連続ドラマ『モツキー』が大きな反響を呼んだ。ドイツ統一後、東西市民が心にくすぐらせている本音を正面からえぐり出し「旧東ドイツの連中は西の助けにすぎることしかできない怠け者だ」「やつらがドイツ人になったのはやつと三年前からさ。それと分かるように、服に印を付けて歩けばいいんだ」といった刺激的なせりふが飛び交う。視聴率は三六・五％という驚異的な数字を記録した。放送終了と同時にテレビ局には賛否両論の電話が殺到した。

ドラマの中で、旧西ベルリンの年金生活者である主人公モツキーは日本人を「われわれ文明人とは違うんだ」と冷笑し「黄色い猿」とのしる。黄色は日本黄禍論を連想させる。猿は口バや力毛と並んで、ドイツでは蔑視の対象である。ヒトラーの思想に影響を与えたニーチエの『ツァラトゥストラはかく語りき』にこうある。「人間にとつて猿とは何か。哄笑の種、または苦痛に満ちた恥辱である。超人にとつて、人間とはまさにこういうものであらねばならぬ。哄笑の種、または苦痛に満ちた恥辱であらねばならぬ」(手塚富雄訳)。

「ドイツ人は親日的」という通説は古くなったようである。

極右ネオナチによる難民・外国人襲撃事件が多発している。難民収容所に爆弾や火炎瓶を投げ込んで焼き殺したり、殴る蹴るの乱暴の末、気絶した外国人青年を線路上に置き去りにして右足を切断したりと、痛ましい。



旅行中の日本人青年もベルリンの地下鉄で三人の極右に襲われた。顔を殴られ、現金やテレホンカードを奪われた。犯人は鉄道警察に見つかつたとき「ハイル・ヒトラー」と叫んで抵抗した。別の日本人留学生は襲われそうになつて「私は日本人だ。難民ではない」と弁明した。極右は言い放つたそうである。「知っている。生意気な日本人だから殴るんだ」

ドイツの内相は外国人記者団との懇談の席上、「ネオナチのことを大袈裟に、悪く書かないでほしい。難民の受け入れ数をもて分ける通り、ドイツはもともと外国人に寛容なのだから」と強調した。だれでも、自分だけは偏見や独断がないと思う。だが、偏見がないと思ひ込む偏見ほど厄介なものはない、というのがドイツでの生活実感だ。

幸い、子どもたちはそうした差別の芽を感じずに、ドイツ人クラスに溶け込んだ。

(ボン共同Ⅱ山本武信特派員)

共同通信社の加盟社である京都新聞の編集責任者から、加盟社モニターで「ドイツに対して抱いていたイメージががらりと変わった。この一文を読んだだけでも、けさ新聞に目を通した価値はあると思つた」というお褒め<sup>ほ</sup>の言葉をいただいたため、印象に残っている。

グローバル化が本格化し始めるころに初めて土を踏んだ生身のドイツは、イメージとかなり違った。毎日のようにカルチャーショックを経験した。底の深い、巨大な人間の営みの集積に眩暈<sup>げんうん</sup>を覚えた。最初のうちはネガティブな体験の方が多かった。そういうカルチャーショックの大きさがこの一文に表れている。



何年も住んだ後なら、こんなエッセーは書かなかつたに違いない。<sup>(6)</sup>

ちなみに、SF映画の古典『猿の惑星』の猿のモデルは第二次世界大戦中の日本兵だった。フランス軍や米軍をはじめ連合軍は日本兵を「猿と人間の間」と見なしていた。文中のニーチェの言葉と符合する。

異文化との出会いや交流は最初のころが強烈で、年月とともに印象は薄れていく。異文化の中に溶け込み、違和感は消える。印象が薄れると、文章の勢いも落ちる。印象は生ものである。もちろん、長年住んでみないと見えない部分も多いが、文章に残すのは、印象が鮮烈なときがいい。記憶に頼ると、どこかに無理が生じる。

グローバル化というのは、さまざまな社会や文化が融合し、共生する時代である。それだけ異質な社会や異質な文化と遭遇する機会が増える。文明の衝突と共生というテーマはグローバル時代を迎えて現実味を増した。違う文化に暮らす人たちは当然、違う考え方を持っている。

異質なものとどう向き合うのか。一人一人が地球市民としての姿勢を問われている。日本語であれ、英語であれ、社会へ発信する文章にはそういう地球市民としての自覚が不可欠になっている。

## 3

## 実像と虚像のギャップを埋める

文章は体験がものを言う。体験とは何か。対象に正面から切り込み、五感をフルに使って対象を丸ごと味わう。対象は人や物の場合もあれば、思想や出来事の場合もある。対象に没入し、対象の実像に迫り、対象との距離を縮める。そういう作業を通じて、思想的にも人間的にも自分自身が変わっていく。自分が変わるところに、体験の深さがある。

偏見や予断を持たない人は少ない。生きてきた環境に応じて、だれでも大なり小なり、先入観や予備観念を抱いている。「これはこういうものに違いない」というイメージである。もちろん、当たっている場合もある。たいていは実像とイメージの間にずれがある。ずれが大きすぎると、実像は虚像となる。虚構もまた、実人生のひとコマではあるが、ノンフィクションを書くというのは極力、虚構を排して事実の核心に迫ることである。

人間はいつも、必ずしも現実の世界に直に接しているわけではない。他者からの情報というフィルターを通して、現実を認識している場合が多い。現実と認識の間に埋めがたい溝がある。体験によって、人は自分があらかじめ持っているイメージと実体とのギャップを埋めることができる。虚像を実像へ引き戻す作業が体験と言ってもいい。百聞は一見に如かず、である。いろいろな情報源から集めた間接情



報を基に対象を思い描くより、自分の目と足で確かめる方がいい。真実への接近は、虚構の排除によって初めて可能になる。虚構を取り除くためには事実に迫り、真偽を検証する必要がある。

噂のような二次情報は実体からかけ離れているものである。情報は人から人へ伝わる過程でバイアスがかかる。意図的であるかどうかは別として、偏向しやすい。AはBに、BはCになり、そのうちD、E、Fへと変容する。人の口と時間を経ると、Aは実像とは似ても似つかないXへ変わっている。それが情報の性質である。噂は火元から立ち上る煙のようなものである。さまざまに変容する。

ネット世界はもともと、バーチャルリアティーの世界である。日本語に訳すと、仮想現実。現実に似ているが、現実とは違う。言ってみれば、「あたかも何々であるかのような現実」である。その世界で飛び交っている情報も当然、バーチャルな性質を帯びている。

あたかも真実であるかのような情報は、真実の一面を暗示してはいるけれども、真実そのものではない。そういう疑似真実の集積がIT社会の小さからぬ部分を成していることを認識しておく必要がある。ネット世界で得た情報は必ずしも事実や真実ではなく、誤解や誤謬ごびようや偏見に彩られている恐れがある。ネット利用者は「あたかもたくさんのことを知っているかのような錯覚」に陥りやすい。

このように、ITネット世界は情報を自由に発信したり受信したりできる分、リスクも大きい。情報が正しいかどうか、精査する機構が存在しないからである。すべてはネット利用者の自己責任に委ねられている。ものごとをリアルに体験する大切さは、ネット時代に入っていつそう高まっている。



現場第一のジャーナリストも、ネットを通して情報を得ることが多くなった。直接取材を回避した二次的な間接情報が増えている。ちゃんとしたジャーナリストなら、間接情報に対しては裏付けを取る。間接情報が誤謬を含んでいないかどうか、情報源に当たって確認する。

しかし現実には、ネット情報を鵜呑みにした怪しげなジャーナリズムも出始めている。ネットジャーナリズムやオンラインジャーナリズムには、そういうお手軽なものが少なくない。新聞情報やネット情報を、あたかも自分が取材したネタであるかのようなふりをしてオンライン記事を垂れ流し、草創期のオンラインジャーナリズムを築いたとして名を挙げた人物もいる。

サン・テグジュペリの『星の王子さま』で賛辞を捧げられたレオン・ヴェルトは、サン・テグジュペリを回想する記事の中でこう述べている。「書き手が自由であり、書いたものが検閲を受けないというのが新聞雑誌の名誉である。もし自分自身の無名性を利用して、ジャーナリストが厚かましくこの自由を濫用するなら、ひとは彼を軽蔑する<sup>(7)</sup>」

ジャーナリストの存在意義は時間と労力をかけ、時には危険も冒して現場へ飛び、自分の目で真実を見極めるところにある。地球という書物を読む国際ジャーナリストの仕事は、わくわくするような面白さと、ぞくぞくとするような不安の谷間で、現実を直視し、思考を深め、世界観を築き上げていく営みである。学者の研究とは異なる。

知識として知っている世界と感覚としてとらえている世界の間には、常に隔たりがある。その隔たり

を埋めようとする意欲が国際ジャーナリストとしての情熱であり、使命感である。虚像を切り崩して実像を再構築する。虚構を見破って真実を提示する。物書きの体験とは、そういうラディカルなものではない。

## 4

### 字数と時間の制約が生む奇跡

原稿はたいいていの場合、字数制限や時間制限がある。紙数と締め切りは文章の形式や内容を左右する。限られた紙数と時間の中で、体験の新鮮さや思考の深さをいかにうまく乗せるかが、腕の見せどころである。

哲学者のジャン・ポール・サルトルが言うように、自由がありすぎると不自由になる。その意味で豊かさは危うさである。字数制限や締め切り時間があるのはいいことである。制約があると、精神や思考は一点に集中しやすい。制約は集中力を生む。制約があるというのは、選択が容易になるということである。多くの可能性の中から最善のものを選び取るうえで、困難が減る。必然的に精神や思考のコンセンレーションが強まる。

原稿にしろ、仕事にしろ、字数目標と締め切りがあるからこそ、時間内にやり遂げられる。遊びやバカンスにしても、時間に限りがあるからこそ、今を精いっぱい楽しもうという気になる。よく遊び、よく



く学べ。緩急のメリハリが生を引き締め、時間をスパークさせる。

終わりは必ず来るといふ切実感がないと、仕事も勉強も伸び切ったゴムのように締まりがなくなってしまう。急性肺炎で夭逝した童話作家、宮沢賢治は二五歳のとき、猛烈な勢いで原稿を書いた。こんな覚悟からだった。「人間の力には限界があります。仕事をするのには時間がいります。どうせ間もなく死ぬのだから、早く書きたいものを書いてしまおうと、私は思いました。一カ月の間で三〇〇枚書きました」<sup>(8)</sup>。賢治の死の床には、生前刊行されなかった膨大な原稿があつた。

例えば、新聞記者が一〇〇〇字程度の記事を書くとき、「一時間以内に」という厳しい制約がある場合と「一週間くらいで」と言われた場合とでは、どちらがいい記事になるか。テーマにもよるが、結果的にはあまり変わらない。むしろ短時間に書き上げた方が、緊迫感が出て良いことが少なくない。

一九九二年一〇月四日のことである。午後一〇時ごろ、共同通信社ボン支局のオフィスで仕事をしていると、外電が至急報で「オランダのアムステルダム郊外で航空機がアパートに墜落した」という事故を伝えた。オランダはベルギーのブリュッセル支局の管轄である。念のため、ブリュッセル支局長に連絡すると、留守だった。ロンドン支局員に聞くと、ブリュッセル支局長はヨーロッパ共同体（EC、現EU）外相会議を取材するため、出張中という。

そこで急遽、私がマイカーでアムステルダムへ向かうことになった。夜のアウトバーン（高速道路）は怖い。ドイツのアウトバーンには街灯がなく、自分の車のヘッドライトで暗闇を切り裂きながら走る。



時速は二三〇―一四〇キロ。行き先案内板の文字はなかなか読み取れない。一度、方向を間違うと、とんでもないところへ行く。オランダへの入口はなかなか見つからず、迷いに迷った。夜の十一時にボンを出発してアムステルダム市内に到着したのは、空がうっすら白み始めた午前六時すぎだった。通常なら三時間で行くところを、実に七時間も要したわけである。

いったんアムステルダムのホテルにチェックインし、東京本社に電話連絡をした後、睡眠を取らないまま、事故現場へ向かった。この現場がまた分かりにくいところにあつた。あっちへ行ったりこっちへ来たりして結局、二時間かかった。

東京本社から指示された事故現場の「雑観」送信の締め切り時間が迫っている。残された時間は一時間余り。急いで現場を取材し、記事を送らないといけない。現場には、ヨーロッパ各国から何百人という報道陣が集まっている。警察当局による報道規制もあり、現場取材は困難を極めた。こんなに焦ったことはなかった。携帯電話など、まだ普及していない時代である。走り書きした原稿を電話で東京へ読み込もうとしたが、公衆国際電話が見つからない。これでまた時間を食った。散々駆けずり回った挙げ句、食料品店で電話を借りて送ったのが次の雑観である。

実例3 「雑観——アムステルダム航空機墜落事故の現場」<sup>(9)</sup>

【アムステルダム5日共同】山本武信特派員】えぐり取られたように真ん中がすっぽりと崩れ落ちた集合アパート。激突した貨物機の機体は見えない。粉々に砕け散ったらしい。悪臭が漂う中で、黒焦げになった遺体がビニールに包まれ、一つ二つ運び出される。オランダ航空史上、最悪の事故から一夜明けた五日、アムステルダムの郊外ベルメルミニアの現場は惨事の大きさをまざまざと見せつけた。

現場では早朝から大きなクレーン車と機動隊が残がい処理に当たっているが、折からの強い雨もあり、遺体の確認作業は遅々として進まない。遺体確認班長は「こんなにすさまじい激突なので、遺体の確認どころではない」といらだちを表している。

アパートの残った部分も真つ黒に焦げ、ぐにやぐにやに溶けた子どもの自転車が悲劇を物語る。警官隊は遠巻きに見守る住人の整理に追われ、上空にはヘリコプターが慌ただしく旋回する。付近は人だかりで交通が渋滞、一時は大混乱に陥った。

ベルメルミニアはアムステルダムの中心部から一〇キロの静かな住宅街。付近には同じようなカラフルなアパートが建ち並ぶ。地域住民の付き合いは密接で、家を失った人たちの一部は近くのアパートに避難しているという。

近くに住む会社員ベイルさん（四四）は「ごう音がしたので飛び出してみたらアパートの中心部が炎に包まれ、いつまでも燃えさかった。泣き叫ぶ声も聞こえ、地獄のようだった」と前夜の悪夢を振り返った。



一時間で取材して五〇行の記事を仕上げるというのは、新聞記者には当たり前の芸当だが、このような困難な状況で一気に仕上げるのは滅多にないことである。俗に言う火事場の馬鹿力だった。それだけに当時のことは記憶に深く残っている。

本もそうである。あるテーマについて二五〇頁の本を執筆するとしよう。三カ月で仕上げた場合と三年かけて上梓<sup>じようし</sup>した場合、三年かけた方が三カ月かけた場合の一二倍良い本になるかというと、そうはならない。時間をかけた方がその分、取材や思考が行き届き、中身も濃くなるかもしれないが、一二倍にはならない。三カ月なら三カ月という期限が設けられると、時間意識が変化し、集中力が高まる。その集中力が奇跡を生む。ここが時間の面白いところだ。本来の能力とは別に「いつまでにこれをやらなければ」という意識が、想像を超える成果をもたらすのである。

## 5

### 人生の持ち時間と生かし方

目標と時間意識なくして成功した人はいない。

本業に一日を費やした後、手に入れる執筆のための一時間は専業作家の一日よりも値打ちがある。ラニング後に冷たい水でのどの渴きを癒すように、自分のために確保した一時間は魂をよみがえらせる。かけがえのないこの一時間は、ふだん何気なく過ごしている一時間よりはるかに多くのものを生み出す。



自分にはこの時間しかないという制約意識が一時間を何倍にも濃密にする。意識のマジックがもたらす時間の奇跡である。<sup>(10)</sup>

ものを書くという営みにおける時間は、時計で計られる「物理的」なものではなく、「実存的」なものである。それだけ書くことは個人個人の内なる姿と直結していると言えよう。これだけの時間しかない「思い切る」ことが「徹し切る」秘訣である。英語の「Decide（決断する）」もラテン語の語源からすれば、切り落とすという意味の「Incise」と同根である。<sup>(11)</sup>

人生の持ち時間を意識することは生き方の根本に関わる問題である。いかに自分の夢を実現し、自分の課題を解決し、人間的に成長していくかという問題は、与えられた時間をいかに扱うかという問題である。人生の締め切りを考えることは、人生の中身を考えることにほかならない。要するに、何を最優先するのか。

古今東西、賢人や偉人と言われる人たちは時間を強く意識した。

凡人には気の遠くなるような数々の偉業を成し遂げたレオナルド・ダ・ヴィンチは「終わりのことを考えよ。まず初めに終わりについて熟慮せよ」<sup>(12)</sup>と言っている。人間は限りある存在である。この世に生まれてから平均八〇年前後には死が訪れるという意識を明確に持っていないと、無目的にだらだら生きてしまうものだ戒めているのである。

曹洞宗開祖の道元も「古聖先賢は日月ををしみ、光陰ををしむこと、<sup>（そとう）</sup>眼睛よりをしむ」<sup>（がんぜい）</sup>（『正法眼』）

蔵」「行持」と記している。いにしへの聖人や賢人は道を究めるために月日が過ぎ去るのを惜しみ、時光を大切にいとおしんだ。それは自分の眼を大切に思う以上だった、というのである。

道を究めることが賢人たちの究極の目標だった。賢人たちの行跡をたどると、時間意識がその人たちの道をつくったことが分かる。時間意識なくして、大きな仕事はなし得ないと言っている。時間を活用する技術は生きる技術そのものである。仕事ができる人は時間の使い方がうまい。生き方が上手な人は時間とのつき合い方がうまい。

時間の問題とは、どう生きてどう死ぬかの問題である。

目標に向かって自分を高め、能力を発揮する道は、時間を生かすところから始まる。

「君、時というものは、それぞれの人間によって、それぞれの速さで走るものなのだよ」。シェークスピアの『お気に召すまま』の一節である。時間は相対的なものである。相対的というのは、状況によって変わることである。時計が刻む時間は、人々が共同で利用するために考え出された便宜上の物差しにすぎない。いつも等間隔で刻む機械的な時間であり、人間の内面的な営みとは関係なく動く抽象的な時間である。良くも悪くも客観的である。各人が実際に生きている実存的な時間は伸び縮みする。

楽しいことや創造的なことに熱中しているときは時間意識がなくなり、あつと言う間に過ぎ去る。つまらない会議は三〇分が一時間以上に感じられる。同じように七〇年を生きて、生きられた時間の質は人それぞれに違う。



ベートーヴェンは「この人生を一〇〇〇倍にも生きよう！」という言葉を残している。量ではない。質の問題である。創造的な時間は時計が刻む時を超え、永遠なるものにつながる。時間の経過を忘れるほど何かに熱中するとき、存在するのは過去も未来もない永遠の今だけである。

この永遠の今こそが本物である。火花がスパークするようなこの瞬間において、素晴らしい創造力が生まれる。同じ時間が深さにおいて何倍もの濃さをたたえる。ベートーヴェンの言葉は、自覚次第で生き方は深くも浅くもなることを言う。無常に流れ去る時間に命を吹き込み、人生を活性化するのは時間意識である。

時間とは、人がそこから何かを主体的に創り出すものである。主体的に関わらなければ、時間は何も生まずに消えていく。創造的な営みに応じて、時間は自分の血となり肉となる。創造的な営みがなければ、時間の方が私たちをのみ込む。

時間が生かされたとき、心は歓びにあふれる。時間が死んだときは空しくなる。その意味で、文章を書くことは時間を生かす最も有効な方法の一つと言っている。すでに触れたように、文章を書くことによって、自己の精神や生命は原稿の中に永遠に宿る。消え去るべき時間がそこに生きている。原稿に書き留められた文章は精神活動の結晶であり、生命活動の刻印である。

例えば、サン＝テグジュペリの『人間の土地』や『星の王子さま』を読んで感動するとき、サン＝テグジュペリ自身はすでにこの世にはいないけれども、作者の精神や生命は今も生きていると感ずる。過

去に書かれたものが時間と空間の壁を超え、異文化圏の人々の心に届く。奇跡のような出来事と云っていい。その素晴らしいさを感じ取りたい。それが文章を書くということの形而上学的な意義である。

スピード化を極限まで追求するネット社会では、書いたものがリアルタイムで世界の隅々まで届く。文章は書かれた途端、個性・特殊性を脱して普遍化する。時差のない活字コミュニケーションの時代が到来したのである。

## 6

### 文章は書き出しで決まる

映画やテレビドラマでは、導入部が大きな意味を持つ。視聴者が最後まで興味を持って観ようとするかどうかの鍵は、最初のインパクトにある。出だしが面白いと、この映画は最後まで面白そうだと感じる。

『鳥』『サイコ』など数々のサスペンス映画の名作を生んだ監督アルフレッド・ヒッチコックは「最初に爆弾を仕掛けたら、観客のショックは五分で終わる。時限爆弾だったら、爆発するまでハラハラドキドキ。かなり持つ」と言っている。

文章も同様、書き出しが重要である。本題へいざなう巧妙な導火線が必要になる。書き出しの部分をリードと言う。「展開」「結論」に対する「導入」という意味である。例えば、一〇〇〇字の文章であれ



ば、最初の一〇〇字ほどの部分に当たる。リードは全体の切り口である。切り口は何通り、何十通りと可能である。それだけ難しい。切り口によって、文章全体の印象や方向が変わる。

文章の成否はリードにかかっている。読者をぐいぐい引き込んでいけるよう、とことん工夫しなければならぬ。作家や新聞記者らプロの物書きも、リードで苦勞する。来る日も来る日もリードが決まらず、頭を痛めることもある。走り出すためには、とにかくスタートを切らなければならない。最初の行を書き出さないと、文章はスタートしない。書き出しに困ったら「とにかく大変だった」と書き始めよ、と勧める先輩ジャーナリストもいた。大変だったことを書き出し、ある程度書き進んでから、きちんとリードを考えればいいというわけである。

人間で言えば、リードは顔に当たる。人は顔を見て「優しそうな人だな」とか「もっと親しくなりたい」などと判断する。いい顔というのは必ずしも美形ということではない。生まれ持った美形よりも、豊かに年輪を刻んだ味のある顔の方が人を惹きつけることは珍しくない。リードも同じだ。第一印象が大切である。

リードさえうまくいけば、文章はもう半分以上できたようなもの。それくらいに大事な箇所である。リードがびたり決まると、その後の展開と結論は大体、スムーズにいく。リードは家づくりで言えば、土台に相当する。土台がしっかりしていないと、上部構造の家屋はぐらついてしまう。文字通り、初めにリードありきである。

もちろん、全体を書き終えてから、リードを書くというのも一法である。だが、それは考えつかないときの窮余の一策にすぎない。リードを先に片付けるのが正攻法だ。最後まで行き着いてもう一度、全体との整合性を考えながら、手を加える。文章のアルファにしてオメガはリードにある。

論文とエッセーとは当然、リードの性質は異なる。論文では全体の概要と結論を端的に示すことが多い。これに対し、エッセーなどの自由作文は型というものがない。それだけ工夫の余地が大きく、面白い。

## 7

### 紀行文——世界へのまなざし

エッセーの旅行編とも言うべきものが紀行文である。これも、初めて訪れる土地ほど、書く材料は多い。見るもの聞くもの、すべて新鮮。新鮮なイメージを鮮度の高いうちに文章に刻む。時間がたつと、感動が薄れる。

「天候や、昼夜の時間にかかわりなく、私は刻一刻を大切に生き、棒切れに刻み目をつけることによつて、それを記録しておこうと心がけてきた。私は過去と未来という、ふたつの永遠が出会うところ——まさにいまこの瞬間——に立とう、その線上に爪先で立とうとした」<sup>(13)</sup>

と、ヘンリー・D・ソローは名著『森の生活』に記している。書くとはまさに「ふたつの永遠が出会



うところ」二度と訪れない「いまこの瞬間」を記録することである。見聞した多くの中から、最も惹かれた部分を中心に書く。読み手が面白いと感じるのは、書き手自身が感動した部分である。そこをどう料理するかが腕の見せどころとなる。

次の短い文は二〇〇二年一月、日本記者クラブの「アジア経済視察団」の副団長として一〇日間東南アジアを訪れたときの紀行文である。与えられたテーマはベトナム視察報告。六五〇字以内という字数制限があった。

#### 実例4 「ベトナム紀行——バイクとアオザイ」<sup>(14)</sup>

ホーチミン空港に降り立つた途端、バイクの洪水が暴力的なまでに迫ってきた。その迫力、そのエネルギー。一体、どこからどこへ向かおうとしているのか。老若男女、みんなが好き勝手に走っている。逆走する者さえいる。それでいて渋滞しない。日本は秩序の中に無秩序があり、ベトナムは無秩序の中に秩序がある……。

平和と建設の新段階に入ったベトナムの最大の懸案は「ホンダ」の爆発的な拡大である。二輪車部品の輸入制限をめぐる日越摩擦も、この現実を見ずして理解できない。

道路を渡れずに呆然としてみると、「危ないよ」「ードル、ードル」と人力車のシク口がしつこくつきまとう。前からは物売り、横からは物乞いの少女。辟易して通りの向こうへふつと視線を移すと、鮮やかな黄色のシルエットが目に入った。アオザイ姿の若い女性だ。見渡せば、モデルのような女性たちが汗まみれの男たちの間で美を競っている。

一〇〇年に及ぶ戦争と貧困を、男以上に耐えてきたのは女性だった。米国との不条理な戦争に勝った後も、女性の生活は男の何倍も厳しかった。そんな女性哀史に新しい風が吹き始めたことを感じさせるのがアオザイの流行である。

バイクの膨張もアオザイの復活もドイモイ政策の副産物で、改革の時代を体現してどんな政治家の言葉よりも雄弁だ。バイクとアオザイ、そこにベトナムの未来が映っているように思えた。

アジア経済視察ではシンガポール、マレーシア、ベトナムの順で回り、各国首相とインタビューした。私がシンガポールを訪れたのは二度目、マレーシアとベトナムは初めてだった。整然と秩序立ったシンガポールとマレーシアに対し、ファジーとも呼ぶべきベトナムの活気がやはり印象的だった。その印象を、バイクとアオザイというベトナムの象徴的な風物に焦点を当てて表現した。一万字分くらいの取材が六五〇字の中に凝縮した。

喧噪のベトナムを旅して、脳裏に浮かんだ光景がある。一一年前に訪れたソ連の首都モスクワである。モスクワの冬は厳しい。ナポレオンも、ヒトラーも、モスクワの冬將軍を甘く見て、あっけなく退散した。

帝政ロシアの末期に皇帝ニコライ二世を操り、異様な光彩を放ったラスプーチンはじめ多くの妖怪、怪物が輩出したロシアは特異な社会である。ロシア象徴派の先駆者といわれる詩人のチュツチェフは「ロシアは普通の尺度では測れない」と言った。ロシア革命はこの国の神秘性をいっそう引き立てる役



割を果たした。

ソ連という国はこの神秘性をずっと引きずった。冷戦が終わりを告げ、ソ連が崩壊する直前の一九九一年十一月下旬。私はドイツのボン・ケルン空港からフランクフルト経由でモスクワ空港に降り立った。自然の寒さとは違う、張りつめた空気を感じた。パスポートコントロールで厳重なチェックを受けて到着ロビーに出ると、共同通信モスクワ支局のロシア人助手がにこやかに迎えてくれた。

「山本さんですか。初めまして。ビザが無事に下りて良かったですね」

「ええ、随分苦勞しました。取れなかったら、パスポートコントロールで交渉しなければなりませんでした」

ソ連は国内経済がどんどん悪化し、日米欧などの西側銀行への多額の民間債務を払えなくなった。債務の支払い猶予や支払い免除について協議するため、先進七カ国蔵相代理会合（G7D）が急遽モスクワで開かれることになった。私は予定していたワルシャワ出張をキャンセルし、ソ連へ飛ぶことになった。

緊急の出張だったため、時間の余裕がなく、ボンのソ連大使館でビザを取るのに苦勞した。ソ連の官僚体制には、ドイツの官僚主義とは違う壁の厚さがあった。出発までにビザが下りなかったら、モスクワ空港のパスポートコントロールで係官に五〇ドルか一〇〇ドル払えば、何とか入国できると入れ知恵してくれる事情通もいた。しかし確実ではないし、仮に入国できても、出国するときに困るかもしれない

いという心配があった。

結局、一週間毎日のようにソ連大使館に通い、無愛想な女性係官に何度も頭を下げてやっと出してもらった。官僚というのはどこの国でも、傲慢で非人間的な感じがするものだが、相手が女性の場合は、その印象がいつそう強くなる。女性は優しいという通念とのギャップが悪いイメージを増幅するのもかもしれない。

当時三六歳。大学の教養部でロシア語やソ連問題を学んで以来、一五年がたっていた。モスクワの中心部へ向かう車の中から雪景色を眺めながら、ついにソ連へやってきたという感慨に浸った。そして、実際に自分の目で見た生身のソ連は驚きの連続だった。

次の記事は、このときのモスクワ訪問記である。モスクワはこれまで訪ねた都市の中でも、ひとときわ印象に残る都市の一つ。ホーチミン市でも体験したカオスがノスタルジイのような感覚を呼び覚ました。

実例5 「モスクワ——混乱期の魅惑」<sup>(15)</sup>

泥棒、賄賂、闇市場……。混乱期の社会とはこんなに刺激に満ちたものだろうか。一九九一年暮れ。私は崩壊直前のソ連の首都モスクワを二度訪れ、そんな感慨を抱いた。

二度とも、クレムリン宮殿の大統領執務室でゴルバチョフ大統領に直に会うことができた。大統領執務室ま



での道のりは遠かった。途中、兵士が行進する中庭の風景をカメラに収めようとして、広報官にとがめられた。執務室の周辺はKGBとみられる、シユワルツエネッガーのような屈強な男たちが固めていた。

ソ連帝国の崩壊は目前に迫っていた。ゴルバチヨフ大統領の顔色は冴えなかった。ペレストロイカ旋風で一躍、時代の寵児となったころの輝きはもうなかった。

同僚の車に乗って驚いた。新車なのに、汚れきっている。きれいにすると、狙われやすいのだという。車を修理に出すときは、必ず立ち会い人をつける。修理工場の担当者から内部の部品を盗まれる恐れがあるからだ。「修理に出して重要な部品がなくなつたんじゃ、目も当てられない」と、同僚は苦笑した。過渡期のロシアは極度に品不足だった。車と言えば、タクシーがこれまた面白い。乗車前に料金交渉をする。料金メーターなど関係ない。近くが一〇ドルで、遠くが三ドルだったりする。

外貨稼ぎの白タクも横行し、寒空に凍える外国人の足元を見てふっかけてくる。このころすでにルーブルの価値は揺らぎ、ドルが幅をきかせ始めていた。

ウクライナという高級ホテル内にあるショー付きレストランでは、限りなく水に近いワインを飲まされるといいかさま商法にお目にかかった。ワイン二本を注文した。一本目は普通のワインが来た。二本目はショーが始まり、室内が暗くなつてから出てきた。かすかにワインの味がした。水で薄めたのである。

同僚がクレームをつけると、動じる様子もなく「おっしゃる通りです。これは何かの手違いです」と言つてちゃんとしたワインを持ってきた。手慣れたものである。きっと毎日この手を使い、客が文句を言わなければしめたもの。気づけば、手違いですと謝ればいいという魂胆なのだろう。だが、これこそ市場経済の原点ではないか、と妙に感心してしまった。

軍部筋を通じて「ヘリコプターでクレムリン宮殿を空撮しないか」という話が舞い込んだ。手数料は六〇〇〇ドル。撮影は日曜日に限るといふ。宮殿の空撮は日本の報道機関では初めて。同僚のカメラマンは承諾した。日曜はあいにく三週間連続の曇り空。四週目にやっと挑戦することになった。すると、同筋から「この話はな

かったことにしてほしい」という連絡が入った。手数料の分配でもめ、反発したグループが「飛んだら、撃ち落とす」と言い出したらしい。

トン、トン。深夜、ホテルのドアをたたく音がする。「すみません。ちょっとお話しませんか」。英語の女性の声である。その筋の女性だな、とピンときた。モスクワの夜の危険なことは再三、耳にしていたので、好奇心を抑えながら断った。

ホテルのロビーで、他社の記者らと大蔵省の幹部が戻ってくるのを待っていたら、今度はフロンド美人が近づいてきて堂々「Who wants me?」。照れ笑いしていると、問わず語りに身の上話を始めた。「本当は学校の先生になりましたが、このご時世、両親や兄弟の面倒をみなければならなくなってますね」。われわれでは商売にならないと分かると、エレベーターに乗り、ホテルの部屋をノックして回っていた。

かつて商社マンを対象に行ったアンケートでは、モスクワは治安の良い世界の都市ランキングで三番か四番だった。今なら、きっとニューヨークと並んでワーストテン入りだろう。

合理主義が根を張る安全な西側社会では忘れがちな、さらさらした生の手ごたえがここにはある。体制からの解放感と先行き不安のはざま、とにかく生き延びようとする人々の意志がむき出しになっているからだろう。語弊があるかもしれないが、危険な社会とは新鮮なものだという思いが残った。

(ホソ共同＝山本武信特派員)

モスクワで思い出すのは、オクチャブレという名のホテルでの出来事。ソ連側代表を交えたG7Dの間もなくスタートする。朝日新聞、日本経済新聞のロンドン特派員やロシア人助手らと一緒に、急いでホテルの会場に入ろうとした。そのとき、ソ連の政府関係者が両手を広げて制した。



「ここから先は進入禁止。日本政府がそう指示している」

「そんなはずはない。われわれは日本政府の了解を得て取材に来ている」

「駄目だ。入ってはいけない」

そんなやり取りが何分か続いた後、日経のロンドン特派員が、

「これじゃあ、らちが明かない。もういいから、入っていいこう」

と言うと、ロシア人助手らは、

「駄目です。彼はKGBです。上着の内側にピストルを持っています。強行突破すれば、撃たれます」

と口をそろえ、後ずさりした。その仕草にリアリティーがあった。ああ、これがソ連なんだ、と思った。

六九年に及ぶソビエト連邦の崩壊で、ロシアは普通の国に転落し、政治、経済ともずたずたになった。ロシアは西側先進国への対外債務を返済猶予してもらったり帳消しにしてももらったりしたうえ、食糧援助や技術供与を受けて過渡期の混乱を何とか乗り切ろうとした。だが、援助金はマフィアや政治家の懐に入ったり、援助物資は闇市場に流れたり、と不正がまかり通った。ロシア社会で今、進んでいるのは、事業に成功したひと握りの富裕層と大多数の貧困層の分化である。巨大な共同体が崩れると、どういう事態になるか、格好の見本である。

ベルリンの壁崩壊からソ連崩壊までの激動は、東西分断の歴史にピリオドを打ち、グローバルコミュニケーションの時代をもたらした。ロシアはもちろんのこと、西側世界に少しずつ歩み寄りながら、かろうじて社会主義体制を維持しているベトナムにも、インターネットは根を張っている。「モスクワ——混乱期の魅惑」は、世界がそういう新時代へ向かって動き出すときにとらえた社会の断面図である。文章に残した都市と何も書かなかった都市とでは、記憶の度合いが決定的に違う。文章に残すことは、記憶に深く刻むことである。世界を読む旅は、印象を書き留めたところで終わる。

## 8

### 地球という書物を読む取材の旅

二〇世紀から二一世紀へ向かう一九九〇年代を激動のヨーロッパで過ごしたのは、幸運だった。特派員になったおかげで、数え切れないほどの貴重な体験をした。普通だったら絶対に会えない著名人に会い、普通だったら絶対に行けない特殊な場所へ行って歴史的瞬間に立ち会う。それを記録して世界へ発信する。そこに国際ジャーナリストの醍醐味がある。現場体験は、書物による理解の何倍も深いものを残す。

直接的な理解の深さという点で、現場中心のジャーナリストは机上中心の研究者より優位に立つ。資料の研究がバーチャルリアリティーだとすれば、体験は火花のようにスパークする身体的リアリティー



である。これは否定しようがない事実である。

海外取材は国内取材の何倍も刺激的で濃密だった。異文化との火花の散るような遭遇と対話の日々だったからだろう。ヨーロッパでの取材経験がなかったら、グローバルな問題への関心は深まらなかったに違いない。現地取材を通して、ヨーロッパや世界がぐんと身近なものとなった。

マドリッド、リスボン、ローマ、パリ、ジュネーブ、アムステルダム、ロンドン、コペンハーゲン、ウィーン、モスクワ、クレタ島……。一つ一つの都市の情景がさまざまな陰影を伴って私の記憶の中にある。これら主要都市のほか、多くの田舎町を訪ねた。どの町にもどの村にも、感銘を受けた。一つの都市について書くだけで一冊の本になるだろう。それだけ多彩で個性の強いのがヨーロッパという文化圏である。<sup>(16)</sup>

コペンハーゲンへ初めて行ったときには、魂が打ち震えるような感動を覚えた。外語大時代に習った独特のイントネーションのデンマーク語が、目の前でさりげなく話されている。ああ、ついにやって来たという興奮を抑え切れず、その場から日本の親友に絵はがきを出したほどである。まさしく、はるかなる特派員への道なりき、という感慨だった。

しかし何と言っても、衝撃だったのはユーロ誕生である。実現不可能と言われた通貨統合を成し遂げたヨーロッパの底力に舌を巻き、ヨーロッパに対する印象ががらりと変わった。ヨーロッパは一つに向かっているし、一つに向かうしかない。そういう視点からヨーロッパの歴史や文化を再評価し、地球共

同体の可能性を探ろうとした。

手元に残る著書や記事は、私なりの地球を読む旅の記録である。

国内を含め都合二三年、現場に身を置いて取材したことになる。殺人事件や偽札事件からテロや戦争まで、多くの修羅場に立ち会った。現場はたくさん<sup>(17)</sup>のことを語る。現場に出ないと見えないものがある。だが、現場主義がすべてでないのも事実である。

時代と四つに組むには不断の知的格闘が不可欠だ。フィールドが広がるこれからのグローバル時代はもつとそうなる。二一世紀のジャーナリストは、現在性の背後に横たわる大きな「時間的・空間的な連続性」を解き明かそうとする意欲と能力を求められている。時間的・空間的連続性とは、一つの出来事をグローバルな視野の中でとらえることである。それはミステリー小説を読むように面白い作業である。

半面、面白さはいつも、危険と隣り合わせである。世界では毎年、六〇人か七〇人のジャーナリストが戦場で死んだり、国家やマフィアの手で暗殺されたりして犠牲になっている。多い年には一〇〇人以上が死んでいる<sup>(17)</sup>。身近な例では、ソマリアの虐殺現場へ向かう途中、ヘリコプターが墜落して死亡したり、エベレスト登山隊に同行して雪崩に遭って亡くなった記者がいる。

ユーゴスラビア紛争の際には、民放の記者が取材に向かうタクシーの中で銃撃に遭って重傷を負った。かと思うと、現場への移動中、三人組の強盗に金品を奪われ、近くに落ちていた木の枝を竹刀代わりにして強盗を逆に撃退した剣道の有段者もいる。



先に触れた一九九二年一〇月のアムステルダム航空機事故では、こんなことがあった。墜落事故から三日目、現場へマイカーで行った。五分ほどして少し奥まった駐車場へ戻ってくると、窓ガラスが割られていた。見ると、警察犬のような犬を連れた二人の男がそばに立っている。男の一人が英語で「怪しい男が向こうへ逃げていった」と言う。そのときは気づかなかったが、その二人の男こそが車上狙いだった。見回りをしているように見せかけて、車を荒らしていたらしい。

先のモスクワでは、こんな事件に遭遇した。日本新聞記者協会のソ連視察団が一週間の日程でモスクワ入りした。その中に共同通信の編集委員がいた。到着した翌日、編集委員は関係者らと夕食を取り、ウォッカをかなり飲んだ後、ホテル三階の自室に戻って熟睡した。朝、目を覚ますと、身に着けていたシャツとパンツ以外は現金七〇万円を含め、すべてなくなっていた。通報で駆けつけた警察官は開口一番、

「だれか女がいたんじゃないか」

と、問いただした。編集委員が、

「私、独りだった」

と答えると、警察官は、

「まあ、熟睡していて良かった。途中で目を覚ましていたら、犯人に殺されていたかもしれない」と、言いつて帰ったという。

ソ連の一流ホテルは、各階に女性の監視係がいる。被害に遭ったホテルは構造上、外の窓から入ることは不可能である。ホテル関係者が手伝わなければ、部屋に入ることはできない。監視係が犯人グループと結託していたのかもしれない。

このような危険を冒しながら、この仕事に携わるのはジャーナリストとしての使命感を持っているからである。何のために取材し、報道しているのか、と絶えず自問しなければ、危険な取材は冒険やゲームと変わらなくなる。国内であれ、海外であれ、報道の使命を支えるのはヒューマニズムであり、人間と地球社会への共感である。地球意識に根差したヒューマニスティックな感覚こそが、文章に深い輝きを与える。

## 9

### ルポ——生きざまへの共感

エッセーや紀行文が自分の見方や感じ方を中心に書く分野だとすれば、ルポルタージュは他者や社会の実相に斬り込む。自分を抑えて対象と一体化し、目的に応じて対象を客観的かつ象徴的に浮かび上がらせる。

エッセーや紀行文でも、もちろんそうだが、ルポルタージュにおいては特に取材の持つ意味が大きい。対象の実像をえぐり出すために、徹底した取材が必要だ。取材とは対象への直接インタビュー、関係者



へのインタビュー、関連資料等の調査などである。中でも当事者へのインタビューは欠かせない。

ネット社会では、必要な情報は端末で簡単に手に入る。それをつなぎ合わせ、合成するだけで、それなりの文章はできる。しかし、ルポルタージュという分野は自分の足で現場へ行き、当事者らに直接会わないと成り立たない。五感をフルに使って対象にぶつかり、対象の本質をつかみ取る。

こう言っているかもしれない。対象に対して自分があらかじめ抱いていた予断や偏見を破壊する作業が取材である、と。あるいは、実像と虚像の落差を見極め、真実の姿を再構築する作業が取材である、と。

次のルポは、長崎支局時代、私が記者として初めて手がけた一九八七年の新年用連載記事である。「共に生きる」ということの意味を深く考えさせられた取材であり、その後のジャーナリスト活動の原点ともなった。

実例6 「知的障害者と共に二五年——なすな園から」<sup>(18)</sup>

学校を出ても職がない。施設はない。友達もできない。知的障害者は豊かな社会の圏外で生きてきた。そんな大人の知的障害者らに自宅を開放し、共に生き、共に老いる道を二五年間探り続けている夫婦がいる。地域に溶け込みながら、自給自足に近い共同生活を営む「なすな園」——その歩みと哀歓を報告する。

## ▽ふすま一枚

長崎県佐世保市から北西へ車で約二〇分の北松浦郡佐々町。なすな園は元炭坑町の静かな山あいにある。一万平方メートルを超える敷地に「暮らしの家」「いこいの家」、それに田畑、作業場、倉庫などから成る「しごとの家」があった。園長は純心短大教授の近藤原理さん、それを妻の美佐子さんが支えていた。

園生は当時三〇〜六〇歳の男性七人と女性四人。ほとんどが重度の知的障害者である。それまでに二八人が卒園していた。「家内も頭が白くなったし、園生も老いた。二五年、遠い道のりでしたね」。原理さんはそう語った。

山口県の知的障害者施設に勤めていた原理さんが小学校教師の美佐子さんと結婚したのは一九五三年だった。新婚旅行どころではなく、その日から施設暮らし。ふすま一枚挟んで知的障害児がいた。一九五九年に帰郷。美佐子さんの退職金や善意のカンパでなすな寮を建て、二人の幼いわが子を抱えながら、障害者と共同生活を始めた。「不幸な人たちのために私財を投げ出して、などという悲壮感はなかった。当時は学校を出ても職がない。施設は遠い。友だちもできない。知的障害者らは社会の圏外で生きてきた。行き場がないのなら、農業でもして一緒に暮らそう、そんな軽い気持ちだったんです」

## ▽発作

高度成長時代に黙々と道を造り、荒地を耕し、田畑を広げた。雑木林を切り開いて果樹園を作った。豚や鶏も飼った。製茶も始めた。しかし、それだけではやっていけない。公の補助もない。原理さんは小学校の教師や大学の非常勤講師をしながら、本を書いたり講演をしたりして生活費を工面した。親のない園生には生活保護費を受けてもらった。

ぎりぎりの生活の中で、一人一人の身の回りの世話をしなくてはならない。苦労は絶えなかった。例えば、けがをする。発作を起こす。行方不明になって大騒ぎをしたこともしばしば。世間の冷たい風にもさらされた。「父の益雄も障害児を預かっていたんですが、五七歳のときに自ら命を絶しました。指導に精根が尽きたん



でしょうね。その心情が今、よく分かる」。しかし、苦しい中にも笑いがあり、喜びがあり、自力で築いてきた生活の充実感があつた。地域の理解も深まり、交流の輪が広がった。「ええ、一緒に暮らすことが生きがいだし、楽しかった。それに二人の女性の献身的な支えがありました。園生からたくさんのごことを学びました。障害者の生涯に関われることを幸せに思っています」。原理さんの気持ちを代弁するように、美佐子さんが言った。

受付係のヨツちゃんは、町内でもちよつとした有名な人だ。来訪者があると、「二コツと手を差し出し」「名前は何？」「生年月日は？」「家族は？」と質問を浴びせる。ノートにメモし、真剣なまなざしで廊下を行ったり来たり。記憶に刻み込んでいるのだという。日曜日などは町内の家々を訪ねて戸籍調査をし、催しの際は進んで受付に立つ。

▽つなぎ役

ヨシオさん、三三歳。自閉症で一九七〇年に入園した。自分のことは何も話さないが、他人事には異常な関心を示す。一度覚え込むと、何年たつても忘れない。千支も明治元年から昭和一〇〇年まで正確に記憶している。「まさに人間コンピュータ。この人の頭の中は一体、どうなっているんでしょう」と原理さんも舌を巻く。「相手との楽しい思い出を作ることになるので、なすな園と外部との大切なつなぎ役です」

重い精神障害のジロウさんが入園してきた。完全な受け身タイプ。指図されるまで指一本動かさうとしない。食事もちいち口まで運んでやって「噛みなさい」と言わないと、食べない。原理さんは三日でへばった。介助役を買って出たのが、三六歳のカズオさんである。

「はい、口を開けて」「はい、ご飯」。カズオさんは辛抱強かった。それから一年目のこと。無気力そのものだったジロウさんが突然、「おかずくれ」と叫んだ。カズオさんがご飯ばかり差し出すので、おかずも欲しいと主張したのである。その日から徐々に心を開き、農作業もできるようになって社会へ巣立った。

「カズオ君は立派な精神治療士。おおらかな彼だからこそできた。駄目な人間なんて一人もない」。原理さ

んは信念を深めた。

「ここでは世間より、時間がゆつくり流れている。さまざまな人間と一緒に生きていくには緩やかさが必要である。緩やかさだけが人間の絆と信頼を約束する。

▽人間かし

農作業はなすな園の重要な日課である。共同生活を支えるとともに、体を鍛え、社会的な自立心を養う。分担を決め、各自できる範囲のことをする。自由に、伸び伸びと。カズオさんはひと鎌入れるたびにぼんやり突っ立って世間を眺めるのが癖だ。

「仕事はせんね」「ペンギンのごたる」。他の園生から非難されても、一向に気にかける様子はない。原理さんは一計を案じた。「悪いけど、苗代のところに立つてくれんね」「立つとくだけでよかろう」。田を荒らすハトやスズメよけの人間がかしたった。

数日後、近くの主婦が駆け込んできて「先生、見てごろうじまつせ」と言う。見ると、カズオさんの回りにハトやスズメが群がって種もみをつついていた。「ハトやスズメにまで馬鹿にされて。役に立ちませんな」とあきれ主婦に、原理さんは苦笑した。「私、思っんです。ハトやスズメも安心して近づけるおらかな人間がカズオ君なんだ、と。とれだけ社会に役立つかという能力主義や生産主義を持ち込まれては、この人たちは立つ瀬がない。人間を人間として見る丸い目が必要なんです」

▽掛け合い漫才

「この人たちはびつくりするほど真つ正直なんです。それが分かんると、彼らの個性とユーモアがキラキラと輝いてきて一緒に暮らすのが楽しくなりますよ」。原理さんがうれしそうに言う。

うららかな秋。「このヤギ見ておいてね」と原理先生がウタ「さんに頼んだ。「はい、よかです」。戻つてくると、ヤギは白菜をバリバリ食べていた。「見ておいてと言ったでしょ」「はい、私、ちゃんと見とつたです」ある日、園外から「なすな園はどこですか」と電話があった。「ここです」と園生。「どこですか」「ここ」



す。相手はガチャンと切った。まるで掛け合い漫才である。こうしたエピソードは枚挙にいとまがない。原理さんによると、健常者優位の視点で見るから「やっぱり障害者は……」となる。視点を移せば、様相は一変する。ウタ「さんは言われた通りのことをしたのだし、電話の主は「どこのバス停で降りるのですか」と具体的に聞くべきだった。

原理さんは「共育・共生・共老」を強調していた。障害者のために、ではない。障害者と共に、である。喜びや悲しみを同じ感覚で共有しながら、生涯を共にする。旅行をしたり、飲んだり歌ったりもする。そうした彩りの中で、障害者はいろいろな人間の中の一人として平等に生活し、成長していくという。

八月の長崎原爆忌を迎えると、平和への願いを込めて二泊三日のなすな障害者教育福祉合宿研究会を開く。全国から集まった教師、学生、医師らが園生と農作業をしながら、なすな園の実践を肌で学ぶ。

# ▽無重力

毎年一二月になると、日めくりカレンダーがどんどん進む。正月に実家に帰るのを楽しみにしている園生が次々に破り取るからだ。「五〇になっても六〇になっても、家に戻りたい気持ちは変わらないんですね」。原理さんは遠い目をした。ひたひたと押し寄せる老いの波に思いを沈めることが多くなった。知的障害者は老化が早い。まだ四〇歳なのに七〇歳くらいに見える人もいる。

「何か心の無重力状態に落ち込むことがあるんです。これからどうなるのか、という不安です。園生は体のあちこちに故障が増え、ボケも出てきた。私も以前のようにがむしゃらというわけにはいかないし……」。原理さんは自分の弱さを隠そうとしなかった。弱ささえさらけ出すその勇気が風雪の歳月を支えてきたのだろう。老いの支度が始まった。まず養豚をやめた。労働時間を短縮し、米作りを減らした。果樹も半分にした。反対に自由時間を増やした。「障害者の生涯は老いるほどに胸の痛む話が多い。生きていて良かったと一人一人がそう思えるような潤いある余生を送らせてあげたいんです」

人生の夕映えの中で、原理さん夫婦は新しい時代の訪れにじっと目を凝らしている。

なずな園は二〇〇〇年八月、閉園した。近藤原理ご夫妻は二〇〇一年一月、行政の手を一切借りずに障害者らの自立に貢献したとして、二〇〇〇年度の「シチズン・オブ・ザ・イヤー」を受賞した。

なずな園の生活を思い浮かべるたびに痛感するのは、人間は相互依存 (Interbeing)<sup>(19)</sup> であるという事実である。相互依存である以上、相手を攻撃してはいけない。共生するしかない。サン・テグジュペリも、友情や共生の大切さを繰り返し強調している。

友情とは絆を結ぶことである。絆を結ぶというのは同じ速度で歩いていくことである。運動会の二人三脚走と同じように、息が合わないとならずく。息が合うためにはやはり、スピードを落とすことが必要だ。思いやりとは相手のペースを考えることである。共同体とは、そういう思想のうえに成り立つ人間の営みである。

米心理学者 A・H・マズローは『人間性の最高価値<sup>(20)</sup>』の中で「ハイシナジー」と「ローシナジー」という社会分類を紹介している。ハイシナジーの社会は目立って非攻撃的な社会である。個人の努力によって達成した利益は、その集団全体の利益になる。ローシナジーの社会では、個人の利益とは他人を打ちのめして獲得した利益である。打ち負かされた大半は我慢していかなければならない。心の冷える敵対関係の社会である。

言い換えると、ローシナジー社会は富が富を呼び、貧しい者はますます貧しくなるような社会なのに對し、ハイシナジー社会は富が満遍なく広がり、高い方から低い方へと流れる。貧しい者から豊かな者



へと流れるのではなく、富める者から貧しい者へと行く。

地球共同体がハイシナジー社会になるには競争主義の破壊力を抑制し、ユックリズムの創造力を取り戻すしかない。地球のパイが限られている以上、グローバルドリームの王者たちが独り占めしては共生社会は成り立たない。共に生きていくためには、ある程度の我慢や自制が不可欠なのである。そういう自制心を支えるのは、大切なものとは何かという自覚である。

自由放任主義は人間や文明の可能性を引き出した。経済の自由化や規制撤廃で人やモノの交流はよりスムーズになった。しかし自由化は一定の限界を超えると、マイナス効果を生むようになる。規制のない世界で必要になるのは自制である。規制が強制的・他律的なものだとすれば、自制は主体的・自律的なものである。自制するとは他者に対して、社会に対して、地球に対して責任を持つことである。未来に対して人間の意志を示すことである。

地球市民の時代がやってきた。大空から地球の全体像を見据えながら、未来を選び取っていく必要がある。そういう地球時代の個人の生きざまを時代や社会の流れと重ね合わせて描いたのが、次のルポだ。ベルリンの壁が崩れ、東西冷戦が終焉を迎えつつあったときに、一つの運命を選択した東ドイツ一家の話である。

実例? 「二二世紀へ——地球未来」<sup>(21)</sup>

一九八九年夏。ハンガリーへの短い家族旅行から、東ドイツに戻る途中だった。車のラジオから衝撃的なニュースが流れた。ハンガリーがオーストリアとの国境を開放したという。

信号は赤から青に変わろうとしていた。道は二つ。ウィーンへ向かう道と、祖国に戻る道と。「エルビツ、どうする?」。夫のトーマス(四九)が聞いた。小学校へ通う息子のダニエルもここにいる。今なら自由な西側へ脱出できる。心臓が高鳴った。が、決心はつかず、東ベルリンへの痛んだ国道を走っていた。

▽運命の一瞬

「もし、あるとき西側へ逃げていたら……。エルビツ・ブルーメさん(四七)は今も一部残るベルリンの壁の前に立ち、一〇年前の運命の一瞬を思い起こした。

当時、夫は映画監督、エルビツさんはホテル従業員だった。「西側へ旅行したり、好きな本を読んだりする国民の自由を国家が奪うのはおかしいと思っていました。逃げなかったのはそれなりに仕事が順調だったし、生活水準も人並み以上だったからです。ウィーンへ逃げていたとしても、またドイツへ戻ってきていたでしょう」

ベルリンの壁が崩壊したのはその二カ月後。東西冷戦が終わり、ドイツ統一から欧州連合(EU)市場統合、さらにユーロへの通貨統合へと時代は展開した。「世の中がこんなに目まぐるしく変化するなんて想像もしなかった。壁の崩壊で私の人生もすっかり変わりました。一〇年間で数十年分の歴史を体験したような気がします」

ドイツ統一など不可能と言われたように、欧州通貨統合も実現しないという懐疑論が多かった。「欧州諸国の現状からすると、ユーロは時期尚早と私も思いました。でも、これがグローバル化の流れなのでしょう」



ユーロが産声を上げた一九九九年一月一日、エルビツさんはベルリンの自宅で家族とテレビニュースに見入っていた。「フリユッセルやフランクフルトの歓迎セレモニーを見てドイツ統一時の熱狂を思い出し、目頭が熱くなりました。ああ、欧州は国境が消え、本当に一つになっていつていっているんだって。一〇年前、ハンガリーの旅から戻る途中の信号でのあの躊躇（ちゅうちよ）がうそのようです」

エルビツさんの父親は二〇世紀中に四度、通貨改革を経験した。「父は通貨が変わるたびに人生まで変わると苦笑します。どちらかと言うと否定的な意味で。私自身はユーロで二度目。最初は一九九〇年七月の東西ドイツの通貨統合です。おかげで私は成功しました」

ドイツ統一後、旧東ドイツでは、国営企業が続々倒産し、失業者が急増した。現在も六人に一人が失業中。その中でエルビツさんは旧西ベルリンの旅行代理店「グローバル・トラベル・ビジネス社」の社長として多忙な日々である。世界中を飛び回り、内外の企業に会議、視察、催しを斡旋（わくせん）している。

ベルリンの壁崩壊一年後に同社の前身である旅行会社に勤めた。客に旧東ドイツへの投資を狙う企業が増えたため、企業相手専門の会社として独立した。社員は四人で、近く増やす予定だ。「運が良かったんです。私の仕事も随分と、グローバル化しています。西も東もない自由な世界で国際的な仕事がしたいというのが社会主義時代からの夢でした。日本にも何度か出張しました」

欧州の歴史は戦争の歴史だった。戦争のたびに国境が引き直され、無数の人々の運命を変えた。エルビツさんも歴史に翻弄（はんろう）された一人である。「日本の方は実感しにくいでしょうが、欧州諸国にとって国境は特別の意味を持っています。国境のためにどれほど多くの人が苦しんだことが。冷戦時代もそうでした。そういう歴史的に複雑な欧州に一つの通貨が流通するのは素晴らしいことです」

ユーロ導入は政治主導だった。市民の受け止め方は各国の経済格差を反映してまちまち。南欧のような貧しい国ほど賛成派が多く、ドイツのような豊かな国は反対派が多かった。

▽平和と戦争の問題



「ドイツ・マルクは強いドイツ経済のシンボル。それを失いたくないという気持ちはよく分かります。でも、やはり豊かな国と貧しい国が格差をなくし、融合していかないと駄目だと思います」。ユーロが誕生すると、ドイツの反対派は激減した。

ユーロは政治や経済だけでなく、言語、文化、歴史、生活習慣が違う国々が共生するための壮大な実験だ。通貨統合の立役者で欧州名誉市民の称号を受けたドイツのヘルムート・コール前首相は「ユーロは平和と戦争の問題」が口癖だった。二世紀の欧州が平和になるかどうかはユーロの成否にかかっているというのだ。

コール前首相はドイツ統一に伴う失業悪化が命取りになり、一九九八年秋の総選挙で退陣した。旧東ドイツではあまり評判が良くなかったが、どことなく憎めなかったと言うエルビツさんは「隣の国は潤い、自分たちの国は貧しいというのは平和共存は望めません。自由は素晴らしいけれど、不均衡は好ましくない。私もユーロの可能性に希望を託しています」

ユーロ誕生後、ユーゴスラビアのコソボ紛争が世界に影を落とした。一〇年前まで同じ共産主義圏だった国の民族対立に、エルビツさんは心を痛めた。「ユーロ圏で将来、戦争や紛争が起こると心配する人はいませんが、圏外では起こり得る。それをどうするか。やはり共同体の輪に取り込んでいくしかないと思うのです。コソボ紛争を何とか解決できたのは政治にまだ力がある証拠です」

EUは今、旧ソ連・東欧諸国やキプロス、マルタなどと加盟交渉を進めている。「二〇一〇年にはユーロ加盟国は、現在の二一カ国から最大二七カ国に拡大する」（英金融機関）との予測もある。

「ユーロが欧州統合の促進剤になるのは確かです。次世代はきつと欧州人として考え、行動するようになるでしょう」。そう言うエルビツさんは、一八歳になったタニエル君と冷戦のシンボルだったベルリンの壁の残骸を見つめた。

（フランクフルト共同＝山本武信）



ルポルタージュでは、何をテーマにし、取材対象をどこに絞るかがすべてと言っていい。その際、鍵を握るのはストーリーの中心人物である。だから、描こうとするテーマをめぐる人選はいつも難航する。「なずな園」の場合は最初からテーマがはっきりしていたため、人選には苦労しなかった。園での面白いエピソードや関係者の話をいかにうまく引き出すが勝負だった。興味深いエピソードには事欠かなかった。

「二二世紀へ——地球未来」の方は苦戦した。本社編集委員室から与えられたテーマは漠然としていて、テーマに沿った最適の人物を探し出すのに苦労した。エルビラさん一家のことを知ったのは偶然だった。ハンガリーから帰る冒頭のエピソードを聞き出したときには、ほっとしたものだった。

この記事に関連し、一点だけ指摘しておきたい。私たち日本人は四方を海に囲まれている。国境線は海のかなたで消え、国境意識は鮮明ではない。ヨーロッパやアジア大陸の国々にとって国境とは何百万人、何千万人という同胞の墓標が築いた命綱である。一本の国境線が無数の人々の運命を裁断した。このため、ボーダーレスとか融合という現象に対して、日本人とは違うシビリアな感覚を持っている。つまり、グローバル化にリアリティーがある。

文章を書く場合、たいてい字数と時間の制約がある。だが、字数制限はその基となる材料を制約するものではない。むしろ材料は多いほどいい。例えば、字数制限が一〇〇〇字だとすれば、どれくらいの材料が必要だろうか。テーマにもよるが、一万字分くらいの材料があれば、十分だろう。

二か三しかないものを無理して一〇の文章にすると、綿菓子のように内容が希薄になる。逆に一〇〇のものを削りに削って一〇の文章にすると、贅肉ぜいにくのない締まった内容になる。締まった内容というのは、中身が濃いということである。

先の「なずな園」や「エルビラ一家」のルポは伸ばそうと思えば、すぐに一〇倍や二〇倍の分量になる。しかし毎日発行される新聞には、自ずと字数制限がある。一本の企画記事はどんなに長いものでも、二四〇〇〜三〇〇〇字程度が限度だろう。そのことが分かっているにも、実際にはその何倍もの取材時間をかける。取材した多くの材料の中から、最も面白い話や最も興味深い話を選び出して再構成する。材料がたくさんあると、書くのが楽になる半面、使わない部分はもったいない気がする。未練を振り切つて要らない部分をどんどん削除し、圧縮する。文章は削ってこそ、中身が引き締まるものだ。

新聞社などのマスコミでは、現場の記者が書いてきた記事を、デスクが削りに削る。可能な限り短く



する。一行一二字で六〇行の原稿だったら、五〇行、四〇行へと絞る。削られた方は不満に思うが、それで十分でなく、その方が良い記事になる。同じ内容だったら、一〇〇行よりも五〇行の方がいい。その方が読者の費やす時間、紙面のスペース、印刷コストなどの面から合理的と言えるだろう。

推敲とは多くの場合、無駄な文言を削り取ることを意味する。文章上達への道は「カンナ削り」から始まる。プロの物書きは、自分の文章を必要最小限にまで圧縮する作業を行える人のことである。できるだけ多くの材料を仕入れて、最小限の字数で伝える。

その意味で、文章の執筆は、材料をふるい落とす選択作業と言える。選択は苦悩である。いったん集めた材料や文章を削るのは、それこそわが身を削るような痛みを感じる。痛みをこらえながら、自分の文章を丹念に整えていく。痛みを乗り越え、削ることが面白くなったとき、文章は確実に上達している。

## 11

### 評伝——人間像を浮き彫りにする

人物紹介はエッセーや紀行文より難しい。

ホモ・サピエンス。知性と心を持つ人間は、地球上において最も謎に満ちた存在である。自分でもよく分からないところがある。古代ギリシャの哲学者ソクラテスは「汝自身を知れ」と言った。サン・テグジュペリの『星の王子さま』にも、自分というものが分かれば、最高の賢者であるというくだりがあ

る。

本人でも理解しがたい他者を的確に評価し、描き出すのはたやすいことではない。だれの人生でも掘り起こせば、一冊の本になるくらいの厚みがある。それを四〇〇字とか八〇〇字に凝縮するのは至難の業である。それだけ取り組みがいもあるのが評伝だ。評伝が書けるようになると、ライターとして一人前と言っているだろう。

実例 8 「時の人——反戦画『地獄』に取り組む丸木位里」<sup>(22)</sup>

被爆の後遺症に苦しみながら、反戦画を描き続けて三七年。今、その集大成として俊夫人（七二）と『地獄』に取り組んでいる。

「絵を通じて戦争をやめて下さいと訴えても、一向にやめてくれない。だったら『戦争をする人は地獄に落ちますよ』と警告するしかない。その悲痛な思いがこの作品には込められているんです」

昨年暮れから長崎市内のアトリエで制作にかかった。毎日一〇時間、八三歳とは思えないエネルギーである。縦四段、横一二段の大作はこれまでの作品の中でも最大。戦争犯罪者らが業火に包まれ、苦しみもがきながら、奈落の底へ落ちていくシーンが鬼気迫る筆致で描かれる。完成は二月末。

「あれがヒトラー、これがムソリーニ……。戦争を起した人だけでなく、戦争を食い止められなかった私たち自身も地獄行きです。ほら、そこに私たち夫婦が落ちていく姿があるでしょ」と言って『地獄』の一隅を指さした。平和を見据える眼は厳しい。



一九四五年八月、広島原爆で父や伯父やたくさんの友人を失った。三日後、救援活動に行き被爆。俊さんも後を追って広島へ。このときの体験が戦後を生き抜く原点となり『原爆の図』の共同制作が始まる。

『幽霊』（一九五〇年）から『ながさき』（一九八二年）まで全一五部。世界二四力国で巡回展が開かれ、衝撃を与えた。「残酷すぎる」と展示を拒む声も少なくなかったが、「実際の原爆はもつと悲惨だった」と訴え続けた。『原爆の図』が高校の教科書から外されたときは、文部省に直接抗議、反権力の立場を貫いた。「核危機で地球は破滅寸前。私たちの創作活動は戦争体験の風化に抗するささやかな試みなんです」と言う。

農家の長男に生まれ、二〇歳で上京。歷程美術協会を創立し、日本画の抽象を試みた。一九四一年、洋画家の俊さんと結婚。一九六七年、悲願だった「原爆の図丸木美術館」を埼玉県東山市に建てた。

夫妻の画風は日本画的技法と洋画的技法の絶妙な調和とたたえられ、世界平和文化賞など数々の賞を受賞した。趣味は畑作り。「無農薬野菜が健康の秘訣だよ」と白いひげをさすつて笑う。子どもはなく、二人暮らし。広島県出身。

これは、共同通信が全国の加盟紙に毎日配信している「時の人」というコラムである。大きなニュースになるような功績を挙げた人や、世間の注目を集めるような興味深いことをやっている人を紹介する欄だ。丸木位里氏は一九九五年に、俊夫人は二〇〇〇年に亡くなった。丸木夫妻の記事を思い浮かべるときに、後悔に似たほろ苦いものがこみ上げてくる。

実は「あれがヒトラー、これがムソリーニ……。戦争を起こした人だけでなく、戦争を食い止められなかった私たち自身も地獄行きです。ほら、そこに私たち夫婦が落ちていく姿があるでしょ」というく

だりには、書こうとして書けなかった言葉がある。

丸木夫妻の言葉通りに再現すると、この文章は「あれがヒトラー、これがムソリーニ……。昭和天皇はそこです。戦争を起こした人だけでなく、戦争を食い止められなかった私たち自身も地獄行きです。ほら、そこに私たち夫婦が落ちていく姿があるでしょ」となる。「あれがヒトラー、これがムソリーニ」までいいが、「昭和天皇はそこです」という言葉に迷った。苦しみもがきながら地獄へ落ちていく昭和天皇の顔があった。昭和天皇がまだ存命中のあるところである。このまま新聞記事として流すと、丸木夫妻が右翼の攻撃を受ける恐れがある。

どこの国でもそうだが、天皇や皇室問題はずっとタブーである。思うように書けない。私が現場の記者としてデスクに上げてても、デスクサイドで「昭和天皇はそこです」の部分は削除したはずである。

右派の産経新聞や読売新聞に対し、共同通信社は朝日新聞と同様、リベラル左派だった。権力と対峙する姿勢が鮮明だった。それでも、天皇問題の扱い方はセンシティブだった。共同通信の方は良くて、ブロック紙や県紙などの加盟紙と摩擦を起こす可能性がある。

私自身は「昭和天皇はそこです」のくだりを入れた原稿をデスクに上げるべきだったと反省している。この言葉こそは丸木夫妻の生涯を貫く信念の表明だった。これがあるのとならないのでは、記事の印象もだいぶ違ってくる。記者としての筋を通して、後は会社の判断に任せれば良かったと思う。入社六年目の地方記者であり、とっさに判断がつかなかった。記者としては、良い反省材料になった。



ボーダーレスな地球時代に入り、さまざまな分野でグローバルスタンダードが生まれている。これは地域的な特殊性が後退し、あらゆるものが普遍化することを意味する。タブーや聖域は、グローバル化の荒波にのみ込まれて消滅しつつある。

皇室問題もそうである。<sup>(23)</sup>「開かれた皇室」というテーマはそういう流れの中で浮上した。二〇〇四年には、皇太子の「(雅子妃の) 人格を否定するような動きがあった」という異例の発言が天皇家と宮内庁を巻き込んで、国民的な論争を呼んだ。

# 実例9 「横顔——ノーベル文学賞を受賞したグラス氏」<sup>(24)</sup>

ノーベル文学賞受賞が決まったドイツの作家ギュンター・グラス氏は平和、環境破壊、人種差別など絶えず異議を申し立てる行動派である。

グラス氏の文学の原点はナチス・ドイツという狂気の歴史にある。グラス氏はナチスを通じて政治と人間の不条理な乖離に思いを深め、「フリキの太鼓」以降、「ドイツの良心」として政治的に行動し、過激に発言した。行動の根底には、第二次大戦が終わるまでナチスの実態を知らなかったという「無知の自覚」がある。

中立というあいまいな姿勢を嫌い、信念に基づいて社会民主党(SPD) 支持を鮮明にし、言葉を武器にして政治や時代の虚構を撃ち続けた。信念にそぐわなければ、SPDから離脱するという自由も持つ。それだけ政治との摩擦も大きく、文学の外で国際的な注目を集めてきた。

ドイツ統一後に荒れ狂う極右ネオナチの難民襲撃やコール前政権の難民送還政策を鋭く告発。難民政策につ

いては「ドイツ人は隠れ人種差別主義者である」と発言して政府・与党と対峙、信念を貫いた。

(フランクフルト共同＝山本武信)

ギュンター・グラスがノーベル文学賞を受賞したとき、私はフランクフルト支局からロンドン支局へ出張中だった。ノーベル賞というのは毎年、だれが受賞するのか、予測がつかない。マスコミでは前もって候補をピックアップし、できるだけ多くの予定稿を準備する。グラスは候補の一人だったが、本命とは見られていなかった。

発表されると、当然、「番外」「一報」「本記」「解説」「サイド」……と取材や執筆に追われる。日本の朝刊に間に合わせるには二時間程度しかない。文字通り締め切り時間との戦いである。

特に通信社の締め切りは過酷である。新聞社のような夕刊、朝刊の締め切りではない。刻々が締め切りである。米APや英ロイターなどの国際通信社と競争しながら、新聞、テレビ、ラジオにニュースをいち早く配信しなければならない。新聞社やテレビ局は通信社の配信記事を見て、自社電として書き直したりする余裕がある。通信社の記事をそっくりそのまま、自社の特派員電のようにして掲載するケースも少なくない。

そういう厳しい時間の制約の中で、グラスの「横顔」まで書く羽目になった。当初担当することになっていたベルリン支局長が土壇場で「グラスのことはよく知らず、書けない」と言い出したからである。



本記や解説を書きながら、横顔の構想を練った。時間の猶予は三〇分。電話で話を聞くということもできない。持てる記憶と知識の中から、グラスの人間像を彫り出した。それがこの記事である。

時間に追われながらの執筆は、ジャーナリズムでは日常茶飯事。普段の勉強と緊急事態への対応力が問われる。取材現場では、命を縮めるような緊張が続く。

## 12

### 寝かして練り直す

共同通信社に入社後、二カ月の新人記者研修を経て赴任した大分支局でまず担当したのは、定番の警察回りである。

描いていた世界と随分違った。通信社の記者はもつとスマートで知的な職業かと思っていたら、新聞記者と少しも変わらなかった。肉体労働の多い文屋である。サツ回りは馴染めなかった。夜討ち朝駆けと言って、事件があってもなくても、警察官の自宅へ情報を取りに行くのである。

マスコミは不規則で長時間労働。共同通信社は世界情勢と向き合っているため、一年三六五日、二四時間体制である。何か事件があると、休日でもすぐに呼び出される。毎月一〇〇時間前後の残業。大きな事件があると、残業時間はすぐに月一五〇〜二〇〇時間に達する。昭和天皇死去の際、社会部記者が月三〇〇時間の残業をした例もある。労働時間の短縮という政府の方針に最も反しているのは、時短の

必要性を報道している当のマスコミである。

建前と本音、理想と現実の矛盾が渦巻く磁場が、マスコミという特殊な世界である。この矛盾を意識しすぎると、やっていけなくなるようなところがある。多くの人が突き当たる壁である。ジャーナリストとしての高い志を抱いて入社してきた記者ほど、そのことに苦しみ、悩む。それがその後の生き方を左右する。

各社が編集綱領でうたう「社会の正義」や「世界の平和」よりも、「抜いた抜かれた」のシーソーゲームが優先するのがマスコミの日常である。どんなに立派な考えを持っていても、他社に抜かれたら、干されてしまう。この現実に失望して辞めていく人もいるが、大半の人は疑問をぐっと胸の奥に押し込めながら、日々の取材に向かう。疑問をかき消すほどに、日々の取材は忙しくもある。疲れ切った頭と体には、「なぜ、俺はこの仕事をするのか」という自問は空しくこだまする。そこに、ジャーナリズムがゆがんでいく落とし穴がある。

こうした肉体労働のうえに成り立つ知的営みがジャーナリズムである。業界の平均寿命も、他の職業より短いそうだ。健康診断で「良い結果」が出ると、肩身が狭い。働きが足りないのではないかと、何とも因果な商売である。

このように、ジャーナリズムの現場では時間に追われ、ゆっくり書く余裕がない。取材したことを即座に原稿にしなければならぬ。しかし、普通の人とはもっと時間的余裕がある。ワインと同じように、



原稿は書いた後、いったん寝かせる必要がある。一定時間寝かせることによって誤字脱字、構成の粗さ、筆の滑りすぎ、論旨やリズムの乱れがよく見えてくる。書いた当初は感情が高ぶっていて、原稿を突き放して見ることができない。寝かせることは、自分の原稿を第三者の眼で見直すための冷却期間と言ってもいい。

例えば、深夜に書いた手紙やメールはすぐに出さない方がいい。深夜の気分は日中とはかなり違うため、感情にぶれが生じる。朝起きて読み返し、練り直すのが賢明だ。人間の心や思考は絶えず揺れている。揺れの振幅が大きいときに書いた文章は、平常心とはかけ離れたものになってしまう。もちろん、情熱がほとばしるような文章の勢いが効果を生む場合もあるが、普通の文章は感情のぶれを抑制した方がいい。

プロは文章の冷却期間が短くてすむ人である。書きながら、自分の文章を客観視する力量を持っている。しかし、プロでも時間が許す限り、推敲に推敲を重ねる。一回さらさら書いて完成という天才には、まだお目にかかったことがない。プロは普通の人より書くのが速いが、遅筆のプロもいる。

プロのものの書きとは何か。書いた原稿がそのまま商品になるということである。文章の質と仕上げる速さが問われる。決められた締め切り時間内に売れる原稿を書けなければ、プロ失格となる。冷静になって思考を整理し、心を整える。それが文章だけでなく、心の修練にもなる。文章力の向上が人間形成に役立つと言うのはこのためだ。文章の冷静さは人間の冷静さである。文章を練ることは人間を練るこ

と、書けば書くほどそう思えてくる。

注

- (1) 澤村榮一「ケルトふたたび」『高知新聞』連載、二〇〇一―二〇〇二年
- (2) 澤村榮一『英語と日本語のはざま』ふたば工房、二〇〇四年
- (3) 阿井景子『わが心の師 清張魯山人』中公文庫、二〇〇一年、一〇八頁
- (4) Zweig, Stefan. *Sternstunde der Menschheit*, Bernann-Fischer-TB, 1943: pp. 25-26
- (5) 山本武信「共同通信社・全国加盟紙配信記事」一九九一年六月
- (6) 山本武信『裏切られた神話——素顔のドイツ』作品社、一九九五年、一四―一六頁
- (7) アントワーン・ド・サン・テグジュペリ『平和か戦争か』みずす書房、山崎庸一郎訳、二〇〇一年、一  
二七頁
- (8) 宮沢賢治『銀河鉄道の夜』集英社文庫、一九九〇年、二三九頁
- (9) 山本武信「共同通信社・全国加盟紙配信記事」一九九二年一〇月五日
- (10) 山本武信『ライフワークのすすめ』早稲田出版、二〇〇二年、二一―二七頁
- (11) J・スキナー『成功の9ステップ』幻冬舎、宮崎伸治訳、二〇〇四年、六四頁
- (12) レオナルド・ダ・ヴィンチ『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記(上)』岩波文庫、杉浦明平訳、一九五  
四年、三八頁
- (13) ヘンリー・D・ソロー『森の生活(上)』岩波文庫、飯田実訳、一九九五年、三四頁
- (14) 山本武信『日本記者クラブ会報』二〇〇二年二月一〇日号
- (15) 山本武信「共同通信社・全国加盟紙配信記事」一九九二年一月



- (16) 山本武信『ユーロ生誕』共同通信社、一九九八年、二〇八―二一四頁
- (17) Kingsbury, D. Loo, E. *Foreign devils and other journalists*, Monash Asia, 2000 Institute: pp. 10-13
- (18) 山本武信「共同通信社・全国加盟紙配信記事」一九八七年一月二日
- (19) Thic Nhat Hanh. *Peace is Every Step*, Bantam Books, 1991
- (20) A・H・マズロー『人間性の最高価値』誠信書房、上田吉一訳、一九七三年
- (21) 山本武信「共同通信社・全国加盟紙配信記事」一九九九年八月
- (22) 山本武信「共同通信社・全国加盟紙配信記事」一九八六年二月五日
- (23) 高橋紘『平成の天皇と皇室』文春新書、二〇〇三年
- (24) 山本武信「共同通信社・全国加盟紙配信記事」一九九九年九月三〇日





## 第4章

### 時代に斬り込む視点と論理

感性の豊かさを要求されるエッセーに対し、論理の鋭さを求められるのが論文である。

論文の前提になるのは事実認識の正確さである。パトス（情熱）に対するロゴス（論理）である。論文の論理は、事実をきちんと積み上げて初めて成り立つ。事実の積み上げとは「現実の再構築」というふうに言うこともできる。

事実を単に並べ立てたのでは、現実はやけてしまう。

限られたスペースと時間の中で現実を文章として再構築するには、それなりのテクニックが要求される。どういう要素が必要で、どういう要素は不要なのか。ここでも選択の苦悩に直面する。事実をコンパクトに提示するというのは、思っているより難しい。

その手本となるのが新聞記事である。新聞記事は何気ないように見えて、すらすら書けるようになるまでには何年もかかる。短い記事にも長年のノウハウが詰め込まれ、一般の読者には見えない工夫を凝らしている。

新聞記者になって三年たったころ、推理小説の巨匠、松本清張の小説に載っている事件記事を見た。新聞記事を真似てはいるが、素人の書いた記事だとすぐに分かるものだった。記事の構成や簡潔さとい



う点で、新聞記者には及ばない。逆も真なりで、新聞記者が優れた小説を書けるわけではない。餅は餅屋である。

事実とは何か。本質とは何か。

地球社会が融合し、事実や本質の意味合いが変わった。グローバルなパースペクティブでとらえないと、見えないものが多くなった。複雑に絡み合ったものを解きほぐし、再構成する。再構成の仕方によって、現実とはさまざまな姿を見せる。文章でとらえようとする現実とはひと色ではない。書き手の眼と手が現実を左右する。

客観報道というのは、書き手の主観を交えずに事実を正確に伝えようとする姿勢である。

## 2

### 新聞記事——逆三角形の構成

あれはヨーロッパが新時代へ向けて歴史的な転換点を迎えた年だった。

一九九八年五月十三日、EU特別首脳会議がブリュッセルで開かれ、一九九九年一月の単一通貨ユーロの導入と一一カ国の参加が正式に決まった。しかしユーロを管理する欧州中央銀行（ECB）の総裁人事をめぐって、ドイツとフランスが激しく対立、すったもんだの徹夜交渉の末、玉虫色の折衷案で合意した。とにかくにも、ヨーロッパの運命は決まった。

私はブリュッセル出張からフランクフルトに戻り、ユーロ熱が冷めないまま、次の仕事の手順などを考えていた。五月六日の朝。オフィスに出ると、米ウォールストリート・ジャーナル紙が大きなニュースを伝えていた。「ダイムラー・ベンツが米クライスラーと合併・買収交渉を進めている」

大西洋を隔てたビッグスリーの一角を吸収？ 噂にも上っていなかった話である。あまりに大きな合併であり、いつもの観測記事ではないだろうか。半信半疑のまま、私はダイムラー本社に電話を入れた。仮に合併計画があっても、こういうケースは「ノーコメント」と答えるのが通例である。

ところが、驚くことに、ダイムラーのスポークスマンは交渉の事実をあつさり認めてしまったのである。合併合意はいつになるのか。ウォッチが大変だなあと内心、厄介に思った。「独ダイムラー、米クライスラーと合併へ」という記事が日本を含め世界各紙の一面トップに載った五月七日朝のことである。ダイムラーのスポークスマンから電話が入った。

「クライスラーのイートン会長とダイムラーのシュレンプ社長が本日午後一時から、ロンドンで両社の合併について記者会見します。飛行機はわが社で用意してあります。ぜひ出席してください」

「ということは、合併で合意したということですね」

「ええ、そういうことです。のちほど報道発表文をファックスします」

東京本社に電話を入れ、至急報の「番外」を打つと、息つく間もないほどの忙しさとなった。巨人通貨ユーロの導入決定後に巨人企業の合併が発表されたのは、グローバル化の流れを映して象徴的だった。



この年の十一月一七日、両社は正式に合併、ダイムラークライスラーとして新たなスタートを切った。<sup>(1)</sup>  
そのときの「本記」が次の記事である。

実例10 「本記——ダイムラーとクライスラーが世紀の合併」<sup>(2)</sup>

【フランクフルト17日共同＝山本武信】ドイツ最大の企業グループ、ダイムラー・ベンツと米クライスラーの合併による世界第三位の自動車メーカー、ダイムラークライスラーが一七日、発足した。フランクフルトやニューヨークの株式市場では同日から、ダイムラークライスラー株（略称DCX）の取引がスタートした。これにより、ダイムラー・ベンツはダイムラー・エンジン社とベンツ社が合併して発足した一九二六年から七二年、クライスラーは一九二五年の創立から七三年の歴史にピリオドを打ち、本格的な世界株式会社としてグローバル競争に挑む。

ダイムラークライスラーはこの日の発足を弾みに、アジア市場への攻勢を狙った日産ディーゼル工業との提携交渉を急ぐ方針だ。新会社の従業員数は四二万八〇〇〇人。一九九八年の売上高は二六〇〇億マルク（約一九兆円）となる見込みで、トヨタ自動車を抜き、米ゼネラル・モーターズ（GM）と米フォード・モーターに次いで三位。双方の長所を生かして車種や販売網を拡充し、数年以内にフォードを抜き二位への躍進を目指す。当初の三年間はダイムラーのシュレンプ社長とクライスラーのイトトン会長が共同で社長兼最高経営責任者（CEO）に就任。三年後にイトトン氏は退き、シュレンプ社長の一人体制となる。

傘下の航空防衛会社ダイムラー・ベンツ・エアロスペースもこの日、ダイムラークライスラー・エアロスペースと改称した。

ドイツのフォルクスワーゲン（VW）やBMWをはじめ世界の競合会社は、企業規模の拡大に向けて買収・提携などの対抗策に動いている。生き残るのは「五つか六つの大企業グループ」（ピエヒVW社長）といわれ、世界を舞台にした自動車戦争が本格化しそうだ。

本記というのは、新聞の各種記事の中で柱になるものだ。本記があって、解説、雑観、サイド、談話などの関連記事がニュースの大きさに応じて展開する。本記は一行一二字で最大六〇行が目安。七二〇字前後の中に必要な要素を織り込まなければならない。いつ、どこで、だれが何をしたのか。アメリカのジャーナリズムでは「5W1H」と呼んでいる。

5W1Hを考えながら、重要な要素ほど前の方へ、補足的な要素は後の方へ持ってくることになる。こうした構成を記事の「逆三角形」と言う。忙しい読者は最後まで全部読む時間がない。リードだけ読んで終わりという場合も多い。そういう事情から、逆三角形というスタイルが定着した。新聞記事における不動の論理である。

エッセーの節でも述べたように、文章はリードが大切だ。新聞記事も例外ではない。リードに何を持ってくるか。記者は取材し、執筆するとき、絶えずこの点を意識している。リードは見出しになる部分である。

この記事で言えば、「ドイツ最大の企業グループ、ダイムラー・ベンツと米クライスラーの合併によ



る世界第三位の自動車メーカー、ダイムラークライスラーが一七日、発足した」がリードに当たる。このリードを軸にして、必要な要素が重要度にしたがって展開する。

リードを考えることは、自分が直面している事件や出来事の最も重要な要素は何かを考えることである。事実の顔をとらえることと言ってもいい。顔をしっかりとらえたら、首から下の各部位を順次つなげる。このようにして現実の骨格を再構築する。

### 3

#### 解説記事——現象の背後に潜むもの

事件や出来事をもっと大きな時代背景や社会背景の中で分析するのが「解説」である。前の例で言えば、ダイムラーとクライスラーはなぜ合併したのか、なぜ合併する必要があったのか、といった視点である。読者でも想像できるような解説では意味がない。読み手が「そういうことなのか」と納得する内容にしなければならない。広い視野、鋭い視点、冷静な分析。書き手の実力が問われる。

ジャーナリズムの現場では、何か大きな事件があると、必ずこの解説を書く。ふだん勉強していても、対応できない場合が多い。社会事件であれ、経済事件であれ、政治事件であれ、事件というのは常識を破るものだからこそ事件なのである。常識を超える未知の事態に対して、きちんとした説明を用意しなければならぬ。

次の解説は、一九九八年夏に世界の金融が危機状況に陥ったときに書いたものである。金融危機が大口ロシアへ飛び火した。本社の外国経済デスクから電話が入り、「一時間以内に解説を送ってほしい」と求められた。構想する時間などなく、とにかくパソコンに向かって打った記事である。実際には四〇分ほどで仕上げた。こういうときは、内心焦りながらも、不思議なほど必要な言葉が出てくる。

実例11 「解説——危機連鎖——グローバル化の落とし穴」<sup>(3)</sup>

【フランクフルト17日共同＝山本武信】世界経済への波及が懸念されるロシアやアジアの金融危機は、局地的な危機が世界全体に連鎖する「グローバル化の落とし穴」をまざまざと見せつけている。東西冷戦終結に伴う「世界の壁」崩壊で経済の自由化とボーダーレス化が一気に加速した。

国境がなくなり、膨大なおカネが一瞬のうちに地球の一方から反対側へ移動。産業界では巨人同士の合併が相次いでいる。グローバル化の流れが強まる中、タイに始まった金融危機はインドネシア、韓国、日本へ波及。その余波で、中国を含むアジア経済全体が動揺している。

アジア地域に力を入れてきた欧米諸国は輸出面や融資面で打撃を受け、自国経済への跳ね返りを恐れている。特にバブル景気を維持してきた米国は「危機拡散の防止策を講じないと、打撃が最も深刻になる恐れ」（国際金融筋）がある。そこへ市場経済化を進め、世界経済への統合過程にある旧大口ロシアが経済のかじ取りに失敗。ぐらつく世界経済にさらに一撃を加えようとしている。

ドイツ銀行リサーチによると、すでに世界経済の三分の一以上がリセッション（景気後退）入りしていると



いう。今のところ、まだ影響が小さい欧米が踏ん張らなければ、リセッションは世界全体を覆い、取り返しがつかなくなる。

欧州連合（EU）が市場統合から通貨統合へ突き進むようとしているのも、他のブロックや地域の経済危機の影響を最小限に抑えようとの狙いからである。グローバル化は競争を促進し、成長を押し上げる効果があるが、いったんどこかがつまずくと、グローバルに影響が跳ね返って、一国では対応できない。ポードーレス経済にはチャンスが大きい分、リスクも大きい。市場の暴走を抑えるために、国際的な協調体制がますます必要になるだろう。

解説も論理的な文章であり、一応論文のカテゴリーに入るが、主眼は事実在即した論理にある。客観性を重んじるという点で、主観を交えて自分の思想や主張を展開する論文とは異なる。別の言い方をすると、論文は署名入りなのに対し、解説は無署名型である。無署名型は必ずしも筆署名が入らないというわけではない。むしろ、新聞の解説記事では筆署名が入っている方が普通だが、個人的バイアスのかかった意見は極力排除する。独創的な見解は尊重しつつ、普遍性を重視する。

論文は賛否両論を呼びやすい。解説は不特定多数の読者が納得することを前提にしている。極論すれば、論文は読まれなくてもいいが、解説は新聞社の商品として大多数の人に読まれなくてはならない。要するに、論文は「私はこう考える」、解説は「私」抜きの「こうである」。その差は実際に書いてみて体得するしかない。新聞記事は原則として「一人称の私を消し去った文章」でなければならない。

だれに読んでもらう文章か。ごく一部の専門研究者が対象なのか、それとも、不特定多数の読者が対象なのか。これは書くうえで重要なファクターである。読む相手に応じ、書く側の姿勢も変わる。

## 4

### インタビュー記事——核心に迫る

インタビューの主眼は本音を引き出すところにある。インタビューの最中に自分の意見をとうとうと述べる人がいる。これは良くない。インタビューは会談とは違う。自分のおしゃべりは抑えて相手の意見を聞かなければ、インタビューの意味はない。

相手が本音を話しやすい環境を提供するのがインタビュアーのマナーである。相手の本音を引き出すためには、普通の会話ではなかなか難しい。場合によっては相手を怒らせたりするのも一つのテクニクである。人は異常な精神状態に置かれるとき、建前ではない本当の姿を見せたりする。平常心では覆い隠せない部分を短時間にどれだけ見抜けるか、インタビューの成否はそこにかかっている。

見出しに立つような内容がひと言でも引き出せれば、成功である。特に各界の大物とのインタビューでは、ひと言が大きな意味を持つ。そのひと言がマスメディアを通じて、世の中の流れを変えることさえある。ジャーナリストはそういう瞬間を期待してインタビューに臨む。



# 実例12 「ドイツ連銀総裁と単独会見」<sup>(4)</sup>

【フランクフルト19日共同＝山本武信特派員】ドイツ連銀のハンス・ティートマイヤー総裁は一日、フランクフルトの連銀本部で共同通信記者と単独会見し、欧州通貨統合について「欧州連合（EU）条約（マーストリヒト条約）に規定された最終期限の一九九九年より以前には実現しない」と指摘、九九年になつてようやく参加基準をクリアした半数以下のEU加盟国による小統合でスタートすることになるとの見通しを明らかにした。欧州金融政策の主導権を握るドイツ連銀総裁が「通貨統合が九九年に小統合で始まる」との見解を内外の報道機関に示したのは初めて。ドイツの金融政策については米国の利上げ転換には影響されず、独自の金融緩和路線を継続する意向を表明した。

会見は通貨統合や金融政策、円問題のほか、欧州為替相場メカニズム（ERM）、欧州自由貿易連合（EFTA）のEU加盟、ドイツおよび欧州の経済見通しなど幅広いテーマにわたった。この中で、総裁は特に通貨統合問題について「インフレ、財政赤字などの」参加基準を緩めようという議論は通貨統合にとってマイナス」と批判、いかなる形でも基準緩和は認めるべきではないと力説した。

現行の基準通りに実施に移せば、参加できる加盟国は限られ、全加盟国による同時参加はほぼ絶望的で、総裁は「当初、参加できなかった国は後で基準を満たせば、門戸は開かれている」と述べた。

総裁はまた「各国はそれぞれの経済実勢に即して独自に通貨安定政策を決めるべきである」と強調。一月の通貨供給量は目標成長圏を大幅に超えたが、こうした月単位のぶれを過大視すべきではないとしたうえで、ドイツのインフレ危険は小さくなつてきており、連銀は利下げ余地を探り続けていると語った。

さらに、日本の円が東アジアの基軸通貨になる可能性について「欧州と違って東アジアでは市場統合プロセスが見られず、円がドイツ・マルクのような地域の基軸通貨になるかどうかは不透明」と慎重な見方を示した。

インタビューの目的や狙いはさまざまである。世界にはインタビューすることが難しい著名人がいる。インタビューできれば、それ自体が特ダネになる。ジャーナリストはそういうインパクトのある人物とのインタビューに功名心をそえられる。朝日新聞に有名な「伊藤律架空会見」事件がある。レッドパージで地下潜伏中だった日本共産党の伊藤律と単独会見したという記事が一九五〇年九月二七日付夕刊に掲載された。三日後に捏造と判明し、記事を全文取り消した。ジャーナリズム史に残る汚点である。

ドイツ連銀総裁も、世界中のジャーナリストがインタビューしたい一人だった。ユーロや欧州中央銀行が誕生する前、ドイツ連銀は「世界最強の中央銀行」を自負し、ヨーロッパで絶大な力を持っていた。「三〇分の主権」という言葉がある。例えば、ドイツ連銀が利上げすると、ヨーロッパ各国の中央銀行は相次いで追従利上げする。その時間が三〇分というわけである。

ドイツ連銀の歴代総裁の中でも、ティートマイヤー総裁の影響力は大きく、欧州通貨統合がどうなるのか、その発言に注目が集まっていた。私は一九九一年にドイツのボン支局に赴任して以来、すでに一五回、手紙や電話でインタビューを申し込んでいた。毎回、広報部長を通じて「通信社とはインタビューしないことになっており、お申し出には残念ながら応じられません」という返事だった。

帰国寸前の一九九四年三月初め、「駄目でもともと」という気持ちでもう一度申し込んだ。すると、意外にも広報部長が電話で「あなたのインタビューに応じてもいい」と言ってきた。与えられたインタビュー時間は三〇分。この短い時間内にできるだけ多くのことを聞き出さなければならない。質問事項



を入念に準備して臨んだ。

ドイツ語で正確なやり取りをしなければならない。共同通信時代、ゴルバチョフ・ソ連大統領からマハティール・マレーシア首相まで有名、無名の人を含め内外の何千という人にインタビューしてきたが、ドイツ連銀総裁はインタビュー相手として最も緊張した人物だった。総裁室でインタビューが始まると、和やかな雰囲気になり、予定時間を超えて四〇分余りに及んだ。「欧州通貨統合は一九九九年にスタートする」はこの時点では、世界の報道に先駆けた内容だった。

## 5

### 論説——時代精神を読み取る

論説は新聞の「社説」に相当する。先の解説より踏み込んだものである。かなり主張や思想が入る。「一人称の私」を極力排するという点は変わらない。書き手は「社説」の「社」を背負っている。

次の記事は、二一世紀がどうなるかをさまざまな角度から予測した部<sup>ぶ</sup>際<sup>さい</sup>の連載企画第一回記事である。本来は文化部が担当するはずだったが、外国経済デスクの私に急遽、お鉢が回ってきた。グローバルな問題を総括する総論であり、難しい原稿だった。特派員時代の知識や体験を生かしてまとめた。

### 実例13 「共存の世紀——人と地球の二世紀へ」<sup>(5)</sup>

激動の二〇世紀が終わり、挑戦の二一世紀が幕を開けた。地球文明はグローバル化の波に乗り、二〇世紀の常識が通用しない未知のゾーンに突入しつつある。情報技術（ＩＴ）革命によって世界の一体化が加速し、さまざまな可能性が開かれる。その裏側で強者と弱者の二極分化が進み、戦争やテロを誘発する恐れがある。人口増大、環境破壊、資源枯渇といった地球規模の問題も先鋭化する。危機にどう対処し、多元的な地球共生時代を築くのか。地球市民の英知が試されようとしている。

▽開かれた世界

「二〇世紀は人間性尊重と人類共存の世紀になるだろう」。一〇〇年前の一九〇一年一月一日、米シカゴ・トリビューン紙はこんな社説を掲げた。だが、二〇世紀は人類史上最も悲惨な戦争と対立の世紀となった。何千万人という犠牲者を出した二つの世界大戦の後、冷戦時代に入り、世界は米ソを頂点に自由主義陣営と共産主義陣営に分かれて対峙した。

この構図が崩れたのが一九八九年のベルリンの壁崩壊。「閉じられた世界」は「開かれた世界」となり、グローバル化が本格化した。世界地図から共産圏が消えたところに資本主義が陣取り、世界資本主義が実現、あらゆる分野でボーダーレス化が進んだ。

国籍があいまいな世界株式会社、何十億ドルものマネーが瞬時に地球を駆けめぐる金融市場、欧州単一通貨ユーロの誕生——。ＩＴ革命は情報や技術のグローバル化を通じて「一つの地球」へのうねりを増幅する。

ＩＴ革命は戦争の姿も変える。民族浄化に端を発した一九九九年のユーゴスラビアのコンボ紛争は北大西洋条約機構（ＮＡＴＯ）軍を率いて空爆を主導した盟主アメリカにとつて、情報ネットワークと人工衛星を使った遠隔誘導によるハイテク戦争の実戦訓練の場でもあった。それによつて軍事産業に刺激を与える意図もある。



「爆弾を落とすより、華麗に目標を達成できる」(米軍高官)と、コンピュータ網にハッカー攻撃を仕掛けてユー・エス・エス軍を麻痺させるサイバー戦計画も練られた。

先端技術が織りなす「戦争ゲーム」は人権感覚をますます麻痺させ、二一世紀のグローバル社会で戦争が起きたらどうなるかを暗示している。

冷戦幕引きの立役者であるゴルバチョフ元ソ連大統領は「政治よりも経済が先行し、世界を遠くまで引張っていった」と述懐する。地球という惑星を内側から分け隔てていた垣根は取り払われ、二〇〇年ほど続いた国民国家の神話は揺らぎ始めている。

#### ▽リスクとチャンス

世界融合の潮流はチャンスとともにリスクをはらむ。あらゆるものが網の目のように絡み合う世界では「自己完結」はあり得ない。グローバル社会は個々に独立した一戸建てではなく、多くの世帯が連なる長屋である。一力所に危機が生じると、ドミノ倒しのように連鎖する。ユーロ危機はドル危機につながり、アジア経済危機は世界経済危機を招く。

より速く、より広く、より大きく。自由化という名のボーダーレス競争を放置すれば、下克上の世界となり、弱者は弾き出される。地域主義など反グローバルリズムの動きが世界各地で高まっているのはその証左だ。

だが、「強者のイデオロギーとしてのグローバルリズム」(マハティール・マレーシア首相)を否定しても、グローバル化は進む。リスクを回避し、チャンスを生かすしかない。シュミット元西ドイツ首相は「核問題やマフィアの犯罪を含め地球問題が山積する。個人、企業、国家、非政府組織(NGO)とさまざまなレベルで協調し、解決しなければならぬ」と力説する。地球の運命を左右する鍵は多様性の中の統一にある。

#### ▽地球倫理の確立

物理学者アインシュタインは「人類は自分を除く世界のすべてを変えている」と言った。これから問われるのは人類自身の意識変革だ。ゴルバチョフ氏やワイツゼッカー元ドイツ大統領ら世界の有識者でつくる「ブダ

ペストクニフ」のエルビン・リース口会長は言う。

「人類は過去一〇万年間、遺伝子的には変わっていないが、地球における役割はこの一〇年だけでも大きく変わった。世界の結び付きが深まっている今、一人一人がこう自問しなければならぬ。『広大な宇宙を漂う小さな惑星で責任ある生活を送るにはどうあるべきか』と。必要なのは地球市民としての自覚であり、意識の進化である」(『第三ミレニアム』)

頑迷なナシヨナリズムはいつの時代も紛争の温床だった。民族、宗教、価値観の違いを乗り越えて共存するには地球市民的な発想が不可欠だ。無自覚な競争主義や拡大主義に代わる「新しい地球倫理の確立」(ローマ法王ヨハネ・パウロ二世)が急務になる。

地球倫理を支えるのは「自制」である。例えば、六〇億人を超える地球の全住人が先進国並みの生活をしようとすれば、地球二つの資源が必要になる。世界人口は増大の一途。大量生産・大量消費の行く末は目に見えている。自制なくして地球文明は存続し得ない。創造か、破壊か。未来を選び取るのは地球市民一人一人である。

二一世紀の世界を表現するとき、最も困難な点は全体状況の複雑さにある。個人の貧富について言えば、非常に豊かな生活水準にあるのは世界人口の六分の一、富豪はほんのひと握りである。発展途上国でこの四半世紀に所得が急速に伸びたのは人口の三分の一にすぎない。地球の住人の半数は相変わらず、極度の貧困にあえいでいる。

正義、人権、民主主義、戦争と平和といった領域でも、同じような不均衡が続いている。例えば、北



欧は高所得、環境意識、福祉水準、政治や社会の自由がバランスよく調和した地域である。アフリカなど多くの地域は北欧と対照的な状況にある。

世界状況の複雑さは私たちの想像力を超えている。全体状況の一部だけを取り出し、それがすべてであるかのようにミスリードする論者も少なくない。ITハイテク文明にバラ色の未来を読み取る一派もあれば、環境破壊や人口増大で地球は破滅に追い込まれると警告する運命論者もいる。

真実は必ずしも中間地点にあるわけではない。楽観論から悲観論まで振幅が大きいとき、論説に要求されるのは「鮮やかな時代の彫塑力」と「健全なバランス感覚」である。

## 6

### 論文のかなめ

論説からさらに踏み込んで、自説を展開する。独自の視点から思想や世界観を論理的に訴える。それが論文である。論説に必要な「鮮やかな時代の彫塑力」と「健全なバランス感覚」は論文にも不可欠。いくら自説と言っても、事実と反したり、奇をてらったりする内容ではいけない。論文のかなめは説得力にある。

世の中には、いろいろな意見がある。時代に真っ向から挑む論文ほど、賛否両論を呼ぶ。反対論が出るのは仕方がない。むしろ、そういう風当たりを覚悟しなければならない。時には不当な非難にも遭う。

それでも、しっかりした論文であれば必ず、心ある人たちから手ごたえのある反応を得る。論文とはそういう位置にある。

もちろん、純粋な学術論文と新聞・雑誌などの論文とでは、手法が違う。文系と理系とでもスタイルは異なる。例えば、文系は思想の展開に重きを置くのに対し、理系は実験結果に基づく論証が主となる。そういうふう異なるけれども、社会に向かって何か新しいことを訴える文章という点では同じである。

#### 実例14 「アメリカンドリームの危機」<sup>(6)</sup>

ロシア金融危機だと言う。世界経済危機だと言う。だが、これは本質的に「アメリカンドリーム」の構造危機である。東西冷戦で勝利し、壁のない自由市場を実現した米国型資本主義の自己矛盾が先鋭化した結果である。「神の見えざる手」(アダム・スミス)は自由放任政策の末、金融市場の腕力に屈した。循環する不確実性。アメリカンドリームが放った「自由」という刺客が地球規模で暴れ回り、危機を深めているのだ。

▽グローバルキャピタリズム

人種のるつぼと言われる米国は求心力と遠心力との微妙な緊張の上に成り立っている。バラバラになりそうでならない、その統合の頂点に立っているのが大統領である。米国民にとって「強いアメリカ」とは「強い大統領」にほかならない。

大統領を頂点とする共同体をまとめるため、庶民に与えられた餉<sup>きり</sup>がアメリカンドリームである。努力さえすれば、だれでもビジネスで成功し、金持ちになれる。情報通信市場で言えば、マイクロソフトのビル・ゲイツ



会長、金融市場で言えば、ジョージ・ソロス氏あたりが代表格だろう。

ルーツをたどれば、一四九二年のコロンブスのアメリカ大陸発見（「到着」）にさかのぼる。これがきっかけで欧米諸国による世界市場進出が過熱し、米国では原住民が征服されて開拓が進んだ。このフロンティアスピリットがアメリカンドリームへとつながる。戦後、ドル一極体制の構築とともに市場の自由化が進み、米資本は世界へ深く浸透した。

資本はどんどん増殖し、拡大する。最後の壁は共産圏だった。それが冷戦終結で崩れた。ベルリンの壁崩壊とともに「世界の壁」そのものが崩れたのである。

共産主義が世界地図から消え、空白になったところに資本主義が陣取った。今、猛威を振るっているグローバル化とは資本主義のグローバル化、つまりグローバルキャピタリズムである。情報スーパーハイウエーの進展も手伝って、グローバルキャピタリズムは予想を上回るスピードで地球を包み込んだ。

ソ連のベルリン封鎖に対抗して米国が実施したベルリン空輸作戦の五〇周年式典が五月に行われた。クリントン米大統領は「共産圏が恐怖と不安という手段で闘おうとしたのに対し、われわれは友情と確信という手段で対抗した。空輸作戦は自由を望むすべての人間の勝利だった。だが、自由への闘いはまだ終わっていない」と演説、自由世界の一層の拡大を訴えた。

#### ▽市場原理主義

その自由世界の構造矛盾が今、一気に噴き出している。ボーダーレスな世界では局地的な危機がドミノ式に連鎖する。タイに始まった金融危機はインドネシア、韓国、日本へと波及した。その余波で中国を含むアジア全体が動揺。危機はロシアの大地を揺るがし、南米、さらに欧米へと忍び寄っている。ドイツ銀行によると、世界の三分の一以上がすでに景気後退入りしているという。

国民国家時代には国家は郊外の一戸建てだった。それがグローバル化で長屋のようにつながった。資本の圧力で政府管理という防火装置も外された。一カ所に火が放たれると、たちまち長屋全体に燃え広がる。



火を放っているのはソロス氏のような投機テロリストである。

市場の自由とは資本の自由である。資本の自由とは思惑の自由である。思惑の自由とはモラルからの自由である。こうして「攪千金を狙う投機テロ」が実体経済を直撃する。国際通貨基金（IMF）のフィッシャー副専務理事は吐き捨てるように言う。「ソロスさえいなければ、ロシアの市場経済化はうまくいったはずである」。だが、ソロス氏という個人の問題ではない。

グローバル化はソ連が崩壊し、市場経済への道を歩むことによって加速した。それが今度は自陣営に取り込んだロシアのつますきで揺らいでいる。米国流の市場経済を性急に押しつけたのも一因である。ロシアの混乱と危機拡散は米国主導の世界経済体制が根本的な転換を迫られていることを示している。早い話、クリントン大統領の不倫問題で市場が動揺し、ドルが乱高下し、世界経済に影響が及ぶような体制が健全であるはずがない。

ニューヨーク駐在の大手邦銀エコノミストは今春のレポートでこう断じた。「共産主義はとうに敗北し、米国型の市場重視の資本主義が『唯一最良』の制度であることが明らかになった」。共産主義が挫折したから、資本主義は正しかったという論法は短絡的である。「勝ったから正しい」という発想自体がいかにも「市場原理主義」(シモン・ソール『自覚なき文明』) 的だ。

勝つことと正しいことは異なる。勝つか負けるかを最大の価値基準にしているところに、現代の不幸があるように思う。歴史の弁証法というものを認識し、現代社会の深層で何が起きているかを自覚していれば、少なくとも「唯一最良」という言葉は出てこないはずである。

#### ▽ヒューマニズムの欠落

好調な米経済の背後では所得配分の不公平が拡大し、多民族間の対立がエスカレートしてきている。貧困層だけでなく、中流層までが所得の目減りに苦しんでいる。国富の半分近くはひと握りの富裕層の手中にある。アメリカンドリーム<sup>(1)</sup>の足元に死屍累々と横たわる敗残者の群れ。自由化とは強者のイデオロギー<sup>(2)</sup>なのである。



自由主義を信条とする米国型資本主義には不均衡というリスクがつきまとう。自由は競争を促進し、成長を刺激するが、優勝劣敗の原理が先鋭化し、強い者と弱い者、富める者と貧しい者との溝を深める。そうになると、社会や国家のアイデンティティークライシスが高まり、暴動やテロを誘発する恐れがある。英国の哲学者バーランド・ラッセルは言っている。「自由と競争があまりに少なければ沈滞をもたらし、あまりに多ければ混乱を招く」

個々の人間や企業や国家は合理的なことをやっているつもりでも、全体を見渡すと不合理なことになっている。過度な競争はグローバルな均衡を損なうだけでなく、人間同士の内的な結びつきを裁断し、個性や創造性を押しつぶす。現代のアメリカンドリームに欠落しているのは民主主義である。リベリズムだけがあつてヒューマニズムがない。民主主義とは一人一人が他者への責任を負う厳しい社会原理である。

問われているのは「不確実性」と「不均衡」を根本から是正するためのグローバルな協調体制の構築である。弱いものや貧しいものに手を差し延べるような方向にグローバル化の磁力を誘導する必要がある。だれのためでもない。自分自身のためである。グローバル時代に無菌状態の平和や繁栄はあり得ない。自由市場の暴走にいま一番脅威を感じているのは当の米国である。

ソロス氏が一九九八年九月一六日の米議会で証言した。「世界資本主義に崩壊の危機が迫っている」と。

これは典型的な雑誌論文である。事例13の論説「共存の世紀——人と地球の二一世紀へ」と比べ、自身の意見がしっかり組み込まれている。社の意見を代表して述べているのではなく、私の意見や見方を開陳している。それだけ表現がアグレッシブになっている。

ちように、世界の金融経済が危機に陥り、東西冷戦におけるアメリカニズムの独り勝ちの矛盾が表面

化し始めたところだった。この矛盾は二〇〇一年九月十一日の米中枢同時テロで一つの頂点に達する。この論文はそういう時代の危機に警鐘を鳴らすのが狙いだった。今読み返しても、本質はずれていないと思う。

論文の真価は、ある程度時間が経過してから問われるケースが多い。特に社会科学の論文はそうである。論文に限らず、文章というものは後から振り返って恥ずかしくないものを目指さなければならない。文章は永久に残る。旅の恥はかき捨ててはいけない。このことを肝に銘じておく必要がある。

## 7

### 書評——エッセンスを引き出す

インターネットなどをのぞくと、言いたい放題の書評があふれている。単に好き嫌いの低次元のものが多く、何も書評に限ったことではない。自分と意見を異にするものに対しては、粗野な言葉を投げつける。「これを書いた人の心はすさんでいるなあ」とか「随分とエゴイステイックな人だなあ」と思ったりする。

読書感想文は本への印象を通して自分自身の姿が表れる。使う言葉はその人の心のありようを映している。読む人のことを思い、一つ一つの言葉に細心の注意を払う繊細な感性が大切だ。自由に自分の意見を発信することができるネット社会では、特にそうである。



書評には、評者の力量や人間性が表れる。批評するには、対象を完全に咀嚼<sup>そしやく</sup>するだけの能力が前提になる。書評は本を十分に読みこなし、良い点と悪い点を見極めたうえで「こういう点でこの本は読むに値しますよ」と読書へいざなうのが目的である。

批評は「八分褒めて二分けなすのがいい」とも言われる。もちろん、批判するような点がないのに、わざわざあげつらう必要はない。要は、これもバランス感覚である。大きな視野に立って、客観的な評価を心がけなければならない。このような認識から、文系アカデミズムでは最近、書評も研究業績の一つとして数えられるようになった。

書評欄は大きくない。与えられた字数が短ければ短いほど、難しくなる。文章修業にはもってこいのジャンルである。

#### 実例15 『語り継ぐヨーロッパ統合の夢』(C・オ克蘭<sup>(8)</sup>著)

一九九九年の導入後、対ドル、対円で下落し続けたユーロは二〇〇二年の現金流通とともに強含み、第二の世界通貨としての地盤を固め始めた。だが、ユーロの真の意義は金融や経済を超えたところにある。史上例のない壮大な単一通貨は、分断線のない平和な「一つのヨーロッパ」の礎である、と世界史的、文明論的な視点からわが子に語る形式でやさしく説いた好著。

ヨーロッパの歴史は古代ローマ帝国以来、戦争と分断の歴史だった。特に第二次大戦はヨーロッパをずたず

たに切り裂き、勝った国も敗れた国も深く傷ついた。「戦争はもうやめて平和に暮らそう」と誓い合って、戦後スタートしたのがヨーロッパ統合構想だ。

ユーロは二〇世紀ヨーロッパの到達点であり、二一世紀の「新しいヨーロッパ人」のシンボルだという。著者はフランス国営放送の著名な女性ニュースキャスター。

この新刊紹介は知り合いの大学教授から「友人が翻訳出版したので、書評で紹介してほしい」と頼まれて書いた。四〇〇字以内という字数の中で、ヨーロッパ統合の歴史という大きなテーマを扱った同書の内容をコンパクトに紹介するのは、ヨーロッパ統合を専門分野の一つとする私には面白い作業だった。

#### 実例16 「戦争プロパガンタのカラクリを暴く警世の書」『情報戦争』（ナンシー・スノー<sup>(9)</sup>著）

戦争が終わるたびに、われわれは騙<sup>だま</sup>されていたことに気づく。教訓が生かされないのは、戦争を遂行する側の情報操作がより巧妙になっているからである。しかし権力の暴走を監視し、危機を告げる早期警戒システムでなければならぬメディア自身がとも簡単に騙され、戦争プロパガンタのお先棒を担いでしまうのは、一体どういふわけだろうか？

そのカラクリを、本書は第一次大戦以降の数々の事例から克明に暴き出す。国際世論を思うままに操つてきた超大国アメリカの暗部をえぐる筆致は鋭利にして妥協を許さない。権力の狡知とマスコミの怠慢に対する憤りが痛切なまでに迫ってくる。

「ジャーナリストには敵地を歩く自由がある。そのおかげで諜報員はジャーナリストを名乗ることができる。



こうしてプロパガンダは内部から、ニュースに浸透することになる」。一九四五〜七〇年の間にCIAの任務に携わった米ジャーナリストは四〇〇人を超えるという。

第一線で活動する記者にこそ読んでほしい本だが、日々の報道に追われてその余裕さえないところに商業メディアの陥穽<sup>かんせい</sup>がある。グローバルな市場競争が過熱する中、メディアは商業主義を強め、大きな視野に立つて真実を追求しようという志は薄れている。客観報道の「客観」は薄つべらな断片的事実にしり替えられ、面白ければいいというセンセーシヨナリズムが幅をきかせるようになった。まさに「客観主義が怠惰な報道の工口スキューズとなる」のである。

アメリカ政府が無邪気なメディアを共犯関係に引き込み、地球の隅々にまでアメリカニズムの福音を広めることなど造作ない。米中枢同時テロの報復戦争や対イラク戦争で、ブッシュ政権は砲弾とともに地球規模の情報戦争を仕掛けた。それはこの世界をアメリカニズムのための「巨大な広告看板に変えようとする心理ウィルス」をばらまくプロパガンダ戦争だった。

本書はそういう「嘘の装置を解体するための手引き」であり、眠れるメディアの心臓部に一撃を与える警世の書である。

この書評は日本ジャーナリスト会議から依頼され、一二三×六七行という字数制限で書いた。アメリカ政府が戦争の口実を正当化するために、どのようにして国際世論を操作してきたかを暴いた同書は実際、刺激的な内容で、大いに勉強になった。

書評を書くとき、その本を集中して読むため、良い勉強になる。本を読むたびに自分なりの読書感想を書く習慣をつけると、記憶の歩留まり率が高まる。それが血となり肉となる。良い本と取り組むことは、

自分を高めるための知的な自己格闘になる。良書をたくさん読んでいる人は内的な輝きに満ちている。内的な輝きは文章に自ずと表れる。書くことは読むことから始まると言うゆえんである。

## 8

### 誤報とスクープ

二〇〇四年一二月、愛知県内でテロの噂が広まり、市民を動揺させた。クリスマスの日、名古屋駅のツインタワーに、日本国内に潜伏しているアルカイダがテロを仕掛けるというのである。噂は「名古屋駅で中近東系の人から道を尋ねられ、教えようとしたが、言葉が通じない。ついて行ってあげたら、『あなたは親切だから教えてあげる。クリスマスイブのころに、名古屋駅に近づかない方がいい』と言われた」という話が発端だった。

名古屋駅の高層ツインタワーはニューヨークの世界貿易センターと似ていることから、まことしやかに広まった。中日新聞が一二月二二日付の朝刊でこの噂について報じ、「愛知県警は『発信源が分からず、根拠がない』として動揺しないよう呼びかける一方、従来のテロ警戒を続行している」と伝えた。幸い、何も起きなかった。

二〇〇一年九月一日の米中枢同時テロでは、ニューヨークの世界貿易センターに航空機が激突する直前、センターの屋上で記念写真に収まる旅行者の写真がインターネットに広く流れ、騒がせた。合成



かどうか、判断に迷うような写真だった。噂やデマは意図的な場合もあれば、自然発生的な場合もある。人間の深層心理には、ものごとを大袈裟に言ったりゆがめたりして楽しむ習性がある。ゴシップ雑誌などがよく売れるのはこのためである。その習性につけ込んだ意図的なデマも多い。

一九九七年秋のことである。ロンドン外国為替市場の米国系ディーラーがひと儲けしようとたくらみ、ロシアのエリツィン大統領が死んだというデマを流した。エリツィン大統領の容態が取り沙汰されているところだった。デマは世界中を駆けめぐり、あつという間にロンドンへ舞い戻ってきた。「エリツィンの死が公式に確認された」という形に発展して。根も葉もない噂を流したディーラーは「エリツィン大統領はもしかしたら、本当に死んだのではないか」と疑心暗鬼になって躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>し、かえって損をしたという。

フランクフルトに駐在していたころ、市場関係者から聞いた話である。真偽のほどは分からないが、電子ネットワークの発展でボーダーレス化した金融市場では、こうしたことが日常茶飯事のように起きている。情報は光のように地球上を走り抜け、瞬時に何億ドル、何十億ドルというおカネが動く。情報は正しくても間違っている、市場を動かす力を持っている。取引材料になることであれば、何でもよいというのがモラルなき金融市場である。マネーゲームの参加者たちは日々、亡霊のような情報に一喜一憂して世界経済を動揺させている。

二〇〇三年五月に発覚したニューヨーク・タイムズ（発行部数二〇九万部）の捏造事件は世界中のメデ

イア界に波紋を広げ、虚実の危険性をマスメディア社会にあらためて突きつけた。ジェイソン・ブレアという二〇代の記者がでっち上げ記事を何十本も書き続け、英語圏では世界有数の信頼性を誇るニューヨーク・タイムズの紙面を飾っていたのである。

ブレアが電話やインターネットを駆使して捏造したニュース記事は半年以上も、多くの編集責任者のチェックと読者の厳しい目をすり抜け、「真実」として受け入れられた。なかなか破綻を来たさなかつたところに、メディア社会の危うさがある。実際、スキャンダルの発覚後も、捏造記事に取り上げられた人たちは「新聞報道というのは所詮、そんなものだから気にもしなかった」「こんなことがあるはずがないよ、とみんなで笑っていたよ」と他人事のように話していたという。

情報のプロでなくても、人はリアリティーのある虚構を真実のように見せかけて世間に流すことができる。特にバーチャルなネット世界では、時間と空間の壁を超えて自由自在に現実を再現することができる。嘘の情報を本当のように流し、ネット市民に信じ込ませるのはいとも簡単である。実際、そういうケースが最近、急増し、さまざまな被害が報告されている。自分で火をつけて世界へ燃え広がるのを楽しむ愉快犯や知能犯が現れるのは、ネット世界の宿命である。

インターネットをはじめ各種メディアは真実を伝えることもできるが、嘘を広めることもできる。真実か虚構か、確認することが難しいという意味で、グローバルネット社会は文字通り虚実皮膜の世界である。本当らしい嘘ほど、処置に困るものはない。



次の記事は、二〇〇〇年末の米大統領選をめぐる歴史的な誤報事件である。

実例17 「米国を揺るがした誤報騒動」<sup>(10)</sup>

接戦、誤報、判定不能、裁判……と異例づくめの選挙だった。

二〇〇〇年末の米大統領選は、民主党のアル・ゴア候補と共和党のジョージ・W・ブッシュ候補がテレビの広告宣伝などに巨費を投じた史上空前の金権選挙だった。投票日まで大接戦が続き、政策よりも相手候補の人格や資質を攻撃する中傷合戦が繰り広げられた。ふたを開けると、五分と五分の歴史的な接戦となり、超大国の二一世紀の最高指導者がなかなか決まらない異常事態となった。

開票時に大混乱が発生した。出口調査に基づく選挙報道では伝統と実績のある米国の主要メディアが連鎖的に誤報を流したのである。それに引きずられて日本を含む外国のメディアも勝者を誤報する失態を演じた。

CBS、NBC、ABC、フォックス、CNNの米五大テレビネットワークは十一月七日午後八時前、民主党のゴア勝利と相次いで速報した。AP通信と共同で設立した組織VNSが開票速報と集計結果を提供し、各社が同じ情報を基に独自の分析を加味して当確を打ったのである。ところが、同日午後一〇時前になってVNSが突如、ゴアの当確を撤回した。これを受けてテレビ各社もゴアの勝利を取り消し、ブッシュが当選確実になったと伝えた。米国を代表する有力紙ニューヨーク・タイムズも早版で「四三代大統領にブッシュ当選」と報じた。

ドタバタ劇はこれで終わらなかった。開票が進むにつれてゴアが追い上げ、八日未明にフォックスが当確を取り消し、他のメディアも続々と訂正するという迷走を続けた。当確競争の中で勝敗判定を踏みとどまり、誤

報を免れたのは大手メディアではAP通信だけだった。現地の支局から次々に入ってくる実票から両候補の差が縮小していることを重視し、即断を避けたのが功を奏した。

CBSテレビのハイワード社長は米議会向けの書簡で「信頼した情報が間違っていたため、われわれも誤った」と弁明した。ABCは二ニュース番組内で「いくつかの地区で出口調査の精度が低く、票数の入力ミスも重なった」と釈明した。誤報の震源として非難の矢面に立たされたVNSは声明を発表し「予測モデルはこれまでの多くの選挙で有効だった。特定の条件下でなぜうまくいかなかったのか、検証する」と説明した。

メディアの迷走を追走する形で、株式市場や外国為替市場も揺れ続けた。踊らされたのは市場だけではない。各国首脳もブッシュ当確速報を信じ、すぐに祝意を表明した。例えば、フランスのジャック・シラク大統領は「ブッシュ候補の当選を心から喜び、友好関係を発展させるよう努力したい」との声明を発表した。韓国の大統領は「真心からお祝いします」と祝電を送った。当確撤回の報道で、慌てて祝意も撤回した。中国の新華社も「ブッシュ当選」を速報した。その後、記事使用差し止めの連絡を流した。

インターネット時代を反映し、メディア各社のサイトは情報を求める一般からのアクセスが集中し、一斉につながりにくくなった。メディア各社が共同で実施した出口調査の結果が投票終了前からインターネット上に流れるなどの問題も発生した。第四三代大統領は前代未聞の歴史的な政治ドラマとメディアの狂騒曲を生んで、ブッシュに決まった。大統領の威信とメディアの信頼は大きく傷ついた。

記者ならだれでも狙うのがスクープである。スクープの対極にあるのが誤報だ。だれもが避けたいと思っている。誤報は記者の取材不足、思い込み、見込み違いといったものから、発表側の間違いや取材源のミスリード、事態の変化、意図的なでっち上げまでさまざまである。スクープも一歩誤ると、大誤



報に転化する。

ジャーナリズム史はスクープ史であるとともに、誤報の歴史である。

二〇〇四年一〇月末。福岡県出身の香田証生こうだ しょうせいさんがイラク中部でイスラム過激派に拉致された事件で、共同通信社は米軍が発見した遺体を香田さんと断定し「香田さんが殺害された」という記事を流した。日本の政府や与党幹部への取材に基づく「スクープ」だったが、半日で誤報と判明した。指紋などによる確認ができていない段階で、情報の信憑性しんぴやうせいを精査せずに報道したのが原因だった。誤報の影響は大きく、共同通信社の信用を大きく傷つけたとして、編集局長らが更迭された。

小説家・幸田文の随筆に「年寄りのバランスは潰えんつぶとして危うく保つバランスであり、バランスの曲芸である。曲芸は随所に危うくて、いよいよ曲芸である」という言葉がある。「年寄りのバランス」を「記者のスクープ」に置き換えれば、そのまま通用する。

時間との戦いの中で対象の深層に孤独に迫っていくため、思わぬ伏兵が潜んでいることが多い。スクープに限らず、取材には危険な罠わなが待ち受けている。記者なら、大なり小なり、それぞれに苦い思い出がある。過ちを犯したことがないという記者がいたら、それは仕事をしなかった人である。

西洋の格言通り、完全なるは神、人間には不完全さがつきまとう。失敗するというのは「人間的な、あまりに人間的な」(ニーチェ)ことである。失敗や過誤から何かを学ぶことによって、人間もメディアも進歩する。ヘーゲルは『精神現象学』で、「人類は相対的な誤謬を経験せずに絶対的な真理に達する

ことはできない<sup>(11)</sup>」と言っている。

## 9

### 権力とジャーナリズムの危機

ジャーナリストの使命は単に情報やニュースを無機質に伝達することではない。権力と対峙して不正や虚構を暴き、人類の平和と幸福に寄与するところにある。

本当のスクープはジャーナリズムが暴かなければ、永遠に闇の底に埋もれる事実を発掘することである。官公庁の発表前に役人や政治家から聞き出して報道する日本特有の「時間差特ダネ」は二義的なものでしかない。報道や言論の自由としてのリベリズムは、ヒューマニズムと一体になって真価を発揮する。

世紀の変わり目に世界は転換し、グローバルメディア時代が幕を開けた。それは取りも直さず、生き残りをかけた新旧メディアの攻防戦の幕開けだった。攻防の磁場からインターネットがいち早く抜け出し、メディア世界を制覇した。無数の光と影が生み出され、人間や地球社会は大きく変わりつつある。

冷戦終結を合図に、人類は自分の手に負えないパンドラの箱を開けたのである。「人類はIT革命の波に乗って理想郷へ向かっている」「人類は科学技術の力を盲信し、自滅しようとしている」。楽観論から悲観論までの振幅の大きさはメディア社会の変化の激しさを物語っている。ウイルス散布による無差



別攻撃、ネット中毒症や人格障害の蔓延<sup>まんえん</sup>、悪意の連鎖、権力による情報操作。すでに一部ではカオス状況も出現している。進化のプロセスの中で自壊作用が生じているのだ。

不透明な時代を迎え、メディアの使命はますます重要になっている。だが、現実とは逆の方向へ突き進んでいるように見える。冷戦後の一〇年余りの間にジャーナリズムは大きく変貌した。米国型市場経済という名の拝金主義が浸透する中、ジャーナリズム精神は窒息し始めている。権力に迎合したり、戦争をあおったり、社内の派閥争いにうつつを抜かしたり、とマスコミ現場では目を覆いたくなるような事態が進行している。地球社会に対する早期警戒システムとしてのジャーナリズムは、十分に機能していない。

# 実例18 「マスコミ企業の舞台裏」<sup>(12)</sup>

反権力志向のジャーナリストと権力志向の管理職というのは、思想的に相いれない。共同通信の亡き斎藤茂男氏や朝日新聞の本多勝一氏のように、ジャーナリストとして有能な人は管理職レースに食指を動かさない。優れた書き手で経営路線を目指した例は、ほとんどないと言っていい。ここが一般の企業とは違うジャーナリズムの特質である。

管理職レースに勝ち残るかどうかというのは、ジャーナリストとしての能力とはまったく別の関数である。だから、マスコミ業界では「えっ、あの人が局長なの?」「まさか、あの人があんな部署に飛ばされるなん

て」と、だれもがびつくりするような人事が頻繁に起こる。むしろ、だれもが納得するような異動の方が少ないのが実情である。

有能で人望の厚い経済部の先輩がいた。いつも毅然とした立派な人である。だれもが経済部長になるものと信じていた。それを望んでもいた。ふたを開けてみると、思ってもみないような部署へ異動になった。政治部出身の編集局長が「ノー」と言っただけだ。その先輩記者は下には寛容で、上にははつきりものを言う人だった。そういう姿勢が目立つ。器が小さい編集局長の反感を買っていたらしい。

揉み手をしすぎて指紋がなくなったと言われるような人が、ほとんど出世する。社内の微妙な風向きの変化を見ながら、あつちにくつついたり、こつちにくつついたり、と要領のいい人間もいる。見ている方が恥ずかしくなるほどだが、そういう人間が上層部に気に入られるのはマスコミも一般企業も変わらない。

フランスの作家バルザックは一九世紀半ばに「もし編集長が自分にとつて欠かせぬはずの有能な人間に嫉妬するようになると、まずたいていの場合、自分のまわりを、凡庸な部下たちで固めるようになる。この種の人間はどれもお世辞が上手で、安上りに新聞を作ってくれるからである。いつの時代もパリで一番出来の良い新聞がこうして潰されていく」(『ジャーナリズム性悪説』)と指摘している。

いつの時代も、人事の私物化によって、メディアの公正さと活力は失われていく。メディアの発展を支える情報技術は進化し続けているのに、人事面ではむしろ後退しているのではないかと思えるほどである。

部益に基づく人事もまかり通る。例えば、政治部がいったん社内での権力を握ると、政治部出身者を重要なポストに配置する。政治権力の中核部で仕事をしてきた政治部記者は、ことのほか派閥人事が好きである。共同通信社では最近、四代続いて政治部出身者が編集局長になった。記者として何をしてきた人なのか、社内でもほとんど知られていない人たちが。派閥力学が生んだ人事である。

派閥は足を引っ張るという行為のゆがんだ形である。派閥に入っている人たちは「互いの足を引っ張らないようにしよう」という暗黙の了解に立っている。これは「自分たちの利益を共有し、守るため、派閥外の人た



ちの足は引つ張る」というシグナルにほかならない。

上へ行けば行くほど、派閥に属していなければ、昇進は難しくなる。個人の能力よりも、派閥の力学が優先する。その結果、派閥争いが熾烈になり、足の引つ張り合いが過熱して本来の仕事は二の次になるという悪循環を生む。派閥の力関係は絶えず揺れ動くため、仕事や生き方への腰も定まらなくなる。

こうした環境の中では、どんなに高い志を持つ記者もつぶされてしまう。「良識」が「非常識」に抗しようとして排除された例を数多く見てきた。それでも「良識」が声を上げているときはいい。派閥による恐怖政治が敷かれ、もの言えぬ社会になるのはメディアの自殺行為にほかならない。当然のように、社内で警鐘を鳴らす者はいない。いても、その声は大きくなならない。他のメディアでも事情は同じだ。共同通信はまだいい方だと思う。もつとひどい企業は多い。独裁型の社長が会社そのものをほとんど私物化しているメディアさえある。本来、反権力の姿勢を貫き、独立不羈であるべきジャーナリストが年とともに、派閥に入ったり、派閥を作ったりする。その分水嶺が大体、四〇代である。ペンで生きることが放棄し、社内の権力を求めて派閥にしがみつく。その愚かしさに気づかない。派閥に群れるジャーナリストが権力や社会の不正をまっとうに監視できないはずがない。

共同通信は『編集綱領』の冒頭で「共同通信社は、世界の平和と民主主義の確立および人類の幸福を念願して、ニユース活動を行う」と高らかにうたっている。他のメディアも同じような編集方針を掲げている。こういう高い使命を担っているメディアが社内の派閥力学で動いてはならないのだ。

人事は直接、間接にニユースの編集に影響する。読者の手に届くニユースの裏側では、このような泥臭い権力闘争が繰り広げられている。

情報のダムに埋没して、表現者としての自立的思惟を失う。グローバル社会の核心をえぐり出す努力を放棄し、売れる情報だけを右から左へ流す。権力や巨悪と対峙して真実を伝えようとする独立不羈の精神は形骸化する。これではもはやジャーナリストではなく、情報ブローカーである。思想なきメッセンジャーボーイと言つてもいい。

ジャーナリズムの理想は、グローバルな情報洪水に押し流されようとしている。理想を失ったものが滅びる運命にあるのは、歴史が証明している。このままだと、メディアの中核を成すジャーナリズムが死滅する日はそう遠くないかもしれない。ジャーナリズムが健全に機能しているかどうかは、民主主義の存亡に関わる問題である。

核兵器は言うに及ばず、人類は自滅できるだけの力を自らのうちに獲得した。

過去幾多にもわたる世代の中で、私たちは今、この惑星に生存するすべての生命の運命を決めるよう迫られている。平和と協調のグローバル社会へ到達するための枠組みを創り出し、地球上における生命と精神の壮大な歩みを続けるのか。それとも、地球上における人類史の終焉への道を用意するのか。私たちが直面している挑戦は、私たち自身の運命を選び取る挑戦である。

グローバルな命題を考えると、メディアの問題は避けて通れない。メディアのゆくえは地球社会のゆくえを暗示している。地球メディア社会では、六三億人の声が良くも悪くもグローバルに響き合う。パーソナルなものがすぐにマスメディア化するところに、二一世紀メディア社会の光と影がある。光が



強ければ強いほど、影は濃くなる。影を切って光を生かすことがメディアユーザーとしての地球市民の使命である。

注

- (1) 山本武信『ベントの興亡』東洋経済新報社、一九九八年、一八八～二二三頁
- (2) 山本武信「共同通信社・全国加盟紙配信記事」一九九八年一月一七日
- (3) 山本武信「共同通信社・全国加盟紙配信記事」一九九八年八月一七日
- (4) 山本武信「共同通信社・全国加盟紙配信記事」一九九四年三月一九日
- (5) 山本武信「共同通信社・全国加盟紙配信記事」二〇〇一年一月三日
- (6) 山本武信『Kyodo Weekly』共同通信社、一九九八年一〇月五日号
- (7) Saul, R. John. *Der Markt frisst seine Kinder*, Campus Verlag, 1997: p. 27
- (8) 山本武信『Kyodo Weekly』共同通信社、二〇〇三年一月二七日号
- (9) 山本武信『ジャーナリスト』日本ジャーナリスト会議、二〇〇五年一月二六日号
- (10) 山本武信『IT革命とメディア』共同通信社、二〇〇一年、二〇二～二〇三頁
- (11) Hegel, Georg W. Fr. *Phänomenologie des Geistes*, SUHRKAMP, 2001: pp. 234-250
- (12) 山本武信『地球メディア社会——進化と自壊の構図』リベルタ出版、二〇〇四年、一五四～一五六頁
- (13) バルザック『ジャーナリズム性悪説』ちくま文庫、鹿島茂訳、一九九七年、三二一～三三三頁





## 第5章

## 生きる力と言葉のダイナミズム

## 1 『星の王子さま』と言葉の力

心の書と呼べるような本に出会えた人は、幸せである。

いつまでも心をとらえてはなさない書物はイマジネーションの鉱床であり、自分の生き方を広げてくれる翼のようなものだ。小さな本の中に夢が詰まっている。

そういう本は何か、と問われたら、私はまず、サン・テグジュペリの作品を挙げる。『星の王子さま』や『人間の土地』は読むほどに深さが見えてくる。時を置いて読み返すたびに、新しい発見があり、生きるヒントが見つかる。鉱脈の中でキラリと輝く宝石のような言葉が、道行く路傍にさりげなく置かれている。

素朴だが、重い言葉が思想の地平を切り開き、生きる力を鼓舞してくれる。人間、平穏無事的时候はいい。だが、人生というのは炎のときもあれば、灰のときもある。むしろ、非常こそが人生の常である。非常の際に役立つのは短い言葉だ。いざというとき、支えになるのは物語の筋より、胸底に響く深い言葉である。じっくり温めてきた一つの短い言葉を呪文のように念じることで、傾きかけていた人生が好転する。

人生は一句である。一句が人生を支える。



炎のように燃える言葉が生意志をかき立て、海のように深い言葉が悲しみを癒す。気にも留めなかった平凡な言葉が人生のある局面で突然、命を帯びてくることもある。自分の人生経験がその言葉の高みにまで達して「ああ、そうだったのか」と得心することもある。言葉によって、生き方そのものが深まるのである。

言葉は力である。パワーのある言葉は自分の中に浸透し、重要でないものを取り除いて重要なものだけを引き出してくれる。それがエネルギーとなり、生命の炎を燃え上がらせる。名言は自分が気づかないところで大きな働きをなす。無意識の層に作用し、ゆっくり発酵する。無心になると、夢の実現に協力してくれる無意識の力が現れる。

こうした言葉をどれだけ自分の血とし、肉としているかで人生は決まる面がある。例えば、困難にぶつかったとき、『人間の土地』の「他人がやりとげたことは自分にも必ずできるはずだ」という言葉を噛みしめると、困難に立ち向かう勇気が湧いてくる。多くの仕事や雑用に押しつぶされそうなとき、『星の王子さま』の「大きなバオバブも、はじめは小さかったんだよ」という言葉を念じると、コツコツ一つずつこなししていくしかないという覚悟ができる。

サン・テグジュペリの思想と生き方を縦糸に現代文明について考察した『星の王子さまからの警鐘』の「あとがき」に、私は次のように記した。

実例19 「星の王子さまと私」<sup>(1)</sup>

サン＝テグジュペリは切りつめた簡潔な言葉によつて、言葉の向こうにあるメッセージを伝えようとした。友情、存在、空間、永遠の今。メッセージは言葉の壁を越え、欧州、米州、アジア、アフリカ、中東、さらに太平洋や大西洋に浮かぶ小島へと風のように渡っていきました。崇高な精神の風です。

この風のおかげでどれほど多くの人が慰められ、勇気づけられたことでしょう。私が『星の王子さま』と出会ったのは大学時代です。フランス語の授業のテキストとして使われたのがきっかけでした。『星の王子さま』はフランス人なら小学三、四年生くらいで十分理解できる美しい模範的なフランス語です。名優ジェラル・フィリップが吹き込んだカセットテープはバックミュージックも良く、流れるようなフランス語に魅了されました。

新渡戸稻造の門弟、天野貞祐は「ゲーテを読むだけでもドイツ語を学ぶ値打ちはある。なお一歩進めて言えば、わたしたちが人生に絶望しても古典のあることを思い、それを味読する幸福を思うならば、それだけでも人生は生きるに値打ちする」と記しています。『星の王子さま』や『人間の土地』により近づくためにフランス語を学んでも無駄にはならないでしょう。

近年、実用語学ということが盛んに言われますが、無用の用としての語学、つまり形而上学としての語学があつてもいいのではないかと思ひます。どこかの国に一日でも滞在するとその国が身近になるように、外国語も少しでもかじると、不思議なほどに、作家や作品との心理的距離が縮まります。

『星の王子さま』は通算すると何度読んだか分かりません。でも、本当の深さが分かったのは社会経験を積んでからです。ハイデッカーが『星の王子さま』を二〇世紀における最も優れた実存哲学書の一つと位置づけていたと知り、なるほどとうなずいたのも最近のことです。



人生のさまざまな局面で『星の王子さま』の言葉やシーンが重なり、多くの啓示を受けました。とりわけ善き人との出会いのありがたさというものを痛感しました。

四〇路の半ばに差ししかつて、気がつく『ファウスト』『エチカ』『臨濟録』などとともに取り替えのきかない座右の書になっていました。座右の書とはひとくと必ず自分の根つこに返り、広い世界へ解き放たれるきつかけが与えられるという意味です。座右の書は心を潤す水であり、視界が悪くなつたときに遠くまで見渡せる展望台のようなものです。

サン＝テグジュペリの言葉は砂漠の泉です。何気ない言葉にはつとめるほど深い思想が織り込まれています。メタファーの世界からどんなシグナルを読み取り、どうイメージを広げていくか。『星の王子さま』を読む楽しみの一つはそこにあります。

外国の書籍や映画を日本の土壤に移植するとき、題名が決定的な意味を持ちます。名訳のおかげで大成功を収めた例は枚挙にいとまがありません。映画で言う『ペペル・モ』は『望郷』、『ウォーター橋』は『哀愁』、『フーストリー』は『ある愛の詩』となつて日本人のセンチメンタリズムをかき立てました。

『Le Petit Prince』の直訳は『小さな王子』です。英語やドイツ語をはじめ世界各国で出ている訳本も『小さな王子』となつています。これを『星の王子さま』という日本語に翻案し、定着させたのは内藤濯氏の功績です。作品に内在する意味を拾い上げた名訳です。

半面、いかにもメルヘン的な題名ゆえに、知識人や「大人」を遠ざけている面もあるのではないかという気もします。題名が触発するイメージが鮮やかすぎるのです。原題通り、中性的なタイトルだったら、日本での受け止め方はどう違っていたか？ 興味あるところです。

サン＝テグジュペリは現在の私とほぼ同じ年齢で逝きました。四〇代は体力や記憶力が落ちる代わりに二〇代、三〇代に蓄積したものが発酵し、いろいろなことがよりよく見えてくる年代のようです。サン＝テグジュペリが今生きていたら、何を考え、何を書いていただろうか。彼の関心はやはり人間と文明の未来に向かった

のではないかと思います。そういう視点から人間の来し方、行く末を考えようとしたのが小著です。

『星の王子さま』のファンのみなさんはこれまでとは違った視点から読み直し、まだお読みになっていない方は新たに読み始めるきっかけになれば幸いです。

『星の王子さま』を推奨したハイデッガーは「言葉は存在の住み家である」（『存在と時間』）と言った。鎌倉時代の仏師、運慶が普通の木から金剛力士像を彫り出したように、存在から真実をえぐり出した言葉が魂を揺さぶる。読書の楽しみの一つはそういう言葉を発見することだ。一冊の書物の中で魂を揺さぶられるような一句に出会うことができれば、それだけで十分に読んだ価値はある。

思想や物語の文脈から切り離された名言集を読むのも悪くはないが、自らの魂を揺るがし、励ます力とはなりにくい。鬱蒼とした言葉の森の中で出会った自分のための言葉を、自分の人生の中で時間をかけて温めていくことが大切だ。

記憶するのではなく、咀嚼<sup>そしやく</sup>し、消化する。『星の王子さま』の思想の核をなす有名な言葉がある。「あんたが、あんたのバラの花をととても大切に思っているのはね、その花のために、ひまつぶしたからだよ」。時間をかけて取り組んだものには、自ずと愛着が湧く。愛着が湧いたものは、自分にとって大切なものとなる。

記憶とは不思議なものである。すっかり忘れていたものがあるとき、ふとよみがえってくる。意識の



表面で消え去ったように見えても、魂の奥底にしつかり刻み込まれている。辞典やノートに当たる前におぼろげな記憶の森に分け入ると、必要な情報やヒントが思いがけず見つかる。受験勉強のように無理して覚えたものより、じっくり時間をかけて慣れ親しみ、いったん忘れた後に自然によみがえってくるものが本当の力になる。

心は明るい言葉や力強い前向きな言葉を聞きたがっている。

そういう前向きな言葉が時間を経て心身の奥底で輝き出すと、いつしか運勢も変わり始める。ポジティブ思考とはそういうものだ。年齢を重ね、生命力が衰えるようになるにつれ、このようにして温めてきた一つの言葉が生きる力を支える土台となる。血肉化し、内に力がこもった一つの言葉のおかげで命を投げ出さずにすむことさえある。

苦しいときの神頼みという。これも実はこうした深層心理のメカニズムを言ったものである。例えば、浄土門の南無阿弥陀仏。六字の名号は一切の無駄を省いた最も簡素な救いの言葉である。生身の人間が救われる道は一つしかない。自分を捨てて、六字にすべてを任せる。六字の名号の中に実存が丸ごとすくい取られる構造になっている。

大地を裸足で踏みしめ、旅を布教の場とした一遍は「南無阿弥陀仏と唱える以外に何もない。声高らかに唱えれば、この世が浄土である。宇宙すべてのものが仏と一体になり、念仏を唱えている」と説いて多くの民を救った。人々は歓喜のあまり踊り出した。名号が人々の生命の中で発酵し、名号そのもの

が踊り出したのだ。

一遍は死に際し、持っていた書籍をすべて焼き捨てて言った。「一代の聖教皆尽きて、南無阿弥陀仏になりはてぬ<sup>(3)</sup>」。もはや仏の教えもない。あるのは六字名号の世界のみ。一遍にとって、旅は自分を捨てる旅だった。自分を放下<sup>ほうげ</sup>する歩みの中に、風のように軽やかな宇宙のリズムがあった。一遍の存在そのものが文字を超えて「後世への最大の贈り物」となった。

## 2

### 生命のリズムと思想のリズム

言葉のリズムは思想のリズムである。思想のリズムは生命のリズムである。生命のリズムは生き方が奏でるメロディーである。

深い言葉、深い思想は深い生き方から生まれる。一句が力を発揮するのは、そういうふうに骨太な思想を内に秘めていればこそだ。永遠の短句は深い思想の森から発酵する。偉大な思想には、そうした短句が無限に詰まっている。サン・テグジュペリの思想の大地は、豊かな言葉の内側に奥深い哲学を包み込んで豊饒<sup>ほうじょう</sup>だ。

唯物論が説くように、第一義的には物質が精神や思考を規定する。と同時に、精神や思考は物質に反作用する。思考は言語である。言語が思考を規定し、人間を創る。極論すれば、ある人がどういう人で



あるかは、その人がどういう言葉を心の言葉にしているかで分かる。文は人なりというのは結局、そういうことである。

何ごとに対しても「やれる」と前向きな人と、「駄目だ」と後ろ向きな人とは生涯において大変な差が生じる。「死にそうになっても、ひとりでも友だちがいるのは、いいものだよ」(『星の王子さま』)と思っている人と、「人間は人間に対して狼である」(トーマス・ホッブス『リバイアサン』)と考えている人とは自ずと生き方が違ってくる。

同じように「なぜ憎みあうのか? ほくらは同じ地球によって運ばれる連帯責任者だ」(『人間の土地』)という融和の思想が優位に立つか、「文明の衝突は不可避だ」(サミュエル・ハンチントン『文明の衝突』<sup>(4)</sup>)とする他者攻撃型のイデオロギーが支配的かによって時代の様相は変わってくる。

人間の業の深さには、りつぜん 慄然とするものがある。それを乗り越え、良い生き方をするには良い言葉、良い思想を持つほかない。理想を失うとき、人間は駄目になり、文明は腐敗する。理想を持つことで人間は進歩し、社会は良くなる。こうあるべきだという高邁な理想やビジョンは人間が動物一般ではなく、まさしく人間であるための存在根拠なのである。

単に現実的であることが大人であることとすれば、これこそ『星の王子さま』が警鐘を鳴らすものである。

## 理想を持ち続けることの意味

理想を放棄し、現実の中に埋没するとき、人の心は老いる。「大人」の現実主義には歴史観がないのと同様、未来へのビジョンがない。目先の利益だけが問題になる。足元の現実には方向感を失って薄っぺらになる。

歴史は現在であり、現在は未来である。太古に地球上のあちこちの水辺で発生した生命体の呼吸は、現在の私たちの呼吸に息づいている。私たちの現在の呼吸は、未来の人類の呼吸へと連綿とつながっていく。

サン＝テグジュペリは『城砦』でこう言っている。「未来を築くというのは、現在を築くということである。今大切な要求を未来へ投げかけることである。今ここにあるものが未来へ歩み出す<sup>(5)</sup>」

未来を拓くのは現在の理想である。現在の理想を支えるのは歴史への視野である。歴史観に支えられた現在が未来を照らし、未来の展望が現在を規定する。人間としての理想を持ち続ける意味はここにある。

理想と現実との距離を埋めようとするのは、人間の意志である。遠大な目標をやり遂げようとする意志がある限り、人の心はいつまでも若い。心が若いと、肉体も相応に若くなる。サン＝テグジュペリが



説くように、精神の風が人間を創る。

夢を追っているとき、人の心は傷つかない。一瞬一瞬が永遠との邂逅だ。

夢や理想は心の乾きを癒す砂漠の泉である。夢を持ち続けることが生きる糧になる。

九六歳まで東洋思想の海外啓蒙に尽くした禅学者・鈴木大拙も、九八歳まで平和運動に携わった哲学者バートランド・ラッセルも「いつも未来のことを考えている」が口癖だった。高邁な目標が前向きに生きようとする力を引き出したのである。

永遠なるもののためではなく、自分自身の人生のためにだけ生きている人に何も期待してはいけない。<sup>(6)</sup>

〔城砦〕

優れた古典を糧にして、めくるめくような明日を問い返す。書物の世界を通じて、心を万古に解き放つ。文学は一度きりの人生で、別の人生を体験させてくれる。過去の遺産は現在に息づき、現在は未来へ静かに歩み出す。そこにこそ古典を読み継ぐ意義はある。サン・テグジュペリの作品群はそうした良質な思想山脈の一つの頂点である。

星の王子さまの目線に立って人間や世界を見つめ直せば、精神の若返りにも役立つ。本を読むとはつ

まるところ、自分を読むことである。本を読みながら、その本に自分を書き込んでいく。自分を投げ込んで読めば、一冊の書物が人生を変える力になり得る。どんな天才や巨人にも弱点や限界はある。大切なのはその著者が今生きていたら、どう考え、どう行動するだろうかという創造的な読書姿勢だ。

理論はちと自分で苦勞して、人生を知るがよいのだ。<sup>(7)</sup>

## （二人間の土地）

と、サン・テグジュペリは言っている。言葉や思想は自ら生きてみて、初めて真実となる。文章を書くことは、真実となった思想を自分自身の言葉でつづることにほかならない。書くことに、そして書いたものの中に、自分自身の本当の姿が存在する。苦勞して知った人生の理論が本当の文章である。

心を込めて文章を書くことは、大きく言えば、自分が獲得した理想を地球上に共生する人類へ、そして未来の人類へ伝えていくことである。グローバルネット時代の今、大切なのは人と人の心をつなぐ炎のメッセージである。人の心に炎をともしようなメッセージが地球社会の未来を支える糧となる。

このような視点に立つて、一冊の本を書くことができれば、表現者として本望というものだろう。短い記事やルポを日々の生業とする大手マスコミの記者も、本を書けるようになって初めて一人前のジャーナリストと言える。事実、多くの記者がいつか本を書く日が来ることを夢見ている。が、なかなか



実現しない。次章からは、表現者の最終到達点である本を書くための思想と技法について述べたい。

注

- (1) 山本武信『星の王子さまからの警鐘』共同通信社、二〇〇〇年、二八一―二八三頁
- (2) 天野貞祐『ドイツ語とドイツ文化』第三書房、一九五〇年
- (3) 『二遍上人語録』岩波文庫、大橋俊雄校注、一九八五年、一三七頁
- (4) Huntington, Samuel P. *The Clash of Civilizations? Council on Foreign Relations*, 1994
- (5) アントワーム・ド・サン＝テグジュペリ『城砦』みすず書房、山崎庸一郎訳、一九八五年、一三八―二三九頁
- (6) 前同、二五一頁
- (7) アントワーム・ド・サン＝テグジュペリ『人間の土地』新潮文庫、堀口大學訳、一九五五年、一七八―一七九頁





## 第6章

本を書くということ

——情熱のかたち

スイス南西部。フランスとの国境に三日月型をしたレマン湖がある。別名ジュネーブ湖。湖畔にはローザンヌ、ジュネーブ、モントルー、エヴィアンなど保養都市が多い。

南向きのスイス領は北向きのフランス領より日当たりがいい。雪をいただくアルプスの絶景もスイス側からしか楽しめない。スイスの住民は「ああ、こちら側で良かった」と言う。

第一次世界大戦末期の一九一八年夏。レマン湖畔にあるヴィルヌーヴというスイスの小さな村での出来事である。裸の男がいかだを漕いでいるのを村の漁師を見つけ、救出する。村人たちが集まってきた何者だろうかと遠巻きに見守る。男は子どものような笑顔を浮かべ、ぼつりと言った。ロシーヤ。だが、村人には通じない。男は絶望的な表情をして押し黙った。

気の毒に思った村人が衣服や食べ物を与えるが、うつむいたまま。騒ぎを聞きつけた村の官吏があれこれ質問しても、ロシーヤ、ロシーヤと繰り返すだけ。代わってやってきたホテル支配人がドイツ語、イタリア語、英語、そして最後にロシア語で話しかけると、男の表情は急に明るくなり、問わず語り身の上話を始めた。

男の名はボリス。最初はロシア国内で戦っていたが、ある日、訳も分からないまま、数千人の兵士と



ともに列車に詰め込まれ、フランス戦線に送り込まれた。そこで足を撃たれて負傷。部隊から脱走し、故国の家族の元へ逃げ帰ろうとする途中だった。

村人たちは「フランスのモントルーの官憲に引き渡すべきだ」「いや、脱走兵に罪はない。状況が落ち着くまでかくまってやるべきだ」ともめた。結局、人の良いホテル支配人がしばらく預かることになった。

数日して支配人が、

「何をお望みかね？」

と氣遣うと、ボリスは声を絞り出すようにして言った。

「私は家へ帰れるのでしょうか。それだけが知りたいのです」

「きつと、帰れるさ、ボリス」

「明日にも？」

「今は無理だ。戦争が終わるまでは」

「いつ戦争は終わるんですか」

「それは神しか知らない。われわれ人間には分からない」

「もっと早く帰れないんですか」

「だめだ、ボリス」

「どれくらいですか。何日も先ですか」

「ずっと先だ」

「旦那、私は行きます。私は元気です。弱ってはいません」

「それはできないよ。国境というものがあるんだ」

「国境？ でも、ツアー（皇帝）が……」

「ツアーはもう退位したんだよ」

「えっ？ 退位した？ 家に戻らないと。子どもたちが待っているんです。どうか、助けてください」

「ボリス、私にはできないんだ。今はだれも君を助けてあげられないんだ」

「ありがとうございます」

ボリスは頭を下げ、ゆっくり道を下りていった。ボリスが水死体で発見されたのはその翌朝だった。

偶然にも、最初に救出した漁師の網にまた引っかかったのだった。村人は遺体を墓に葬り、その上に粗末な木で作った十字架を建てた。

国際的ヒューマニストとして知られるオーストリアの作家シュテファン・ツヴァイクの『レマン湖のエピソード<sup>(1)</sup>』だ。物語は「ボリスの墓にあるような無名の十字架は今、ヨーロッパ全域を覆っている十字架だ」という言葉で終わっている。ヨーロッパを覆う十字架は地球を覆う十字架でもある。二〇世紀



中に戦争の犠牲になった人は、世界で八〇〇〇万人に達する。

原典で八頁のこの短編は、国家が引き起こす戦争がいかにむごく、空しいかを静かな筆で伝えて感銘深い。学生時代に中級ドイツ語の読み物として出会って以来、もう何度読んだか分からない。読み返すたびに、胸を締めつけられる。生涯に何度も読み返したくなるような珠玉の作品に出会うのは、幸運なことである。そういう作品は例外なく人間と世界の真実をえぐり出し、生きることの意味を鋭く突きつけている。時代の変遷によって磨<sup>す</sup>り減らないメッセージが込められている。

書くことはメッセージを伝えることである。メッセージの中で最も気高いのは、人々に生きる希望と勇気を与えるものだろう。心はネガティブなことよりも、ポジティブなことを聞きたがっている。人間は大空と大地の間で生き、そして死す運命にあるからである。

フィクションであれ、ノンフィクションであれ、生きる希望と勇気につながるようなメッセージが優れた作品のテーマになる。そういうテーマを発掘することから、表現者の作業はスタートする。テーマが多面的な広がりや重層的な厚みを持つとき、それは一冊の本になる。本は質とともに、量がものを言う。

## 2

### 有限性と永遠性というテーマ

夜空の星のように輝く名作群の中で、生と死の断層を美しく描き取った短編は何か、と問われたら、私は『星の王子さま』とともにオー・ヘンリーの『最後の<sup>(2)</sup>一葉』を思い浮かべる。蔦<sup>つた</sup>の葉に託して描いた、傷ついた生の再生物語である。

一〇頁前後のこの掌<sup>しょう</sup>編<sup>へん</sup>は、命の有限性と永遠性というテーマを静かな筆致で描いて感銘深い。見事なのは結末である。そこにいたるまでの伏線が最後に炎のように燃え上がる。推理小説以上に素晴らしいプロットに「ああ、これが掌編の醍醐味なんだ」という感を深くする。あらすじを紹介すると、

ニューヨーク・マンハッタンにある三階建ての芸術家村。若い絵描きのジョンジーは重い肺炎にかかって寝込む。医者はジョンジーの親友スーに言う。

「助かる見込みは一〇に一つといったところです。その見込みも、あの娘が生きたいと思う気持ちにかかっています。何か心を惹きつけてやまないようなものがあの娘の中にあれば、いいのです  
が」

ジョンジーは心配そうに窓の外を見ながら、何かを数えている。一二、一一、一〇、九、八……。



「ねえ、何を数えてるの？」

と、スーが尋ねると、ジョンジーはささやくように言う。

「葉よ。蔦のつるの葉よ。最後の一葉が落ちたら、私も行かなきゃならないんだわ。すべての執着を捨てて、あの哀れな疲れ切った蔦の葉のように落ちて行きたいの」

遠い神秘的な旅路に出る決心をした魂ほど、孤独なものはない。彼女を友情や大地に結びつけている絆が一つ一つほどけてゆくにつれ、死への空想がますます強く彼女の心をとらえてゆくようだった。彼女たちの下の階に、ベアマンという老人が住んでいる。六〇を超えた芸術の落伍者だった。穴蔵のような部屋の片隅には二五年間、絵筆が入るのを待ち続けているまつさらのキャンヴァスがあった。ベアマン老人はスーからジョンジーの話聞いて、思わず叫ぶ。

「何だって？ <sup>いまいま</sup>忌々しい蔦の葉が落ちると自分も死ぬだと！ そんな馬鹿なことを言うやつがどこの世界にいるんだ。ああ、かわいそうなジョンジー。ここはジョンジーのような善良な娘が病で伏せるところじゃない。いつか、わしが傑作を描くから。そうしたら、みんなでここを出ていこう。本当だぞ」

雪まじりの冷たい雨がひっきりなしに降った。だが、最後の一葉は落ちずに残っている。次の日も北風が吹き、雨が窓をたたいた。窓を開けると、蔦の葉はまだある。ジョンジーは危機を脱し、生気を取り戻す。

「私がどんなに悪い子だったかを諭すために、何かの力があの最後の一片をあそこに残しておいてくれたんだわ。死にたいと思うのは罪なんだわ」

その日、ベアマン老人は死んだ。スーは元気になったジョンジーに打ち明ける。

「ちょっと話したいことがあるの。ベアマンさんがね、今日、病院で肺炎で亡くなったの。患ったのは二日だけだったわ。一日目の朝、管理人さんが下の部屋で苦しがつているのを見つけたんですって。靴も服もぐつしより濡れていて、氷みたいになつていたそうよ。あんなひどい晩に一体、どこへ行つてたのか、見当もつかなかったらしいの。そしたら、まだ灯のついたカンテラと、いつもの場所から引きずってきた梯子はしごと、散らばった数本の絵筆とパレットが見つかったの。ねえ、窓から、あの壁の上の最後の蕙の葉を見てごらんさい。風が吹いても、ひらひら動かないでしょ？ 変だと思わなかった？ ねえ、ジョンジー、あれがベアマンさんの傑作なのよ。最後の一片が散つた夜、ベアマンさんがあれを描いたのよ」

文字の向こうから色鮮やかな絵が見え、エンヤの透明なBGMが聴こえてくるようである。いわゆる起承転結の「結」、舞楽や能楽で言う序破急の「急」がこれほど鮮やかな作品も珍しい。

一つまた一つと落ちてゆく蕙の葉は、この地上に存在する命のはかなさを暗示している。その命を、風や雨が揺さぶる。于武陵うぶりやうの漢詩にあるように、花発ひらけば、風雨多しである。ベアマンさんは持てる



力を振り絞って、本物そっくりの蔦の葉をキャンヴァスに描いた。自分の命を吹き込むように、生き生きと。生涯最高の傑作だった。

ジョンジーは絵を本物と思って、生命力を回復した。落ちた葉はベアマンさんの命である。残った絵の葉はベアマンさんの心である。ベアマンさんは自分の命と引き替えに、若いジョンジーの命を救った。そのことによって、挫折した自分の人生を最後に燃え上がらせ、「永遠」というキャンヴァスにとどめた。最後の一葉は「有限性」の象徴であり、描かれた絵は「永遠性」の象徴である。ベアマンさんの最後の創作は、有限性と永遠性との谷間に橋を架ける試みだった。読み返すたびに感動するのは、ベアマンさんの命を賭した行為が人間という存在の崇高さを思い起こさせるからだ。

ブルース・リーのカンフー映画を見て映画館を出ると、カンフーの真似をしている人が必ず何人かいた。作品に感情移入しているうちに、作品のヒーローが見る側の中に炎のように灯るのだ。本も同じである。読み手の心に「自分もこんな人になりたい」「自分もこんな経験がしたい」という炎を灯す作品は不滅の生命力を獲得したと言える。

オー・ヘンリーはこの一作だけでも、人類の記憶に刻まれたに違いない。蔦の葉の絵と同様、創作によって限りある命が永遠へとつながったのである。明るい心の炎を他の人の心に灯していく営みほど、崇高なものはない。どんなに細々としたものであっても、その炎が世代から世代へ伝わり、だれかの心に灯り続けているというのは素晴らしいことだ。

この世は生きるに値するという炎のメッセージ。そのメッセージを伝えていくことによって、永遠の懷に抱かれていく。書くことによって自分も他者も救われる。本を書く真の意義はここにある。本の心は人々の心に感応し、ずっと残るのである。

### 3

#### 根源的な問いと主題の提示

『最後の一片』には掌編ながら、フィクション、ノンフィクションを問わず、ストーリーを書くうえで共通する大切な要素がそろっている。主なものを箇条書きにしてみると、次のようになる。

- ①主題⇨テーマの提示↓「生と死」
- ②ストーリーのための素材↓「絵と葉」
- ③読者を引き込む展開↓「わくわくする」
- ④結末の意外性↓「鮮やかな解決」
- ⑤感動。読者を元気づける↓「生きる意味の確認」
- ⑥再読可能↓「結論を知っても読み直したくなる」



この中で最も大切なのが「①主題＝テーマの提示」である。これがなくては、本というものは成り立たない。テーマは本を貫く縦糸である。本の題名とは必ずしも合致しないが、深く絡み合っている。文学作品ほど、シンボリックな題名になる。『最後の一葉 (The Last Leaf)』はテーマを見事に凝縮して成功している。これ以外のタイトルはあり得ないのではないかと思うほどびったりしている。

①の成否に応じて、②以下は自然に展開する。

テーマとは、書き手が今、最も重要と考える問題である。ここに問題が潜んでいますよ、と読者に訴えたいことである。読者と広く共有したい問題である。なぜ書くのかという根源的な問いがテーマにこもっている。テーマによって大体、読者層の範囲が決まる。読者の立場に立って考えると分かるように、読者は自分の関心に沿って本を手にする。関心のないものにはなかなか手を出さない。

「人の興味を引こうと思えば、まず自分が本当に興味を感じることが必要だ」という英国の政治家ジョン・モーリの言葉は、本を書く際の基本である。ラテン語の格言にも「人を泣かせる前に自分が泣かなければならない」とある。

知らない世界に気づかせてくれるのが本である。これは書き手自身が「知らない世界」を体験していることが前提になる。世間が知らない世界をどれだけ深く、広く経験したかによって、本の内容は深くもなり、浅くもなる。思索や想像力もちろん重要だが、最後にものを言うのは体験の有無である。創作に不可欠なインスピレーションも、体験的世界の奥底から噴き出してくる。インスピレーションとは

要するに、対象との自己格闘から期せずして生じるスパークである。

体験が書き手の情熱を高める。その情熱が読者に伝わって感動や共感を生む。机上の勉強や想像だけで書いたものは、どんなに論理的に精緻であつても、砂上の楼閣のようなところがある。例えば、釣りをしたことのない人が書いた釣りの本は実用に耐えない。ジャーナリズムの世界を体験したことのない学者が文献だけに頼つて書いたジャーナリズム論は、どうしてもピント外れになってしまう。「経済学者が一番経済を知らない」という風説も、あながち誇張ではないだろう。

体験という足場がないと、こういうものだろうという推測にならざるを得ない。その推測を土台にして論理を組み立てると、現実離れしたおかしなものになってしまう。実際、そういうものが少なくない。文章は正直である。二〇万語前後の世界ともなれば、自ずと体験の深さと限界が自分にも他人にも見えてくる。該当する分野の体験者には、その本の著者が現実とどれほど深く関わってきたかが読み取れる。特に体験しなければ分らない世界はそうである。例えば、禅。多くの人が禅について書いているが、この領域は坐禅の体験の深さがものを言う。坐禅体験のない人が書いている禅の本はどんなに文章が巧みであつても、底が見えてしまう。読者が知りたがっているのは推測の世界ではなく、その人が実際に体験した世界である。

ルポルタージュやノンフィクションは体験的世界の最たるものである。国際関係論や国際経済論といった社会科学分野でも、現場体験の深さが決定的な意味を持つ。学者が書いたものでも、資料や第二次



情報だけに頼らず、自ら現場を歩き、取材している人の本は当然、生き生きしている。

ジャーナリズムとアカデミズムの違いは何か。現象から距離を置き、より大きな流れの中に本質をとらえようとするのが政治学、歴史学、経済学などの社会科学である。ジャーナリズムは一つ一つの現象を現場に立って克明に記録する。考古学や人類学のようにフィールドワークの学問もあるが、現場に身を置いて現場の出来事を肌で感じ取り、対象を印象的に浮かび上がらせるのがジャーナリズムである。

もちろん、現象と本質は分かれていない。現象の奥に本質があり、本質は現象として姿を見せる。一体である。したがって、ジャーナリズムには本質を目指す社会科学的な視座が不可欠であり、社会科学には現象に密着するジャーナリスト的な精神が不可欠である。両者がうまく噛み合ったときに、世界像はより鮮明になる。

理論は現実の中に投じられて真実になる。

現場の息吹を知らない傍観的な社会科学は、空理に終わる恐れがある。<sup>(3)</sup>同じように、グローバルな社会認識と歴史認識に鍛えられていないジャーナリズムは「面白くさえあればいい」というセンサーショナリズムに陥る危険性が高い。一般論として言えば、体験に基づき、現在性を彫塑しながら、時間的な「歴史性」と空間的な「普遍性」を獲得した書物こそが優れたノンフィクションだろう。

本を書く技術というのは、ひと言で言えば、自分が体験した独自の世界をどのような形で読者に伝えるかという問題に尽きる。自分はこういう世界で、このように生きてきましたというメッセージの表現形態が本にはかならない。メッセージが骨格をなし、結晶する。ポール・エリュアールというフランス現代の詩人に、

年を取る それは自分の青春を

歲月の中で組織することだ<sup>(4)</sup>

(「とだえざる詩Ⅱ」)

という含蓄のある詩句がある。これにならって言えば、

本を書く それは自分の体験を

言葉の中で組織することだ



体験が伴わない美辞麗句は空しい。独自の体験的世界さえあれば、表現が稚拙であっても、素晴らしい本になる可能性がある。形式よりも内容である。百聞は一見に如かず、と言うように、体験より強いものはない。

多作の作家によく見られるように、晩年の成熟期の作品よりも初期の作品の方が生き生きとして面白いことが多い。体験という内容が表現という形式を上回っているからである。内からあふれるものが作品の命になっている。成熟期の表現力は若いころより、向上する。しかし、それに見合うだけの体験と勢いがなければ、良い作品にはならない。

一〇の材料が必要な作品を書くのに、初期のころは一〇〇も二〇〇も材料を持っている。それがだんだん減ってきて、一〇を書くのに七とか八の材料しかなくなる。足りない分は技術や知名度で補う。それが多作家の摂理ではないかと思う。

私たち凡人には気の遠くなるほど多くの名作を残した故松本清張も、初期のものが圧倒的に面白い。後期の作品はどこかパワーに欠ける。清張文学の精髓と言える執念や怨念が希薄なのだ。

本ではないが、山田洋次監督の映画『男はつらいよ』シリーズもそうだ。喜劇としての傑作は初期に集まっている。巨匠とか権威とか呼ばれるようになって、つまらなくなるのはどの分野も同様である。自分の中のものを出し切るからなのだろうか。芸が「枯れる」という言葉は「涸れる」に通じる。

もちろん、晩年に良質の作品を次々に生み出す大器晩成型の人もある。オー・ヘンリーはその一人で

ある。オー・ヘンリーはスランプの克服法について、こう語っている。「三カ月もの間、一行も書けないことが、しばしばある。強いて書こうとせず、町へ出てぶらつくことにしている。町へ出て、群衆の中へ入って行き、実人生の鼓動と迫力を、じかに肌で感じ取る。物語作家にとって、これ以上の刺激剤はないと思う」

「体験」↓「テーマ」↓「表現」が一番自然な流れである。逆の流れはどうしても無理が生じる。作家がスランプに陥るのは、体験と表現のバランスが崩れる場合が多い。あふれる体験の世界を表現という網でかぶせようとするときの方が、勢いのある良い作品ができる。表現力と想像力で体験の枯渇をカバーしようとする、勢いがそがれる。

新しい非日常的体験をすることによって、新しいテーマが生まれる。人生の非常事態がそのまま、本のテーマになる。非日常的体験をするために、わざわざホームレスになったりする作家もいるほどである。絶えず変わったものを見てみたいというのは、もの書きの習性だろう。

このように、体験とテーマは密接に結びついている。だから、たとえ高度な専門書であっても、体験に基づいているものであれば、読者の心に響いてくる。もっとも、この場合の読者層は限定されたものになる。良書であるかどうかにかかわらず、専門性が高くなるほど、読者の範囲が限られるのは仕方がない。

欧米のアカデミズムでは、専門の研究書でも血の通ったものが少なくなく、読ませるものが多い。社



会や現場とのつながりを考えているからだろう。この点、日本のアカデミズムはもともと欧米を見習うべきだろう。

研究書などにも「③読者を引き込む展開」と「⑤感動。読者を元気づける」は必要な要素だと思う。歴史に残る古典をひもとくと分かるが、どれも心を揺さぶるような言葉の森である。深い体験からほとばしり出た思想は、表現力も豊かだ。体験を言葉の中で組織するとき、抑えようとして抑え切れないものが個性となる。

## 5

### 沈黙の深さと死生観

言葉よりも深いのは沈黙だ。沈黙の深さは存在の深さである。オー・ヘンリーやサン・テグジュペリの作品に共通する魅力は、沈黙の深さでもある。

のどがかわいても、死ぬ思いをしても、そんなことは、どうでもよいことでした。ひとりの王子さまを、一つの星といっても、ぼくの地球の上で、なんとかしてなくさめなければならなかったのです。ぼくは、王子さまをすっかりだいて、しずかにゆすりながら「あんたの好きな花、だいじょうぶだよ……」と、いいはしましたが、なんといいか、わかりませんでした。……涙の国って、

ほんとうにふしぎなところですね。<sup>(5)</sup>

(『星の王子さま』)

愛するとは案じることである。『最後の一葉』のジョンジーや星の王子さまのように大切な人が、どうしようもない苦しみや悲しみの中にいるとき、何をしてあげられるのか。あるいは、自分が死んだとき、後に残った家族や友だちはどうなるのか。わが身の無力を悟り、何かに祈りたい気持ちになる。東の人も、西の人もそっと手を合わせる。どうか、大切な人たちの行く末に幸せな未来が待っていますように、と。

手を合わせるといのは、自我による抵抗をやめることである。無限なるものに自分を委ねることである。自分が消え、言葉が消え、沈黙が生まれる。涙の国は限りある者同士が心を通じ合い、いたわり合う沈黙の国である。『星の王子さま』の中心テーマである「心でしか見えない大切なもの」は沈黙の中で見えてくる。

空間から空間へとめどなく湧き起こっては消えるおしゃべりをやめる。立ち止まって、何が本当に大切なものを振り返る。大切なもののために立ち止まり、考えることを一時停止する。沈黙は自分を深く見つめることである。

現実はどうだろうか。グローバル化が進む現代社会はひどくおしゃべりである。立ち止まることを許



さない。二四時間体制でモノやサービスを生産し、消費する。テレビ番組も二四時間絶え間なく流れる。インターネット時代を迎え、雑多な情報が洪水のように地球上を駆けめぐる。茶の間のパソコンを開けば、世界中の情報がリアルタイムで飛び込んでくる。モノ、カネ、人、サービスとあらゆるものが目まぐるしく動き続け、止まることがない。

こうして昼と夜の区別が判然としなくなり、夜明けとともに一日が始まり、夕暮れとともに一日が終わる自然のサイクルは崩れ去った。昼と夜の区別がはつきりしないというのは、沈黙と騒音の区別がはつきりしないということである。沈黙は、騒音が途切れるところに生まれる。騒音が連続する世界に、沈黙は存在しない。

優れた音楽は沈黙の底から奏でられる。

秀でた俳句は静寂の極みからふつと生まれる。

各種メディアからとめどなく情報が流れたり、歌詞が聞き取れないような騒々しいハイテンポの流行歌が増えているのは、地球文明のスピード化と通じている。スピード化の結果、生と死の境目もはつきりしなくなった。休止という概念を排除した地球規模の二四時間生産体制は、死について考えることを許さない拡大再生産システムだ。光を灯し続け、音を流し続けることによって、死の暗闇を生存空間から追い出してしまった。人間の欲望をかき立てては満たし、満たしては肥大化させるために。夜を日に継ぐ人工的な光の世界は絶え間なく欲望を増産する。

現代人は、資本による欲望のリーダー操作の中に置かれている。どういうことかと言えば、例えば、次々と新たな商品を消費者の鼻先に突きつけ、「これを買わないと時代から取り残される」と迫る。ほとんど押し売りだ。今で言えば、情報通信の世界がそうだ。新商品の登場は欲望をあおる。欲望が膨らむと、商品開発のサイクルも速まる。こうした欲望の自転車操業が真の進歩であるかのような錯覚が浸透している。

現代の資本主義は拡大主義という磁場の中に巻き込まれ、出口を見失っている。政府も企業もエコノミストも、経済拡大こそが絶対善であると信じて疑わない。近ごろの経営者が口にすることと言えば、スピードと効率である。巨大な大量消費社会の中で文明の行方が危うくなっていることに気づかないでいる。

どこかおかしいという素朴な疑念も、拡大の歯車の中で押しつぶされてしまう。拡大の歯車を止める、競争に負け、何もかも失う。社会全体がそういう強迫観念に駆られている。重大なのは、ブレーキ機能がどこにも存在しないという事実である。だから、モルモットのようにひたすら拡大への無限軌道を走り続けるしかない。たくさん持っていて、足りないと思う。自制心がなく、歯止めがきかない。モノに固執し続ける限り、心から満ち足りるということはない。足りない足りない、もつともつと無意識に合唱しているうちに、本当に大切なものは見失われてしまう。



人間っていうやつあ、いるところが氣にすることなんて、ありやしないよ。

子どもたちだけが、なにがほしいか、わかってるんだね。<sup>(6)</sup>

(『星の王子さま』)

生きていくうえで本当に必要なものとは何かという問題は、死とは何かという問題である。どう生きるかはどう死ぬかである。どう死ぬかを考えないと、生はおろそかになる。生きることは死へ向かうことである。禅の「平常心是れ道」は、死を内側に溶かし込んだ死生観だ。

死はだれのもとにも確実にやってくるのに、死に対する現代人の意識は欲望の拡大再生産メカニズムの中で薄れている。死に対する理解が欠如すると、生の尊厳に対する自覚が薄れる。モノとカネが支配する多弁な世界が、人々から健全な死生観を奪っている。死を生活空間から排除するなど、人類史上ほとんどなかったと言つてよい。日米欧の先進国では本土での戦争がなくなったことや医療技術が発達したことも一因だが、根はもつと深い。

目の奥に「体内時計」という機能がある。太陽の光に応じて、体が自然と反応する太古からの遺産である。日中は一生懸命働き、夜になれば、音と光を消して安らかに眠る。この日々のサイクルの中に、実は生と死の意味を体得する場があった。昼生きて、夜死ぬ。一日はその日で完結する。だから、今日の苦しみは今日で終わる。そこに救いがある。

その体内時計が、目まぐるしい現代社会の中で損なわれてしまった。

一日一生や一期一会は、自然のリズムの中ではごく自然な生き方だった。「昨日の発句は今日の辞世、今日の発句は明日の辞世、われ生涯、言い捨てし句々一句として辞世ならざるはなし」とは芭蕉の辞世である。静があるから、動が際立つ。死があるから、生が生き生きする。大切なのは緩急自在だ。「古池や蛙飛び込む水の音」という芭蕉の句は、一瞬の音の中に静寂を写し取って名句である。

無の音。今この一瞬に永遠が息づいている。仏陀の瞳のような静寂が支配すると、光と音に踊らされていた欲望は鎮まる。モノの世界から解放され、数字では測れない心の世界に戻ることができる。厚化粧の文明に汚されていないものが見えてくる。目を閉じないと、見えない世界がある。心でしか見えない世界は、ささやくような静けさの中で浮かび上がる。

オー・ヘンリーやサン・テグジュペリの言葉が高い緊張度を持っているのも、沈黙の深みから発せられているからである。永遠性と有限性との張りつめた緊張感が物語を天空の高みに押し上げる。「生と死」という不朽のテーマがそこに息づいている。

## 6

### 創作の原動力

オー・ヘンリーは一八六二年、ノースカロライナ州で医者の子として生まれた。『森の生活』で知ら



れる思想家ヘンリー・D・ソローが息を引き取った年である。新興国のアメリカが世界の舞台へ台頭し始める草創期だった。

超大国として世界権力の頂点を極めた現在の姿と違って、当時のアメリカはハングリー精神に満ち、未来への希望にあふれていた。新しいものにチャレンジしようという機運が世界のどこの国よりも強かった。才覚と努力次第で、だれでも成功できる。「自由競争」と「一攫千金の夢」がアメリカンドリームである。

その裏返しとして不安もあった。自由が催す実存のめまいである。オー・ヘンリーはアメリカンドリームの陰に転がる小さな人生を拾い上げて、温かな人間の心を短編に写し取った。それが時代や国境を越えて読者の心をとらえ続けるのは、小説技法というテクニクの底に波乱の人生体験が息づいているからである。

オー・ヘンリーは若いころから文筆へのあこがれを持っていた。機知に富み、文章がうまかった。二代前半に小品を書いて稿料を稼いでいる。画才もあった。だが、作家として身を立てるまでには、多くの試練を乗り越えなくてはならなかった。

オー・ヘンリーは三二歳のとき、ファースト・ナショナル銀行の出納係のかたわら、安い価格で売りに出された新聞社を買い取り、経営に乗り出す。しかし無理が重なり、一年で廃刊に追い込まれる。お金に困り、親戚や友人から借金したり、賭博に手を出したりした。そういうときに連邦銀行調査局によ

る調査がファースト・ナショナル銀行に入り、収支の不足が発覚する。オー・ヘンリーが真つ先に疑われた。

オー・ヘンリーは告発された後、いったん釈放される。しかし再度告発されて逮捕され、五年の実刑判決が下る。無実だったという説もあるが、借金を返すために銀行のお金を立て替えのつもりで流用したというのが定説になっている。刑務所の生活はオー・ヘンリーの人生観を変えるほどに過酷だった。

「ここでは人間は魂も感情もない動物と見なされている」

「自殺がピクニックのようにありふれたものとなっている」

「人間の生命がこれほど安っぽく考えられているとは想像もしなかった」

逮捕、投獄という生涯の汚点をばねに、オー・ヘンリーは本格的な作家として再出発した。入獄の前に愛妻アソルを病気で失ったことも、創作に没頭するきっかけになった。書くことで悲しみを克服したのである。彼の傑作はほとんど、晩年のこの時期に生まれた。残った作品は約二八〇編、いずれも独特のペーソスにあふれている。

「人生は『むせび泣き』と『すすり泣き』と『ほほえみ』から成り立っている。中でも『すすり泣き』が最も多くを占めている」という『賢者の贈りもの』の言葉は、オー・ヘンリーの人生体験からにじみ出たものである。

人生を代償にして、数々の珠玉の掌編が生まれる。これは特殊なケースではなく、多くの作家に共通



する姿である。人間は過ちを犯し、後悔し、自分を切り刻むからこそ、人間的なのだ。卑小であるがゆえに、それを克服しようとする意志において偉大になり得る。その見本のような人間がオー・ヘンリーだった。

## 7

### 意外性の発掘

小説をどういうふうを書くのか、と聞かれて、オー・ヘンリーはこう答えている。「いつも書き出す前に、できるだけ物語の筋を頭の中で組み立てておく。そして、いっぺんペンをとり始めると、一気に<sup>か</sup>成に書き上げて編集者に渡す。読み直したり推敲したりすることは、ほとんどない」

オー・ヘンリーの場合はいずれも短編だから、テーマが定まると、構想に沿って一気に書き上げることもできた。しかし、通常、できあがったときの本の姿かたちが、著者の頭の中で最初から描かれるということはまずないと言っている。思考の中にあらかじめ、まとまった知識や情報の集積が本の形で存在するわけではない。

もちろん、著者は書き始める前にこういうものを書くように考える。しかし、どんなに綿密に構想を練っても、二〇〇―三〇〇頁もの内容を具体的に思い浮かべることが不可能である。それが専門性の高いものになれば、なおさらである。

例えば、一枚のキャンヴァスに描く画なら、完成したときの構図をそっくりイメージすることができ。だが、本はほんやりとしかイメージできない。本は無数の言葉から成っている。一つのセンテンスを書いて次のセンテンスが浮かんでくる。そのセンテンスの論理に沿って次のセンテンス……というふうに、無限の積み重ねである。

書いているときにふとある文句を思いつくと、その後の論理の展開が大きく変わることもある。完成したときには、予想もしなかった形になることも珍しくない。『最後の一葉』のように計算し尽くされた意外性もあるが、著者自身にとっての意外性がそのまま読む側の意外性になることも多い。「巧まざる意外性」とでも言ったらいいだろうか。人は書きながら、未知の鉅脈にぶち当たり、アイデアを発掘する。書くとは、自分の内にある意外なものを掘り起こす作業にほかならない。

本の執筆は大洋への航海のようなものである。目的の港に向けて船出してみると、嵐に遭ったり、進路に迷ったり、時には海賊船に遭遇したりもする。テーマが大きければ大きいほど、構想が野心的であればあるほど、航海は波乱に満ちたものになる。創作にはそういうリスクが無数に横たわっている。当初想定していた目的の港が途中で変更される場合もある。だからこそ、挑戦のしがいもある。

構想に沿って書き始めたものの、どうにもならない袋小路に追いつめられることがある。論理矛盾を来したり、それ以上先へ進めなくなる。自分の能力に懷疑になる。ところが、追いつめられ、極限状況に達したときに、良いアイデアがふっと浮かぶことが多い。本という膨大な量の原稿を書いている以



上、壁にぶつかるのは避けられない。その壁から逃げず、ぶつかっていくと、ブレークスルーが起こる。書かないと、どこに壁があるのか、分らない。書くことによって自分の無知を悟る。ソクラテスの言う「無知の知」である。書くことは人知れず、汗をかき、恥をかくことである。書くことによって、人は自分の知性や感性を磨くことができる。そういう試練が自分自身を高め、本の価値を高める。

何かを創造することを通じて自分自身を創造する。未知なるものに挑むことによって、自分自身の中にある未知の領域が切り開かれていく。書きながら、何かを発見する。それはわくわくするような冒険である。

今、あるテーマの本を仕上げたとする。同じテーマの本を一年後、あるいは二年後に書いたら、同じものになるだろうか。きっと違うものになるはずである。ここに創作の一回性がある。先の勢いと深く関わっている。これは人間の生命や精神が絶えず変化する中にあることと関係している。自分自身が日々変わっているから、テーマやその展開の仕方も微妙に変わってくる。

創作は生き物である。固定していない。絶えず変化している。何カ月にもわたって連日、同じ劇を演じる舞台俳優や同じ<sup>はなし</sup>噺をする落語家でさえ、一回一回の出来は微妙に異なる。一回一回が勝負である。およそ創作や創造活動というものは、反復や模倣がきかないところに醍醐味がある。

だれでも経験することだが、過去に書いた自分の著作を読み返して「今の自分にはこれは書けない」と感心したりすることがある。もちろん「今の自分だったら、こう書く」と反省することもあるが、そ

のときにしか書けないものがある。本を書く営みにおいては、タイミングが非常に重要なことが分かる。バッターボックスに立つ。ピッチャーが投げたボールが猛スピードで目の前を通り過ぎ、キャッチャーミットに収まる。ボールをいつ打つか。打つタイミングによってホームランになることもあれば、内野ゴロになることもある。バットを振らなければ、ボールは当たらないし、遠くへも飛ばない。ものを書くことにも、そういうところがある。

本は書くうちに、最初にイメージした形とはどんどん違ったものになっていく。主題や目指している到達点にそれほど異同はないが、そこへいたる具体的な表現や構成は実際に書いてみて初めて、自分自身にも明らかになる。

本当の書物は冒険のように驚きに満ち、人間や世界への眼を開かせてくれる。これは読者のみならず、著者自身の体験でもある。書くことは未知なるものへの冒険である。知っていることを書くかと思っていれば、知らず知らずのうちに、自分でも想像しなかった未知の世界へ導かれていく。巧まざる意外性と呼ぶゆえんである。ここに本を書く面白さがある。

## 8

### 構想と持続力

書いているうちに本の世界が独り立ちし、書き手を運んでいく。そういう感じがしてくる。それが勢



いである。勢いに乗ると、書くことが面白くて仕方がなくなる。寝る時間も惜しくなる。そうなれば、半ば成功したも同然。創造的なとき、人は後ろを振り向かない。横をきよるきよる見ない。まっすぐ前を見て走る。とにかく勢いに任せて最後まで走り抜くことである。きめの粗さは完走してから、整えればいい。

本に必要な分量を書きこなすだけの知力と体力を引き出し、活性化するのが勢いである。

エッセーや小論文が短距離走だとすれば、本はマラソンである。マラソンは完走しなければ、意味がない。最初の五キロ地点か一〇キロ地点までトップで走っても、途中で棄権すれば、入賞できない。遅くとも速くとも、とにかく最後まで走り抜くことが大前提だ。本も同じ。文章がうまくてもへたでも、とにかく二〇〇〜三〇〇頁の分量を書きこなすことが大前提になる。小手先の文章術では、どうにもならない。

逆に、必要な分量をこなす体力と意欲がある人は有望だ。ここでは質より量が先に立つ。本を何冊も書くにつれ、このことを痛感する。情熱を持ち続け、最後までギブアップしない人が成功する。

最上の財産は自分自身の中にある。経験と思考を正しく用いることによって、自分自身から最良のものを引き出し、言葉のピラミッドを建設する。人間は自分で努力して得た結果の分だけ幸福になる。

本づくりは挑戦するに値するライフワークである。本は完成したのを見るから、「こんな量はとて」と腰が引けてしまう。どんな本も最初は一行から始まる。千里の道も一歩からである。一行書いた

ら、次の一行を書く。それを毎日継続することによって項ができ、節ができ、章ができ、そして本ができあがる。どんな文豪も、どんな手練<sup>てれん</sup>の作家も、事情は同じ。本を書くのに要領や技術はあっても、近道はない。とにかく書き始めるしかない。

本の執筆は自分自身との孤独なレースである。テーマを決め、全体の骨格が固まるまでが大変だ。あてもない、こうでもない、と多くの時間を構想に費やす。とにかく走り出し、ペースをつかむまでが勝負である。

構想が固まってきたら、まず「はじめに」と「目次」を作る。「はじめに」と「目次」は航海で言えば、目的地を示す海図であり、羅針盤である。この二つができあがると、楽になる。もちろん、走っているうちに、内容がどんどん変わる。その都度、書き換えればいい。

短い文章でも、長い文章でも、書き出しのリード部分ができれば、半分以上できたも同じと言われる。経験則から言っても、確かにそうである。出発点が到達点の姿を左右する。それだけ難しい。

次の文章は一九九八年一月に出版した『ベントの興亡』（東洋経済新報社）の「はじめに」と「目次」である。同書は拙著の中で最も短期間に仕上げた本で、「はじめに」は最初の段階でびたっと決まった。「目次」の構成は書いていく中でどんどん変わっていった。



実例20 「ベンツの興亡」<sup>(8)</sup>

【はじめに】

二〇世紀は人類がはるか遠くまで駆け抜けた世紀だった。戦争と革命が大きな影を落としたこの一〇〇年の間に、生活様式や社会システムを変えるような画期的な発明が相次いだ。しかし、自動車ほど、二〇世紀の人類を魅了したものはない。

自動車は人間社会の隅々にまで浸透し、大きな影響を及ぼした。

「時間と空間」のパラダイムが転換し、新たな次元の世界が出現した。二〇世紀はクルマを抜きにして語れない。世界の大企業上位一〇社のうち四社が自動車メーカーである事実はクルマがいかに深く社会に根づいているかを物語っている。

「馬なし馬車」と呼ばれたこの「走る夢空間」に先鞭をつけたのは一九世紀の二大自動車メーカーだったベンツ社とダイムラー・エンジン社である。両社が合併して誕生したダイムラー・ベンツは卓越した感性和技術力によつて数々の名車を生み出し、高級車メーカーとして世界市場で不動の地位を築いた。

ダイムラー・ベンツは二〇世紀という激しい時代の振幅とともに発展した。ベンツはメード・イン・ジャーマニーの頂点に君臨する。ベンツというブランドは国民の精神構造に深く根つき、政治や社会を動かす力さえ持っている。ダイムラー・ベンツがおかしくなり始めたのは一九九〇年代に入ってからである。

ロイター前社長が一九八〇年代後半に推進した多角化路線が挫折、九五年には大赤字を出して創立以来の危機に見舞われた。経営立て直しのため、シュレンプ新体制が発足、ロイター氏は追放された。シュレンプ社長は徹底的にリストラを進め、前社長の遺産を手荒く清算した。リストラが奏功し、九六年には黒字に転換した。

復活したダイムラーは九七年、伝統の高級車一辺倒から大衆車路線へとハンドルを切った。しかし、社運をかけて投入したミニベンツ「Aクラス」と超小型車スマートはエルヒテストという試験走行で相次いで横転、発売延期に追い込まれた。

ベンツ大衆革命はつまずき、一〇〇年に及ぶ名声は著しく傷ついた。

シュレンプ社長は起死回生策を練った。世界をあつと言わせたのはそれから半年後の九八年五月である。米クライスラーとの合併方針を発表したのだ。製造業では史上最大の合併。売上高でトヨタ自動車を抜き、米ゼネラル・モーターズ（GM）とフォード・モーターに次ぐ世界三位の巨人企業となる。世界の自動車業界は度肝を抜かれた。

新社名は「ダイムラー・クライスラー」。そこに栄光ある「ベンツ」の名前はなかった。

なぜ、米クライスラーと合併したのか？

なぜ、「ベンツ」は社名から消える運命となったのか？

これらを解くカギは世界史の転換をもたらした戦後最大の歴史的イベントにある。経営危機、大衆革命、巨人合併……。ダイムラー波乱の一〇〇年は現代の底流を映している。ダイムラー栄光と挫折の一〇〇年は動乱の二〇世紀と重なっている。

本書の主眼はダイムラーの企業ドラマを縦糸に世界の時代模様を浮き彫りにすることにある。したがって、ベンツ車の礼賛ではない。描こうとしているのはメルセデス・ベンツのフロントガラスから見つめた時代風景であり、時代風景の中で強烈な光芒を放つ巨人企業の実像である。そして、この巨人が到達した時代山脈の頂きから見える二一世紀の地平線は……

## 【目次】



はじめに

第1章 ベンツが消えた

1 ベンツ一族の憤激

2 ドイツの「影の政権」

3 フランド信仰

4 永遠のメード・イン・ジャーマニー

5 ベンツ神話の光芒

6 二〇世紀の遺物に

第2章 栄光と挫折の一〇〇年

1 ゆらめく夢空間

2 ベンツが神話になった瞬間

3 美しい国のメルセデス伝説

4 陸へ、海へ、空へ

5 技術文明の影——第一次大戦の試練

6 ヒトラーのベンツ

7 狂気と没落への道

第3章 野望の死角

1 不死鳥のように

2 夢の跡から……

3 輝く世界フランド

4 ロイター社長の危険な野望

5 誤算の構造

6 クーデター狂騒曲

7 非情のランボー登場

#### 第4章 ベンツが転んだ

1 ストックホルムからの一撃

2 ベンツ大衆革命

3 一〇〇年の名声に傷

4 なぜ、戦略車は転んだのか？

5 VW・GM戦争に飛び火

6 墜ちた偶像

7 バルセロナ——復活への助走

#### 第5章 世界の壁が崩れた

1 ダймラー狙う赤軍派が解散

2 ベルリンの壁崩壊が世界を変えた

3 巨人の美学——Big is beautiful

4 情報スーパーハイウエーの猛威

5 「世界規格」戦争

6 ユーロ革命の衝撃

7 ドル神話の終焉

8 野望を携えて米国へ……

#### 第6章 巨人合併の内幕



1 晴天の霹靂

2 秘密交渉

3 世界株式会社の誕生

4 危機のアシアを狙え

5 中国・巨人市場の鼓動

【タイムラークライスラー略史】

第7章 世界自動車ウオーズ

1 ロールスロイス買収戦争

2 自動車業界のナポレオン

3 BMWの逆襲

4 全力疾走の名門ボルシェ

5 パンドラの箱を開けたのは……

第8章 地球の未来のために

1 闇世界からの足音

2 グローバル化の落とし穴

3 だれが地球を守るのか？

4 終わりに——自足と共生の思想

あとがき

私の場合は大体、「はじめに」と「目次」ができ「第1章」が終わったところから、スムーズに進み、徐々に加速する。最初のうちは一日一頁程度がやっとだったのが、四頁、五頁、六頁と加速し、多い日には一〇頁を超えるようになる。これまでの最高は一日一五頁、四〇〇字詰め原稿用紙で約三〇枚だった。

この段階になると、もう夢中になって寝食を忘れるような状態になる。ランナーズ・ハイと呼ばれるものと同じだろう。人にもよるが、私の場合、途中でこれでいいのだろうかと思ったり、よろけたりすることはあまりない。最後の関門はゴール直前の「推敲」である。全体を締めくくるための大事な作業だ。

この一連の執筆作業は何カ月も続くロングランである。マラソンランナーが走り抜くこと自体に無上の喜びを感じるように、自分の構想にしたがって一つの作品を仕上げることは、何ものにも替えられない喜びである。一度、この味を占めると、病みつきになる。一冊書くと、書き足らなかったものを新たに書く。さらに次の著作へと挑みたくなる。途中で何度、休憩しようと構わない。汗だくなり、へとへとなっても構わない。ゴールにたどり着きさえすればいいのである。このことを理解し、早速パソコンに向かう人は、本が書ける人である。



## 9

### 本を書くための必要条件

一人の男が海辺に座り、素手で魚を捕ろうとしていた。そこへ放浪者が通りかかり、男の背を軽くたたいて言った。

「ねえ、君、網の編み方を教えてあげろよ。そうすれば、もっと素早く、たくさん魚が捕れるよ」

男は魚を捕ることに夢中で、放浪者の言うことがよく聞き取れなかった。男は顔も上げずに答えた。

「時間がないんだ。今すぐに魚を捕らないといけないんだ」

取るに足らないことのようにだが、これが日々の現実である。スピード時代の人生とは言ってみれば、こんなものである。急ぐことによって、かえって時間を失う。大切なものを手に入れようと慌てているうちに、大切なものを失う。急<sup>せ</sup>いては事をし損じる、という諺の通り、人の話を聞き、じっくり考えて行動することが大切だ。

ものごとには、長年の経験から生まれ、伝えられているノウハウというものがある。本を書くこともそうである。さまざまなテクニクがある。ただ、ポリュームのある本の執筆には、テクニクだけでは到底カバーできないものがある。テクニクを超えるものとは何か。

だれの人生にも、ほかの人にはない体験やドラマがある。その意味で、だれでも生涯に一冊の本は書

ける可能性がある。しかし、それは可能性であつて、現実性ではない。「だれでも本が書ける式」のハ  
ウツー本は出発点から矛盾を含んでいる。だれでもできるようなことなら、人は挑戦したりしない。そ  
もそも、だれでも書けるような本を、一体だれが読むだろうか。人が本を手にするのは、そこに意外性、  
面白さ、有益性などを期待しているからだ。「これは自分には書けない」と思わせるのが本当の本であ  
る。

本を書くということについて考えるとき、私はオランダの哲学者スピノザの『エチカ』をいつも思い  
浮かべる。ゲーテやロマン・ロランにも大きな影響を与えたこの哲学書は厳格な幾何学的秩序に沿つて  
人間の自由や社会の自由を説いた後、困難を克服する勇気をたたえる美しい言葉で終わっている。

ここに到達するために私が示した道は極めて険しいように見えるが、それを見いだすことは不可能  
ではない。実際、このように稀にしかないものは困難であるに違いない。もし幸福が手近なところ  
にあり、大した努力もせずに達成できるのなら、どうしてもほとんどすべての人が無視するなどとい  
うことがあるだろうか。崇高なるものはすべて希有であるとともに、困難である。<sup>(9)</sup>

スピノザの言う「私が示した道」とは、絶対的な安心立命の境地を指す。言い換えると、神である。  
本を書くというのも、同じである。どんな作品も、どんな仕事も「神への歩みであり、死において初め



て完結する」(サン・テグジュペリ『城砦』)。ライフワークに値する仕事とは、そういうものである。

達成感は額に汗して初めて得られる。だから、困難なほど、やりがいがある。棚ぼた式の幸運は寿命が短い。あとの人生へつながらない。したがって、自分を高めることにはならない。

一冊の本を書く作業は知識や体験とともに、時間とスタミナを要する。知力とともに、体力が必要だ。だから、多くの人が書きたいと思いつながら、書けずにいる。あるいは書き始めて途中で投げ出す。例えば、毎日たくさんの記事を書いている新聞記者のような文章のプロでも、本を書ける人は全体の比率からすると極めて少ない。共同通信社にいたころ、

「今度、自分も本を書こうと思っている」

と、何人もの同僚から聞かされたが、実現しなかったケースの方が多い。本を書くには文章術だけでは足りないのである。本を書ける人と書けない人の差はどこにあるのだろうか。

アカデミズムでは、豊富な知識を持ちながら、体系的に分かりやすく表現できない学者が少なくない。表現と知識は次元が違う。本を書くのに知識や情報の蓄積は必要条件だが、十分条件ではない。頭脳のタンクに蓄積された知識を明晰判明な形で引き出すには、それなりのテクニックが要る。

忙しくて書く時間がないというのも言い訳にならない。時間は自分で見いだすものである。超多忙な中で何冊も本を出している人は少なくない。

では、文章術(ソフト)、時間・場所(ハード)、知識・体験(コンテンツ)の三つがそろえば、本は書

けるだろうか。ノーである。この三つを兼ね備えても、なお不十分だ。この三要件よりも、もっと大切なものがある。むしろ、それがあれば、三要件は欠けていても何とかなる。本を書く技術のかなめはそこにある。

## 10

### 内容が形式を創り出す

本が書ける人と書けない人の差は紙一重だ。「だれでも書ける」の可能性と現実性は、同じメダルの裏と表である。

可能性を現実性に、書けないを書けるに変えるものとは一体、何だろうか。肝心なのは「いかに書くか」というテクニックよりも、「なぜ書くのか」という目的意識である。つまり、動機づけである。書かずにはおれないという内側からあふれる切実感こそが、「本を書く技術」のアルファにしてオメガなのだ。これをぜひ世の中に伝えたいという切実感さえあれば、文章術や時間術といったものは後からついてくる。逆にそれがなければ、いくら文章がうまくても、いくら時間があっても書けない。

形式は内容を生まないが、内容は自ずと形式を創り出す。天才画家のパブロ・ピカソは絵描きを目指す人にこんなアドバイスをしている。「絵を描きたいという気持ちは何よりも大切です。作品の中から自分を探しなさい」。単純なようだが、これが創作の心構えのすべてと言っていい。本を書こうとする



人にもそっくり当てはまる。本を書きたいという気持ちが何より大切です。作品の中から自分を探しなさい、と。

本を書きたい理由は人によってさまざまである。最も崇高な動機の一つは例えば、この地球で生きたあかしを本として残したいという願いだろう。悠久の時の流れにのみ込まれていく限りある自分の人生を、一冊の本に記録することによって永遠の忘却から救う。同時に他人の利益や社会の向上にも寄与する。この営みが生きがいを創造するということにはかならない。

動機が行動を呼び起こす。動機があつて初めて、一つの目標にエネルギーを集中することができる。成功の鍵は動機づけにある。どんな分野であれ、動機づけの上手な人が成功する。本を出版するという目標を達成するには、そのための動機づけが不可欠である。動機づけが想像もしなかった活力と集中力を生む。「動機」↓「目標」↓「計画」↓「執筆」↓「出版」という流れになる。

自分の中にある「本を書きたいという気持ち」を大切にすること動機づけの前提になる。動機づけさえできれば、すでに半分以上成功したと言っても過言ではない。それくらいに動機づけが重要である。

本を書く最大の推進力は「情熱」である。情熱がソフト、ハード、コンテンツの三要件を動かす。宇宙の創成がビッグバンとともに始まったように、本執筆の三要件は情熱の点火とともに動き出す。

極論すれば、本を書く技術とは、本を書く情熱にほかならない。本を書ける人と書けない人との差は、情熱の有無にかかっている。一冊の本には四〇〇字詰め原稿用紙で三〇〇―六〇〇枚ほどの分量が必要である。これだけの分量を書き通すには、パワーが欠かせない。どんなに文章が上手で、時間の余裕があつて、書く材料がそろつていても、パワーがなければ、本はできない。やり通すパワーを生み出すのが情熱である。情熱はハングリー精神と表裏の関係にある。

文章術はありながら、本を書けない新聞記者が多い、と先に言った。これは日常の仕事が長時間の激務であることも大きい。さらに、新聞記事はできるだけコンパクトに圧縮することを習慣づけられているため、本のような膨大な量の原稿には不向きになつている面もある。縮み思考が拡大思考に転換するのは結構、難しい。一〇〇メートルの短距離走者がそのままではマラソンランナーになれないのと同じだ。

だが、本当の問題は、ハンディキャップを乗り越えようとするハングリー精神がないからだろう。大



手マスコミという肩書や高給に馴染んでしまうと、何が何でものハングリー精神はなくなってしまう。無理することもないか、となってしまう。外的要因にしろ、内的要因にしろ、本を書く必要性に迫られていなければ、書く意欲は湧き出てこない。

自分が描く夢こそ、情熱の根源である。情熱が冷めると、夢も消える。必要なのは情熱を失わないこと。情熱を持ち続けて取り組むと、必ず道は開ける。

人間というのは、精神的にも物質的にもハングリーな方がいい仕事ができる。適度に不安定な方がいい。地位や生活が安定すると、自分の殻に閉じこもって守勢に回る。挑戦する情熱を失い、どうしても怠惰になる。怠惰になるとは、停止することではなく、後退することである。どんどん新しい対象にチャレンジし続けなければ、精神はよどんでしまう。精神や頭脳はそういう構造になっている。

どんな分野でもそうだが、勢いのある人にはかなわない。権力や名声のことではない。ハングリー精神に満ち、絶えず何かに挑戦したいという情熱を持っている人は強い。情熱なしに、偉大なことが成し遂げられたことはない。情熱こそが奇跡の源泉である。良く生きるとは何かに打ち込むことである。熱中することである。人には挑戦する対象が必要なのだ。不遇なときや追いつめられているときほど、文章には勢いが出てくる。古典をはじめ、人の心を揺り動かすような良い本は、ハングリーな状況から生まれたものが多い。苦しいときや悲しいときの方が情熱は燃え上がりやすい。昔から火事場の馬鹿力という。非常事態に直面すると、人は思わぬ力を発揮する。人生は思い通りにならないことの方が多い。

思い通りにならない憤懣<sup>かんまん</sup>をポジティブなエネルギーに転換する手段こそが本を書くことである。

現代社会が証明しているように、飽食は人間を駄目にする。精神的にも、肉体的にも。何か足りないから、それを補おうとする内なるエネルギーが情熱である。生活や境遇が満ち足りると、何かをなそうという意欲や気力がどうしても失せてしまう。絶望や挫折があるからこそ、生きがいが生じる。

情熱なくして優れたものが生まれたためしはない。情熱はテクニックを超える。情熱こそが困難を克服し、ものごとを創造する原動力である。奇跡というものがあるとするれば、それは情熱のみがなせる業<sup>わざ</sup>と言えるだろう。「情熱なしになし得るものは、すべて無価値である」<sup>(10)</sup>（『職業としての学問』）と、マックス・ウェーバーは言っている。精神論に聞こえるかもしれないが、現実にそうなのだ。

優れた作品はすべて、そういう情熱から生まれた。情熱が時間を生み、内容を発酵させ、形式を創り出す。およそ創造的なものは、情熱と無縁ではあり得ない。ドイツ語の語源が示すように、創造力の源泉である「情熱（Leidenschaft）」は「苦しむ（leiden）」<sup>(11)</sup>とから出てくる。苦しみに耐え、苦しみを乗り越えたところに、真の喜びは生まれる。苦悩を透過した情熱なくして、創造の喜びはない。絶望を経験していない希望を信じることはできない。希望は絶望の底から立ち現れてこそ、本物になる。二〇〇三年春に公開された映画『戦場のピアニスト』の主人公シュピルマンの生きざまを見て、その感を深くした。音楽も書物も、創造的なものはすべて情熱の所産であり、情熱の存在証明である。

精神は自己を創造する程度に<sup>(11)</sup>応じて進歩する。本を書くことは自分の中にある未知の鉅脈を発見する



ことである。鉦脈からアイデアを絶えず掘り出すことにより、精神の退化を防ぎ、自己を創造し続ける。文章を書いていると、本当に思考がよく回転し、自分でも驚くほどのアイデアが浮かんだりする。自己を創造するとは、精神的な深みを獲得することにほかならない。

本を書きたいという情熱のある人はだれでも、きっかけさえつかめば、書くことができる。これまで無駄に過ごしていた隙間時間を活用し、本という険しい山の登頂に向けて歩み出すことができる。後は登り続ければいい。何ごととも究極のところ、持続力で決まる。

登頂に成功したときの喜びは、困難と情熱の大きさに比例する。本を書き上げ、出版することは、人生における忘れがたい至高体験となるだろう。一冊の本を書き残すことで、この世に生まれてきた甲斐はあったと心から思えば、至福というものだろう。

本の書き方は自由である。何ごととも「型から入って型を出す」が王道だが、自分流でいい。取り組んでいるうちに、自分に適した方法が見つかる。型にはまらないところに面白さがある。

## 12

### 抽象から具象へ

抽象的な願望は動き出さない。これをいつまでに書き上げたいという具体的な願望だけが実現に向かう。実際に本を書き上げる人は何も言わずに今すぐ着手し、黙々と執筆に打ち込む。不言実行、内側か

ら突き動かすものがあるのだ。それがあると、多忙な中にあつても、不思議と書く時間も出てくる。すべてが一点に向かって効率的に流れ出す。

先に述べたように、五―一〇頁程度のエッセイや分担執筆ならともかく、二〇〇頁、三〇〇頁の本を書くとなると、持続力が必要になる。持続力を支えるのは勢いである。言うところの情熱である。内なる衝動を大切にしながら、無形のものを形あるものにしていく。

あるいは、こう言った方がいいかもしれない。必死に形になろうとしているものに形を与えてやるのが、本をつくる営みである、と。鎌倉時代の仏師、運慶が普通の本からすさまじい迫力の金剛力士像を彫り出すように、自分自身の中から彫り出した真実が本の実体をなす。

テーマが何であれ、本を書くことは自分自身を吐き出すことである。感銘を受ける本には、どこか尋常ならざる勢いというものがある。内からあふれるものを抑えて、なお噴き出してこようとするものが勢いである。したがって、自分が勢いを保てるテーマを見つけることが肝要である。そのテーマに基づいて構成を考え、骨格をつくりながら、内容を付与していく。書くことによって内側に埋もれていたものが浮かび上がり、アイデアとなって形成されていく。内容が深まるとともに、骨格も変わっていく。そうしているうちに、全体像が姿を現し、細部を整えて完成するというのが通例である。

抽象から具象へ。それが執筆である。書くことは、混沌の中からある形を創造することである。



## 13

### 本の構成方法

アイデアは浮かびやすい反面、消えやすい。構想やアイデアは日がたつにつれ、忘れていくものだ。機を逸すると、意味を失う。アイデアは浮かんだ瞬間にしっかりとつかまえないければならない。思いついたアイデアはすぐに書き留める必要がある。そのときは重要ではないと思えても、後で生きてくることがよくある。

アイデアは孵化<sup>ふか</sup>してみないと、その本当の姿は見えない。親鳥が卵を温めるように、大切に温めていくことが将来の成功につながる。

書き留めるとするのは、アイデアを生かす最良の方法である。レオナルド・ダ・ヴィンチが言うように、幸運というものが訪れたら、ためらわずに前髪をつかまなくてはならない。後ろ髪ははげているから<sup>(12)</sup>。思い立ったが吉日で、その都度メモする。その日のうちにイメージを膨らませて一つのまとまった文章にしておく、それがどんどんたまって本の土台になる。

一つのアイデアが時間を経て発酵し、それが思わぬ幸運を呼ぶこともある。言ってみれば、宝くじのようなものである。当たるはずはないと思っていいたら、当たっていた。買っていなかったら、当たることもない。それがアイデアというものである。

書きためた文章群をあこれ並び替えながら、本の形を探る。これも本を書く一つの手法である。パソコンを使えば、簡単に入れ替えができる。例えば、一つのアイデアについて三頁くらいの文章を七〇篇くらいつくと、本の分量になる計算だ。アイデアが数十個あれば、そっくり本を構成する小見出しになる。どう並べ替えるのが一番効果的かは、パズルの原理と同じ。頭の体操である。何通りどころか、何十通りも可能だ。そこから一番効果的な姿を引き出すのは、大変だが、面白い作業である。

本づくりは大ざっぱに言えば、大テーマを小テーマに分割して内容を充実していく方法と、小テーマを書きためて大テーマに集約する方法がある。その中間にさまざまな色合いの手法がある。テーマやそのときの状況によって、手法は変わってくる。内容の見取り図をつくらずに、いきなり思いついたところから書き始め、一気に終わりまで書き進む人もいる。本のベースとなる一番重要な部分を最初につくって、そこから発想を膨らませていくという人もいる。

自分が一番やりやすい方法を採用すればいい。オーソドックスな方法としては、まず大きなテーマを見つけ、その構成を分割して攻めるのが無難だろう。具体的な構成要素が見えてきたら、書きやすいところから書いていく。書いていくうちにイメージがどんどん広がり、本の全体像が浮かび上がってくる。

自分が読んで「面白い」「有益だ」と感心した本をじっくり分析してみると、本のつくり方が見えてくる。参考になるような本の目次に、自分が書きたいテーマを当てはめていくのも一手である。型から入って型を出す。マニュアルから入ってマニュアルを出す。創造のためには、型やマニュアルを学ぶこ



とが大切である。

以上のように、本を書くことは、精神、感性、頭脳、身体を使った全人格的な営みである。世界を書きながら自己をとらえ、自己を書きながら世界を認識する。世界と自己、外と内の世界をつなぎ、新しい領域を創造することが本の執筆である。

注

- (1) Zweig, Stefan. *Episode am Genfer See*, S. Fischer Verlag, 1970
- (2) オー・ヘンリー『オー・ヘンリー傑作選』岩波文庫、大津栄一郎訳、一九七九年、ただし本文は筆者訳
- (3) 山本武信『IT革命とメディア』共同通信社、二〇〇一年、六九―七二頁
- (4) 外山滋比古編『名言』作品社、一九九二年、五九頁
- (5) アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ『星の王子さま』岩波書店、内藤濯訳、一九五三年、四二頁
- (6) 前同、一一八頁
- (7) オー・ヘンリー『オー・ヘンリー傑作選』前同、五頁
- (8) 山本武信『ベントの興亡』東洋経済新報社、一九九八年、一―一〇頁
- (9) バルーフ・デ・スピノザ『エチカ』中央公論社、下村寅太郎訳、一九六九年、三七二頁
- (10) マックス・ウェーバー『職業としての学問』岩波文庫、尾高邦雄訳、一九八〇年、二三頁
- (11) Toffler, Alvin. *Third Wave*, Pan Macmillan, 1980
- (12) レオナルド・ダ・ヴィンチ『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記(上)』岩波文庫、杉浦明平訳、一九五

四年、四〇頁





## 第7章

表現する世界——メディア危機に抗して

表現の自由や言論の抑圧について考えるとき、真つ先に思い浮かぶのがサルマン・ラシュデイ事件である。特にものを書く人間にとって、避けて通れない深刻な問題だった。

サルマン・ラシュデイが著書『悪魔の詩』<sup>(1)</sup>を発表したのは一九八八年。イランの統治者から「同書はイスラム教を冒瀆する」として二五〇万ドルの賞金を賭けられ、一〇年近く命を狙われる身となった。

ラシュデイは一九四七年にインドのボンベイの裕福なイスラム教徒の家庭に生まれた。ウルドゥー語と英語のバイリンガルとして育ち、一四歳のとき英国のパブリックスクールに入学した。いったん移住地のパキスタンに戻った後、再度英国に渡り、大学で歴史を学んだ。卒業後、俳優、コピーライターなどの仕事に就きながら、幼いころからの夢だった小説を書き始めた。その間に英国人女性と結婚、英国に帰化した。一九八一年にインド現代史を背景にした雄渾な物語『真夜中の子供たち』を発表、一躍世界的な評価を得た。

『悪魔の詩』は「神の書コーランや予言者マホメットを冒瀆している」としてイスラム社会の一部から憤激を買った。ラシュデイは「私の本は宗教ではなく、世俗のモラルに関するものである。イスラム教徒を怒らせたとしたら、申しわけない」と謝罪したが、ホメイニ師から死刑を宣告された。日本では



一九九一年七月、同書を翻訳した筑波大学助教授が大学構内で何者かに刺殺されるという事件が発生した。

ラシュデイは英国当局に守られながら潜伏、二時間以上同じ公共の場所にいることはなかった。最近、イラン指導層から「死刑」宣告を解除され、再び表通りを歩けるようになった。ラシュデイは何度かノーベル文学賞候補に擬せられたが、ノーベル賞委員会はイスラム圏への政治的配慮から授賞を見送ったともされる。

ラシュデイ事件を通して痛感するのは、言論や表現の自由の尊さである。日ごろ空気のように無意識に享受している表現の自由は、言論が抑圧される場面に遭遇して初めて各人のリアリティーになる。

## 2

### グーテンベルク革命の衝撃

二一世紀の自由な表現空間は、いかにして実現したか。

今日では空気のように当たり前になったマスコミュニケーションを考えるうえで欠かせないのは、グーテンベルク活字革命の歴史的役割である。グーテンベルクによる活字印刷の発明があったからこそ、現代という時代も今日のような形で存立し得ている。

一四世紀の末、ヨーロッパは神が支配する暗黒の中世から抜け出し、ルネサンスが開花した。人間主

義へ回帰しようというかけ声とともに、中国やインドを中心とする東方からシルクロードを経由して、多くの技術がヨーロッパに流れ込んだ。コンパス、馬具、航海術、造船、火薬、製法紙、印刷技術……。これらの外来技術がヨーロッパを世界支配へ駆り立てる。そして、世界はグローバルゼーションの海へ漕ぎ出す。

中でも活版印刷は、知識や文化を広めるのに多大の貢献をした。

中国の印刷術を基に活字印刷機や印刷インキを発明したのは、ドイツ人ヨハネス・G・グーテンベルクである。それまでにも、ヨーロッパには整版による印刷があった。中国では一世紀に素焼きの活字がつくられている。一二三〇年ごろには朝鮮半島の高麗でも、世界初の金属活字による活字印刷が実用化されていたと言われる。しかし、アジアで情報革命が起きることはなかった。グーテンベルクの印刷法によって書物や新聞の大量発行が初めて可能になり、マスメディア発展のきっかけとなったのである。

グーテンベルクが一四四五年に活版印刷を発明したとき、需要を予測する諮問委員会が設けられた。委員会は協議の結果、「印刷物を読む人の数は極めて少なく、活版印刷は無用である」と結論した。委員会の予測は見事に外れ、知識と情報の世界における革命的な出来事となった。さまざまな偉業、思想、言説が大量に記録され、中断したり消滅したりすることなく、広く世間へ流布することになったのである。

それまでの手書き写本の世界は口コミと同様、時間的にも空間的にも制約されたものだった。グーテ



ンベルク以前にも、手書きの本やメッセージは教会を頂点とする政治の監視の眼をくぐって配信されていた。これは私的な通信サービスであり、ニュース配信の原型と言えるものだった。それが無制限に解放されることになった。

ヨーロッパはこうして写本時代から印刷本時代へ移った。活字メディアが台頭し、多くの活字人間を生み出した。その影響で、写本業界の写字生たちは仕事を奪われ、労働争議のようなこともあったという。一八一〇年代の英国で、産業革命に伴う機械化の結果、手工業労働者が大量失業し、機械を破壊するラッダイト運動が起きた状況と似ている。技術文明が職を奪い、労働者に雇用不安を投げかけるのはネット時代の現代も同じ。

グーテンベルク活版印刷本の衝撃は、それ以前の本の価値を考えると分かりやすいかもしれない。英オックスフォード大学やパリのソルボンヌ大学などヨーロッパに大学が創設され始めた一二―一三世紀ごろ、羊皮を薄くなめし、一字一字を手書きした聖書や学問の本は、一冊が何百万円もするような高価なものだった。しかも大判だった。大学の図書館では盗まれないよう、一冊一冊を書見台に鉄鎖でつないで公開した。

それが活版印刷により安価で小型になり、大量に普及するようになった。大きな部屋を占領するほど巨大な装置だったコンピューターが携帯型パソコンにまで縮小し、普及した過程と似ている。

活版印刷がなければ、知の集積と情報の共有は進まず、産業革命も遅れたかもしれない。ルネサンス

が掲げたヒューマニズムは、知識や情報が一般大衆へ浸透することにより、理念から現実に変化した。知の解放とは人間性の自覚である。メディアの意義はそこにある。

文字が放つ想像力の素晴らしさに、人々は気づき始めた。人々は印刷された活字を読むことで神の呪縛から解かれ、世界に対する認識をあらため、自己意識に目覚めた。神の呪縛からの解放とは、偏見や独断からの解放であり、自分と事物に対する明晰判明な認識を獲得することである。ルネ・デカルトの「我思う、ゆえに我あり（*Cogito, ergo sum*）<sup>(2)</sup>」（『方法序説』）という命題はその出発点であり、結論だった。この結果、近代の学問や研究は爆発的に発展した。

人々は理性に基づいて合理的に生き、自然科学を発展させ、社会を近代化した。一七〇一八世紀の啓蒙思想は人間の理性や進歩に限りない信頼を置いた。ヴォルテールは理性と進歩を信じて文明生活を礼賛した。カントが真善美の絶対的な価値を擁護し、科学、道徳、宗教、芸術を体系づける理想主義哲学を打ち立てたのも、こうした時代だった。

啓蒙思想に基づく「進歩」は、ヨーロッパの知識人が総がかりでつくり上げた新しい概念だった。フランスの哲学者ディドロやダランベールが無神論的・唯物論的な視点から編纂した『百科全書』<sup>へんさん</sup>は、その一つの記念碑である。

印刷技術に関して言えば、ラッダイト運動が盛んだった一八一四年に輪転式印刷機が誕生、一八四〇年前後から自動活字鑄造機が登場した。コンピューター印刷が始まるのは一九七〇年代以降である。そ



れは、言葉の表現空間が限りなく広がる歴史でもあった。

### 3

#### 近代初頭のビル・ゲイツ

グーテンベルクの活版印刷は近代世界を開くメディア革命であり、現代のIT革命のはしりだった。グーテンベルクは言ってみれば、近代初頭のビル・ゲイツである。

ゲイツが基本ソフト「ウィンドウズ95」によってIBMなどのハードメーカーの支配体制を切り崩し、IT革命に火をつけたように、一四五五年に完成した美しい『四二行聖書』の普及は教会の權威を切り崩し、ルターらの宗教改革に火をつける結果となった。

なぜそうなるかと言えば、聖書は信者を神との個人的な関係に引き戻す役目を果たすからである。信者は聖書を読むことにより、教会の分厚いフィルターを通さずに、神と直接対話するようになった。神からのメッセージが人々に直接届くようになると、教会を頂点とする階級のピラミッド構造は崩壊する。これはインターネットの普及により、組織の水平化が進む現代の構図と変わらない。

ビル・ゲイツとグーテンベルクは先行技術を巧みに採り入れて新しい技術を生み出し、世界標準になった点もよく似ている。情報の量が極端に増えすぎて、同時代の人々が戸惑っているところも同じである。違うのはビル・ゲイツが強引な商法で市場独占に成功し、世界一の大金持ちになったのに対し、

グーテンベルクは事業のトラブルや門弟の裏切りに遭って不幸な晩年だったことである。

グーテンベルクの活版印刷が画期的な新メディア技術として評価が定まったのは、ずっと後のことである。イタリア、フランス、オランダ、スイスにグーテンベルク式の本格的な印刷業者が登場するのは、グーテンベルクの死後二〇―三〇年たってからである。一五〇〇年ごろには、二五〇都市余りで計一〇〇以上の印刷所が開設されたという。

ヨーロッパで新聞が誕生したのは、グーテンベルク聖書の活字印刷から約一五〇年後の一六〇九年。雑誌の発行は一六八二年だった。

文明論的に見て、世界への影響力はゲイツとグーテンベルクのどちらが大きかったかと言えば、間違いない。グーテンベルクだろう。米国のジャーナリストグループが一九九九年に公表した「過去一〇〇〇年に世界に最も影響を与えた偉人・悪党一〇〇〇人」でも、グーテンベルクは堂々の一位だった。ちなみに、グーテンベルク聖書は一九八七年にニューヨークのクリスティーズで、三三〇万ポンド（約七億七五〇〇万円）という記録的な高値で落札された<sup>(3)</sup>。

活版印刷はメディア世界の最初のビッグバンである。このおかげで庶民の読み書きの力が培われ、教育革命が進み、民主主義社会が確立される土台となった。知識や情報を大量の活字印刷物として伝達することにより、社会の共同体的性格は強まる。活版印刷はヨーロッパをはじめ世界にラディカルな変化をもたらした。それを象徴する三つのキーワードは「複製」「公開」「普及」。いずれも文化の発展に不



可欠の要素であり、現代のマスメディア社会の基盤になっている。

もちろん、評価する声ばかりではなかった。マスメディアへの風当たりも強かった。ハルバーシュタットというドイツの町の教区監督J・G・ホッケは一八世紀末、文豪ゲーテに宛てた書簡で次のように批判した。

印刷物に対する読書欲はフィラデルフィアの黄熱病のように蔓延する大きな悪である。それは子どもたちやその子孫にとってモラルの腐敗となる。読書によって愚昧と誤謬が聖なる人生に持ち込まれる。真実は無力になり、偏見が増す。読書は機械的であり、理性と心が得るものはない。墮落した読書欲は多くの人間から幸福を奪い、精神的、道徳的に惨めな状況に追いやる。

この批判はマスメディアによる人間の愚鈍化、粗野化、大衆化への不安を代弁している。テレビやインターネットが登場したときの、技術革新への不安と通じる。印刷術は当時、黒い技術 (die schwarze Kunst) と呼ばれていた。魔術や妖術の意味もあり、印刷術に対する当時の空気がうかがえる。ホッケの書簡にゲーテがどう答えたかは不明だが、畢生 (ひっせい) の大作『ファウスト』の「天上の序曲」にある「善い人間は、暗い衝動に駆られても、正道を忘れるということはないものだ」という言葉がホッケへの回答だったようにも思える。

人間には悪いと知っていながら、あえて悪を行う「反価値衝動」(A・H・マズロー)がある。匿名性のネット世界は暗い衝動を増幅する。しかし、人間は決して生来悪ではない。善なるものへ自己を形成する可能性を持つ存在である。悪とは、人間の可能性が十分に開花しなかった結果、発生するものである。一種の機能障害である。精神分析学者のエーリヒ・フロムは「破壊性は生かされざる生命の結果である」としている。

時代的に言うと、人間の善なる可能性に希望と信頼を寄せたのは古代ギリシャ、ルネサンス、そして啓蒙主義の発展期である。「ああ、いかに感嘆しても感嘆しきれぬものは、天上に輝く星とわが内なる道德律である」というカントの『実践理性批判』の言葉は啓蒙時代の信念を体现している。人間は善へと傾向づけられた可能性の中に生きている。ただ、それは可能性にすぎず、樂觀はできない。新しい技術が人間の質的向上に役立つかどうかは結局、利用する側の姿勢次第である。<sup>(4)</sup>

## 4

### グーテンベルク世界の没落

産業革命がヨーロッパへ広がった一九世紀前半は、ルネサンス以来の近代的世界が限界を見せ始めた時代だった。

産業革命がもたらした現実には、啓蒙主義の理想を打ち砕く。社会の矛盾を前に、理性万能主義は通用



しなくなった。ルネサンスの人間解放が産業革命を経て突きつけた結論は、資本による人間性の疎外と新たな階級社会だった。ラッダイト運動は時代の矛盾を象徴する事件だった。それでも、技術は前へ進む。科学技術の進歩は一九世紀から加速し始めた。二〇世紀に入ると、進歩は異常なほどのスピードになった。これはすべての科学分野に当てはまる。宇宙物理学から遺伝子工学や生命科学にいたる自然科学がことにそうである。

一九世紀末まで世界の進歩をリードしたのは、ヨーロッパである。二〇世紀は新興勢力の米国が台頭し、圧倒的な進歩を達成した。日本は一九世紀後半の明治維新を経て、欧米先進国を追走し始めた。

二〇世紀の人類は技術革新の波に乗って、想像を超える距離を走り抜けた。特に二〇世紀最後の一〇年は目まぐるしい変化だった。それに伴ってコミュニケーション技術も向上した。米国の未来学者アルビン・トフラーが「人類は今、農業革命、産業革命に続く第三の波である情報革命の時代に入りつつある」(『第三の波』<sup>(5)</sup>)と言ったのは一九八〇年である。その直後に沸き起こったニューメディアブームは不発に終わった。

東西冷戦が幕を閉じ、グローバル化が進んで情報革命は一気に過熱した。メディアが文明の主役に躍り出るのである。情報伝達のスピードはどんどん速まり、人々が共有するコミュニケーションの場は今や地球規模に広がっている。

メディアが主役に躍り出たとき、崩壊の足音が高まったのが印刷本の出版である。近代から現代にか

けて燦然<sup>さんぜん</sup>と輝き続けたグーテンベルク世界は、パソコン、インターネット、テレビゲームといったデジタル革命の猛攻によって崩れ始めた。硬派の本を読まないという若者たちの傾向は、グーテンベルク世界の終焉を象徴しているように見える。

時代は確かにそういう方向へ動いている。しかし、ものを書くという営みは紙の媒体でも電子媒体でも、基本的には変わらない。変わらないが、美しく装丁された紙の本はそれ自体で独自の世界を形成し、電子媒体では味わえない知の表現空間を提供する。バーチャルなサイバースペースよりも、ずっとリアリティーがある。

電子新聞が話題になり始めたころ、「新聞が消える日」というキャッチフレーズが世間の耳目を集めた。しかし見通し得る範囲の将来において、新聞が消えることはない。インターネット上で新聞を見る人を含めると、新聞の読者数はむしろ増加傾向にあるかもしれない。要は新聞の記事をどういう形で流していくか、である。紙の媒体か、ネットの媒体か――。

自動二輪や自動車が普及しても、自転車の人気は相変わらず高いのと似ている。ローテクにはハイテクにない良さがある。自転車は小回りがきき、排ガスを出すこともない。サイクリングは健康にも良い。テレビやDVDが広く普及しても、映画館で映画を楽しむ人は少なくない。巨大なスクリーン、場内いっぱいに響く音声。人は映画館の暗闇の中でほんのひととき、別の人生を味わう。

同じように、電子本やゲームは紙の本を消滅させることはない。<sup>(6)</sup>新メディアは旧メディアを駆逐しな



い。旧メディアは新メディアを補完する。ドイツ・ニュルンベルクの「北バイエルン新聞」主筆のヴォルフガング・リープルは一九一一年にこれを「情報メディア発展の基本法則<sup>(7)</sup>」と呼んだ。

本は長い間、人々の心を潤し、頭を鍛えるメディアだった。近代の知の社会を切り開いたグーテンベルク世界を維持・発展させるためには、良い本を出すことが大前提になる。グーテンベルクの活版印刷術によって、本の大量印刷が可能になった。とは言え、本の出版は近年まで、膨大な費用がかかる事業だった。望めば、だれでも出せるというものではなかった。偉大な仕事を成し遂げた天才でも、存命中に出版できなかった例が無数にある。グーテンベルクの印刷術が確立したころに生涯を送った万能の巨人レオナルド・ダ・ヴィンチは、膨大な出版用の手記を書きながら、ついに望みはかなわなかった。死後によりやく認められて名著としての地位を獲得した古典は多い。

そうしたマスメディアの発展途上に比べると、現代は一般の人でも本を出しやすい環境になっている。無名であっても、内容が面白ければ、ベストセラー入りすることも夢ではない。むしろ無名の著者の本でも、一発大当たりするのが現代だ。かつてのような知の巨人が輩出しなくなり、日替わりのように新しいヒーローが求められている。

商品サイクルが著しく短くなったように、本のサイクルも短くなった。かつては一冊の本が売れば、家が建つと言われた時代もあった。年間六万点もの本が出版されている現状では、それは難しくなった。一万〜二万部売れたら、ベストセラーと言われる時代である。これから本を書こうと思っている人にと

つては、むしろチャンスかもしれない。本の執筆で生活するのは現実的に厳しいが、本を出版できる可能性は高くなっている。インターネット上で発表することも可能である。やり方によっては、利益の出る電子出版にもなるだろう。

## 5

### テーマが先か、ニーズが先か

ベストセラーというのは多くの読者の関心を喚起し、広く共鳴し合う本である。共鳴し合う関心が高尚であるかどうかは関係がない。現実には一部の例外を除くと、読者の低い方のニーズにこたえたものがベストセラーになりやすくなっている。

良書とは対極にあるようなものがベストセラーになるのは、その国の文化が何であるかを物語っている。そういう本がベストセラーになるたびに思い出すのは、古代ローマの雄弁家キケロの「おお時世よ、おお風俗よ」という言葉だ。ジュリアス・シーザーの時代、質実剛健の美風が失われ、軽薄になったことを嘆いたものである。俗っぽく言えば、世も末だ、というニュアンスだろう。

二〇〇一年暮れ、出版界に衝撃が走った。専門書取次の老舗、鈴木書店が経営破綻した。負債額四〇億円。いわゆる大型倒産ではないが、出版界に与えた影響は大きい。

鈴木書店は「良書の普及」を掲げ、五〇年以上にわたって岩波書店や有斐閣などの人文社会科学系専



門書を書店に配本してきた。雑誌、マンガ、娯楽小説のような利益率が高い本はほとんど扱わなかった。良書普及という理念は戦後日本の復興期や高度成長期にマッチした。学生運動の時代とも重なり、思想書がよく売れた。

だが、一九八〇年代に入って良書や名著が売れなくなった。一九九〇年代になると、バブル経済の崩壊やパソコン、携帯電話の普及が良書離れを加速した。不景気になって真っ先に売れなくなるのが本である。売れなくなるから、内容が良いかどうかよりも「売れる」ということに重点を置いた本が出るようになる。現在のような構造不況に見舞われると、こうした傾向はいっそう強まる。

「万人向きの書物は常に悪臭を放つ書物である」(『善悪の彼岸』<sup>(8)</sup>)というニーチェの言葉は、出版文化の一面を突いている。本というのは本来、文化の粋である。だから、ベストセラーの傾向を見ると、その国の文化や教育が見えてくる。

日本とドイツを比べても、随分と違う。産業構造の違いと同じように、日本の文化は軽薄短小型に向かっているのに対し、ドイツの文化は重厚長大型の面を多く残している。ドイツでは、割と硬派の本がベストセラーになる。しかも息が長い。ものによっては一年以上、ランキング上位に入っていることも珍しくない。タレント本や暴露本のようなものがベストセラーになることはまずない。

これは国民一人当たりの図書購入費の違いにも表れている。ユーロモニター社の調査によると、ドイツは一二〇ドルで二位のスウェーデン(九五ドル)、三位の米国(九〇ドル)を引き離して圧倒的優位を

保っている。日本は四〇ドルで、イタリアやオーストリアとはほぼ同水準である。<sup>(9)</sup>

これはドイツの本の値段が高いためでもある。ドイツの物価は日本に比べ、総じて安いのに、本はなぜか高い。賃金水準なども考慮すると、ドイツの本は日本の二倍はするように思える。内外価格差がそれぞれの国の経済状況とともに、文化の違いを反映しているとすれば、ドイツの本が高いのはそれだけ教養への関心が高いためとも言えよう。

テーマが先か、読者層が先か。これは結局、書き手の姿勢の問題である。プロの作家やベストセラーを狙う人は、読者層を考えてテーマを決めることが多い。産業界では新商品を開発する際、必ず消費者ニーズを市場調査する。本づくりにおいても、テーマの設定は読者層の想定を抜きにしては考えられない。自費出版ならともかく、一般の商業出版を目指すのであれば、採算を度外視するわけにはいかない。出版社という相手がいるからである。どんなに良い本でも、売れないと判断されたら、出版してもらえない。

したがって、現実的には双方のバランスを考えながら、ということになる。しかし大原則はあくまで、自分が書きたいことを書く。自分が訴えたいことを最優先する。そこが一般商品と違う本の文化性である。本は精神の宇宙の中の一つ一つの星のようなものである。



## 6

## 出版ジャーナリズムの気概

本当に良い本は、書き手の情熱や誠実さが伝わってくる。利益や名声のためではなく、このことが訴えたいという真摯なメッセージが込められた本は、いつまでも心をとらえて離さない。そのメッセージが読み手の心の琴線に触れて、勇気づけてくれる。読者のニーズに迎合するのではなく、読者の最も良質な部分を最大に引き出す。そういう高い志が出版文化の土台を支えてきた。そこに、一般の産業とは異なる出版ジャーナリズムの存在意義がある。

出版不況に見舞われても、良質な本を出していこうとする志の高い出版社や編集者も少なくない。そういう編集者に出会うのは、著者にとって何よりの喜びである。本の心は、著者と編集者の志が共鳴して読者に伝わる。そういう媒体なのである。

出版に限らず、新聞やテレビなどジャーナリズムというものは流行にくみしやすい。流行とは移ろいやすいものである。「より多くの人に読んでもらいたい」「より多くの人に見てもらいたい」という欲求が過当競争にさらされると、時代の低俗なニーズに迎合してしまう。その流れに抗しようという志が少数にしても、なお息づいているからこそ、ジャーナリズムはジャーナリズムたり得ている。

『夜と霧』で知られるドイツの精神医学者V・E・フランクルは、次のように述べている。

模範になる人間が少ないために、少数派は途方もない責任を担っている。ある古い神話は、世界の成否はその時代に本当に正しい人間が三六人いるかどうかにかかっていると言いつつ消えてしまいうる(10)人数である。それでも、全世界が道徳的に成り立つことが保証されるのである。

危機の時代、退廃の時代にこそ、本当に良いものが生まれるのは、人類全体の精神のバランス作用なのだろうか。危機意識は濁ったものの中から、純粹なものを浮かび上がらせやすいのかもしれない。危機意識とは真実へのハングリー精神である。個人にあつても、ハングリー精神が飛躍のばねになる。

前に触れたように、巨匠たちの後期の作品がパワー不足になるのも、経済的に充実し、ハングリー精神を失うからである。人間、地位や生活が安定すると、どんな分野でも創造力を失う。いや、創造力を失うから、地位や名誉を欲しがるようになると言った方がいいのかもしれない。物書きは適度に不安定な方がいい。経済的に破綻しないと、書き出せないというライターもいるほどである。

流行や現象の奥にあるものへの飽くなき探求。たとえ世界が崩れ去っても、人がそれによって生き、それによって生きることが出来るものへの視線。前章の『最後の一葉』で言うと、ベアマン老人が自分の命と引き替えに描いた絵の意味である。オー・ヘンリーはここにメッセージを込めて書いた。

ストーリーにはオー・ヘンリー自身の体験や見聞が織り込まれているに違いない。似たような実話が



あったのかもしれない。確かなのは、このテーマを読者に訴えたいという、やむにやまれぬ体験に根ざす衝動があったということである。その衝動が知性とイマジネーションを総動員して、こういう形に結晶した。

高い志に根ざした体験が視線を研ぎ澄まし、テーマを深める。

そういう本が広く受け入れられること、そこからグーテンベルク世界の復興は始まる。

## 7 失われざるものの秘密

本の意義を考えると、思い出すのはスペインの天才建築家アントニオ・ガウディである。ガウディは一九二六年に路面電車にはねられて亡くなるまでに、バルセロナに数々の幻想的な建築物を残した。その集大成が「サグラダ・ファミリア教会」である。

ガウディは世界的な名声を確立した後、精神的な苦境に陥り、一時は自殺さえ考えるような時期があった。それ乗り越え、設計に没頭したのがサグラダ・ファミリアだ。ガウディはこの教会を一つの巨大な楽器に見立てていたと言われる。着工から一世紀以上たつ今も、建築途上にある。

「いつ完成するのですか」

と、現場で関係者に尋ねると、

「さあ、いつかなあ」

と、のんびりした答えが返ってくる。

ガウディは自分の存命中に完成しないことを知っていた。正面入口の二本の柱の足元にそれぞれ亀の像がある。ゆつくり造れ、というガウディの遺志だという。自分は一個の人間として死んでいくが、それを引き継いでくれる人々が必ずいるという人間への深い信頼がそこにある。はるかな時の流れが人間と人間の絆を深くしている。これこそが天と向き合うライフワークである。ガウディのライフワークは有為転変の世の中であって、なお健やかに息づく「永遠なるもの」に気づかせてくれる。

個人的な幸福の楼閣は必ず、蜃気楼しんきろうのように消えてしまう。老いと死が容赦なくそれを破壊する。

このように考えるなら、個人的な幸福よりも永続性のある何かが人生にはあるのかもしれない。<sup>(11)</sup>

(サン・テグジュペリ『夜間飛行』)

どんどん加速するスピード時代に、スペインでは今も時間がゆったり流れる。そういう緩やかな、しかし烈々と燃えるような時の流れの中で、ガウディが残したライフワークは進行する。ガウディは自分のライフワークの完成を未来に委ねた。完成したとき、サグラダ・ファミリアはどんな音色のメッセージを人類に伝えるのだろうか。



天地は失われても、失われないものがある。本を書く本当の意義も、失われざるものの秘密を書き残すところにある。永遠なるものに触れることで、人は二ヒリズムの牢獄から抜け出す。移ろうことのない、永遠にして美しきものを後世の人々へ伝えること。それこそが書物の使命である。人類は書物のメッセージによって、精神的に進歩してきた。

古典は歴史の風雪に耐え、永遠の生命を獲得した書物である。それは天を焦がすような猛火ではない。灰の中にあつて、いつまでも暖かさを失わない埋<sup>う</sup>み火である。手をかざすほどに、その温もりが身心の深奥に染み渡ってくる。心が渴いたときは、潤いを与えてくれる。視界が悪くなったときは、遠くまで見渡せる展望台を提供してくれる。自分を見失いそうなときは、生きる原点を指し示してくれる。

私たちが本を書く際も、志はできるだけ高いところに置きたい。一つの短い文章が読み手の心に響いたら、それだけで書いた価値はある。自分が独自に見つけた珠玉のメッセージを一つ、この地球に置いていけば、後世への最大の贈り物になる。

出発点にあつては、動機や目的は何でもいい。苦闘しながら書いているうちに、人は考えや姿勢が変わり、本当に良いものを目指すようになる。それが本を書くという営みの素晴らしさである。自分が書いている本が、書いている本人の内面を変えらるということが少なからずある。書くことによって、自分が変わるのである。書くことは今までの自分を乗り越え、新しい自分を創造することである。

大切なことは、ささやくように伝えるものである。思想の中の最も深奥なるものは、大声で表現する

ようなものでは決してないからだ。美しい言葉、すがすがしい思想は静寂とともに訪れることが多い。

永遠の別れに際して大切な人たちに自分の全人生をもつて伝えたいこと、与えたいものとは一体、何か。それは結局、自分が全人生をかけて追い求めてきたものにほかならない。自分の全人生をもつて表現したいものについて考えるとき、一切の不純物をそぎ落とした純粋な言葉が浮かんでくる。その言葉が結局、自分が歩んだ人生なのである。

あと一日しか生きられないとしたら、という問いに立つとき、人はこの世でまだ積み残していることについて考える。<sup>(12)</sup> 人生においてまだはつきりしないものは何か。これから追求すべきものは何か。学術研究書であれ、一般の書であれ、このように考えたときに「やりたい」と心から思ったことが本のテーマになる。

## 8

### 非日常的な異空間

本当の書物は冒険のように驚きに満ち、人間や世界への眼を開かせてくれる。本の意義は「読者が知らないこと」に気づかせてくれるところにある。これには二つの側面がある。一つは、読者が見聞したことがないような未知の世界を開示してくれるもの。もう一つは、よく知られている世界をまったく違った視点から照らし出してくれるもの。



フィクションはそれを虚構という形で、ノンフィクションは事実の積み重ねによって示す。非日常的な異空間の中に現実を創造するのがフィクションであり、日常的な現実の中から非日常性を発掘して再現するのがノンフィクションである。手法や形式は違っても、優れた作品には読者がはっとするものがある。

一冊の本が生き方を変えることさえある。ドイツのイエンス・ウヴェ・マルテンスという人は十数年前、航空機事故で妻と二人の子供を失い、絶望のどん底に突き落とされた。孤独と失意の中、一冊の小さな本と出会う。サン・テグジュペリの『星の王子さま』である。マルテンスさんはこのメルヘンに癒され、力を得て絶望の底からはい上がってくる。その体験を『心で見ると』という感動的な一冊にまとめている。

孤独なときは、避難場所を提供してくれた。すべての希望を失いそうなときは、力強さを与えてくれた。何もかも信じられなくなったときは、人間を信じ続ける大切さを教えてくれた。苦境に直面すると必ず、静かな声で目に見えない大切なもののことを思い出させてくれるのが『星の王子さま』だ。それは、救いを必要としている人にはいつでも適切な指針を示してくれる人生哲学である。<sup>(13)</sup>

マルテンスさんの場合、フィクションのリアリズムが人生を支え、その体験がノンフィクションを生

んだ。一冊の本を買うことは自分の運命を買うことである。マルテンスさんほどドラマチックではないにしても、だれでも自分の人生を振り返るとき、たくさんの本によって支えられてきたことに思いいたるはずである。自分が感動した本が物書きとしてのベースになる。

夢をはぐくんでくれた本、苦しみを和らげてくれた本、知恵を授けてくれた本……。素晴らしい本は人間の中の最も良質な面を照らし出す。本は素晴らしい、と心の底から賛嘆するからこそ、自分もそういうものを書いてみたいという気持ちになる。

本をたくさん読み、たくさん感動した体験が本を書く土台になる。物書きの原点は読書における至高体験である。どんな本とどういうふうに接してきたかが、物書きとしての方向や資質を左右する。本を書く技術の第一歩は優れた本へのあこがれである。古典はその最高峰に位置する。

本を書くことは、生の営みをすくい上げることである。良い本を書くには良い本をたくさん読んで学ぶとともに、人生経験を積むことが不可欠だ。物書きの世界にあつては、あらゆる人生経験が生きてくる。無駄なものは何一つない。むしろ回り道した経験が魅力や厚みになる。人は過ちを犯し、後悔し、自分を切り刻む。挫折、左遷、不遇、病気、誹謗中傷。耐えるたびに人生が見えてくる。

枠を破ったところに飛躍がある。苦勞人ほど物書きに向いているのは、直線的なエリート人生を送ってきた人には見えない世界を知っているからだ。運が悪かったことを「運が良かった」と喜べるようになるのは、物書きの特権かもしれない。肥やしが作物を育てるように、負の体験は文章を豊穡にする。



下り坂の人生が、書く世界では上り坂になる。マイナーな経験をしているからこそ、本という大きな山にチャレンジしてみようという情熱も生まれる。

このように豊かな経験を持つ人は本を書く能力を秘めた人と言える。その経験に知性や想像力が加わることによって、一冊の本が誕生する。書く技術のアルファにしてオメガは体験と情熱である。豊かな体験を持ち、それを言葉に表現せずにはおれない。そういう気持ちを大切にする人は、本が書ける人である。

注

- (1) サルマン・ラシュディ『悪魔の詩』プロモーションズ・ジャンニ、五十嵐一訳、一九九〇年
- (2) ルネ・デカルト『方法序説』岩波文庫、落合太郎訳、一九八三年、四五頁
- (3) 「共同通信社・全国加盟社配信記事」一九八七年七月九日
- (4) 山本武信『IT革命とメディア』共同通信社、二〇〇一年、九三―九六頁
- (5) Toffler, Alvin. *Third Wave*, Pan Macmillan, 1980
- (6) 山本武信『グローバルメディアの世紀』日本図書センター、二〇〇四年、二四―二七頁
- (7) Hondrich, K. Otto. *Mensch im Netz, Spiegel-Buchverlag*, 1999: pp. 319-322
- (8) フリードリヒ・ニーチェ『善悪の彼岸』岩波文庫、木場深定訳、一九九三年、五六頁
- (9) 山本武信『裏切られた神話——素顔のドイツ』作品社、一九九五年、三四頁
- (10) V・E・フランクフル『それでも人生にイエスと言う』春秋社、山田邦男・松田美佳訳、一九九三年、一

五頁

- (11) アントワーン・ド・サン＝テグジュペリ『夜間飛行』新潮文庫、堀口大學訳、一九五六年、八五頁、筆者がやや改訳

- (12) Grün, Anselm. *Wenn ich nur noch einen Tag zu leben hätte*, Kreuz Verlag, 1999

- (13) Martens, Jens Uwe. *Mit dem Herzen suchen*, DuMont Buchverlag, 1998 : p. 12



## 第8章

## 地球のゆくえ・人間のゆくえ

IT革命を引っ張った米マイクロソフトの時代がスタートして、一〇年になる。

同社の怪物ソフト「ウィンドウズ95」が発売される直前の一九九五年六月、ビル・ゲイツ会長は東京都内で記者会見を開いた。先進国首脳会議並みに七〇〇人もの記者が集まった。ゲイツは席上「ウィンドウズ95は情報スーパーハイウエーの礎となり、二一世紀のマルチメディア時代を制する」と、早々と勝利宣言した。私もその会見に出席し、若きゲイツの自信に満ちた表情を今もよく覚えている。

ゲイツの予言通り、ウィンドウズ95はまたたく間に世界市場を席巻し、ITデジタル時代を制した。それは二〇世紀最後のアメリカンドリームにして、二〇世紀最大のグローバルドリムだった。冷戦が終わった一九九〇年代にグローバル化が本格化し、真の意味での世界標準を初めて実現したわけである。しかも、驚くほどの短期間に。これほどの急成長は史上例がない。

二〇世紀後半の歴史を語るとき、欠かせない人物がいる。ミハイル・ゴルバチョフ。ペレストロイカ（改革）を引っ提げての、一九八〇年代半ばの国際政治の舞台への登場は鮮烈だった。米ソを頂点とする戦後の世界構造が大きな転換点を迎え始めたことを予感させた。事実、ペレストロイカはソ連のみならず、世界のペレストロイカとなった。<sup>(1)</sup>



風が吹けば、桶屋が儲かる式のロジックで言えば、ビル・ゲイツが今日あるのは、ほかでもない、冷戦の幕引きをしたゴルバチョフ・ソ連大統領のおかげだった。世界を二つに隔てたベルリンの壁が崩壊し、東西ドイツが統一し、世界全体がボーダーレスになったために、ウィンドウズは急速に世界へ浸透した。その立役者がゴルバチョフだった。

私がモスクワのクレムリン宮殿大統領執務室でゴルバチョフ大統領と会ったのは、一九九一年一月と一二月の二度。ソ連が崩壊する直前だった。ゴルバチョフ大統領はソビエト連邦が終焉を迎えたことを自覚し、デビューしたころの華やきはもうなかったが、一つの歴史を創り、その歴史にのみ込まれようとする傑出した人物のすべてがそこにあった。

「私がコール首相にドイツ統一を承認したことを非難する人がソ連国内にいる。しかし、どう言われようと、私は大きな展望を持って偉大な仕事を成し遂げてきた。ブッシュ米大統領と今、米ソ関係のみならず、ヨーロッパ、そして世界を視野に入れた遠大なビジョンを話し合っている」

私のインタビューにそう答えたゴルバチョフは、米国の独り勝ちを苦々しく眺め、二〇〇四年八月の米メディアとのインタビューでは「アメリカに何でも好きなようにしていいと委任した覚えはない」と憤っていた。冷戦後の世界情勢を象徴する言葉である。

ゴルバチョフからビル・ゲイツへ――。それはアナログ世界からデジタル世界への転換でもあった。

## 2

### 言語の誕生と表現の自由

ITデジタル時代の軸足は二一世紀に入った今、ハードやソフトからコンテンツへと移った。コンテンツの核を成すのは言語、画像、音声、デザインである。中でも重要なのが言語だ。言語は人間の存在根拠であり、コミュニケーションの中心的媒体である。言語の誕生は、コミュニケーション発達史のビッグバンだった。

アルタミラの洞窟壁画のような絵や図はもと、人間が何らかのメッセージを仲間に伝え、コミュニケーションをつなぐイメージだった。そうした絵や図が長い時間をかけて絵文字に変化し、文字が誕生する。文字が初めて生まれたのはメソポタミアというのが定説である。狩猟した動物の数を記すなど、経済活動の記録だったという。

文字の発明により、歴史の記録が可能になる。歴史とは人間の営為のあかしである。人間はこの地球上において何をなし、これから何をなそうとしているのか。それが文字として残され、同時代の人々へ、そしてまだ見ぬ世代へ伝えられる。コミュニケーションによるコミュニケーションの継承と拡大が本格化するわけである。

文字には絵のような具体的なイメージがない。これがものごとを抽象化したり概念化したりする人間



の思考力を高め、表現領域を広げることになる。言語の発展とともに、人間の脳は大きくなり、知性が発達する。壮大な進化の歩みの中で袂<sup>たもと</sup>を分かったサルと区別して、人類がホモサピエンスと自称するゆえんである。

言葉は自分自身を含む世界を認識し、描写する自己形成的な道具である。言葉によるコミュニケーションは、生活と文化をはぐくむ揺りかごである。米国の著名なメディア学者ニール・ポストマンは言っている。「言葉はメディアであり、メディアはメタファー<sup>(1)</sup>（隠喩<sup>いんぎょ</sup>）である。メタファーがわれわれの文化の中身を創造する」<sup>(2)</sup>（『死への遊戯』）と。

メディアの中核を担うジャーナリストは、いつ誕生したのだろうか。定期刊行物を発行する職業人として歴史上公式に確認されているのは、グーテンベルクの活版印刷が普及し、ガリレオの地動説が波紋を広げた一七世紀初頭の近代ヨーロッパである。

しかし、ジャーナリズムも文字と不可分の関係にある以上、文字の成立・発展過程においてジャーナリストの祖先とも言うべき人物がいたはずである。エジプトにも、インドにも、バビロニアにも、そして中国にも。職業として独立していなくても、何かを文字で記録するという行為にはジャーナリスティックな営みがあったに違いない。

例えば、歴史の編纂者<sup>へんさん</sup>、聖書の著述者、自然科学の記録者、哲学や文学の中にジャーナリズムの原型が見いだされる<sup>(3)</sup>。どんな分野の記述も結局、日々の出来事と無縁ではないからである。古代エジプトの

遺跡から見つかった碑文には「今の若い者は……」という老人の愚痴が書かれ、ヴェスビオ火山の噴火で全滅したイタリアの古代ポンペイ遺跡には、為政者への不満など一万件以上の落書きがあつたという。落書きの習性は、現代のインターネット掲示板に引き継がれる。

日本で言えば、清少納言の『枕草子』や吉田兼好の『徒然草』などにジャーナリスト精神を読み取ることができる。ヨーロッパでも、ジャーナリズムは文学と深く絡み合うジャンルだった。松尾芭蕉のように、近代ヨーロッパの文学者や詩人も漂泊の旅に出て世相と時代精神を見つめた。

ロマン・ロランやサン＝テグジュペリもジャーナリズムと無縁ではない。優れた作家や思想家には、ジャーナリスト出身あるいはジャーナリズムでポルタージュなどの仕事をした人が少なくない。現実世界における体験が思考やイメージを高めるからだろう。

ジャーナリズムは時代を写し取る鏡であり、文明の日常性の記録である。対象は宇宙のビッグバンや猿人の足跡から社会事件、家庭料理、大衆文学と森羅万象に及ぶ。対象にならないものはないと言っていい。何か新しい要素や驚くような事実がある限り、ジャーナリズムの取材対象になる。

逆に言うと、ジャーナリストは森羅万象に関心を抱くゼネラリストでなければならない。関心のフィールドをできるだけ広く保ちながら、必要に応じて特定のテーマに迫っていく。特定のテーマに専念する場合でも、視野の広さや知識の深さがものを言う。

そのジャーナリズムが権力を監視し、社会の不正をただす役割を果たすために闘い取ってきたのが表



現の自由である。表現の自由は、二一世紀のグローバルコミュニケーション社会において全面開花した。端末のパソコンや携帯電話さえあれば、だれでも自由に時間と空間の壁を超えて情報をやり取りできる。こんな時代はかつてなかった。

インターネットを軸とするバーチャルなグローバルネットワークの誕生により、情報は一極集中型から分散拡大型へ移行した。情報発信の多極化が進んでいる。この結果、地球市民は中央集権的な体制から解放され、ヒエラルヒー的序列なしに自由に通信できるようになった。

インターネットが登場するまでのマスメディア社会は新聞、テレビ、ラジオなどの大手メディアが読者や視聴者などの大衆に対して一方的に情報を流し、大衆の側が受け入れる片側通行だった。この「マスメディア→大衆」つまり「一→多数」という一方通行の構造が、「二↕一」「一↕多数」「多数↕多数」という双方向へ変化した。多数は理論上最大、地球上に住む六三億人ということになる。

一個人が広範なブームやトレンドを生み出せるという意味で、これはパーソナルメディアの疑似マスメディア化現象と言っていいたろう。パーソナルとマスの境界はあいまいになった。ローカルな個人がグローバルな主導権を握ることも夢ではない。

反面、情報流通が自由になりすぎた結果、表現は暴走している。ネット上を流れる情報の多くは役に立たないジャンク情報である。誹謗中傷や人権蹂躪じゆうりんの類も少なくない。自由の名のもとに他者の尊厳を侵し、文化を汚している。ネット犯罪も増大傾向をたどっている。これでは知識社会どころか、愚民

社会となる。

自由なコミュニケーションの荒野で試されるのは、地球市民の理性である。

グローバルコミュニケーションにおける最も重要な情報は、文明の対話を促し、地球の明日を開き、人々に希望をもたらす情報だろう。ジャーナリズムはその先導役を務めなければならない。そのためには、個々のジャーナリストが高い見地から世界の出来事を的確にとらえ、適切に表現する力を高める必要がある。

グローバル時代に必要なのは、地球を宇宙に漂う一つの惑星として見る視点である<sup>(4)</sup>。地球も一つの星にすぎないという認識が人間の傲慢さ<sup>ごうまん</sup>を相対化し、新たな地平を開く。

### 3

#### 天空とのコミュニケーション

地上での生活に疲れ、希望を失いそうになったとき、満天の空を見上げる。もしかしたら、自分たちと同じような高度な生き物がどこかにいるのではないだろうか。宇宙の果ては一体、どういうふうになっているのだろうか。そんな少年少女時代の夢にふけっているうちに、地上のもやもやしたものが吹っ切れる。

星空を見上げるといのは、悠久の時間を見つめることである。



宇宙のかなたから地球の生活を見つめると、今、抱えている悩みがいかにもちっぽけなものに思えてくる。小さな存在である自分が無限の宇宙の懷に抱かれ、守られ、生かされていることに気づく。そう  
だ、今を一〇年後のために耐えていこう、という勇気が湧いてくる。

人は社会という横軸と天空という縦軸の交差点に位置する。天空へ思いを馳せるとするのは、社会との「横のコミュニケーション」を中断し、天空との「縦のコミュニケーション」を取ることにによって、本来の自分を取り戻すことである。

人は社会の中で成長するにつれ、抽象概念や先入観といった自我の鎧よろいに厚く覆われるようになる。子供のころの自由で自然な感性は曇り、ものごとの不思議に驚いたりするみずみずしさを失う。清冽な  
星空を見上げるのは、地上の汚れから心を清めたいという無意識の気持ちに働いている。星々が心の疲れや悲しみをすくい取ってくれるのだ。

メルヘンのファンタジーにときめくのも、心の曇りを落とす何かをそこに求めているからにほかならない。現実から心を引き離すことによって生まれるカタルシス効果である。時間が悲しみを癒すように、空間は心を浄化する。

宇宙の地平線は、地球から百数十億光年のかなたにある。この宇宙には約一〇〇〇億個の銀河が存在する。二〇〇二年五月、米ハワイ大学の研究チームは「宇宙誕生から間もない一五三億年前の銀河を発見した」と発表した。これまでに観測された最古の銀河より五〇〇〇万年古いという。こうした銀河群

の中に天の川と呼ばれる銀河系があり、そこを漂っているのが地球という惑星である。銀河を見つめ、夜空の無限の壮大さの中で自分の置かれている位置を感じる。心を天空へ解き放つうちに、自然界の美しさや存在の不思議に打たれる。

宮沢賢治の幻想的な童話『銀河鉄道の夜』は宇宙シンフォニーとも呼ぶべき瞑想的な作品で、日本の文学史に独自の世界を開いた。主人公ジョバンニは幻の鉄道に乗って幻想空間へ旅立ち、さまざまなものに遭遇する。燐光に輝く三角標、後光の差す鳥、一二〇万年前のくるみ……。どれも宮沢賢治が体験した心象風景だ。その異次元空間を貫いているのは、仏教的世界観に基づくヒューマニズムである。

「かすかなかすかな旋律が糸のように流れて来るのでした。『新世界交響曲だわ』。姉がそつと云いました」。読み終えた後、人間存在の深い哀しみを超えた透明な音色がいつまでも胸底に響き渡る。そして、思いを新たにする。虚空に浮かぶ地球は奇跡の星なのだ、と。

宇宙は人間の思議を超えている。だから不思議と言う。アインシュタインはこれを「宇宙の永遠の神秘」と呼び、「宇宙と人間の存在の神秘に目を見張り、畏敬の念に包まれない人々はもう死んだも同然だ」と言い切っている。米映画俳優兼監督のウッディ・アレンはこんなジョークを放っている。「宇宙のことを知りたいという人々には驚かされる。チャイナタウンで迷わないようにするだけでも大変なのに」

星々が宇宙空間に浮かんでいる不思議、太陽が燃え続けている不思議。その不思議な宇宙の中の、地



球という美しい惑星に生まれ、暮らしているのは、それ自体が奇跡のような出来事である。デンマークの童話作家アンデルセンが言うように、人生は神によって書かれたメルヘンなのかもしれない。

生命化学者によると、宇宙環境は生命にとって苛酷だという。生命を生み出す物質は、宇宙のどこにでも転がっているが、簡単に壊れてしまうものだという。生命体がこの宇宙で進化し、生き続けるのは、それだけ難しいことなのである。

この美しい地球は、荒ぶる惑星だった。最新の研究によると、<sup>(5)</sup>四六億年前に誕生した地球は二三億年前と六億年前の二度にわたって全球凍結、つまり地球全体が氷に閉ざされ、生命は絶滅の危機にさらされたそう。巨大隕石が激突して、地球上の生き物が死に絶えるという事態にも見舞われている。

そういう多くの危機があつたからこそ、人類は今日のように進化することができたのだという。その人類自身、何度も絶滅の危機に直面しながら、生き延びてきた。二一世紀に入ると、地球環境に異変が生じ、大型の台風や地震も多発するようになった。マグニチュード九・〇を記録した二〇〇四年二二月のスマトラ島沖地震では、大津波にのまれて犠牲者は二九万人前後に達し、被災者は五〇〇万人に達した。

人類の消費主義の結果、地球の体力に限界が出てきている。

当たり前のものでして受け入れている現実を、時折、違った視点から見直すと、日常の物差しが消え、思考がリフレッシュする。

アニメ作家の手塚治虫は『銀河鉄道の夜』の熱烈な愛読者だった。手塚はこの劇画的なファンタジーから無数の夢とヒントを得て、自作の中に生かしていった。ロマンあふれるその宇宙的なアニメがまた、私たちに感動を与え、生きる意味を投げかけ続ける。サン・テグジュペリの『星の王子さま』も、リチャード・バックの『かもめのジョナサン』も、あるいは、パウロ・コエーリヨの『アルケミスト』も、同じような視点から宇宙と人間の秘密に迫ったメルヘンである。

本来の自己は、まだ書かれていない数字が限界をもたぬごとくに、限りなく完全なるものであり、時間と空間を超えて、いかなる場所にも直ちに到達しうるのだ。<sup>(6)</sup>

（『かもめのジョナサン』）

夢を追求している時は、心は決して傷つかない。それは、追求の一瞬一瞬が神との出会いであり、永遠との出会いだからだ。僕が真剣に自分の宝物を探している時は、毎日が輝いている。それは、一瞬一瞬が宝物を見つけるといふ夢の一部だと知っているからだ。<sup>(7)</sup>

（『アルケミスト』）

耳を澄ませば、宇宙はさまざまなことを語りかけてくる。宇宙の鼓動、存在の旋律。宇宙の波が自分



を包んでいることに思いがいたる。天空から見ると、一瞬だけスパークする花火のようににはかない生。永遠なるものに触れたとき、人は生きていることの尊さに気づいてはつとする。その驚きから、至高体験は生まれる。

第二次世界大戦中、偵察機で敵地撮影に飛び立ち、地中海上空で消息を絶ったサン・テグジュペリは飛行機を用具にして大空から地球の素肌と人間の本質を見つめた。宇宙線を浴びせるようにして文明の厚化粧を洗い落とし、社会の虚偽を告発し、人間の虚飾をはぎ取り、本当に大切なものだけを抽出した。大切なものとは、心でしか見えないものである。夢、絆、愛、友情、誠意、意志、責任、祈り。要するに、モノやカネが支配する世界の中で失われつつある人間の心である。

すべてを「0」と「1」の数値に還元するデジタルネット世界には収まらないもの、そういうものとして宇宙の神秘と人間の心が存在する。そこに光を当てて言葉で表現する。単なる情報の伝達とは異なる、真実追求としての言語表現の地平はそこから広がる。あるいは、こう言っているかもしれない。言葉の力が及ばない地平から、本当の表現は始まる、と。沈黙の中からふつと湧き上がってくる言葉こそが本物である。

経済は拡大しているはずなのに、失業が増え、収入が減る。技術は進化しているはずなのに、労働時間が増え、仕事がつくなくなる。東西冷戦が終わり、人類は一つの地球へ向かっているはずなのに、戦争やテロが続発し、罪のない人々が犠牲になる。

文明の拡大とともに、本当に大切なものがなくなっていく。そんなはずではなかったという現象が今、世界のいたるところで起きている。文明が高度化するほど、矛盾が拡大し、難問が次々に浮上するのは、パラドックスと言うしかない。

幼いころ、急な坂道を上っていて、ふと思った。足を滑らせたら、上り坂はそのまま下り坂になって転げ落ちる、と。上りの中に下りがある。進化の中に崩壊がある。生命は自己を創造する程度に応じて進化する。だが、進化は直線的ではない。さまざまな方向がある。退化や自滅のシナリオもある。他者や自然との調和を無視した自己創造は、自己破壊へ向かう。

地球社会は今、政治、経済、技術を中心に空前の規模とスピードで進化している。ことに情報通信分野の技術革新は目を見張るものがある。インターネットは地球社会の一つに結び、人類に限りない可能性を提供した。携帯電話は固定電話の常識を打ち破り、世界中どこにいても自由におしゃべりができる



ようにした。

しかし、見る位置をずらすと、違った姿も浮かび上がってくる。

科学技術が進歩し、政治・経済が拡大するにつれて、人間自身は退化し始めているのではないか。そう思えるような現象や出来事がいたるところで起きている。例えば、テロや戦争の世界的な連鎖。例えば、誹謗中傷やウイルス散布などインターネット上での悪意の伝染。例えば、モラルの喪失。「つながっている」というインターネットや携帯電話の宣伝文句とは裏腹に、人と人の絆は薄れている。二〇〇四年六月に長崎県佐世保市の小学校で起きた六年生の女子児童による同級生刺殺も、そういうネット社会の影を宿した事件だった。

文明が発達すればするほど、人類は自らの中に自分を破壊する圧倒的な力を獲得し、苦しむようになる。文明のパラドックスである。壮大な進化のドラマの中で、自壊現象が進んでいる。大胆に言えば、人間そのものが崩れてきている。異なる文明、異なる民族、異なる宗教が激しく火花を散らし合って、人類のアイデンティティーは大きく揺らいでいる。

二一世紀の人類はどこからどこへ向かおうとしているのだろうか。

二一世紀の世界を描こうとすると、最も困難な点は全体状況の複雑さにある。ひと昔前までは、各国の状況や国際的な出来事を個別に描写すれば、世界情勢を表現できるようなところがあった。今は各国の政治、経済、社会、文化が複雑に絡み合うグローバル時代となり、ひと筋縄ではいかなかった。

グローバル時代の文法を読み解くのは容易ではない。無数の要因が重層的に交錯し、作用し合う。

勝ち組がいつの間にか負け組になり、負け組が勝ち組に転じる。例えば、冷戦終結後、唯一の超大国となり、テロリズムの標的にされるアメリカは果たして勝ち組なのだろうか。それとも、アメリカは繁栄への坂道を上り続けているのだろうか。

一九八九年一月九日のベルリンの壁崩壊から二〇〇一年九月十一日の米中枢同時テロまでの一〇年余りの間に、世界は大転換した。文明のパラダイムが根底から変わったと言っても過言ではない。ジョン・リードの名著『世界をゆるがした十日間<sup>(8)</sup>』にならって言えば、「世界を揺るがした一〇年」だった。歴史はこの一〇年を、政治、経済、社会、科学、技術を包む「文明のマクロ転換点」として記憶するだろう。それが後世にとってプラスとなるのか、マイナスとなるのか、予測するのは難しい。確かなのは、この一〇年の大きなうねりを理解しなくては、二一世紀における地球社会のゆくえも、人間のあり方も見えてこないということである。

人間は地球上で唯一、責任を持つ自覚的な生き物である。自分とは直接関係のないような世界の悲惨な出来事に心を痛め、自分の仕事を通じて世界の建設に寄与するところに、地球市民としての存在理由がある。

未来は予言するものではない。人類が自らの意志で選び取るものである。未来は現在の投影である。現在を伝えるとは、未来を創造することである。メディアは現在の核心を伝えながら、未来にメッセー



ジを発し、未来の足場を形づくっている。そういうふう<sup>(9)</sup>に自覚するとき、表現者としてのメディアの責任の重さが分かる。

そして、メディアのあり方を決めるのは結局のところ、地球市民一人一人の意志と行動である。メディアの肖像とは、地球社会の自画像にほかならない。何を選び、何を未来へ伝えるべきかと自問しながら、希望と信頼を拡大再生産していかなければならない。地球上における壮大な生命と精神の歩みを絶やさないために。

そういう希望のメッセージを世界へ運ぶ「精神の風」<sup>(9)</sup>が、表現者としての地球市民の意志である。その意味で、表現力を鍛えるというのは、地球社会の「土地を耕す」<sup>(10)</sup>ことにほかならない。「人間であるということとは、とりもなおさず責任を持つことだ。人間であるということとは、自分には関係がないと思われるような不幸な出来事に対して忤怩たることだ。人間であるということとは、自分の僚友が勝ち得た勝利を誇りとすることだ。人間であるということとは、自分の石をそこに据えながら、世界の建設に加担していると感じとることだ」<sup>(11)</sup>——優れたジャーナリストでもあったサン・テグジュペリが残したこの言葉が喚起するものこそが、地球市民の存在根拠である。

文章を書くというのは、人間と人間をつなぐ「見えざる絆」を拡大再生産する創造的な営みにほかならない。心と心を結びつけ、人々を勇気づける言葉の交流こそが真のコミュニケーションである。

無数の情報が双方向で流れるネット世界の中では、コミュニケーションが密になっているように見えて、実は「低温関係」と言われるような事態が進行している。一種のコミュニケーション不全症候群である。

低温関係というのは、他者との関係は持っているけれど、一定以上の深い交流ができない関係のことである。コミュニケーションは上っ滑りなものになって、心と心の交流が苦手という若者が増えている。低温関係が重度になると、ネット引きこもり症やネット廃人になる。バーチャルなデジタル文明の落とし穴である。

デジタル隆盛の中、アナログ文明は大きく揺らいでいる。

デジタル革命の立役者であるマイクロソフトのビル・ゲイツは二〇世紀最大のグローバルドリームを実現し、ミスターワールドと呼ばれる。そのゲイツが一〇歳のころからあこがれ、遺稿を四〇億円で競り落とした巨人がいる。レオナルド・ダ・ヴィンチである。

ダ・ヴィンチは芸術から科学までさまざまな領域に足跡を残し、凡人には気の遠くなるような偉業を成し遂げた。名画モナリザだけでも、ピカソの絵一〇〇枚とルーベンスの絵一五〇枚に匹敵すると言わ



れる人類の至宝である。技術的先見力は近代を飛び越え、一気に現代に達した。遺稿には飛行機や潜水艦など三〇〇―四〇〇年後に実現する幾千ものアイデアが記されている。グーテンベルクの活版印刷が産声を上げたばかりのころに、ダ・ヴィンチは電話のようなメディアの開発も考えていた。精神分析学者のフロイトによると、みんながまだぐっすり眠っている間に早々と目覚めてしまったのがダ・ヴィンチだという。

中世に君臨した全能の神から人間性を取り戻すため、ルネサンスという時代は「万能の人」を必要とした。ダ・ヴィンチは神に対抗する人類の代表選手だった。尽きることのない好奇心、未知なるものへの情熱、完璧さへの執念。ダ・ヴィンチの創作活動や研究活動にはこれで終わりというものがなかった。発明したり発見したところが新たな出発点となった。際限のない知的好奇心は無限の世界を切り開いた。それは、神に抑制されていた中世の「知の渇き」にこたえるものだった。

ダ・ヴィンチが開いた前人未到の「知と創造の宇宙」をそっくりたどり、そのすべてを総合的に理解できる研究者はいないだろう。みんな、自分の得意な分野を土俵にしてダ・ヴィンチを論じているにすぎないように見える。

ましてダ・ヴィンチに匹敵する万能の人は存在しない。この先も出てこないだろう。なぜなら、現代という時代は学問、科学の極端な細分化や労働の分業化で「部分的な人間」となり、「万能の人」は誕生しにくくなっているからである。

英国の宇宙物理学者スティーブン・ホーキングのように個別分野で天才は輩出しても、万能の天才は出ない。事実、だれもが一致して巨人と認めるような人物は、世界を見渡してもいない。ビル・ゲイツは世界のパソコンソフト市場を牛耳るだけの卓越した力を示した。だが、それは一部の人が持ち上げるような天才なのだろうか。万能でないことは確かである。

グローバル化で世界の結びつきが深くなるにつれ、世界の内部はどんどん細分化し、複雑になっていく。複雑になりすぎて全体への直観は働かなくなったのかもしれない。いや、そういう直観自体が必要とされなくなったのかもしれない。例えば、IT革命を推進するうえで必要なのは、高度の狭い専門知識である。

ビル・ゲイツは極めて知能指数の高い人材しか採用しないと云ってはばからない。彼の言う知能とは「全体知Ⅱ知恵」ではなく、「部分知Ⅱ専門知識」である。ハイテク分野の中でも、限りなく狭い領域に対する専門知識である。ダ・ヴィンチの頭脳にあやかろうという動きが世界的に広がっているのは、現代の知のあり方に限界が見えてきたためと言える。デジタル世界の偉才ビル・ゲイツが万能の天才ダ・ヴィンチにあこがれるのもうなずける。

ダ・ヴィンチというのはアナログ型なのである。夢を見たり、創造したりするのはこのアナログ型である。一步一步論理的に進むデジタル型の垂直思考に対して、いくつもの領域を縦断する水平思考と言ってもいい。水平思考によって飛躍できる。ダ・ヴィンチは分析よりも観察、論理よりも直観の方が優



れていた。

デジタル世界で本当に必要になるのは、論理優先のデジタル型よりも、実はアナログ型である。デジタルは左脳の論理に強いが、右脳の直観に欠ける。産業界やアカデミズムの研究分野では、分析知には優れているが、総合知に欠ける人が多くなっている。「知の巨人」の代わりに増えているのはせいぜい「経営の巨人」だろう。

デジタル時代のホワイトカラーは、創造性や柔軟性といった人間的なアナログ能力こそが必要になる。パソコンの操作能力などは雇用の最低条件ではあっても、強みにならない。IT化はむしろ、新商品や新ビジネスモデルの提案につながるアナログ能力を磨いて会社の競争力を担う人材になるよう促す。

「コンピューターは役に立たない。答えしか与えてくれないから」と言ったのは画家のピカソである。左脳優位のITハイテク時代に右脳の良さが再認識されつつあるのは、技術文明のアイロニーである。デジタルとアナログ、左脳と右脳、ハイテクとローテク、論理と直観、現実と夢、垂直思考と水平思考。新旧の鋭い対比の中で、ダ・ヴィンチのようなマルチ頭脳に活路を求める動きが高まっている。

いずれ、デジタル世界からアナログ世界への回帰が始まるだろう。

知識や情報は時代とともに変化し、進化し、増大する。知恵の方は人間存在の本質が変わらないように、それほど変わらない。古代の科学は現代の高度技術に直接役立たないが、古代の賢人や哲人の生き

る知恵は現代に通用する。科学が知識の世代的な積み重ねであるのに対し、知恵は一代限りである。科学は先人の到達した地点から出発できるのに対し、知恵は世代間で蓄積することができない。知恵は凝縮された人間性の極致である。

知恵は個人の創造力に属し、社会的に移転できない。自分が生きていく中で経験を積み、自分なりに獲得するしかない。高度なITを開発した現代人の科学的知性が釈迦、老子、ソクラテス、イエス・キリストらの英知を超えられないのはこのためである。むしろ、古いものが今、最も新しいとも言えるような時代になっている。

古代ギリシャや古代中国の哲学書などを読むと、驚くほど現代的であることに気づく。現在、さまざまな形の自己啓発の本が出ている。特に米国から輸入・翻訳したものが多く、それらのエッセンスはすべて歴史の中に見いだされる。この分野で独創ということはほとんど不可能と言ってもいい。現代における創造とは、既存のアイデアの組み合わせという面が大きい。

例えば、ローテクの極地である禅の境地においても、釈迦、達磨、臨済、道元、白隠といった偉大な祖師を超えることは事実上、不可能である。現代人にできることは、その境地に近づき、それを自分なりに現代状況の中で生かすことだろう。

分かりやすく言えば、科学はピラミッド建設である。先人が石を積み上げたところから、新たに積み上げていけばいい。知恵の世界はと言うと、例えば一〇〇メートル走で、賢人たちは九秒八か九秒九く



らいで走ってみせた。人間はここくらいまでは到達可能だということを身をもって示した。後は各個人がこの限界に向かって走ってみるしかない。ここに、一回限りしか生きることができない人間の本质がある。

人間は「種」として無限に向かって連続するが、「個」としては不連続である。有限性に対する緊張感があるからこそ、創造的な時間が生まれる。知恵は至高の時間の中で醸成される。知恵とは至高体験のエッセンスである。したがって、科学・技術文明がどんなに高度化しようと、それ自体は人間の本質的な幸福とは関係がない。幸福は世代的に進化しない。戦争や紛争をやめないのは、人類の知恵が進化していない何よりの証拠である。

現代スイスの思想家で経済学者のルネ・エグリ氏は『LOLA原則』の中で、次のような比喻を使って人類に警告を発している。

何十億という塵のような星が渦巻く無限の宇宙を、住人が「地球」と名づけている一つの惑星が漂っている。そこでは何千年も前から、注目すべきことが起きている。「人間」と名乗る生物が争いごとに大部分の生存時間を費やしているのだ。殺し合うことさえある。なぜ、そんなことになるかと言えば、お互いに相手の気持ちを理解できないからである。

「地球」という塵のような星全体を支配しようとしているわけでは決してない。地球の中の想像

できないほど小さな断片を支配しようとしているだけなのである。

人類が何千年もの間、「無限のこの宇宙の中に自分たち以上に高度な知性を備えた生物は存在しない」と思いこんできた事実もまた、理解しがたいものだ。人類は宇宙の仕組みがどうなっているかを知らなかったにもかかわらず、自らを被創造物の王者であると見なしてきた。今なお「被創造物の王者である人間は本質的に攻撃的な生き物である。したがって、人類が生き延びようとする結果、対立、戦争、死、殺人は不可避である」と決めつけている理論がある。

地球を無限の宇宙の中の塵と見なすとすれば、こんなシーンをイメージすると、理解しやすいだろう。宇宙のかなたから、人類より高度に進化した生物が何百年か、何千年かおきに地球を訪れる。人類がその間に「生命がどのように機能しているか」を理解したかどうかを確かめるのである。だが、宇宙からの訪問者は地球を訪れるたびに首をひねりながら、引き揚げていく。人類がなぜ、このことを理解しようとしなのか、とんと謎なのだ。高度に発達した精神にとって、なぜ人間の精神がうまく働かないのか、理解不能に違い<sup>(12)</sup>ない。

二〇〇一年九月一日に米中枢同時テロが発生、対アフガン報復戦争、対イラク戦争へと雪崩れ込んでいった。グローバルコミュニケーションが本格化する中で、キリスト教徒とイスラム教徒による文明の衝突が起きているのは、現代という時代を暗示して不気味である。



## 6

### 時代認識に立った表現の力

近代以降の学問、科学、技術、産業の発展は細分化の歴史だった。総合から分析へ——。その行き着いた姿があらゆるものを「0」と「1」に数値化するITのデジタル世界である。

経済学も、もとは人間論を中心に据えた総合的な社会哲学だった。古代ギリシャのアリストテレス以来、偉大な経済学者は例外なく哲学者だった。アダム・スミスしかり、カール・マルクスしかり。それが資本主義の拡大とともに「需要と供給」論に成り下がり、限りなく数学に近づいた。数学信仰は「心では見えないもの」(『星の王子さま』)を排除した。

こうして哲学を捨てた近代経済学はダーウィンの進化論を背に「ものごとは時間の経過とともに価値を増大しなければならない」というGDP信仰を生む。ベルリンの壁が崩壊してから、この傾向はいっそう顕著になった。

IT革命は消費意欲を促してGDP信仰を増幅した。

何でも儲けよう、得しようとしている間に、アメリカも日本も世界も、目標と手段を取り違え、おかしくなった。文化や精神は文明の圏外へ追いやられてしまった感がある。「GDPさえ拡大すれば、すべてが解決する」という米国流の無自覚な拡大主義に一撃を加えたのが米中枢同時テロである。旅客機

をミサイルに仕立てたイスラム原理主義の米同時テロは世界中の人々の度肝を抜き、米政権を震撼<sup>しんかん</sup>させた。

ジャーナリズムも、胸元に刃を突きつけられた。携帯電話の新製品発売や政治ゴシップに目を奪われている場合ではない。世界には伝えなければならないもつと重要な問題がある、と。米コラムニストのピート・ハミルは著書『新聞ジャーナリズム』の中で「地球社会への関心を失い、醜聞報道にうつつを抜かしていた米メディアはテロで目を覚ました<sup>(13)</sup>」と自戒、ジャーナリズムは危険性を告げる早期警戒システムでなければならないと警鐘を鳴らしている。

IT革命によるグローバルネットワークの実現により、あらゆる情報が自由に手に入るようになった。自由に流通するようになったために、情報は早くもインフレを起こし、価値を減じている。皮肉と言うしかない。人々は安っぽい情報やつまらないジャンク情報に殺到して、重要な問題から目をそらすようになった。

情報が地球上を洪水のように流れ、だれもが何でも知っているという錯覚が広まっている。虚と実、現象と本質の落差。そこにメディア社会の落とし穴がある。先行きが不透明な時代であればあるほど、ジャーナリズムには高い自覚と認識が求められる。

新しい環境のもとで活動するには、これまでとは異なる思考方法が必要になる。前に触れたように、遺伝子的に見ると、人間は一〇万年来それほど変化していないらしいが、人間の行動様式や人間を取り



巻く環境はこの一〇年で激変した。二〇世紀の旧思考では、二一世紀の問題に対応できない。地球社会の複雑な連鎖をグローバルに解析し、グローバルな視点から解決の糸口を探ることが急務になっている。そこに米中枢同時テロ後のジャーナリズムの新しい命題がある。

二〇〇三年の対イラク戦争では、イラクが大量破壊兵器をアフリカから購入したという英国筋の情報が嘘だったことが戦後、判明した。米国や英国が掲げた「戦争の大義」は根底から揺らいだ。そういう大義を世界へ広めるお先棒を担ぎ、戦争遂行を間接的に支援する格好となったのがメディアである。何もこれが初めてではない。メディアは権力にからめとられる危険性にさらされている。不透明なグローバル時代には、その危険性はいつそう強まる。

二一世紀の先行きを不透明にした米中枢同時テロはなぜ起きたのか。テロ後、ブッシュ米政権はなぜイラク戦争に執念を燃やし、フセイン政権を打倒したのか。もっと言えば、この地球社会では今、何が起きて、これから何が始まるうとしているのか。歴史をさかのぼりながら、現代というグローバル時代の危うさとジャーナリズムの役割について考える必要がある。そういう時代認識に立ったメディア表現だけが、時代と人々を揺り動かす力を持つ。

人類は今、地球規模の命題を突きつけられている。核問題、貧富の格差、環境破壊、犯罪の増大、文明の衝突。グローバル時代のマクロ危機を回避するには、デジタルのような分析知ではなく、全体を俯瞰するアナログ思考が不可欠との認識が高まっている。デジタルの帝王ゲイツがアナログの神ダ・ヴィ

ンチにあやかろうとするのも、ITウィンドウイズムの限界に気づいているからだろう。

壮大な知の宇宙でダ・ヴィンチが示した重要な世界認識は、次の一点である。

地球は一個の星である。地球は月とほとんど同じ一個の星であるという結論に達しなくてはならない。<sup>(14)</sup>

今でこそ常識になったが、地球を一つの惑星としてとらえる視点こそ、グローバル化の現代を先取りした思想である。一つの地球という認識に到達するまでに、人類は多くの時間と労力を費やした。その到達した地点から世界と自己を創造的に表現するところに、メディア社会市民の主体的位置がある。意識的に書くことは時代に挑み、時代を創ることである。それが現代という時代の特質だ。世界がおかしな方向へ進まないようにするには、メディアプロフェッショナルが文章能力を磨き、表現主体としての主体性を高めなければならない。

地球時代における言語表現の可能性とは、現代文明が共生できるかどうかに関わる本質的な命題である。メディアにおける表現と自覚の問題は、戦争か平和かの問題へつながる。書き手の姿勢が今ほど厳しく問われている時代はない。

逆に言えば、現代という時代はそれだけ書く価値がある。

ネット時代に求められているのは、薄っぺらな情報をたくさん流すメッセンジャーボーイではなく、



目の前の事件や出来事を大きな時間的・空間的連関性の中でとらえ、その全体像を浮き彫りにするメディア・プロフェッショナルである。世界と人間の本質を掘り出す取材力と表現力を持つ書き手こそが今、必要とされているのである。

## 7

### シンプル化と緩やかさの創造力

国境がなくなり、ありとあらゆるものが複雑に絡み合うグローバル化時代を迎え、個人の存在はますます不透明になっている。地球上を行き交うモノ、カネ、流行、権力、欲望。本質の外にあるものが「私」を包み込んでいる。鬱蒼たる森の中で迷ったような気分になっている人が少なくないのではないだろうか。グローバリゼーションという巨大なジャングルの出口はどこにあるのか。

過剰負荷環境という社会心理学の用語がある。情報量や商品量が多すぎる過剰負荷環境の中に置かれると、人はもつと良いものがあつたのではないかという不安を持つ。個人の自由意志による決断は近代社会における最高価値の一つだが、多くの可能性の中から絶えず何かを選び取るのは容易ではない。むしろ、いつも何か間違つた選択をしているのではないか、もつとよい選択があつたのではないかという不安に駆られる。消費のみならず、人生全般においてそうである。

サルトルは「人間は自由という刑に処せられている」(『存在と無』)と言っている。自由という刑を回

避け、選択で迷わなくてもすむよう流行に乗る。ブランドが受けるのはそうした心性を反映している。しかし、流行はすぐに変わる。多様性が過剰になると、何をどう選んだらよいのか、分からなくなってしまう戸惑う。

森で迷ったときは、いったん立ち止まり、来た道に戻るのが早道である。人生の森に迷い、生きていく気力がなくなったときは、幼いころを思い出すことである。社会の垢に染まっていない喜びや楽しみの原型が遠い記憶の中に眠っている。幼いころの原体験を追想すると、不思議と元気がよみがえってくる。『星の王子さま』のような童話を読み返すと、めくるめくファンタジーを再発見し、単純さの深淵にはっとしたりする。赤ん坊の笑顔に触れると、幸福のありかがほの見えてくる。

ルソーは文明の先行きに不安を抱き、「自然に帰れ<sup>(15)</sup>」と説いた。どんなに複雑なものでも、突きつめれば、原型の変奏曲にすぎない。原点には大いなる秘密が隠されている。原点を探るといのは時代を支配するイデオロギーから距離を置き、自分と世界を永遠の相のもとに見つめ直すことである。

流行や現象が多様化した世界では、「シンプル」が方向性や価値観を提供してくれる。自然な生活としてのシンプレライフという理想は、物質文明と緊張関係にある。文明は人間を自然の本源から遠ざける。

シンプルという概念で理解されるものは常に、その時代状況に対して批判的である。鏡に映し出された対称図形のように、その時代の欠落したものや問題のある傾向に対して警鐘を鳴らしている。一九世



紀には一九世紀の、二〇世紀なら二〇世紀の現状に対するアンチテーゼがシンプルという思想である。

シンプルとは行きすぎたものへの警告なのである。拡大に対する縮小、加速に対する減速、足し算に対する引き算……。エントロピー（乱雑化）に対してはホメオスタシス（恒常性維持）の原理が働くからこそ、ものごとは安定する。

過剰とも言える豊かさは満足感を生まず、むしろ持続的な幸福感をむしろむしばんでいるという自覚が広がっている。絶えず何か新しいものを購入すると、何かを所有する楽しみは消え、購入する行為だけが目的のようになってしまう。しまいには使わないモノが身の回りにあふれることになる。場所を塞ぐ<sup>ふさ</sup>だけでなく、手入れしたり、掃除したり、整理したりと労力を強いられる。不要な衣類や道具を減らせば、それだけ負担は小さくなる。それが心の重荷を解く一步にもなる。

モノを集めたり、積んだりするのは人間の根源的な衝動の一つなのかもしれない。遺伝子DNAには人類誕生以来の遺伝情報が書き込まれているという。人類は歴史の大半をモノ集めに費やしてきた。買いためをしておけば、いざというときに役立つし、気休めにもなる。突発する災害、飢餓、戦争が「蓄える」という人間の習性を形成してきたのである。それだけ人間社会は不安定だった。

シンプルに生きるには、まず日常生活の不要なものを整理する必要がある。タンスの中のたくさんの衣類、本、レコード、CD、ビデオ、台所用品、家具、飾りもの。これらの中で本当に必要なものは何なのか。ヨーロッパのシンプルライフのスローガンは「必要でもなく、美しくもないものは消えゆく運

命にある」

不要なものを持たないというのは、不要なものを買わないことである。不要なものを買わないというのは、不要な欲望に振り回されないことである。モノだけではない。

地球上を洪水のように流れる情報もそうである。インターネットで簡単に手に入るからといって、必要な情報をかき集めていると、何が大切なのか分からなくなる。情報は多ければ多いほどいいというのは、ネット時代の神話であり、虚構である。これも「ものごとは時間の経過とともに価値を増大しなければならぬ」という米国流GDP信仰の産物だろう。

スイスの心理学者カール・G・ユングは「人は四〇代、五〇代になると、人生のバランスが崩れていくような感じを持つ」と言っている。四〇年、五〇年と生きているうちに仕事、家庭、人間関係とさまざまな重荷を背負い込む。不要なものを整理しないと、荷は重くなるばかりだ。

青年は未来に生き、壮年は現在に生き、老年は過去に生きるという。壮年、つまり中高年の危機は現在の荷が重く、複雑なところにある。オランダの画家ヴィンセント・ファン・ゴッホは三七歳でピストル自殺した。ドイツの作曲家ロベルト・A・シューマンは四六歳で発狂してライン川に身を投げた。ドイツの画家エルンスト・L・キルヒナーは五八歳で、オーストリアの作家シュテファン・ツヴァイクは六一歳で、川端康成は七三歳で自殺した。

中年クライシスという言葉があるが、どの年代にも人生の危機は訪れる。新しい夢をつかみ、生きて



いるという感覚を取り戻すには思い切って過去の堆積を削り取り、もう一度原点に立ち返るしかない。それが自己再生の哲学としてのシンプルライフの意味である。

文章を書くことも、大量の情報の中から不要なものをどんどん捨てて、本当に大切なことだけを原稿のマス目に刻むことである。それは自分の精神を純化し、自身の人生を再構築することにはかならない。それが表現空間の純度を高めることになる。人は文章を書くことによって、自分の生き方をラディカルに見直し、未来に向かってポジティブに歩み出すことができる。それが言語表現の創造力というものである。

注

- (1) 山本武信『ユーロ誕生への道』共同通信社、二〇〇〇年、二〇六―二一〇頁
- (2) Postman, Neil. *Wir amüsieren uns zum Tode*, Knauer, 1985: pp. 25-30
- (3) Mathien, Michel. *Les journales*, Collection QUE SAIS-JE?, 1995: p. 37
- (4) 山本武信『地球メディア社会——進化と自壊の構図』リベルタ出版、二〇〇四年、一九七―二〇〇頁
- (5) NHKスペシャル番組「地球大進化 四六億年」二〇〇四年
- (6) リチャード・バック『かもめのジョナサン』新潮文庫、五木寛之訳、一九七七年、七五頁
- (7) パウロ・コエーリョ『アルケミスト』地湧社、山川紘矢・山川亜希子訳、一九九四年、一五七頁
- (8) ジョン・リード『世界をゆるがした十日間』岩波文庫、原光雄訳、一九五七年
- (9) アントワヌ・ド・サンテグジュペリ『人間の土地』新潮文庫、堀口大學訳、一九五五年、二〇五頁

- (10) 前同、五一頁
- (11) 前同、五〇頁
- (12) Egli, René. *Das LOLA-Prinzip*, Editions D'Olt, 1994: pp. 19-24
- (13) Hamil, Pete. *NEWS IS A VERB*, Deidre Enterprises, 1998 (邦訳『新聞ジャーナリズム』日経BP、武田徹訳、二〇〇二年、六―一頁)
- (14) レオナルド・ダ・ヴィンチ『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記(下)』岩波文庫、杉浦明平訳、一九五八年、四六―五〇頁
- (15) ジャン・ジャック・ルソー『エミール(上)(中)(下)』岩波書店、今野一雄訳、一九九四年



## 参考文献一覽

- Brügger, N. Kolstrup, S. *Media History*, Aaphus University Press, 2002
- Dohmen, Florian. *Medien & Macht*, VSA-Verlag, 1998
- Doyle, Gillian. *Media Ownership*, SAGE Publications, 2002
- Egli, René. *Das LOLA-Prinzip*, Editions D'Olt, 1994
- Grün, Anselm. *Wenn ich nur noch einen Tag zu leben hätte*, Kreuz Verlag, 1999
- Hamil, Pete. *NEWS IS A VERB*, Deidre Enterprises, 1998
- Hegel, Georg W. Fr. *Phänomenologie des Geistes*, SUHRKAMP, 2001
- Heidegger, Martin. *Sein und Zeit*, AKADEMIE VERLAG, 2001
- Herbert, John. *Practising Global Journalism*, Focal Press, 2001
- Hondrich, K. Otto. *Mensch im Netz*, Spiegel-Buchverlag, 1999
- Huntington, Samuel P. *The Clash of Civilizations?*, Council on Foreign Relations, 1994
- Kingsbury, D. Loo, E. *Foreign devils and other journalists*, Monash Asia, 2000 Institute
- Laszlo, Ervin. *3rd Millennium*, Planetary Consciousness Network, 1997
- Laszlo, Ervin. *Macrosift*, Berrett-Koehler Publishers, 2001
- MacLuhan, Marshall. *THE GUTTENBERG GALAXY-The Making of Typographic Man*, University of Toronto, 1962
- MacLuhan, Marshall. Fiore, Quentin. *The Medium is the Massage*, Gingko Pr Inc., 2001

- Martens, Jens Uwe. *Mit dem Herzen suchen*, DuMont Buchverlag, 1998
- Mathien, Michel. *Les journalies*, Collection QUE SAIS-JE?, 1995
- Meckel, M. Kamps, K. *Medien-Mythos?*, Westdeutscher Verlag, 1999
- Müller, Bodo. *Über die Ostsee in die Freiheit*, Delius Klasing, 1992
- Ortega y Gasset, Jose. *Revolt of the Masses*, Blackstone Audiobooks, 1997
- Postman, Neil. *Wir amüsieren uns zum Tode*, Knaur, 1985
- Saul, R. John. *Der Markt frißt seine Kinder*, Campus Verlag, 1997
- Schenk, Herrad. *Vom einfachen Leben*, Verlag C.H. Beck, 1997
- Seidel, Peter. *Invisible Walls*, Prometheus Books, 2001
- Shaughnessy, S. *A Book of Meditations for Writers*, Harper Collins San Francisco, 1993
- Thic Nhat Hanh. *Peace is Every Step*, Bantam Books, 1991
- Toffler, Alvin. *Third Wave*, Pan Macmillan, 1980
- Woodhull, N.J. Snyder, R.W. *Journalists in Peril*, Transaction Publishers, 1998
- Xupei, Sun. *An Orchestra of Voices*, Praeger Publishers, 2001
- Zweig, Stefan. *Sternstunde der Menschheit*, Bermann-Fischer-TB, 1943
- Zweig, Stefan. *Episode am Genfer See*, S. Fischer Verlag, 1970
- 阿井景子『わが心の師 清張 魯山人』中公文庫、二〇〇一年
- 天野貞佑『ドイツ語とドイツ文化』第三書房、一九五〇年
- 『一遍上人語録』岩波文庫、大橋俊雄校注、一九八五年
- 伊藤正『チャイナ・ウォッチング』ソニー・マガジズ、一九八一年
- レオナルド・ダ・ヴィンチ『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記(上)(下)』岩波文庫、杉浦明平訳、(上)一九



五四年、(下)一九五八年

マックス・ウェーバー『職業としての学問』岩波文庫、尾高邦雄訳、一九八〇年

内村鑑三『後世への最大遺物・デンマルク国の話』岩波文庫、一九四六年

尾川正二『文章表現入門』創元新書、一九七四年

尾川正二『原稿の書き方』講談社新書、一九七六年

尾川正二『文章の書き方』講談社新書、一九七七年

ヨハン・W・フォン・ゲーテ『ファウスト第一部』新潮文庫、高橋義孝訳、一九六七年

パウロ・コエーリョ『アルケミスト』地湧社、山川紘矢・山川亜希子訳、一九九四年

斎藤茂男『飽食窮民——ヘルポルタージュ——日本の幸福』共同通信社、一九九一年

澤村榮一『英語と日本語のはざま』ふたば工房、二〇〇四年

アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ『星の王子さま』岩波書店、内藤濯訳、一九五三年

アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ『人間の土地』新潮文庫、堀口大學訳、一九五五年

アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ『夜間飛行』新潮文庫、堀口大學訳、一九五六年

アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ『城砦』みすず書房、山崎庸一郎訳、一九八五年

アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ『平和か戦争か』みすず書房、山崎庸一郎訳、二〇〇一年

J・スキナー『成功の9ステップ』幻冬舎、宮崎伸治訳、二〇〇四年

鈴木亨『響存的世界』合同出版、一九六七年

バルーフ・デ・スピノザ『エチカ』中央公論社、下村寅太郎訳、一九六九年

ヘンリー・D・ソロー『森の生活(上)(下)』岩波文庫、飯田実訳、一九九五年

高橋紘『平成の天皇と皇室』文春新書、二〇〇三年

高宮利行『グーテンベルクの謎』岩波書店、一九九八年

多田孝志『地球時代の言語表現』東洋館出版社、二〇〇三年

ルネ・デカルト『方法序説』岩波文庫、落合太郎訳、一九八三年

外山滋比古編『名言』作品社、一九九二年

中原中也『中原中也詩集』角川文庫、一九六八年

フリードリヒ・ニーチェ『善悪の彼岸』岩波文庫、木場深定訳、一九九三年

リチャード・バック『かもめのジョナサン』新潮文庫、五木寛之訳、一九七七年

バルザック『ジャーンナリズム性悪説』ちくま文庫、鹿島茂訳、一九九七年

東山魁夷『自然の中の喜び』講談社、一九九五年

カール・ヒルティ『幸福論』白水社、斎藤栄治訳、一九七九年

深代淳郎『天声人語（正・続）』朝日新聞社、（正）一九七六年、（続）一九七七年

藤田博司『ジャーナリスト教育の構築に向けて』『東京大学社会情報研究所紀要第六七巻』所収、二〇〇四年三月

月

V・E・フランクル『それでも人生にイエスと言う』春秋社、山田邦男・松田美佳訳、一九九三年

オー・ヘンリー『オー・ヘンリー傑作選』岩波文庫、大津栄一郎訳、一九七九年

ヨハン・ホイジンガ『中世の秋』角川書店、兼岩正夫・里見元一郎訳、一九八四年

A・H・マズロー『人間性の最高価値』誠信書房、上田吉一訳、一九七三年

宮沢賢治『銀河鉄道の夜』集英社文庫、一九九〇年

武者小路実篤『人生をどう生きるか』青春出版社、一九六九年

村田充八『社会的エートスと社会倫理』晃洋書房、二〇〇五年

森昭雄『ゲーム脳の恐怖』NHK出版、二〇〇二年

森本哲郎『文明の旅』新潮選書、一九六七年



- 山本武信『裏切られた神話——素顔のドイツ』作品社、一九九五年
- 山本武信『ベントの興亡』東洋経済新報社、一九九八年
- 山本武信『ユーロ生誕』共同通信社、一九九八年
- 山本武信『星の王子さまからの警鐘』共同通信社、二〇〇〇年
- 山本武信『ユーロ誕生への道』共同通信社、二〇〇〇年
- 山本武信『IT革命とメディア』共同通信社、二〇〇一年
- 山本武信『ライフワークのすすめ』早稲田出版、二〇〇二年
- 山本武信『大学教授になれる本の書き方』早稲田出版、二〇〇三年
- 山本武信『グローバルメディアの世紀』日本図書センター、二〇〇四年
- 山本武信『地球メディア社会——進化と自壊の構図』リベルタ出版、二〇〇四年
- 山本武信『グローバルズムと反グローバルズム』米中枢同時テロ事件』共同通信社、二〇〇一年
- 山本武信『ドイツ編——メルヘンの世界』共同通信社編『六〇億人の地球家族』所収、二〇〇一年
- 山本武信『グローバルメディア学序説』大同工業大学紀要第三九巻』所収、二〇〇三年十二月
- 山本武信『Commercial Bias in the Global Media——From the Fall of the Berlin Wall to the Iraq War』JAMCO Online International Symposium, 11004年11—11月
- 山本武信『Globalisierung der Medien und die Informationsethik』大同工業大学紀要第四〇巻』所収、二〇〇四年二月
- 山本武信『地球時代のメディア文章技法に関する実践的研究』大同工業大学紀要第四〇巻』所収、二〇〇四年二月
- 山本武信『メディアの実践的文章技法』大同工業大学情報演習テキスト、二〇〇四年
- サルマン・ラシュディ『悪魔の詩』プロモーションズ・ジャンニ、五十嵐一訳、一九九〇年

ジョン・リード『世界をゆるがした十日間』岩波文庫、原光雄訳、一九五七年  
ジャン・ジャック・ルソー『エミール（上）（中）（下）』岩波書店、今野一雄訳、一九九四年  
魯迅『阿Q正伝・狂人日記』岩波文庫、竹内好訳、一九九五年  
ロマン・ロラン『ペーローヴェンの生涯』岩波文庫、片山敏彦訳、一九六五年  
ロマン・ロラン『ジャン・クリストフ（一）』新潮文庫、新庄嘉章訳、一九六九年



## あとがき

喧噪<sup>けんそう</sup>のマスコミからアカデミズムに転身して感じるのは、時間の流れの緩やかさである。記者時代は日々締め切りに追われ、時間との戦いだった。大学では、少子化で生き残り競争が激しくなったとは言え、時間はまだゆったり流れている。

締め切りがないというのは、怖いことである。怠けそうになると、私はいつも「時間をむだにつぶしても、永遠は傷つかないとも思っているのだろうか？」（『森の生活』）というヘンリー・D・ソローの言葉を思い出して、わが身に鞭を打つ。時間は天からの贈り物である。贈り物である以上、何をもってしても替えられない。人生の持ち時間は限られている。有限性に対する意識が薄れると、時間が無為に消えていく。

今日一日しかないと思い直し、できるだけのことをする。毎日、一つだけ自分を超えるようなことにチャレンジする。毎日、何か小さなアイデアに挑戦する。その積み重ねが大きな成果につながる。

この年になって、目標を持つことの大切さを痛感する。

目標こそは飛躍への鍵である。目標を持つ人と持たない人とは、五年、一〇年後に大きな差が出る。

具体的な目標を設定すると、それを達成しようという意欲が湧いてくる。大切なことは、最後までやり抜くことである。どんなに素晴らしい目標やアイデアを思いついても、実行し、やり遂げなければ、何にもならない。

達成感がなければ、人間は成長しない。

やり遂げるというのは、楽しいことである。達成感の積み重ねが幸福感になる。一つ一つの目標をきちんとやり遂げるかどうかで、人生は大きく変わってくる。時間的な制約に対する意識は、完遂する意志を高める。

桃栗三年柿八年と言うように、何ごとにも芽生えてから実を結ぶまでには一定の年数を要する。

文章表現の道も速成とはいかない。時間がかかる。しかし、やり方さえ間違えなければ、面白いように上達する。

大学では、講義でも演習でも文章表現力の養成に力を入れている。半期でもこちらが驚くくらいに伸びる学生が何人もいる。本人も上達したことを自覚して自信を持つようになる。自分の中の何かが弾けたのだろう。文章を書くことに自信を持つと、顔つきまで変わってくる。そういう学生を見るにつけ、授業を担当して良かったと思う。教える側が学生からエネルギーをもらっていることになる。

ジャーナリスト時代、取材することは、取材相手から自分の力量を試されるようなところがあった。それが大いに勉強になった。同じように、教えることは教えられることである。そんな思いを抱きなが



ら、本書を書き終えた。

ささやかながら、四半世紀に及ぶジャーナリスト活動と著述活動の集大成である本書をまとめることができたのは、共同通信時代に知己を得た多くの先輩、同僚、友人らに負うところが大きい。うまくいったこと、失敗したこと、ほぞを噛んだこと、体験したすべてが財産になった。振り返って感謝の念に堪えない。

本書の出版に際しては、ミネルヴァ書房出版企画部の戸田隆之部長と大西光子さんにご尽力いただいた。記してお礼申し上げたい。

二〇〇五年十二月

山本 武信

## 著者略歴

### 山本 武信（やまもと・たけのぶ）

1954年福岡県出身。九州大学哲学科卒業。共同通信社ボン特派員，フランクフルト支局長，経済部次長，大同工業大学教授などを経て2005年4月から阪南大学国際コミュニケーション学部教授。この間，ヨーロッパを中心に世界40カ国以上で取材した。専門はメディア論，国際ジャーナリズム論，ヨーロッパ論，現代文明論。

著 書 『裏切られた神話——素顔のドイツ』（作品社，1995年）

『ユーロ生誕』（共同通信社，1998年）

『ベンツの興亡』（東洋経済新報社，1998年）

『星の王子さまからの警鐘』（共同通信社，2000年）

『ユーロ誕生への道』（共同通信社，2000年）

『IT革命とメディア』（共同通信社，2001年）

『ライフワークのすすめ』（早稲田出版，2002年）

『大学教授になれる本の書き方』（早稲田出版，2003年）

『グローバルメディアの世紀』（日本図書センター，2004年）

『地球メディア社会——進化と自壊の構図』（リベルタ出版，2004年）

『Die Krise der Medien——メディアの危機』（京大出版センター，2005年）

『世界を揺るがした10年——ベルリンの壁崩壊から9・11まで』（晃洋書房，2005年）

### 共著・訳書

『欧州はユーロでどう変わる』（ヘンリック・ミュラー著，東洋経済新報社，1998年）

『60億人の地球家族』（共同通信社，2001年）

『米中枢同時テロ事件』（共同通信社，2001年）

『経済・時事問題早わかり』（ダイヤモンド社，2002年）

『最新英語キーワードブック』（小学館，2003年）ほか多数。



〈世界〉を書く技術と思想  
——21世紀のメディア表現——

2006年1月1日 初版第1刷発行

検印省略

定価はカバーに  
表示しています

著 者 山 本 武 信

発 行 者 杉 田 啓 三

印 刷 者 中 村 嘉 男

発 行 所 株式会社 ミネルヴァ書房

607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1  
電話代表(075)581-5191 番  
振替口座01020-0-8076 番

© 山本武信, 2006

中村印刷・新生製本

ISBN4-623-04509-9

Printed in Japan

---

## 戦争とマスメディア

四六判・上製364頁・本体3200円

——石澤靖治著

●湾岸戦争における米ジャーナリズムの「敗北」をめぐって 政権との対立と批判をアイデンティティとするアメリカのジャーナリズムが、湾岸危機・戦争において、なぜ明らかな敗北を喫したのか。戦争とマスメディアとの関係について、政権とマスメディアの関係という視点からとらえ分析する。

---

## グローバル社会とメディア

A 5 判・上製312頁・本体3500円

——武市英雄・原 寿雄責任編集

メディアのグローバル化という現象は、わが国の報道の現場において日本一国のみの視点でのニュース取材感覚を改めるきっかけをも意味している。グローバル化が進展し、メディアが変容する中で「報道」のもつ役割、意味とは——。本書では、地球規模での「報道」の社会的影響力とメディアとしての役割、課題について考察する。

---

## メディアの法理と社会的責任

A 5 判・上製360頁・本体3500円

——渡辺武達・松井茂記責任編集

あらゆる社会的存在は外部からの要請に応えなければならないが、とりわけメディアにはその責任が大きい。本書では、メディアとジャーナリズムがいま問われている問題を探り、メディア自身による質的向上を提起する。

---

## 日本のジャーナリズムとは何か

A 5 判・美装448頁・本体3500円

——柴山哲也編著

●情報革命下で漂流する第四の権力 多様な領域の専門家と豊富な現場経験をもつジャーナリストたちが集い、同じ土俵の上で交わした議論の成果をまとめた論集。総合的かつ学際的なジャーナリズム研究の書。

---

—— ミネルヴァ書房 ——

<http://www.minervashobo.co.jp/>